

南信州広域連合殿 委託

受託業務報告書

平成 27 年度

南信州地域への移住・二地域居住可能性
調査事業 UIJ ターンにおける実態調査

平成 28 年 3 月

公益財団法人鉄道総合技術研究所

平成 27 年度 南信州地域への移住・二地域居住可能性調査事業

UIJ ターンにおける実態調査

概 要

2027 年のリニア中央新幹線の開業により、南信州地域の飯田市には中間駅が設置される予定である。少子高齢化等の人口問題を抱える南信州地域にとって、リニア中央新幹線は人口問題改善の契機となる可能性がある。そこで今回は、地域の活性化や人口問題等の改善という観点から、地方部への人口還流現象である UIJ ターンに着目し、同地域への UIJ ターンを促進する方策について検討する。その実態に関する種々の調査を実施し、その結果を報告する。

キーワード：UIJ ターン、移住、人口問題、地域活性化、リニア中央新幹線

目 次

1. はじめに	2
2. 昨年度報告書について	3
2.1. 南信州地域への移住・二地域居住に関する調査	3
2.2. 新幹線・特急等を利用した通勤行動に関する現状把握のための分析	5
3. UIJ ターンにおける実態調査	7
3.1. UIJ ターンについて	7
3.2. 調査の概要	8
3.3. 取得されたサンプルの基本属性	11
3.4. ターンに関する基本属性	16
3.5. 勤務実態	31
3.6. ターンに対する意識と評価	44
3.7. ターン時に受けた行政サービス・情報入手法等	100
3.8. まとめ	135
4. 総論	137
4.1. 南信州地域への移住・二地域居住者誘致のための戦略	137
4.2. おわりに	138
付録 I：「南信州地域への移住・二地域居住に関する調査」調査票（原稿）	140

1. はじめに

2027年（平成39年）に東京都（品川駅）と愛知県（名古屋駅）との間が開業する予定のリニア中央新幹線には、途中の各県に1ヶ所ずつ中間駅が設置されることとなっており、長野県においては南信州地域の中心市である飯田市に駅が設置される予定である。現在、南信州地域と東京都内との移動の利便性が高いとは言えない状況にあるが、中間駅の設置により、東京都内と南信州地域との人的移動や交流がより盛んになることが期待される。

その一方で、南信州地域の人口は減少傾向にある。このような中で、利便性の高い交通機関の整備にあわせて地域を活性化していくためには、観光の促進による短時間訪問者の増加をはかるのみならず、南信州地域への移住や二地域居住などによる、より長期間の滞在者を確保していくことが重要である。その可能性を探るため、2014年度（平成26年度）までに、国内における別荘・別宅の利用や新幹線・特急等を利用した通勤行動に関する現状把握と、南信州地域やリニア中央新幹線に対する意識や認知に関する調査を実施し、その結果を報告した¹⁾。

それらの結果を踏まえ、今年度は地方部への人口還流現象であるUIJターンに着目し、同地域へのUIJターンを促進する方策について検討するに資する資料を提供することを目的として、全国を対象としたUIJターンに関する実態調査を実施し、その結果を報告する。

¹⁾ 公益財団法人鉄道総合技術研究所：南信州地域への移住・二地域居住可能性調査事業，受託業務報告書，2014年9月

2. 昨年度報告書について

平成 26 年度までに南信州広域連合殿から公益財団法人鉄道総合技術研究所に委託された「南信州地域への移住・二地域居住可能性調査事業」では、南信州地域やリニア中央新幹線に対する意識や認知に関する調査を実施した。また、国内における別荘・別宅の利用や新幹線・特急等を利用した通勤行動に関する現状把握のための分析を行った。

本章は、昨年度の報告書で実施した調査や分析の概要について示し、得られた知見について簡単にまとめたものである。ここで示していない詳細な分析データ等については、昨年度報告書本体を参照されたい。

2.1. 南信州地域への移住・二地域居住に関する調査

調査の概要を表 2-1 に、調査内容と項目を表 2-2 に示す。調査にはインターネット調査を活用した。2014 年 6 月に実施し、1,030 サンプルを取得した。このうち分析に用いることが望ましくないと考えられるサンプルを除外した結果、有効回答数は 891 サンプルとなった。調査により得られた主な知見は以下の通りであった。

- ▶ 別荘・別宅利用者の中心は 60 歳以上で経済水準が比較的高い方である。
- ▶ 別荘・別宅の利用頻度は少なく、利用日数も年間 1 週間程度以下が半数と短い。
- ▶ 別荘・別宅の選択においては、気候や環境の良さが最も重要なポイントである。他地域との差別化を図る上では、副次的な観点である交通の利便性、建物、別荘・別宅でのやりたい活動の実施可能性などがアピールポイントになりうる。
- ▶ 遠方の別荘・別宅を利用する方は少ない。居住地と同じ、あるいは隣接地域の別荘・別宅を利用するケースが中心である。この傾向は、別荘・別宅で本業の仕事を行う方では特に強い。逆に新幹線を利用して別荘・別宅に移動する方の移動時間は長いことから、新幹線の存在が遠方からの利用者の獲得に貢献していると言える。
- ▶ 別荘・別宅の利用はゴールデンウィークや夏場、また週末に特に多い。別荘・別宅で本業の仕事を行う方の利用は年間を通じて、また曜日によらずほぼ一定であり、かつ高頻度である。
- ▶ 自宅から別荘・別宅までの移動手段の主体は自動車である。鉄道の利用者は、駅からバスあるいはタクシーを利用するケースが多く、鉄道利用者に対しては、このような駅から別荘・別宅地までの移動手段の提供が求められる。特に別荘・別宅で本業の仕事を行う人にとって、交通の利便性は最も重要な観点である。
- ▶ 維持費用が高いほど、その別荘・別宅の継続利用意向が強い。若年層は別荘・別宅にかかる費用が全体と比較して大きく、優遇措置を活用する割合も大きい。ただし全体としては、優遇措置を受けている方の利用年数は必ずしも長くない。
- ▶ 若年層が別荘・別宅維持にかかる費用は全体と比較してより高く、また優遇措置もより受けている。また別荘・別宅への交通手段としてより鉄道が選択される傾向に

ある。

- ▶ 南信州地域への訪問経験や認知は、中部地方の居住者で比較的高いが関東地方や近畿地方の居住者にはあまり浸透していない。他の地域の居住者と比較して中部地方居住者の訪問が多い観光名所も複数存在することから、リニア中央新幹線の開業をきっかけとしながら、関東地方や近畿地方に対する地域の魅力のアピールによって認知度を高めることにより、観光客の呼び込み効果が期待される。

表 2-1. 昨年度調査（南信州地域への意識調査）の概要

項目	内容
調査実施時期	2014年6月
調査対象者	インターネット調査会社が保有する登録モニターのうち、下記の条件を満たす方。 ① 30歳以上の方 ② 東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県の居住者 ③ 会員制を除く別荘・別宅を保有しているか賃貸しており、その物件を年1回以上利用している方
調査方法	インターネット調査
回答数	1,030サンプル
有効回答数	891サンプル（有効回答率 86.5%）

表 2-2. 昨年度調査（南信州地域への意識調査）の調査内容と項目

調査内容	調査項目
サンプルの基本属性	年齢・性別、職業、婚姻状況、世帯収入
別荘・別宅の利用実態	保有状況、居住地と別荘・別宅の所在地 利用頻度、利用目的、別荘・別宅への移動 等
南信州地域に対する認知と評価	認知と訪問・観光体験、南信州地域に対するイメージ アクセス・イグレス交通 等
リニア中央新幹線に関する意識	新幹線計画の認知、開業後の訪問意思 等

2.2. 新幹線・特急等を利用した通勤行動に関する現状把握のための分析

本分析は、2006年11月に実施した調査結果に基づいて行ったものである。調査の概要を表 2-3 に、調査内容と項目を表 2-4 に示す。調査にはインターネット調査を活用した。分析に用いることが望ましくないと考えられるサンプルを除外した結果、有効回答として 735 サンプルを取得した。分析により得られた主な知見は以下の通りであった。

- ▶ 新幹線・特急等による通勤を行う大きな理由は、「早く目的地に到着できること」と「混雑を避け着席できること」にある。新幹線・特急等には、速達性だけではなく快適性も求められている。
- ▶ 新幹線・特急等による通勤を高頻度で実施するためには、そもそも通勤自体が高頻度である必要がある。また新幹線利用者では新幹線・特急等定期券分の補助を受けている割合が大きいことから、勤務先（あるいは自治体等）による経済的な補助や新幹線・特急等通勤に対する勤務先の理解が新幹線利用を促進する可能性がある。
- ▶ 居住地側では徒歩や自転車のほか、路線バスと自動車が必要な交通手段である。また勤務地側では徒歩利用者が極めて多く、バス利用者も一定程度存在する。居住地側では駅へのアクセスのためのバスや駐車場、駐輪場の提供、勤務地側では徒歩圏内における就業地の確保と公共交通機関の提供が必要である。
- ▶ 新幹線・特急等が存在するから、あるいは新幹線・特急等のサービスが開始されたから新幹線・特急等による通勤を始める、というケースは一般的ではなく、勤務地の移転や転勤、よりよい住環境の確保に伴う転居等により通勤行動が変化した結果として新幹線・特急等による通勤を始めるケースが多い。このことから、新幹線・特急等サービスの提供そのものだけではなく魅力的な住環境・就業環境の提供が必要であると言える。

表 2-3. 通勤行動に関する調査の実施概要

項目	内容
調査実施時期	2006年11月
調査対象者	インターネット調査会社が保有する全国の登録モニターのうち、新幹線、特急列車、ライナー列車を利用して週1回以上通勤している方
調査方法	インターネット調査
有効回答数	735 サンプル

表 2-4. 調査内容と項目

調査内容	調査項目
サンプルの基本属性	年齢・性別、職業、居住地
新幹線・特急等による通勤	新幹線・特急等による通勤の頻度 保有している切符、通勤交通費補助の状況 アクセス・イグレス交通、新幹線・特急等通勤への評価 等
他の交通機関による通勤	通勤時の交通機関、保有していた切符 通勤交通費補助の状況、アクセス・イグレス交通 等
新幹線・特急等利用への 転換時の変化	居住地の変化、勤務地の変化 等

3. UIJ ターンにおける実態調査

3.1. UIJ ターンについて

「U ターン」、「I ターン」、「J ターン」という語は、都市部から地方部への人口移動現象のことであり、人の流れをそれぞれのアルファベットの形に見立てて分類したものである。これらをまとめて、「UIJ ターン」や「UJI ターン」などと称されている。内閣府や林野庁の定義によれば、「U ターンは出身地に戻る形態、J ターンは出身地の近くの地方都市に移住する形態、I ターンは出身地以外の地方へ移住する形態」とされている²⁾³⁾。

東京を始めとした都市部における人口や人材の一極集中、それに伴う地方部の労働力不足が問題視されるなか、地方部への人口移動現象である UIJ ターンは地方振興を促す一つの施策として注目されており、国土交通省国土政策局では UIJ ターン・定住の促進に取り組む自治体の情報を掲載する「ふるさと Search」⁴⁾を運営するなど、国土政策としての注目も大きい。

南信州地域への UIJ ターンの可能性を探るためには、まず日本全国における UIJ ターンの実態を把握することが必要である。ターンを行った理由やきっかけのみならず、ターン時の年齢や家族構成、現住地やターン実施に対する満足度評価など、その実態を幅広い見地から UIJ ターンの実態を明らかにすることは、都市部から地方部への人口移動を促すために必要な方策を検討するための有用なヒントとなりうる。

そこで本章では、UIJ ターンの実態について調査を実施した結果について報告する。

²⁾ 内閣府：これまでの議論の骨太方針への反映について、第4回地域の未来ワーキング・グループ 参考資料，2014年7月29日

³⁾ 林野庁：平成26年度 森林・林業白書

⁴⁾ ふるさと Search（ふるさとサーチ）HP，国土交通省，http://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/chisei/crd_chisei_tk_000037.html

3.2. 調査の概要

本調査の概要を表 3-1 に示す。調査にはインターネット調査を活用し、目標回答数を 800 サンプルとした。

本調査では特に都心部から地方部への UIJ ターンに着目するため、インターネット調査会社の登録モニターのうち、現在、地方部に居住している方（表 3-1「調査対象者」の②）で、現在の居住地に転入する前には都心部に居住していた（表 3-1「調査対象者」の③）、かつその転居を自発的に行った方（表 3-1「調査対象者」の④）を対象とした。なお、25 歳未満の若年層にとっての転居は、家族の都合等、自分の意思による転居ではないことが多いと想定されるため、25 歳以上の方（表 3-1「調査対象者」の①）を対象とした。また本調査は、登録モニターの記憶に頼った調査であることから、データの信頼性を高めるため最近 20 年間の転居（表 3-1「調査対象者」の⑤）のみを対象とした。

なお本調査において、都市部とは三大都市圏もしくは人口 15 万人以上の市町村を指し、地方部とは三大都市圏以外の人口 15 万人以下の市町村を指すものとする。このとき、三大都市圏とは、首都圏（埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県）、中京圏（岐阜県、愛知県、三重県）、近畿圏（京都府、大阪府、兵庫県、奈良県）に位置する各都府県を指し、この区分は国土交通省によって実施されている全国幹線旅客純流動調査⁵⁾に基づくものである。

表 3-1. 調査の概要

項目	内容
調査実施時期	2015 年 10 月 20 日～21 日
調査対象者	インターネット調査会社が保有する登録モニターのうち、下記の条件を満たす方。 ① 25 歳以上の方 ② 三大都市圏以外かつ人口 15 万人以下の市町村に、現在居住している方 ③ 前の居住地が、三大都市圏もしくは人口 15 万人以上の市町村であった方 ④ 前の居住地から現在の居住地に、自発的な理由で転居を行った方 ⑤ 現在の居住地への転居を 20 年以内に行った方
調査方法	インターネット調査
回答数	927 サンプル
有効回答数	890 サンプル（有効回答率 96.0 パーセント）

⁵⁾ 全国幹線旅客純流動調査 HP, 国土交通省,
http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/soukou/sogoseisaku_soukou_fr_000016.html

本調査を2015年10月に実施し、927サンプルを取得した。このうち分析に用いることが望ましくないと考えられるサンプルを除外した結果、有効回答数は890サンプルとなった。

ここで除外されたサンプルは、下記のいずれかの条件に該当するサンプルである。

- 転入理由を問う設問において「転居先の土地や住環境に惹かれて」のみを選択した同県内に転出したサンプル（ただし、出身地と現住地が同一市区町村の場合はUターンであるとみなし、除外しない）
- 出身地と現住地は同一でないと回答しながらも、出身地を問う設問において、現住地と同一の市区町村を回答したサンプル
- 出身地と現住地は近隣であると回答しながらも、実際には全く近隣でない市区町村名を回答したサンプル
- 転居時の年齢が17歳以下であるサンプル

以下、「回答者」とはこの有効回答者を指すものとする。

調査内容は表3-2に示すとおり大きく5点に分かれる。はじめに、調査で取得されたサンプルの基本属性を整理する。その後、ターンに関する基本属性や、ターン後の勤務実態について分析する。さらに、ターンを実施した理由や現住地に対する評価など、ターンに対する主観的な意識や評価について整理する。最後に、ターン時に受けた行政サービスや、ターン時に行った情報収集などについてまとめる。

表 3-2. 調査内容と項目

調査内容	調査項目	報告箇所
サンプルの基本属性	年齢・性別 婚姻状況 世帯収入	3.3「取得されたサンプルの基本属性」
ターンに関する基本属性	UIJ ターンの種類 ターン前後の居住地 現住地の人口規模 出身地 ターン時の年齢 ターン時の家族構成	3.4「ターンに関する基本属性」
勤務実態	職業の有無 業種 仕事の見つけ方	3.5「勤務実態」
ターンに対する意識と評価	ターンの理由 現住地への評価 現住地への定住・永住意思 ターンしたことに対する評価	3.6「ターンに対する意識と評価」
ターン時の情報・サービスの入手法等	ターン時の行政サービス ターンに関する情報収集 比較検討したターン候補地 ターン時に検討した期間	3.7「ターン時に受けた行政サービス・情報入手法等」

3.3. 取得されたサンプルの基本属性

(1) 年齢・性別構成

回答者の年齢・性別構成を図 3-1 に示す。回答者の 61%が男性であり、女性の回答者は比較的少ない。また男性、女性ともに 25 歳から 39 歳にかけての若い回答者が多く、60 歳以上の高齢者の割合は少ない。

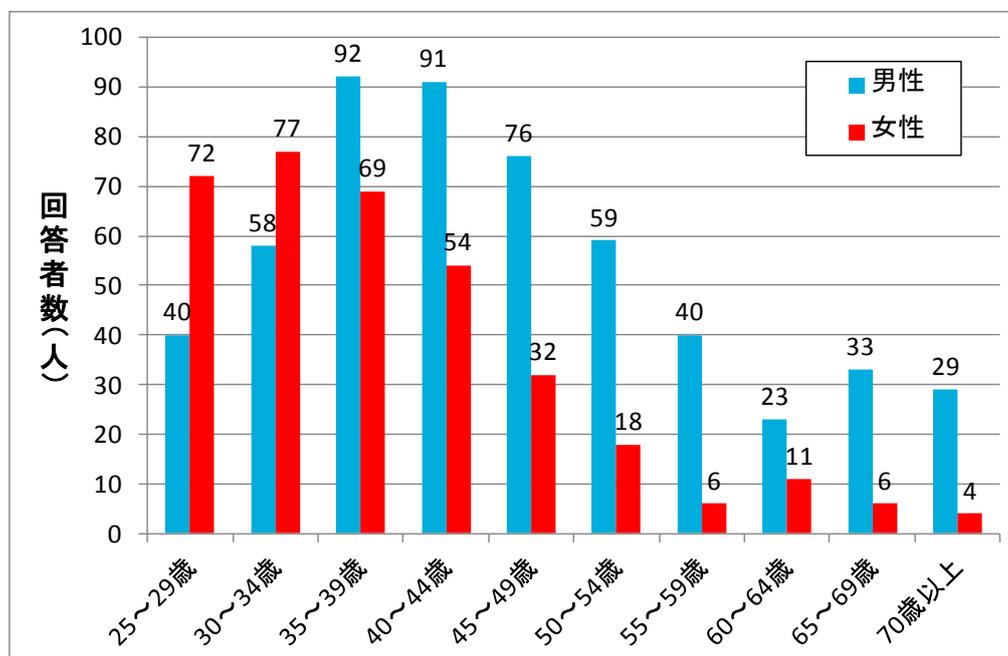
(2) 職業構成

回答者の職業構成を図 3-2 に示す。会社員が全体の 4 割を占めるなど就業者が多い一方で、専業主婦・主夫や無職の方も全体の 2 割程度に上る。これらは、配偶者が就業しているか、すでに退職されているケースであると考えられる。

年齢別の職業構成を図 3-3 に示す。59 歳以下では、どの世代でも会社員の割合が一番多く、4 割程度を占めているが、60 歳以上では専業主婦・主夫あるいは無職の方の割合が多くなる。65 歳以上では、無職の方が半数に達する。定年等による退職の影響と考えられる。

(3) 婚姻状況

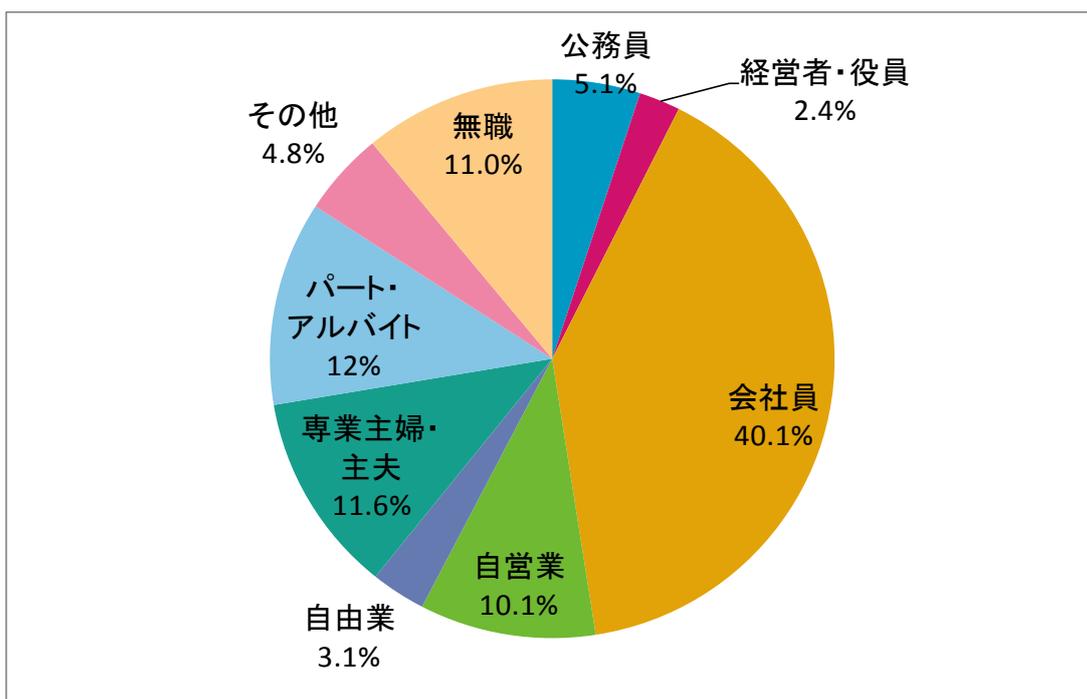
回答者の婚姻状況を図 3-4 に示す。30 歳以上の方の既婚率の全国平均が 67.4% (2010 年)⁶⁾ であることから、回答者の既婚率は全国平均よりやや低めである。



N=890

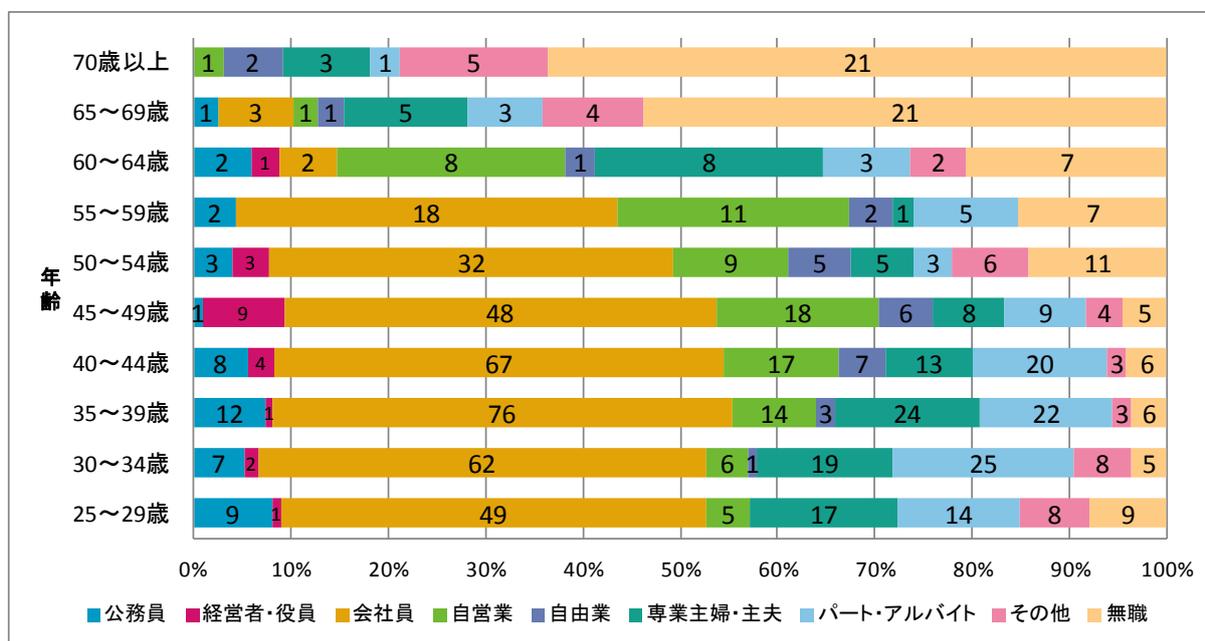
図 3-1. 年齢・性別構成

⁶⁾ 総務省統計局「平成 22 年国勢調査」による。



N=890

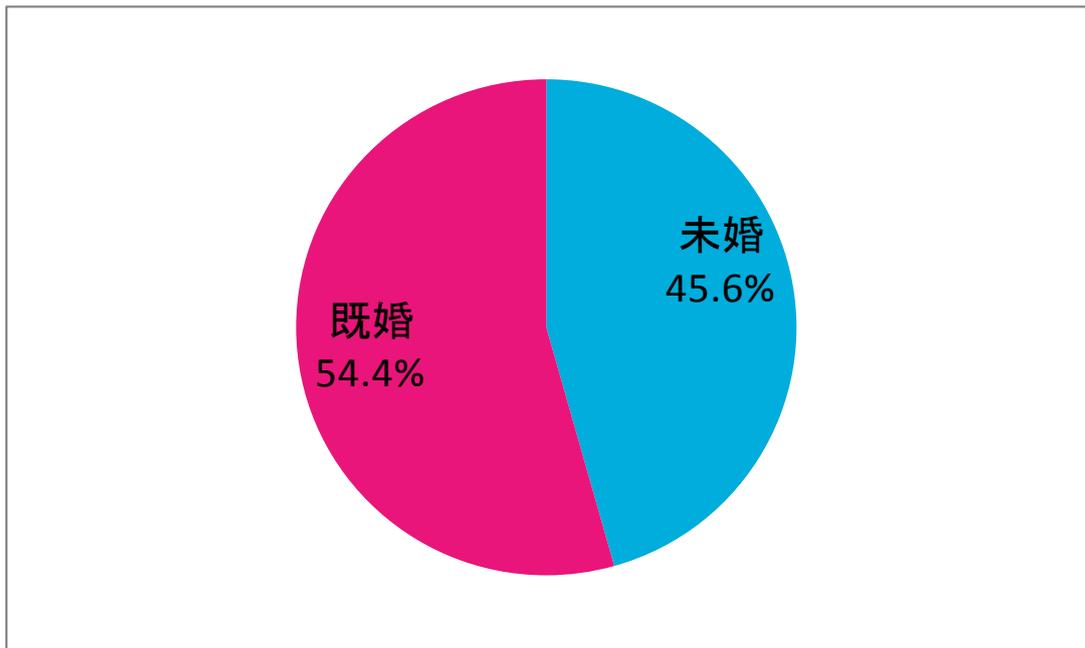
図 3-2. 職業構成⁷⁾



N=890

図 3-3. 年齢別職業構成

⁷⁾ 自営業：法人を設立せず、個人で事業を営む職業。自由業：一定の雇用関係によらず、時間に束縛されないで、独立して営む職業。多くは特別な技能・技術・知識に基づく専門的職業で、芸術家・芸能人・医師・弁護士・会計士・文筆業など（大辞泉）。本アンケートでは、このような定義を被験者に示しているわけではなく、被験者本人の解釈で回答されていることに留意ください。



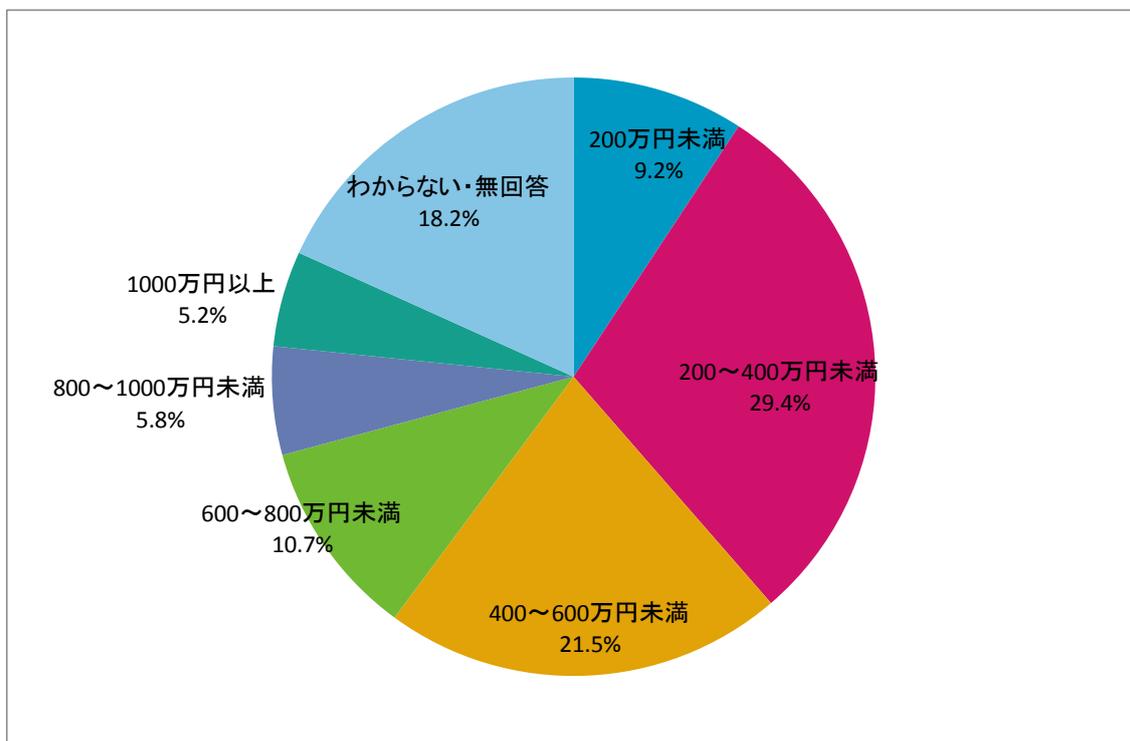
N=890

图 3-4. 婚姻状况

(4) 世帯収入

回答者の世帯収入を図 3-5 に示す。収入と所得は異なるため一概には比較できないが、全国で見ると平成 22 年において年間所得 400 万円未満の世帯が全体の 45.2%、年間所得 1000 万円未満の世帯まで含めると全体の 88.0%にまで達する⁸⁾ことと比較すると、回答者の経済水準は全国平均よりやや低いと言える。

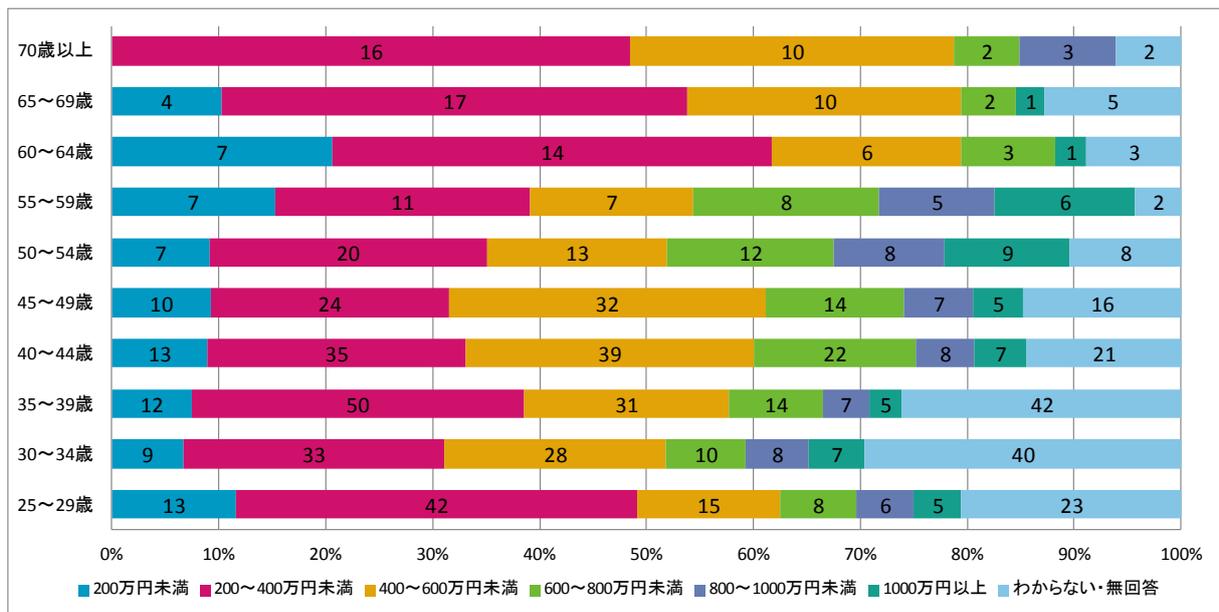
年齢別の世帯収入を図 3-6 に示す。60 歳未満の回答者では、概ね年齢の増加とともに世帯収入が増加する傾向が見られる。年間所得 400 万円未満の世帯が全体の 45.2%であることと比較すると、30 歳未満の若年層や 60 歳以上の高齢者では「わからない・無回答」を除けば、年間 400 万円未満と回答した者が半数以上であり、全体の平均よりやや低い結果となっている。若年層では年功序列型の給与体系の影響を、高齢者は退職等により年金生活を送っていることなどの影響を受けているものと考えられる。



N=890

図 3-5. 世帯収入

⁸⁾ 厚生労働省「平成 22 年国民生活基礎調査」による。



N=890

図 3-6. 年齢別世帯収入

3.4. ターンに関する基本属性

本節では、回答者のターン実施時の基本属性について報告する。報告に先立って、本報告における UIJ ターンの定義とその分類について説明する。

(1) 本報告書における UIJ ターンの定義と分類

UIJ ターンの実施経験者を対象にアンケート調査を行う場合、まず、ターン実施経験者かどうか(どのターンを行ったのか)を判別するための質問を設ける必要がある。ただし、I ターンや J ターンという語は、比較的新しい語であり、IJ ターン実施者に該当する方でも、自分が IJ ターンを実施したと自覚していない方がいることも想定される。そのため、「UIJ ターンを実施したことがあるか」等、直接的にターンの実施履歴を問う質問では、適切に調査対象となるべき者を捕捉できない可能性がある。

またアンケート調査では、調査対象者に調査内容を悟られると、対象者の主観から回答に偏り(バイアス)が生じてしまうことがしばしばある。そのため、「UIJ ターンを実施したことがあるか」等、直接的にターンの実施履歴を問う質問を設けるのは、この観点からも得策とは言えない。

そこで、今回の調査では、市町村単位での居住遍歴(出身地、前居住地、現住地)の組み合わせと、現住地と出身地が近隣であるか否かを問い、その結果によって得られたサンプルを各ターンに分類することとする。それにより、調査対象となるべきものを適切に捕捉出来るようになるほか、回答バイアスのリスクを軽減出来ると考えられる。

3.1 でも説明したが、内閣府の定義によれば、J ターンは「出身地の近くの地方都市に移住する形態」であるため、「出身地の近く」という曖昧な概念を、居住遍歴のみから定義し、J ターンとそれ以外のターンを明確に区分するのは難しい。実際には現住地と出身地が多少離れていても、ターンを実施した本人が、転入先を選択する際に「居住地が近隣である」ということを意識したならば、それは J ターンである。したがって、J ターンは主観的な概念を含んでいると考えられる。居住遍歴を調査するにもかかわらず、それとは別に現住地と出身地が近隣であるか否かも調査したのは、このためである。なお、この設問は、現住地と出身地について「同一」、「近隣」、「同一でも近隣でもない」の3つから、当てはまる選択肢を選ぶものである。

上記設問と居住遍歴の回答による各ターンの分類条件を表 3-3 に、これを図として表現したものを図 3-7 に示す。

表 3-3. 本報告書におけるターンの分類条件

ターン分類 (取得サンプル数)		「現住地と出身地の 関係」の回答	居住遍歴の条件 (記した条件を全て満たすもの)	解説
Uターン (481)	県外Uターン (363)	「同一」または「近隣」	・出身地と現住地が同じ ・前居住地と現住地の都道府県が異なる	①
	県内Uターン (118)	「同一」または「近隣」	・出身地と現住地が同じ ・前居住地と現住地の都道府県が同じ	②
Jターン (74)		「近隣」	・Uターンに該当しない ・出身地と前居住地が異なる ・前居住地と現住地の都道府県が異なる	③
		「同一でも近隣でもない」	・出身地と現住地の都道府県が同一 ・前居住地と現住地の都道府県が異なる	④
Iターン (230)		「近隣」または 「同一でも近隣でもない」	・Uターン、Jターンに該当しない ・出身地と現住地の都道府県が異なる ・前居住地と現住地の都道府県が異なる	⑤
県内流動 (105)	出身によらない 県内移動(26)	「近隣」または 「同一でも近隣でもない」	・出身地と前居住地の都道府県が異なる ・前居住地と現住地の都道府県が同一	⑥
	出身県での 県内移動(79)	「近隣」または 「同一でも近隣でもない」	・出身地、前居住地、現住地が同都道府県 ・Uターンに該当しない	⑦

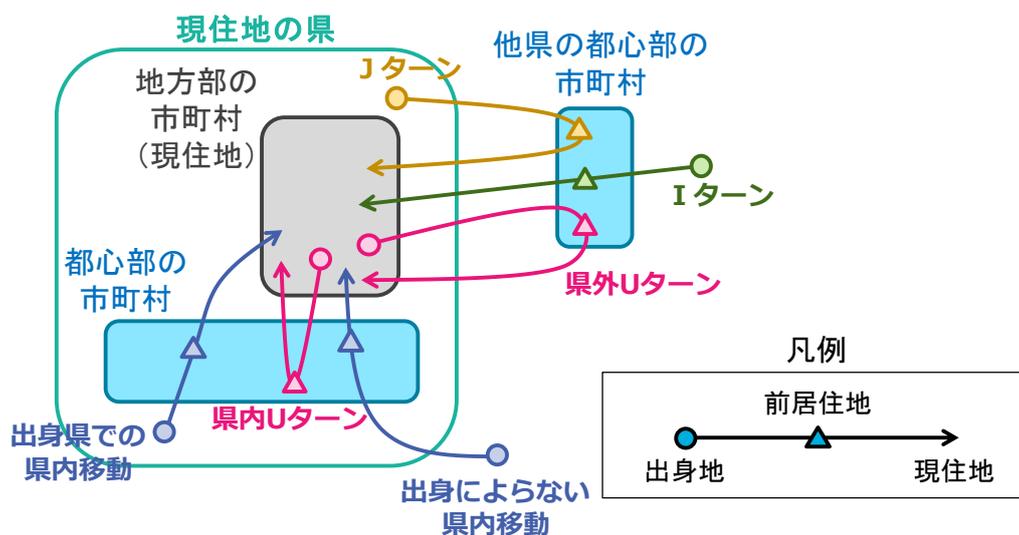


図 3-7. 本報告書におけるターンの分類条件 (図)

各ターンの分類に関する考え方を、表 3-3 中の解説で示した番号の順に記す。

①② Uターン

出身地の市町村から別の市町村を経由して、再び出身市町村に戻るような移動をUターンとして定義した。現住地と出身地の関係については「同一」ではなく「近隣」と回答した場合においてもUターンとしたが、これは市町村合併への配慮である。ただし、「同一でも近隣でもない」と回答したサンプルについては、同一市町村にもかかわらず、近隣でないと判断するのは考えにくいいため、不適切サンプルとして除外している(3.2で前述)。

また、他の都道府県を経由したUターンか否かによって、ターンの実施に関する考え方も異なっていると思われる。そのため、他の都道府県を経由した「①県外Uターン」と「②県内Uターン」の二つに分類した。

③④ Jターン

出身地から、出身とは別の都道府県を経由し、出身の市町村に近い別の市町村に戻るような移動をJターンとして定義した。なお、Jターンについては、「出身地の近くに移住」という定義から、暗に「全く別の地域(都道府県)を経由して戻る」という意味も含んでいると考え、同一都道府県内での転居(前居住地と現住地が同じ都道府県)の場合は、Jターンとみなさないものとした。

前述したように、Jターンの定義は「出身地の近く」という部分に主観的な概念を含んでいると考えられるので、現住地と出身地の関係を「近隣」として回答した者のうち、出身地と現住地が異なっており、都道府県を跨いで転入をJターンとした。すなわち、出身地と現住地の都道府県が異なる場合でも、ターン実施者が「近隣である」と判断した場合はJターンとしている。例えば、「出身地：山口県岩国市→前居住地：愛媛県松山市→現住地：広島県大竹市」という移動では、出身地と現住地は異なる都道府県であるものの隣接した市であり、この移動はJターンと判断するのが適切である。

また、現住地と出身地の関係を「同一でも近隣でもない」と回答した場合でも、現住地と出身地が同一の都道府県で、都道府県を跨いで転入している場合にはJターンとした。例えば、「出身地：福岡県久留米市→前居住地：神奈川県川崎市→現居住地：福岡県京都郡苅田町」という移動では、確かに、久留米市と苅田町は同じ福岡県内とはいえ、地理的には遠く離れており、近隣と答えにくいのは理解できるものの、川崎市を経由して出身県に再び戻ってくるという移動は、出身が福岡県であることを踏まえて、現住地の選択を行っていると考えるのが自然である。

⑤ Iターン

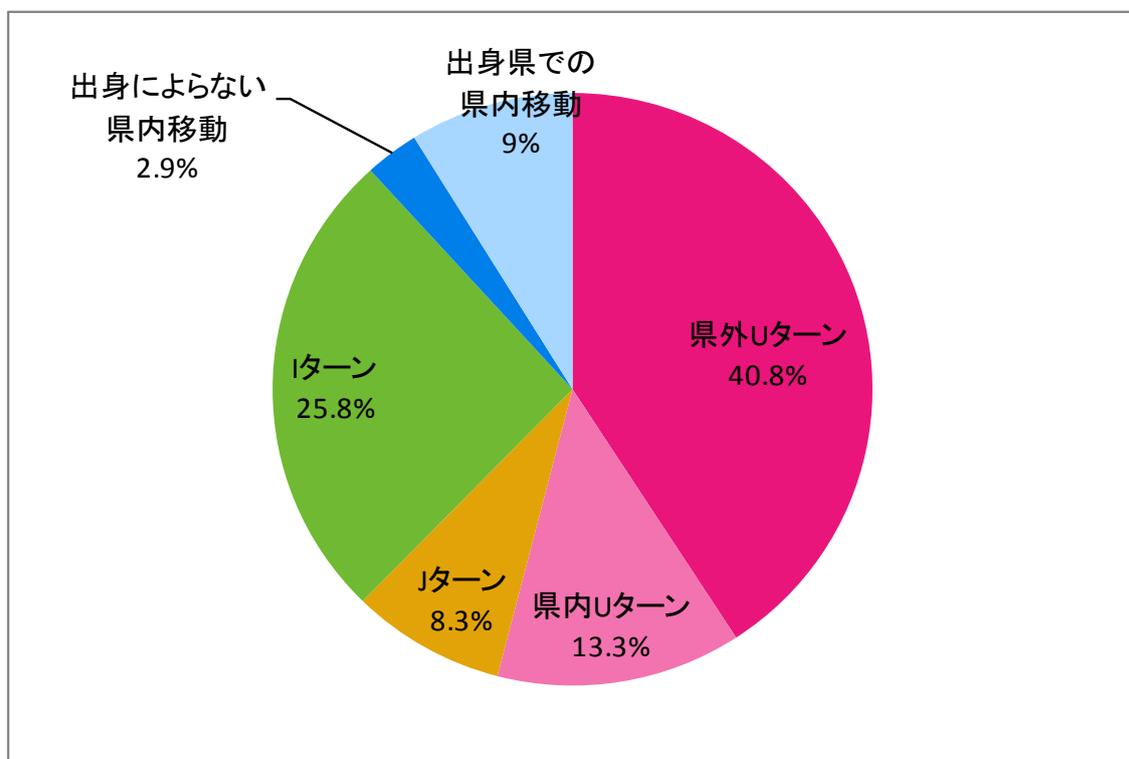
上述したUターン、Jターンに該当せず、出身県によらない都道府県を跨いで転入をIターンと定義した。なお、出身地は前居住地と同一であっても構わない。

⑥⑦ 県内流動

同一都道府県内からの転入については、転居前後も同一の生活圏で過ごしている可能性がある。その場合、今回の IJ ターンの定義にある「移住」という言葉で、移動を説明するのは不適切であると考えられる。さらに、出身地が転居先の選択に影響を及ぼしているのか否か（I ターンか J ターンか）を区別するのが極めて困難である。そこで今回は、同一都道府県内での転居については、出身地と同一の市町村に帰ってくる U ターンを除いて、「県内流動」とし、UIJ ターンとは別の行動として定義した。

その中でも、出身地と同じ都道府県での移動か、もしくは出身によらない移動かによって、転居の実態や考え方も異なっていると思われる。そのため今回は「⑥出身によらない県内移動」と「⑦出身県での県内移動」の二つに分類した。

以上の定義にしたがって分類した、回答者のターン構成を図 3-8 に示す。一番多かったのは県外 U ターンであり、県内 U ターンと合わせると半数を越える。都市部から地方部への移住においては、出身地が転居先の選択に大きく影響を及ぼすことが示唆される。しかし、I ターンも全体のおよそ 1/4 を占めており、出身地によらない移住も珍しいものではないことがわかる。また、少ないながらも J ターンのサンプルも 1 割程度収集することが出来た。



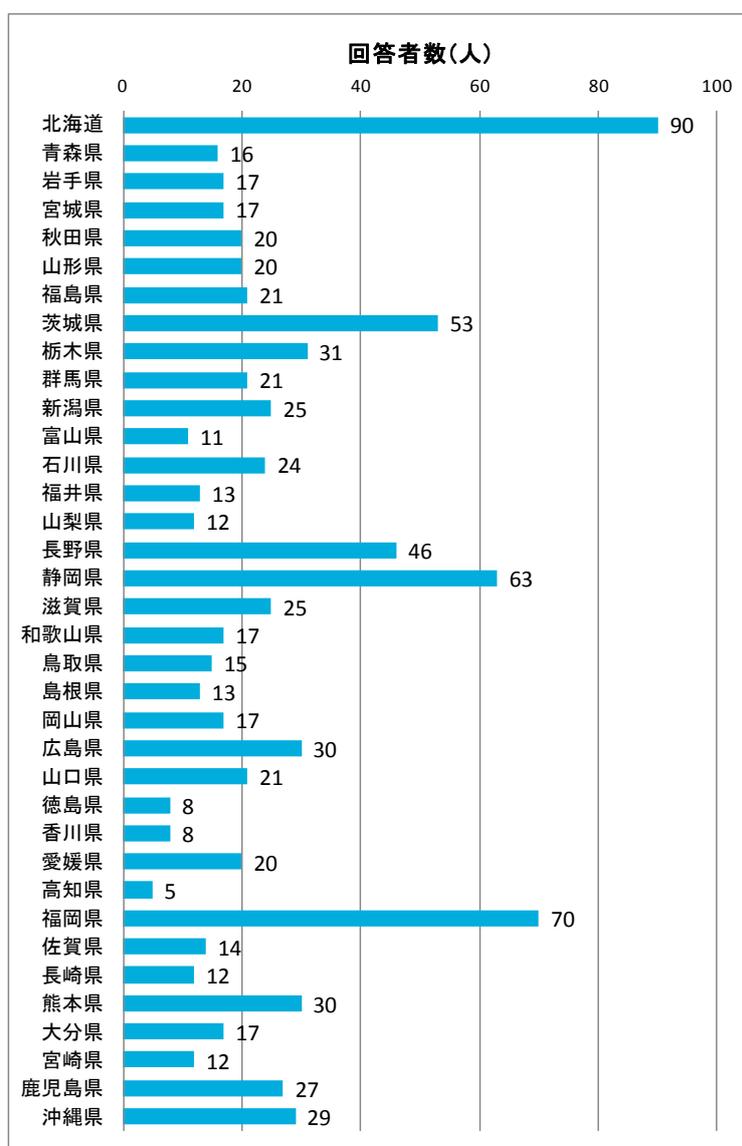
N=890

図 3-8. 回答者のターン構成

(2) 現住地

回答者の現住地の分布を図 3-9 に示す。県によって偏りはあるものの、少ない県でも 5 サンプル以上のデータを収集することが出来た。回答者の現住地と都道府県別の人口⁹⁾を並べたグラフを図 3-10 に示す。多少の偏りはあるが、おおむね人口比に従って回答が得られたことがわかる。このことから、UIJ ターン先は、地域による顕著な偏りがあまり無いということが示唆される。

また、回答者の現住市町村の人口規模を図 3-11 に示す。5000 人単位で集計した結果によれば、概ねどの人口規模に居住するサンプルも均等に取得することが出来た。以後の分析では、現住市町村の人口規模について、一万人未満 (53 サンプル)、一万人以上五万人未満 (332 サンプル)、五万人以上 (505 サンプル) の三段階に区分して、分析を行う。



N=890

図 3-9. 回答者の現住地

⁹⁾ 総務省統計局「人口推計 (平成 26 年 10 月 1 日現在)」による。

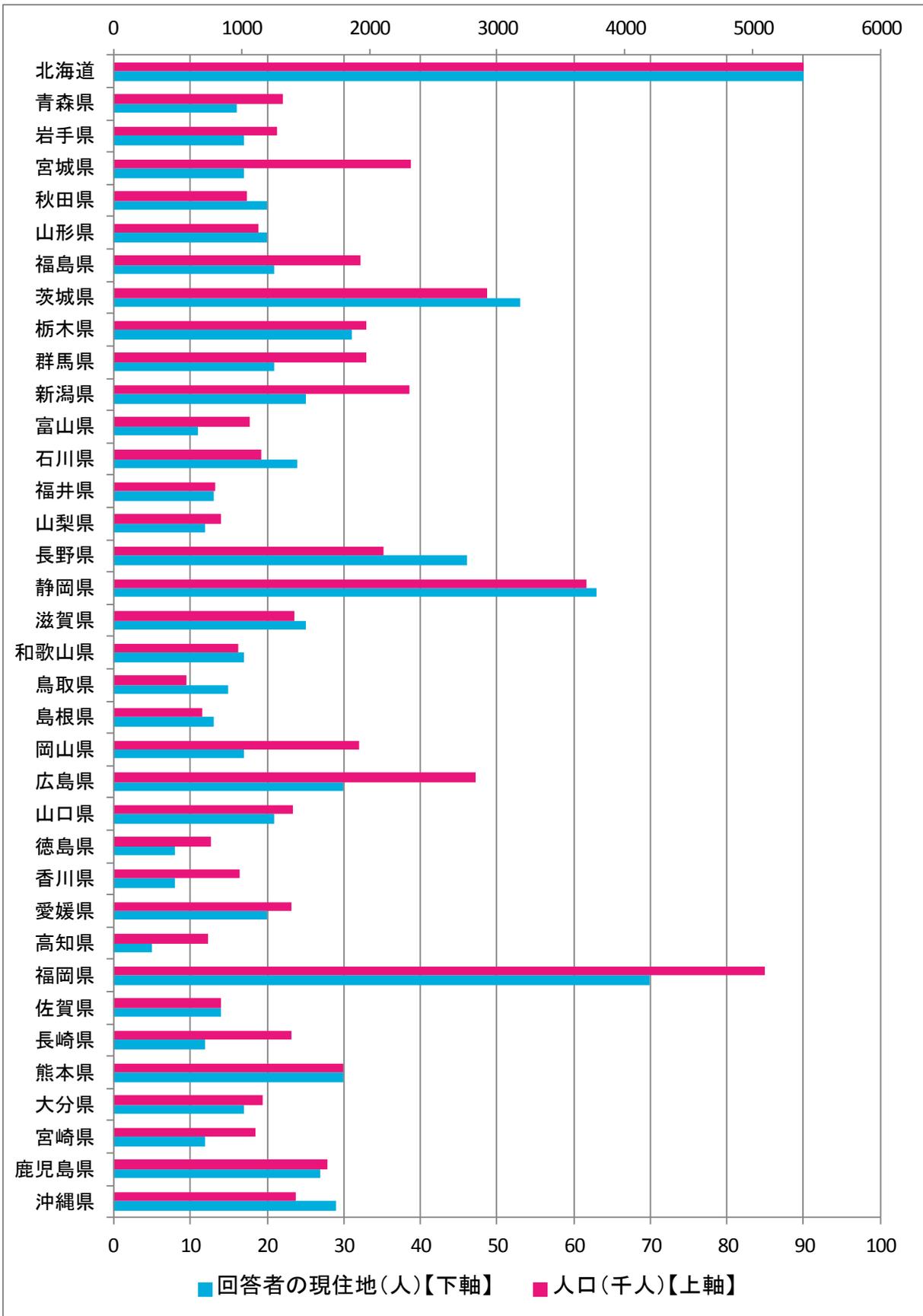
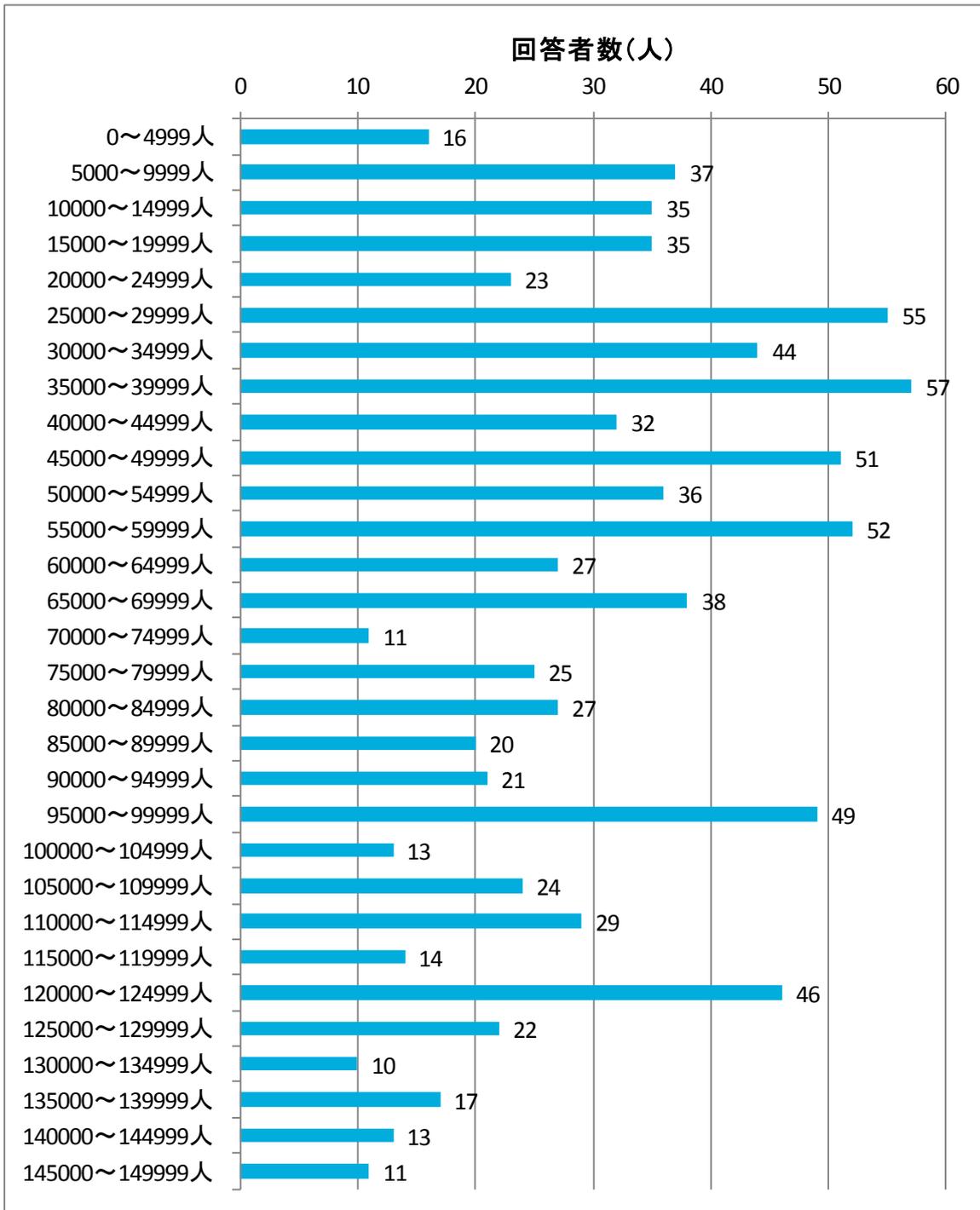


図 3-10. 回答者の現住地と都道府県別の人口の関係



N=890

図 3-11. 現住地の人口規模（市町村の重複を含む）

(3) 現住地と出身地の関係

回答者の現住地と出身地の関係を表 3-4 に示す。集計に際して、表 3-5 に示すように 47 都道府県を 15 地域に集約した。

表 3-4 中では、現住地と出身地の地域が同じ箇所を赤の網掛けで示している。この結果から、出身地と同じ地域に現在も居住している人が明らかに多いことがわかる。沖縄を除いた全ての地域で、現在ある地域に居住している人の半数以上が、その地域を出身地としている。他の地域と比べてこの割合が低い沖縄は、移住先として人気があるといえる。

表 3-4. 現住地と出身地の関係

		現住地											総計	
		北海道	東北	北関東	北陸	甲信	静岡	近畿	山陰	山陽	四国	九州		沖縄
出身地	北海道	70	2		1	1	3						1	78
	東北	4	95	9	2	1	1					3	1	116
	北関東		2	63								2	2	69
	首都圏	6	7	16	2	15	11	1		3	2	5	2	70
	北陸	1	2	3	63		3	2				1	1	76
	甲信			1		33	1			1				36
	中京圏	1		1	2	3	3	2				1	4	17
	静岡	1		1			38		1					41
	大阪圏	4	1	3	2	4		12	1	6	1	9	3	46
	近畿							24						24
	山陰								24	1				25
	山陽	1		5	1			1	1	50		4	1	64
	四国	1	1	1			1			2	37	2		45
	九州	1	1	2		1	2		1	5		154	1	168
	沖縄											1	14	15
総計		90	111	105	73	58	63	42	28	68	41	182	29	890

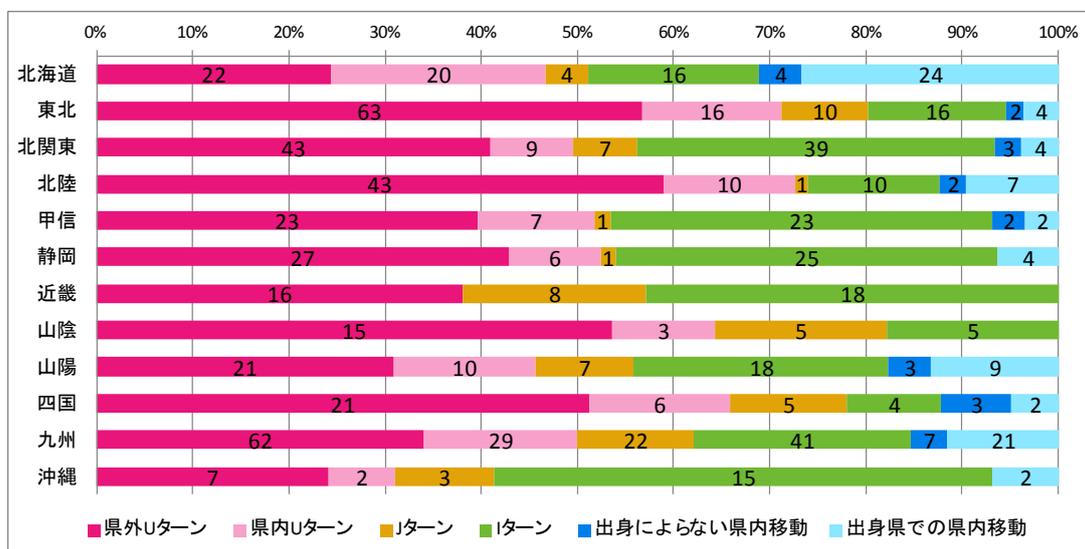
表 3-5. 地域名と対応する都道府県

地域	対応する都道府県
北海道	北海道
東北	青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県
北関東	茨城県、栃木県、群馬県
首都圏	埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県
北陸	新潟県、富山県、石川県、福井県
甲信	山梨県、長野県
中京圏	岐阜県、愛知県、三重県
静岡	静岡県
大阪圏	京都府、大阪府、兵庫県、奈良県
近畿	滋賀県、和歌山県
山陰	鳥取県、島根県
山陽	岡山県、広島県、山口県
四国	徳島県、香川県、愛媛県、高知県
九州	福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県
沖縄	沖縄県

(4) 現住地とターン分類の関係

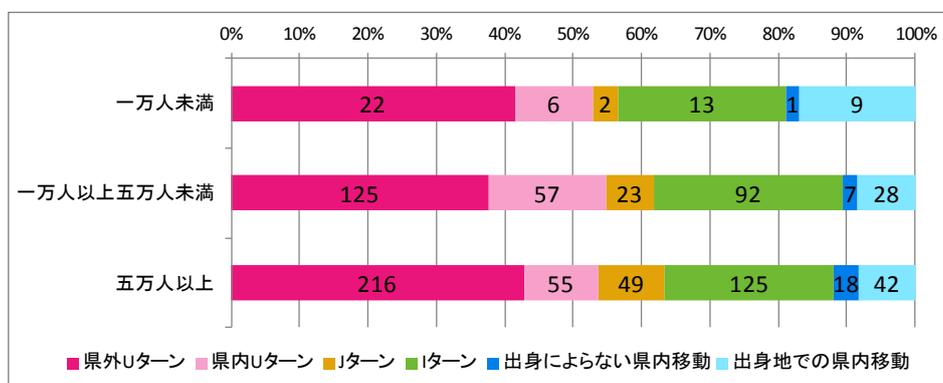
現住地とターン分類の関係を図 3-12 に示す。U ターンによる移住者はどの地域にもある程度いるのに対し、I ターンによる移住者の人数は地域によって顕著に差が生じている。U ターン者の人数が多く、I ターン者の人数が少ないのは、東北・北陸・山陰・四国の各地域であり、これらの地域では、UJ ターン者の割合が全体の 7 割以上を占めるのに対し、I ターン者は 2 割以下となっている。これらの地域には人口 100 万人以上の都市がなく、核となる都市の存在が UIJ ターンの実施に影響を及ぼしている可能性が示唆される。また、北海道では県内 U ターンや県内移動の割合が多いことが伺える。このことから、北海道は、同一都道府県内での転居が、他の地域と比較して多い地域であることがわかる。

現住地の人口規模とターン分類の関係を図 3-13 に示す。ターン先である現住地の市町村の人口規模の違いによる、各ターン分類の構成比に差は見受けられなかった。



N=890

図 3-12. 現住地とターン分類の関係



N=890

図 3-13. 現住地の人口規模とターン分類の関係

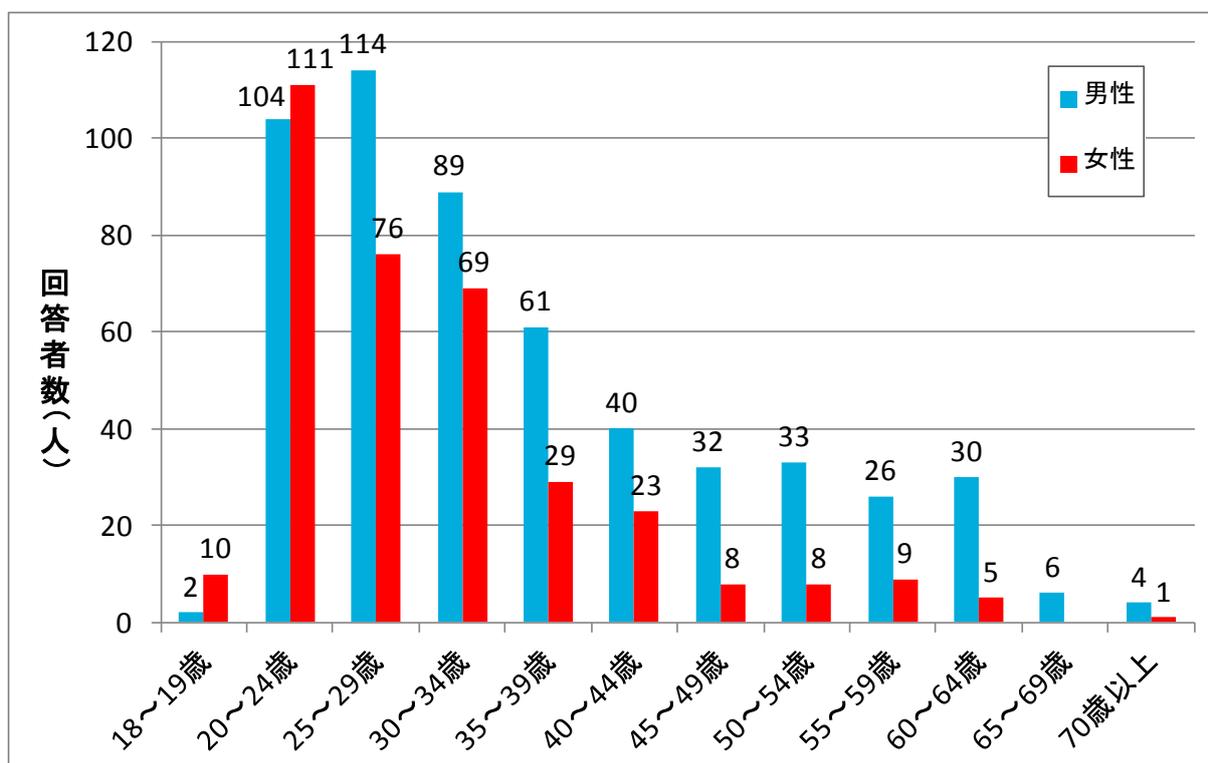
(5) ターン時の年齢

回答者がターンを実施したときの年齢の分布を図 3-14 に示す。男女ともに 20～34 歳にターンを実施した人が多いことがわかる。ただし、35 歳を超えても 64 歳までの人数は、ほぼ横ばいになっている。その一方で、65 歳を超えると、極端に人数が少なくなる。これは、退職後のターンのピークが終わったことによるものと思われる。

ターン時の年齢とターン分類の関係を図 3-15 に示す。65 歳以上のターンは人数が少ないため、除外して考えると、高齢になるに伴い、U ターンなどの出身に依存したターンの割合が減少し、I ターンなど出身によらない転居の割合が増加していることがわかる。

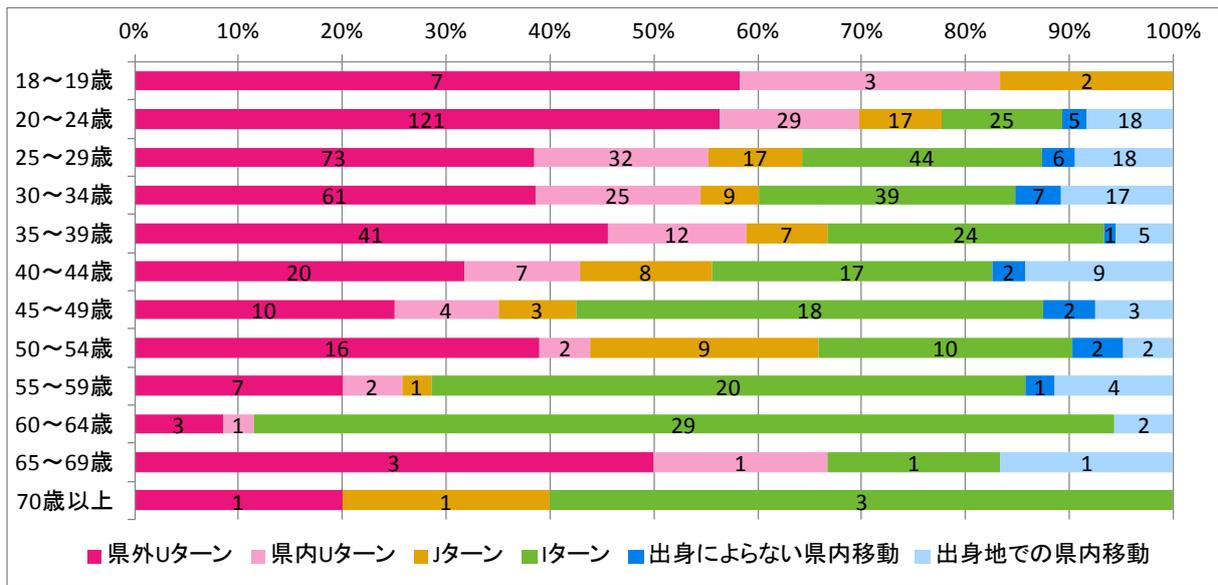
ターン時の年齢と現住地の関係を図 3-16 に示す。ターンを実施した年齢に関係なく、ターン先の地域は満遍なく分布していることがわかる。

ターン時の年齢と現住地の人口規模の関係を図 3-17 に示す。ターン時の年齢がどの年代でも、人口が一万人未満の市町村をターン先とした転入は 1 割未満に留まっており、人口が五万人以上の市町村をターン先とした転入も 5 割強となっている。ターン時の年齢の違いによる、ターン先市町村の人口規模の構成比に差は見受けられなかった。



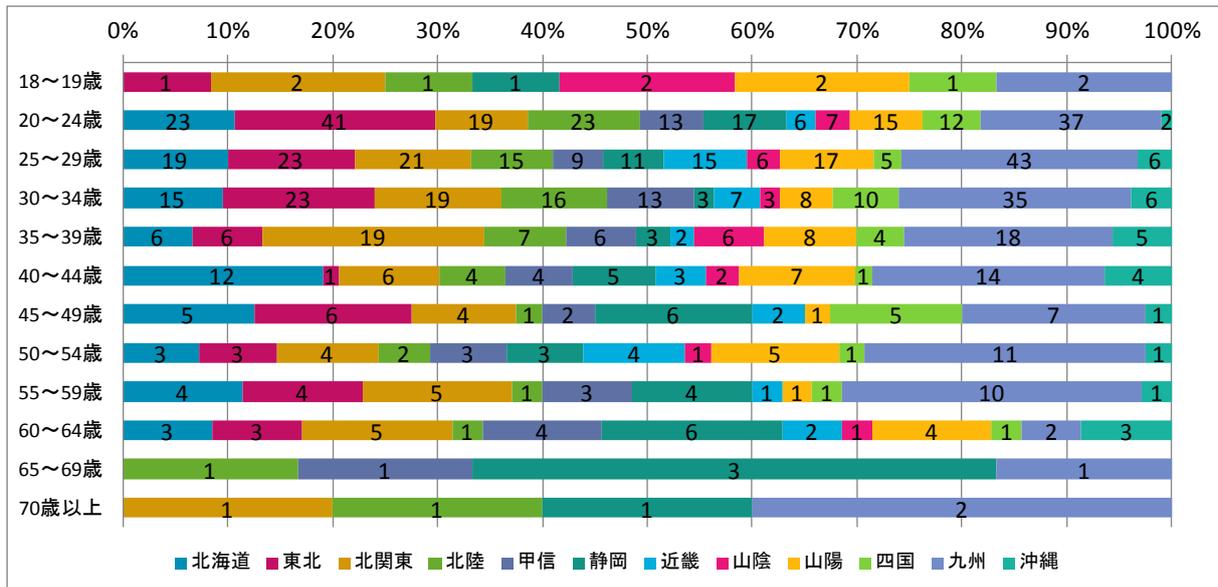
N=890

図 3-14. ターン時の年齢



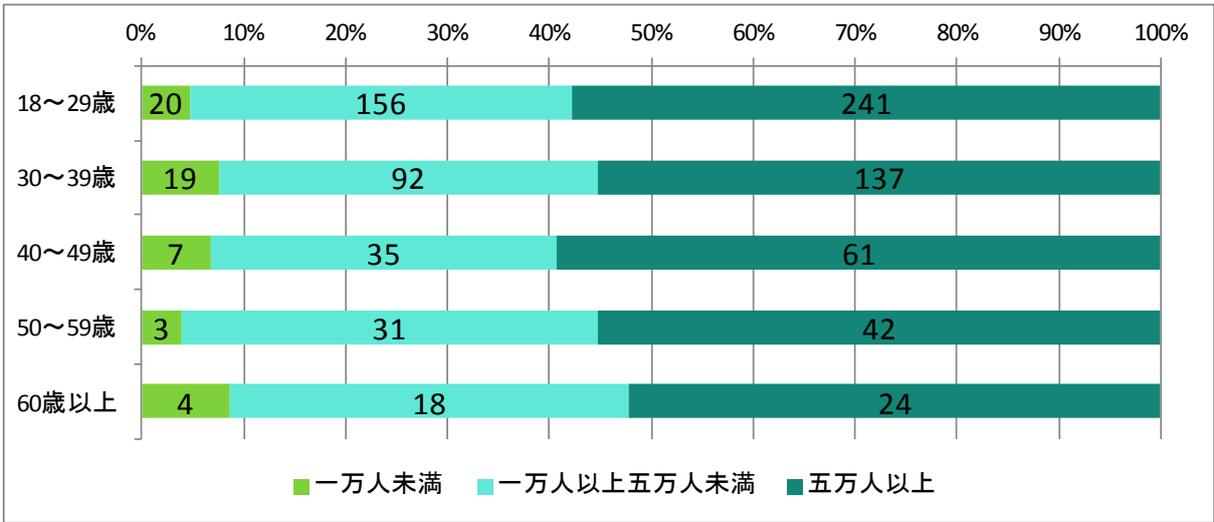
N=890

図 3-15. ターン時の年齢とターン分類の関係



N=890

図 3-16. ターン時の年齢と現住地の関係



N=890

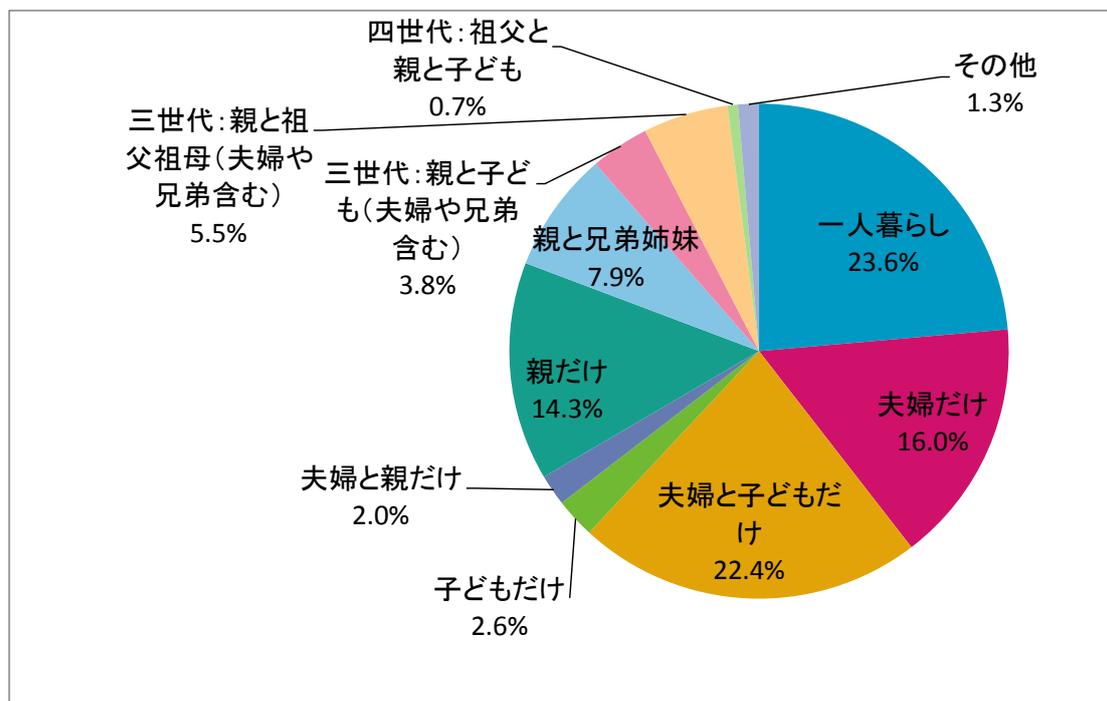
図 3-17. ターン時の年齢と現住地の人口規模の関係

(6) 回答者の家族構成

回答者がターンを実施したときの家族構成を図 3-18 に示す。回答者がターンを実施したときの家族構成のため、ターン時の年齢にも依存するが、一人暮らしから三・四世代世帯まで幅広い家族構成のサンプルを取得できた。

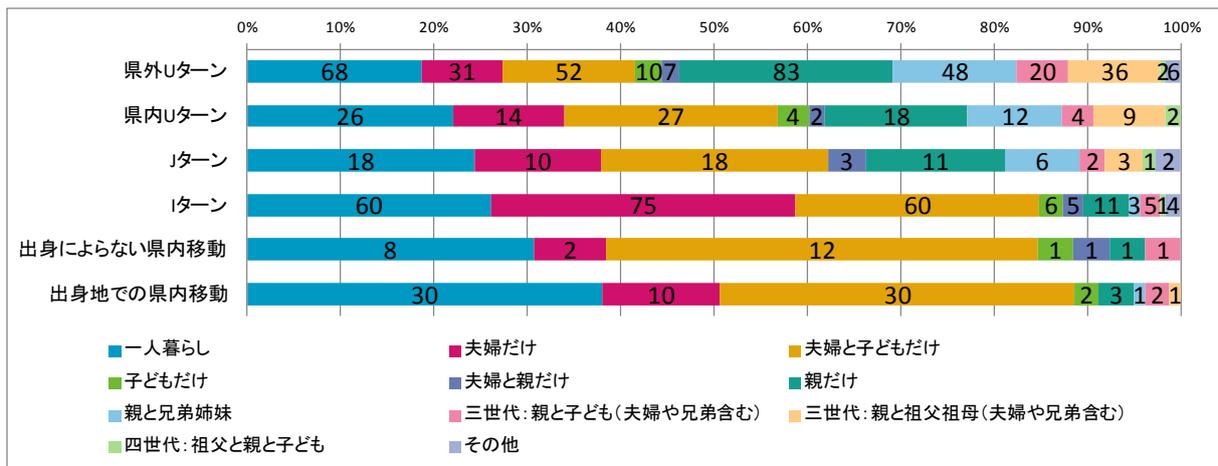
ターン分類と家族構成の関係を図 3-19 に示す。出身地に依存する U ターン・J ターンと、依存しない I ターンでは、家族構成の傾向が異なっている。U・J ターンでは「夫婦だけ」世帯が 1 割程度であるのに対し、I ターンでは 3 割を超えている。その一方で、I ターンでは、親世代を含む世帯が 1 割程度であるのに対し、U・J ターンでは 3 割を超えており、特に県外 U ターンでは 5 割を超えている。家族構成が、ターンの実施に影響を及ぼしていることがわかる。

家族構成と現住地の人口規模の関係を図 3-20 に示す。家族構成の違いに依る、ターン先市町村の人口規模の構成比に差は見受けられなかった。



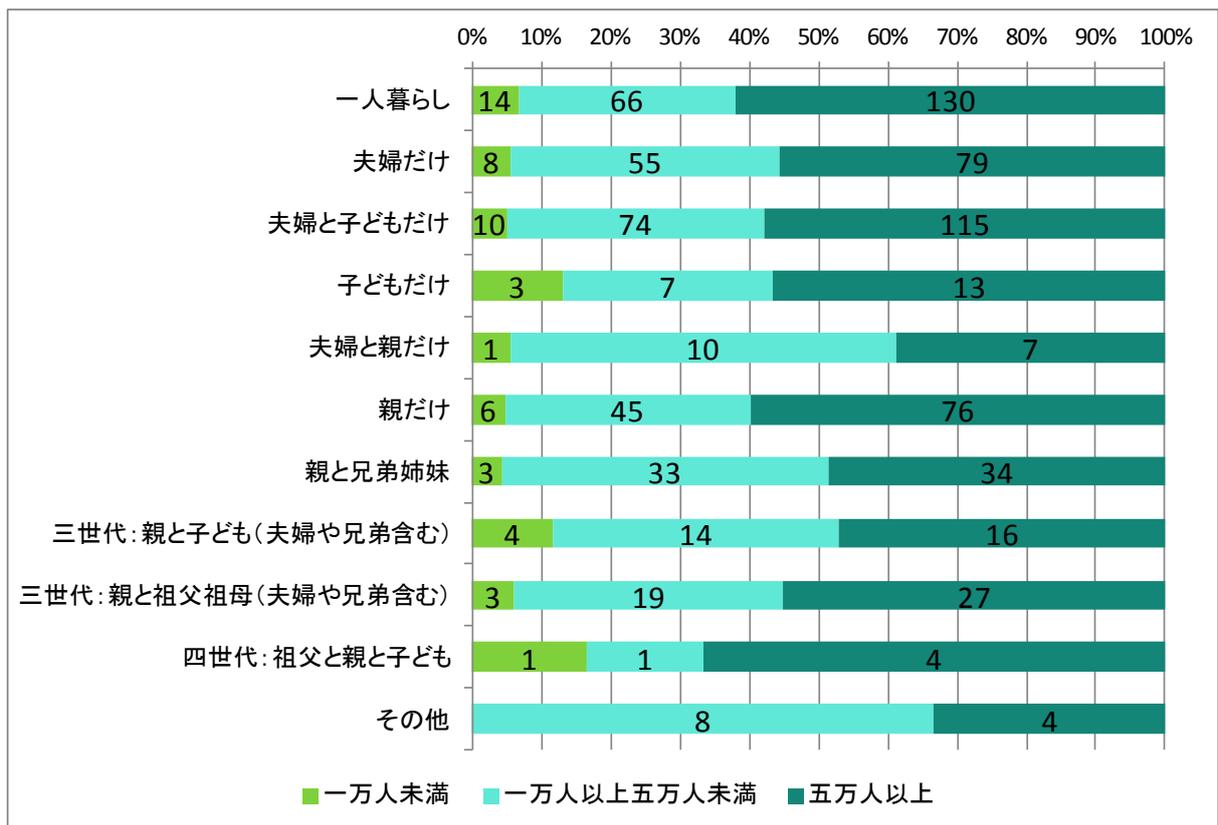
N=890

図 3-18. 回答者の家族構成



N=890

図 3-19. ターン分類と家族構成の関係



N=890

図 3-20. 家族構成と現住地の人口規模の関係

3.5. 勤務実態

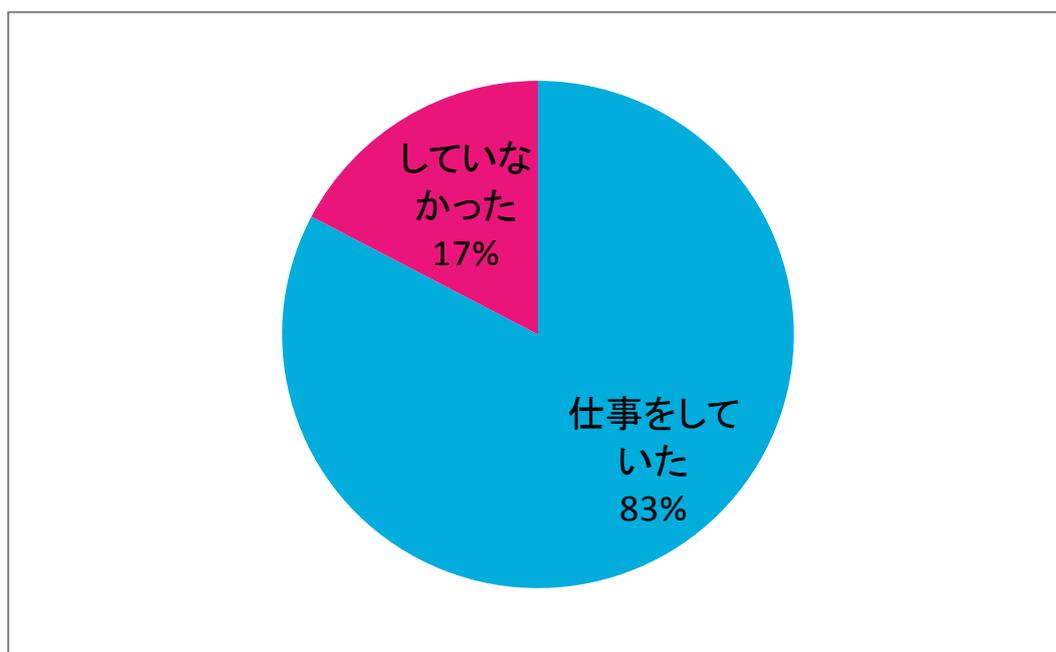
本節では、回答者のターン実施後の勤務実態について報告する。

(1) 転入後の仕事の有無

現住地に転入後の、回答者の仕事の有無について図 3-21 に示す。仕事をしてきた（現在も仕事をしている人も含む）が8割以上であり、仕事をしていない人は17%に留まった。仕事をしていない人は配偶者が仕事をしている、もしくは退職後であるなどのケースと考えられる。図 3-2 で示した回答者の現在の職業構成は、専業主婦・主夫と無職が合わせて 22.6%であったため、差の約 6%がターン実施後には就いていた仕事をやめた方であると思われる。

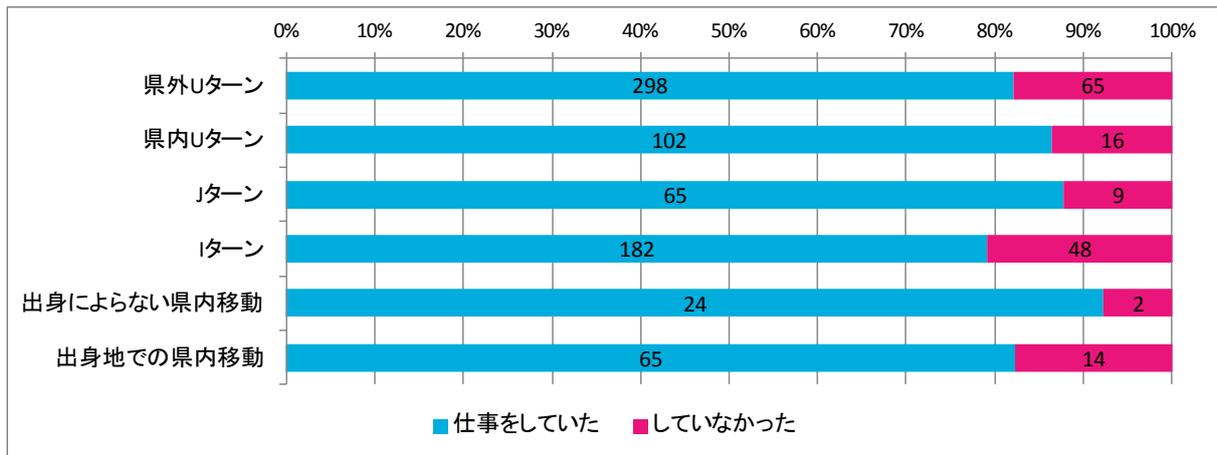
ターン分類と転入後の仕事の有無の関係を図 3-22 に示す。ターン分類による違いは、あまり見受けられないものの、I ターンでは 2 割以上がターン後に仕事をしておらず、他のターンよりは、仕事をしていなかった人の割合が多い。これは、退職をきっかけとして、I ターンを実施する人が一定数存在することによるものと思われる。

現住地の人口規模と転入後の仕事の有無の関係を図 3-23 に示す。一見、二つの項目には関連があるようにも見られるが、これは誤差の範囲であり、ターン先である現住地の人口規模の違いによって、転入後の仕事の有無に差は見受けられない。



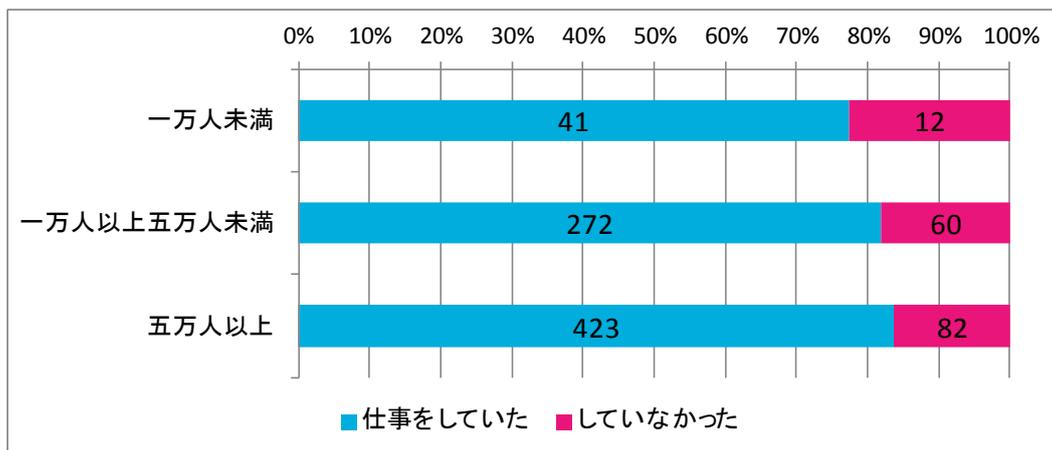
N=890

図 3-21. 転入後の仕事の有無



N=890

図 3-22. ターン分類と転入後の仕事の有無の関係



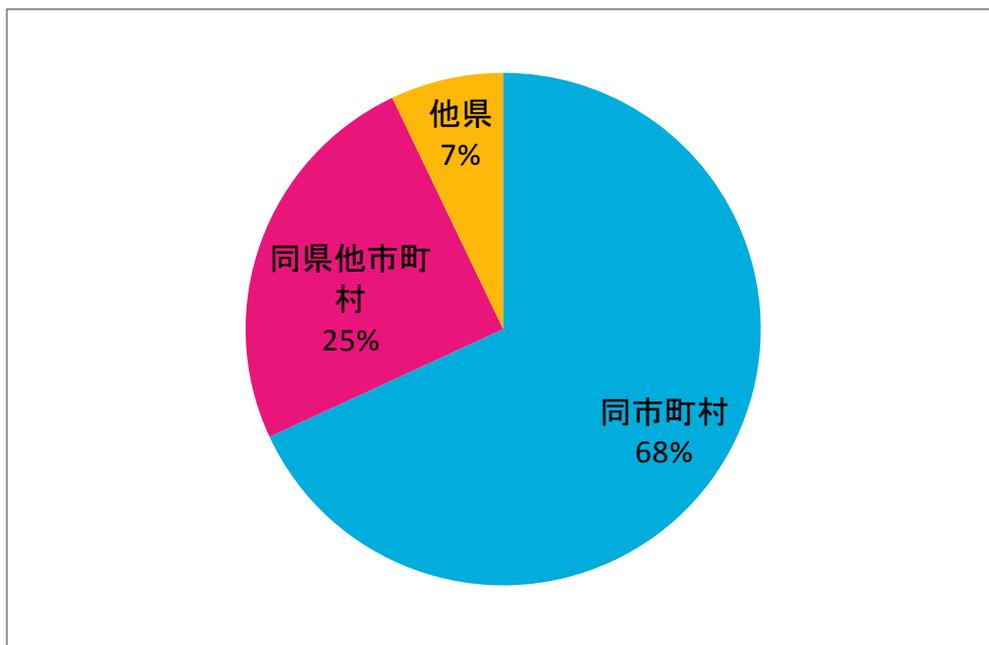
N=890

図 3-23. 現住地の人口規模と転入後の仕事の有無の関係

(2) 居住地と勤務地の関係

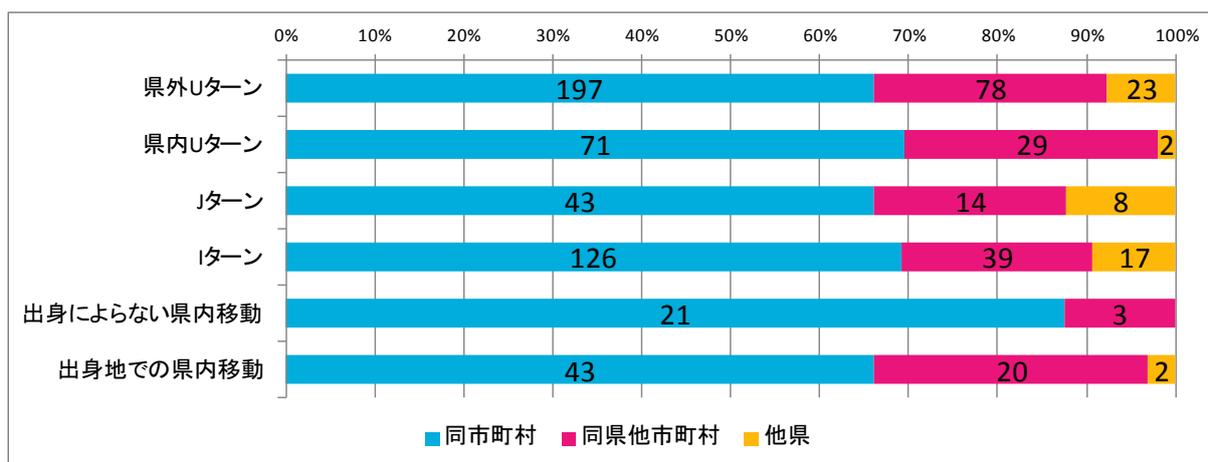
転入後の居住地と勤務地の関係を図 3-24 に示す。転入後も仕事をしてきた人の約 7 割が、居住地と勤務地が同市町村であった。他の市町村ではあるが、居住地と同じ都道府県内に勤務地があるという人も含めると、その割合は 93%に上る。居住地と勤務地が別々の都道府県に位置しているという人の割合は 1 割以下であった。今回の調査では、地方部へのターンを対象としているため、公共交通の利便性が比較的低い地域が対象となっていることもあり、居住地と勤務地が近隣である人の割合が高くなったものと思われる。

ターン分類と勤務先と現住地の関係を図 3-25 に示す。県内 U ターン・出身によらない県内移動・出身地での県内移動の 3 つのターンは、同一都道府県内での転居であるが、これらのターンを実施した人は、他県からのターンを実施した人よりも、現住地と他の都道府県を勤務地としている人の割合が少ない。以前、他県に居住していたなどの理由がなければ、都道府県を跨いで就業することは珍しいケースであると考えられる。その一方、現住地と同県内の他市町村への就業者は、どのターンでも 2 割程度存在しており、それほど珍しいことではない。



N=736

図 3-24. 転入後の居住地と勤務地の関係



N=736

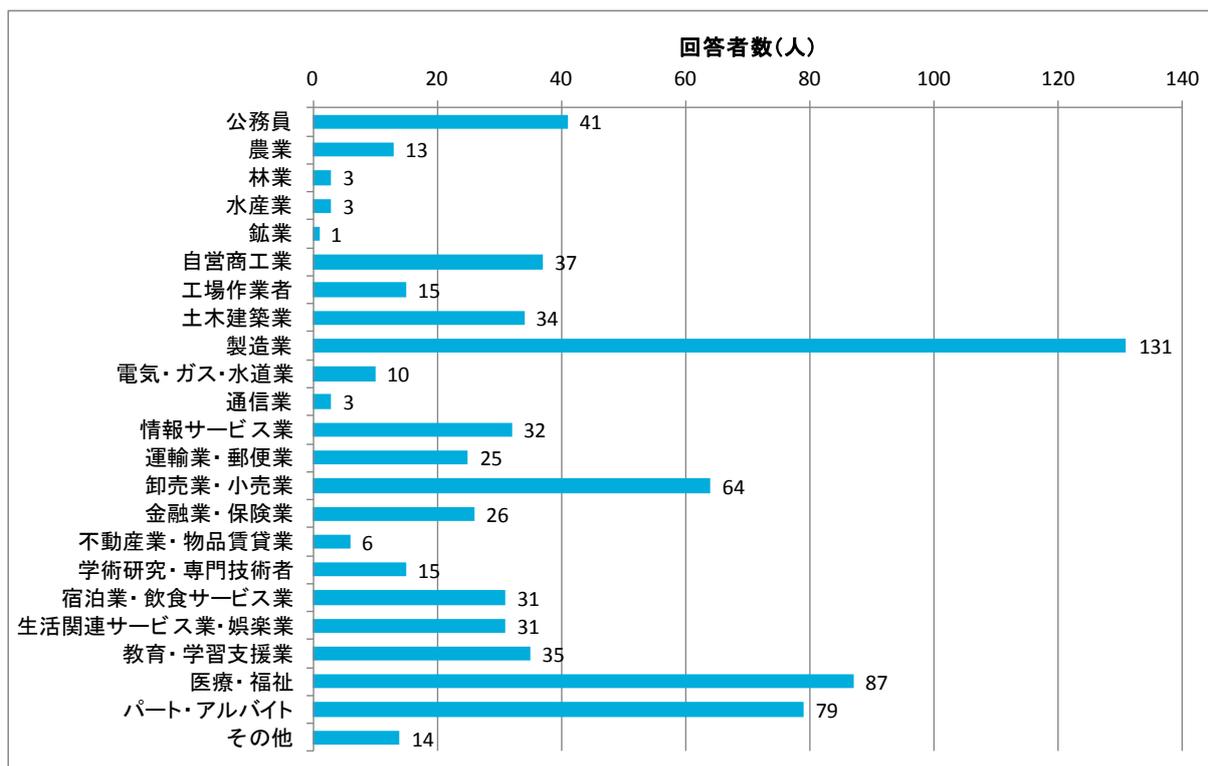
図 3-25. ターン分類と勤務先現住地の関係

(3) 業種

回答者が転入後に就いた仕事の業種を図 3-26 に示す。最も多いのは製造業であり、全体の 2 割弱を占めている。全体的に第三次産業に従事する方が多く、農林水産業に従事する方は 19 名とあまり多くない。

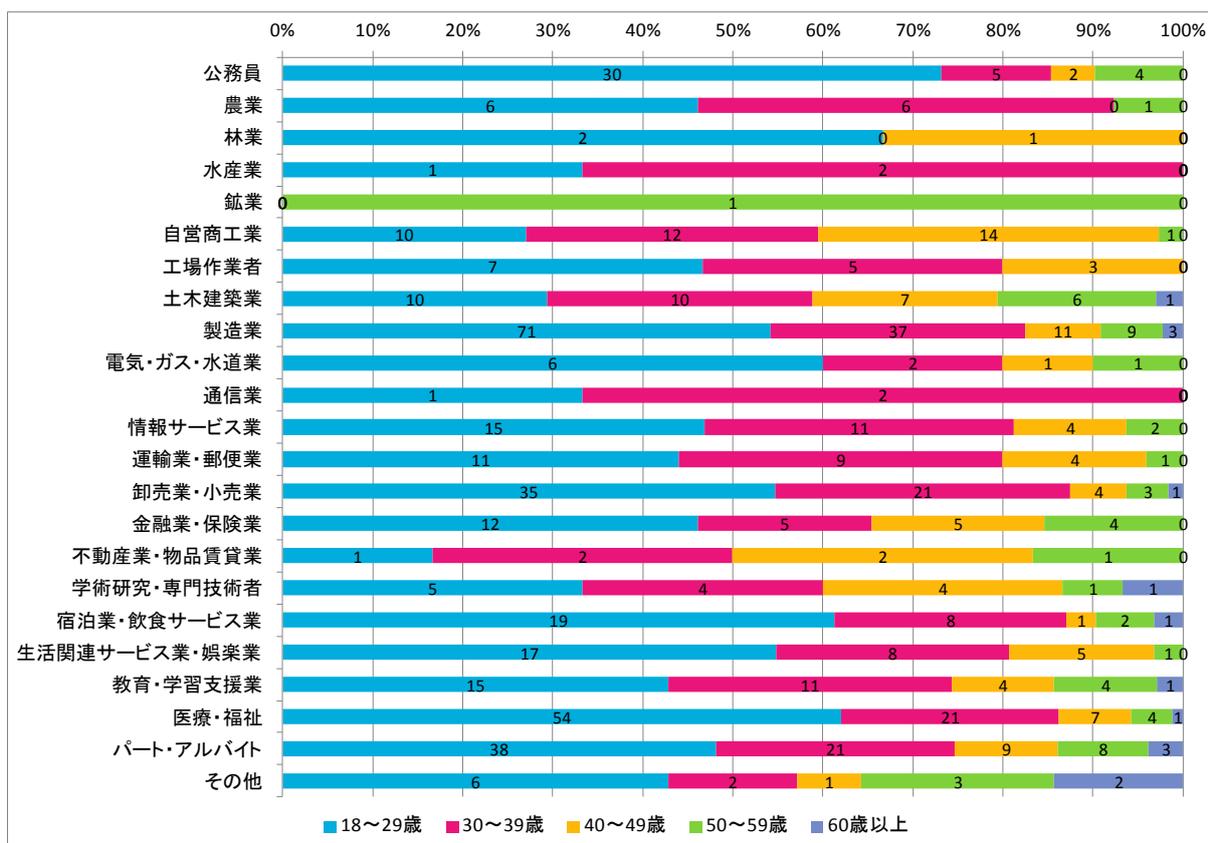
業種別のターン時の年齢について図 3-27 に示す。業種によって、ターン時の年齢構成に違いが見られる。例えば、農林水産業や自営商工業に就いた方のほとんどが、49 歳以下でのターンを実施していることがわかる。

業種別の勤務先と現住地の関係について図 3-28 に示す。農林水産業や自営商工業、公務員に就いた方は、全員が勤務先と現住地が同じ都道府県に位置しており、職住近接の傾向が見受けられる。業種別のターン時の年齢についての考察と合わせて考えると、これら業種に就く方は比較的若年層が多く、職住近接の傾向が見られることから、就業に関する支援と、住宅に関する支援を合わせて行うことが効果的だと思われる。



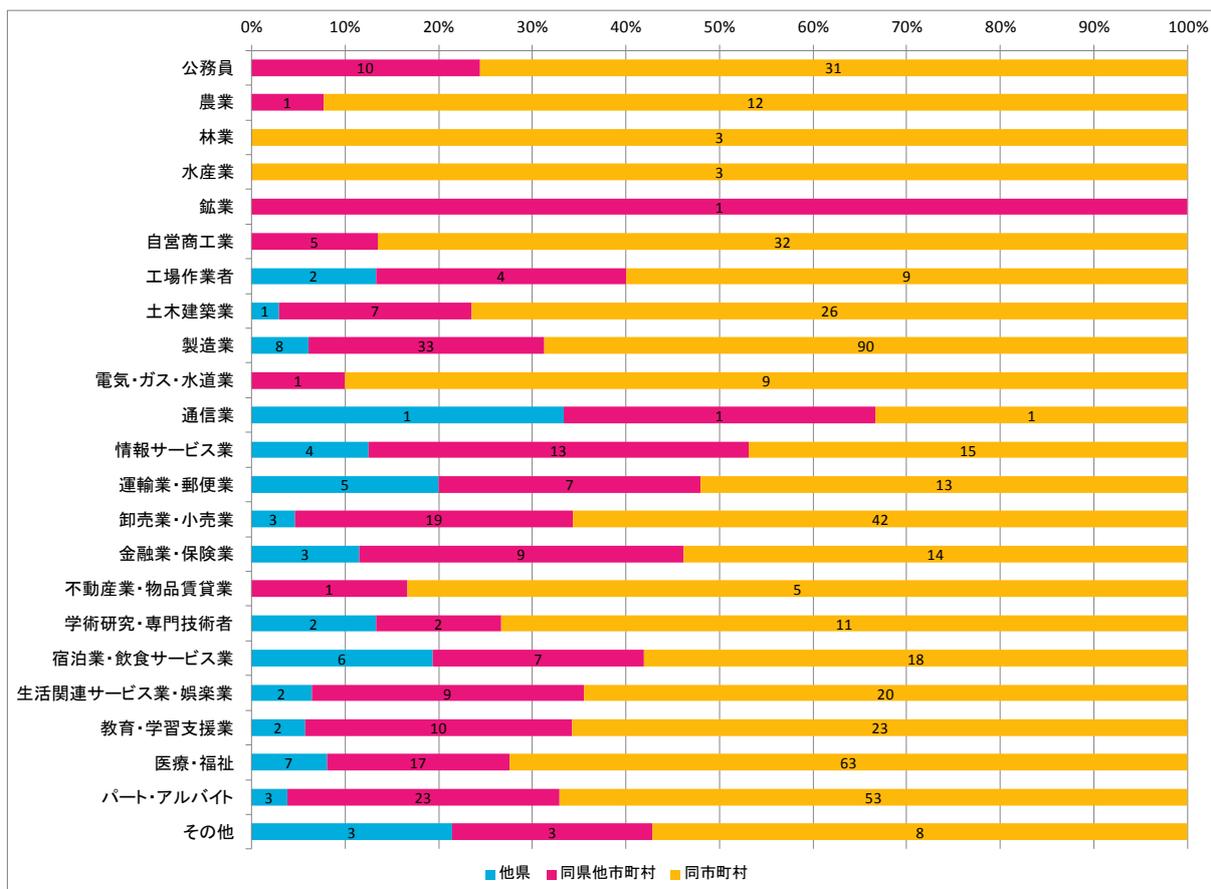
N=736

図 3-26. 転入後に就いた仕事の業種



N=736

図 3-27. 業種別のターン時の年齢



N=736

図 3-28. 業種別の勤務先現住地の関係

(4) 仕事の見つけ方

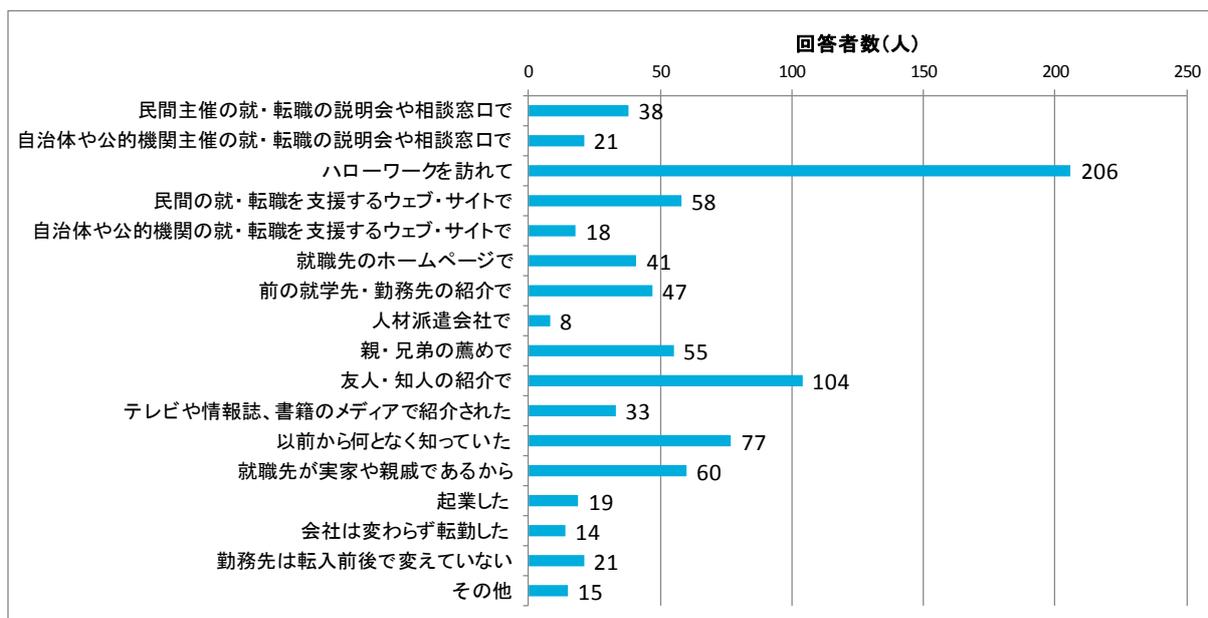
回答者の転入後の仕事の見つけ方を図 3-29 に示す。ハローワークを訪れたケースが最も多く、回答者のおよそ 3 割を占めた。このほか、就・転職を支援する相談窓口や web サイトを利用した人や、親族や友人・知人からの紹介によって仕事を見つけた人も多い。また、「会社は変わらず転勤した」という回答を行った 14 名は、会社から命ぜられた転勤ではなく、自発的な転勤を行ったものと思われる。

仕事の見つけ方とターン分類の関係を図 3-30 に示す。どのターン分類でも、ハローワークを訪れたケースは多い。「親・兄弟の薦めで」の割合に着目すると、出身地に依存する U・J ターンでは 1 割程度該当するが、出身に依存しない I ターン・出身によらない県内移動ではほとんどみられなかった。逆に、「友人・知人の紹介で」と回答した人の割合は、U・J ターンよりも、I ターン・出身によらない県内移動を実施した人のほうが多くなっており、これら二つの回答の割合は、逆の傾向を示していることがわかる。仕事の見つけ方は、ターン実施者の出身地か否かによって傾向が異なると考えられる。

仕事の見つけ方と勤務先現住地の関係を図 3-31 に示す。現住地と勤務先の関係がどの場合でも、ハローワークを訪れたケースが最も高い割合となっている。また、図 3-30 で示したターン分類との関係においても逆の傾向を示した「親・兄弟の薦めで」と、「友人・知人の紹介で」は、勤務先現住地との関係でも同様に、逆の傾向を示しているほか、「友人・知人の紹介で」と「テレビや情報誌、書籍のメディアで紹介された」については、現住地と勤務先が離れるほど、回答の割合が高くなるという同じ傾向を示している。これらの回答は、他者からの紹介という点で共通点がある。回答者は少ないが、現住地と勤務先が別の都道府県で「起業した」と回答した人がいないことから、起業する場合は職住近接の傾向があることが伺える。

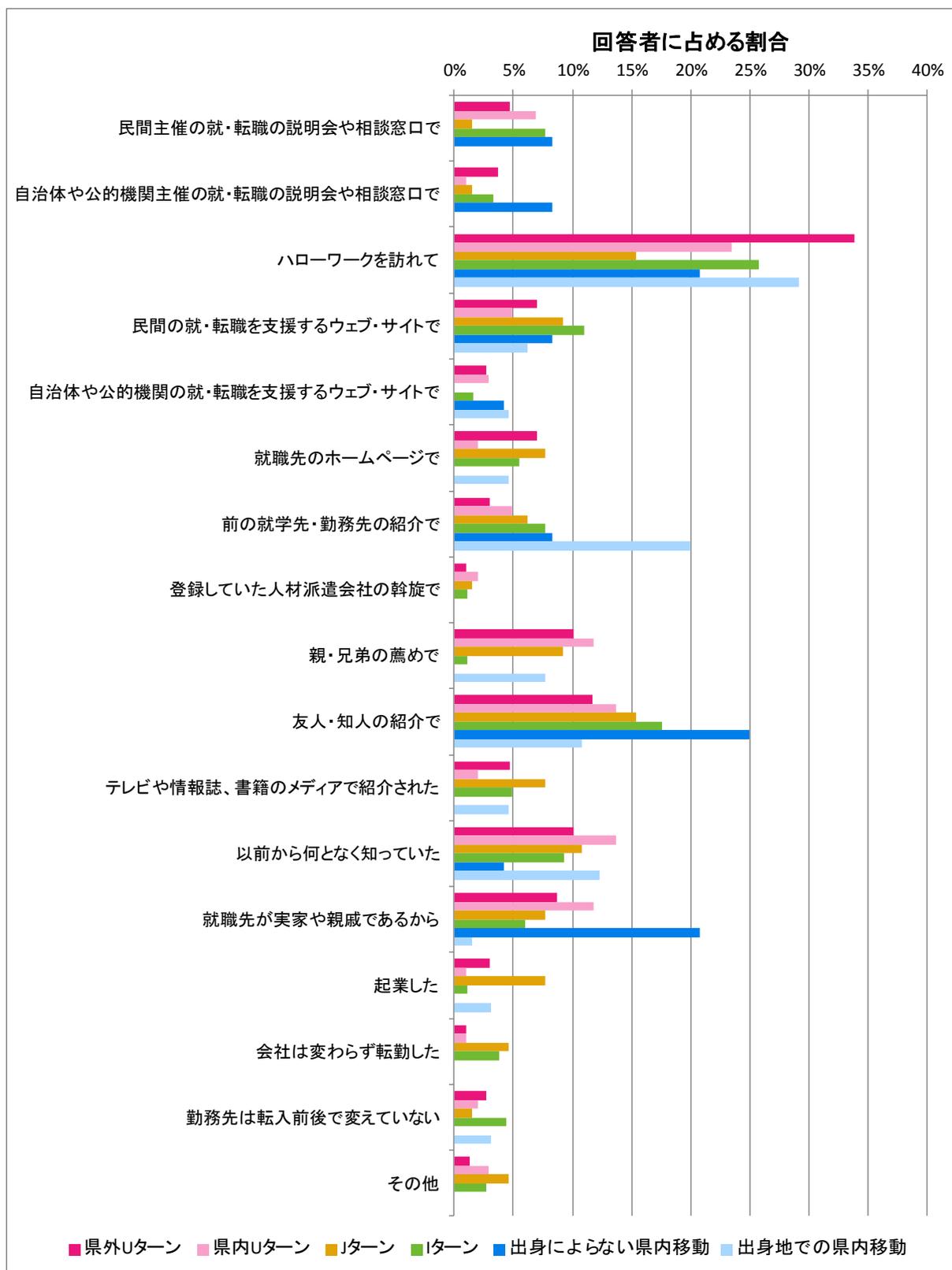
仕事の見つけ方とターン時の年齢の関係を図 3-32 に示す。ハローワークを訪れて仕事を見つけたケースが、どの年代でも満遍なく多いが、45 歳を過ぎるとその回答の割合が極端に少なくなっている。また、起業した方も、ターン時に 50 歳を超えている人はいないことがわかった。その一方、「勤務先は転入前後で変えていない」という回答は、45 歳以上から極端に増加傾向にあることがわかる。ライフスタイルの変化に伴う生活環境の変化によって、就業環境も変化している、ものと思われる。

仕事の見つけ方と業種の間を表 3-6 に示す。この表では、転入後に公務員に就いた 41 名のうち、24%が「親・兄弟の薦め」で公務員に就いたことを示しており、それぞれの業種に対する割合の合計が 100%となっている。「ハローワークを訪れて」「友人・知人の紹介で」の選択割合はほとんどの業種で大きかったが、公務員や農業、自営商工業ではその傾向が異なり、公務員では「就職先のホームページで」「親・兄弟の薦めで」という回答の選択割合が大きく、農業では「就職先が実家や親戚であるから」が、自営商工業ではそれに加え「以前からなんとなく知っていた」の選択割合が大きくなっていった。業種の違いにより、仕事の見つけ方にも差があることがわかる。



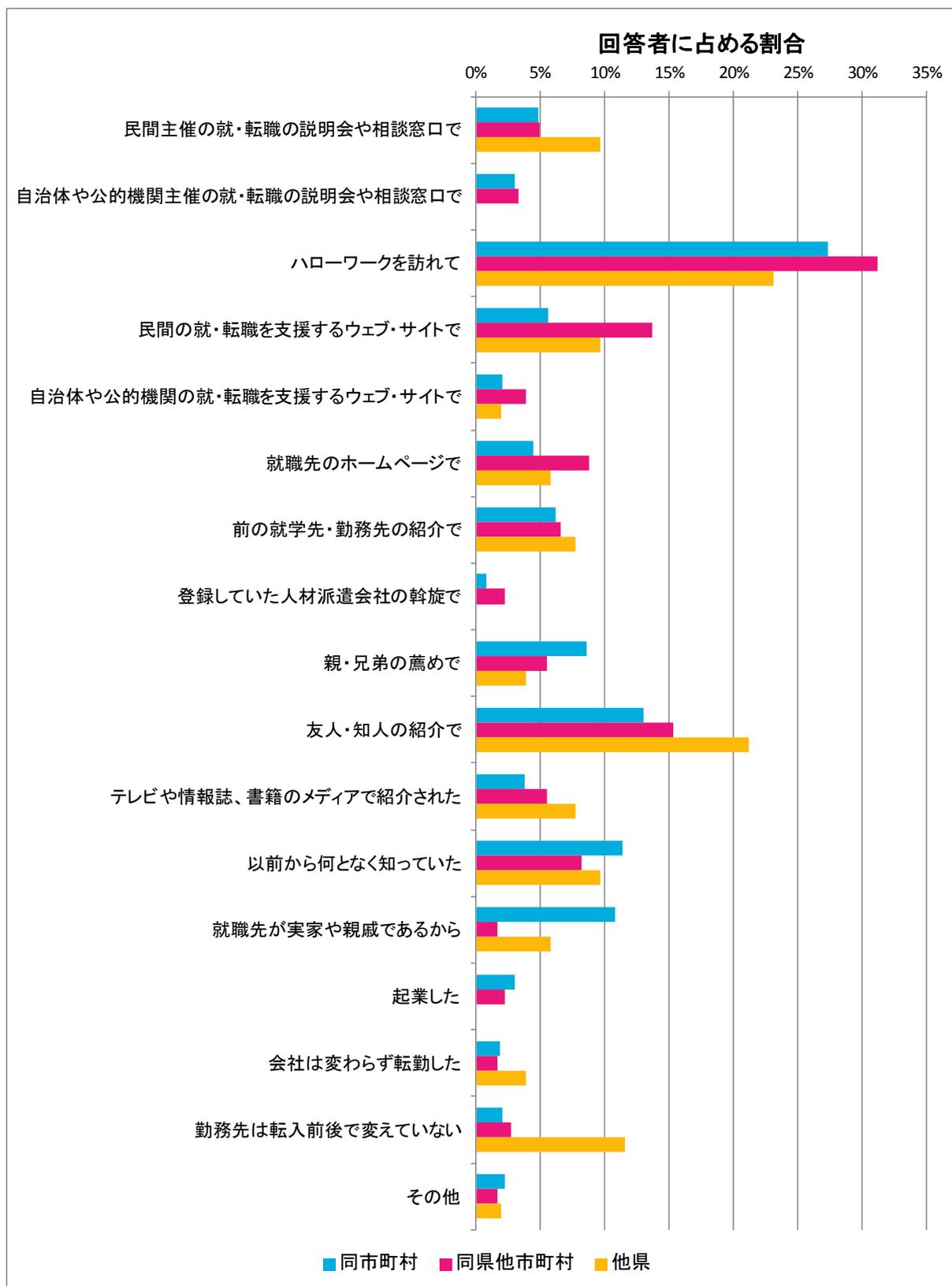
N=736

図 3-29. 転入後の仕事の見つけ方（複数回答）



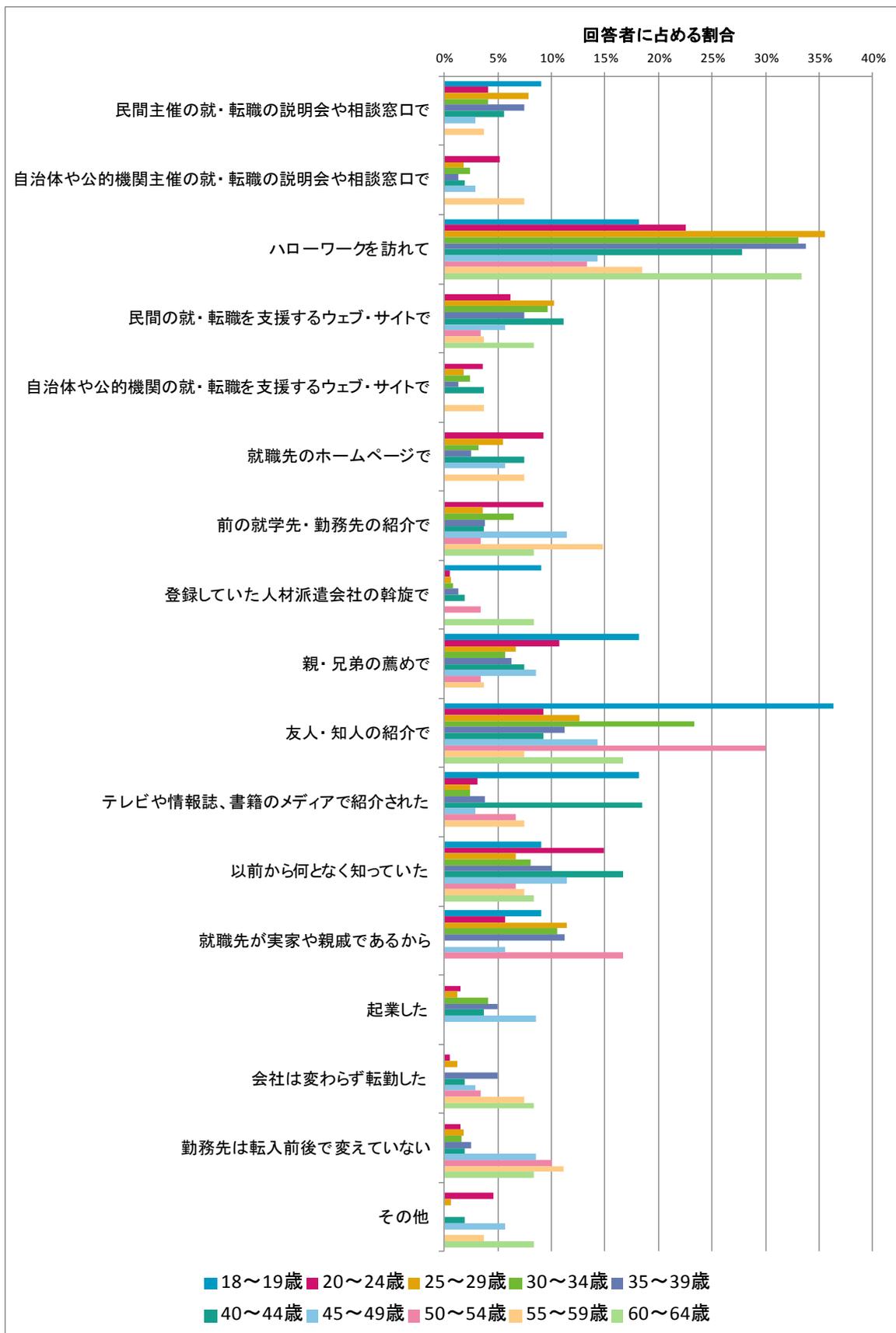
N=298, 102, 65, 182, 24, 65

図 3-30. 仕事の見つけ方とターン分類の関係（複数回答）



N=501, 183, 52

図 3-31. 仕事の見つけ方と勤務先現住地の関係（複数回答）



N=11, 195, 166, 124, 80, 54, 35, 30, 27, 12

図 3-32. 仕事の見つけ方とターン時の年齢の関係（複数回答）

表 3-6. 仕事の見つけ方と業種の関係

	公務員 (N=41)	農業 (N=13)	林業 (N=3)	水産業 (N=3)	鉱業 (N=1)	自営商 工業 (N=37)	工場作 業者 (N=15)	土木建 築業 (N=34)	製造業 (N=131)	電気・ ガス・ 水道業 (N=10)	通信業 (N=3)	情報 サービ ス業 (N=32)	運輸 業・郵 便業 (N=25)	卸売 業・小 売業 (N=64)	金融 業・保 険業 (N=26)	不動産 業・物 品質賃 業 (N=6)	学術研 究・専 門技術 者 (N=15)	宿泊 業・飲 食サー ビス業 (N=31)	生活関 連サー ビス業 ・娯 楽業 (N=31)	教育・ 学習支 援業 (N=35)	医療・ 福祉 (N=87)	パート ・アル バイト (N=79)	その他 (N=14)
民間主催の就・転職の説明会や相談窓口で	2%	0%	0%	0%	0%	5%	13%	6%	8%	0%	0%	13%	0%	3%	8%	17%	7%	13%	0%	3%	6%	1%	0%
自治体や公的機関主催の就・転職の説明会や相談窓口で	12%	8%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	10%	0%	0%	4%	0%	0%	0%	0%	3%	0%	9%	5%	3%	0%
ハローワークを訪れて	5%	15%	0%	0%	0%	3%	60%	38%	32%	30%	0%	44%	28%	17%	27%	0%	20%	29%	23%	23%	38%	43%	7%
民間の就・転職を支援するウェブ・サイトで	5%	0%	0%	0%	0%	3%	13%	9%	10%	0%	67%	13%	8%	9%	15%	0%	0%	6%	6%	3%	3%	11%	14%
自治体や公的機関の就・転職を支援するウェブ・サイトで	10%	8%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	10%	0%	0%	0%	2%	4%	0%	0%	3%	0%	6%	2%	4%	14%
就職先のホームページで	22%	0%	0%	0%	0%	3%	0%	3%	2%	0%	0%	6%	4%	3%	15%	0%	0%	13%	10%	6%	3%	5%	14%
前の就学先・勤務先の紹介で	2%	8%	33%	0%	0%	0%	0%	3%	9%	0%	0%	0%	8%	8%	0%	0%	13%	0%	13%	9%	11%	4%	14%
登録していた人材派遣会社の斡旋で	0%	0%	0%	0%	0%	0%	7%	0%	2%	0%	0%	3%	0%	0%	0%	17%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	7%
親・兄弟の薦めで	24%	0%	0%	0%	0%	14%	0%	0%	5%	10%	0%	3%	4%	11%	8%	17%	7%	10%	6%	9%	10%	4%	0%
友人・知人の紹介で	7%	15%	33%	67%	0%	8%	7%	24%	13%	20%	0%	9%	32%	16%	12%	0%	13%	13%	19%	20%	13%	14%	0%
テレビや情報誌、書籍のメディアで紹介された	2%	0%	0%	0%	0%	0%	7%	3%	5%	0%	0%	6%	8%	8%	8%	0%	0%	3%	10%	3%	0%	9%	0%
以前から何となく知っていた	17%	8%	0%	0%	0%	24%	0%	3%	6%	0%	0%	6%	4%	9%	19%	17%	20%	6%	6%	14%	15%	9%	29%
就職先が実家や親戚であるから	0%	54%	33%	0%	0%	27%	13%	12%	2%	0%	0%	3%	4%	19%	0%	33%	0%	23%	13%	3%	5%	1%	0%
起業した	0%	0%	0%	0%	0%	14%	0%	3%	1%	0%	0%	13%	4%	2%	0%	0%	13%	3%	0%	0%	3%	0%	0%
会社は変わらず転勤した	2%	0%	0%	33%	0%	0%	0%	3%	5%	20%	33%	0%	0%	0%	4%	0%	7%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
勤務先は転入前後で変えていない	0%	0%	0%	0%	100%	5%	0%	3%	2%	0%	0%	0%	4%	5%	8%	0%	7%	0%	3%	0%	3%	3%	7%
その他	5%	0%	0%	0%	0%	5%	0%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	2%	4%	0%	13%	0%	0%	6%	1%	0%	7%

3.6. ターンに対する意識と評価

本節では、回答者のターンに対する意識と評価について報告する。

(1) 現住地への転入理由

回答者の現住地への転入理由を図 3-33 に示す。「親元で暮らしたかった」と回答した人は約 2 割に上り、最も多かった。「自分が豊かな自然環境のなかで生活をしたかった」、「周辺の環境が良い」などの回答が次いで多かった。回答は、概ね 4 つに大別することが出来、ポジティブな理由での転入理由として「自然環境」、「地元志向」、「生活環境」の 3 つ、ネガティブな理由での転入理由として「仕方なく」の 1 つに分類できる。また、就業環境の変化による転居や、単純に気に入ったという理由による転居を行ったという回答も見受けられた。

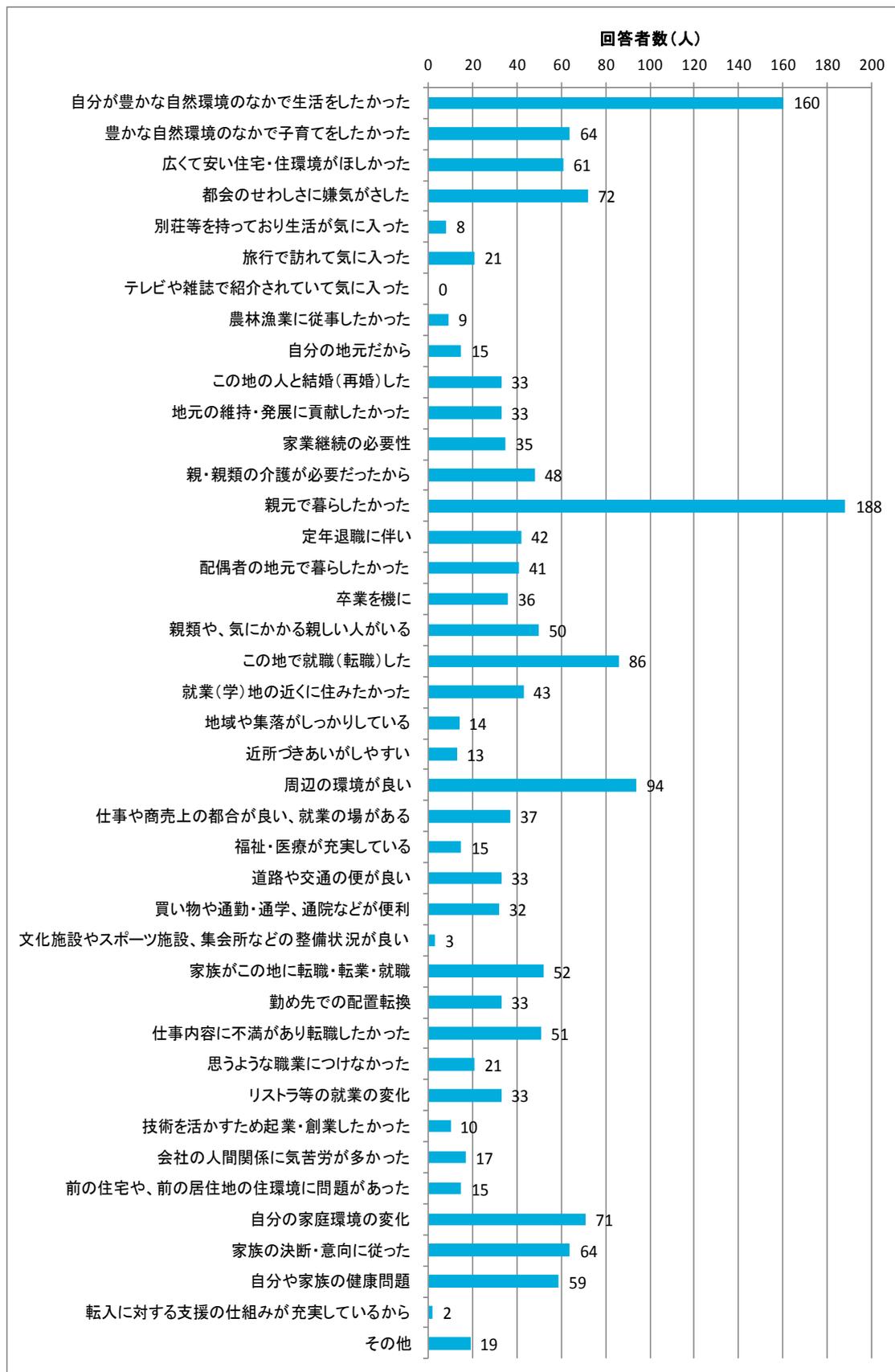
現住地への転入理由について、その他を選択した方の自由回答の抜粋を表 3-7 に示す。どの項目にも分類しがたい転入理由も存在していた。

転入理由とターン分類の関係を図 3-34 に示す。U ターン者では「親元で暮らしたかった」という理由で転入している人が一番多く 3 割を超えている一方で、I ターン者では「自分が豊かな自然環境のなかで生活をしたかった」など、自然環境を求めて転入を行っている人の割合が多くなっている。また、「周辺の環境が良い」「道路や交通の便が良い」などの回答では、U ターン者よりも J ターン者のほうが、選択割合が高くなっている。これは、出身地である自治体に不自由な点がある場合に、出身地よりも、その出身の近隣で、道路や交通などの利便性が高いところに転入しているといった行動の現れだと思われる。このほか、「仕事内容に不満があり転職したかった」「思うような職業につけなかった」などのネガティブな転入理由では、U ターンの割合が多い。これは、他に行くところが無くなり、出身地に帰るといった行動に依るものだと思われる。

回答者の業種別の、現住地に転入した理由として各理由を選択した割合について表 3-8 に示す。全体的に、業種と転入理由については顕著な傾向は見受けられなかったが、ターン後に農林水産業や宿泊業・飲食サービス業に従事した方では「自分が豊かな自然環境のなかで生活をしたかった」「都会のせわしさに嫌気がさした」など自然環境やスローライフを求めての理由で転入している方が多く見られた。

転入理由とターン時の年齢の関係を図 3-35 に示す。60 歳以上のターン者の半数が、定年退職をきっかけとした転居を行っている。高齢になればなるほど、豊かな自然環境や周辺の環境を求めて転居を行っている。

転入理由と現住地の人口規模の関係を図 3-36 に示す。「自分が豊かな自然環境のなかで生活をしたかった」「旅行で訪れて気に入った」「農林漁業に従事したかった」などの回答に着目すると、現住地の人口規模が一万人未満の市町村に居住している方の回答割合が、一万人以上の市町村に居住している方に比べて顕著に高くなっている。豊かな自然環境や農林漁業への従事を求めてターンを実施する方は、居住地の人口規模が一万人未満であるような市町村の自然環境・生活環境を想像して転入している方が多いものと思われる。

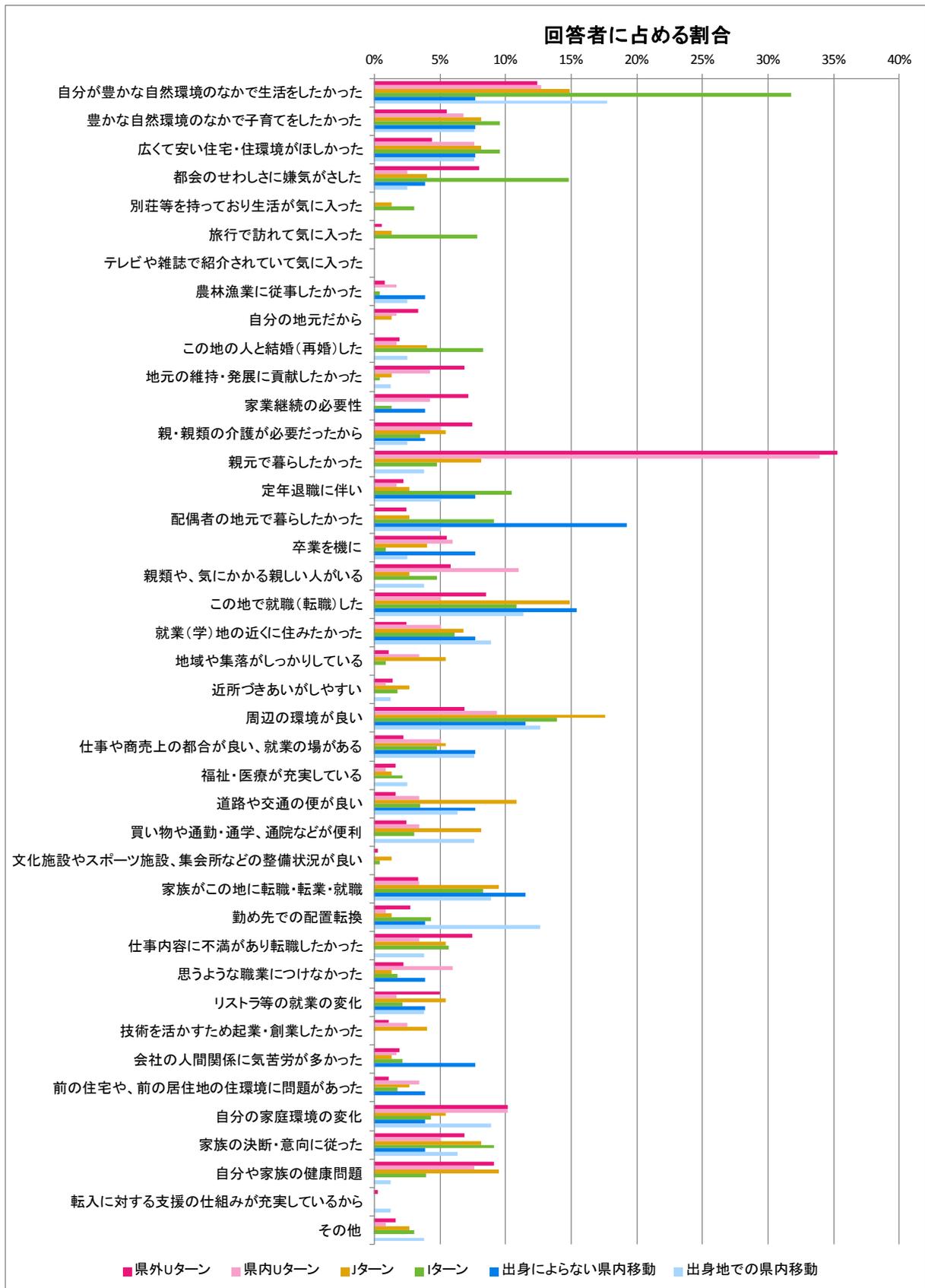


N=890

図 3-33. 現住地への転入理由(複数回答)

表 3-7. 現住地への転入理由に関する自由回答（抜粋）

資格取得の勉強に集中するため
家を買った
お金が欲しかった
ヘッドハンティング
土地を見つけたから
遠距離恋愛をしていたから

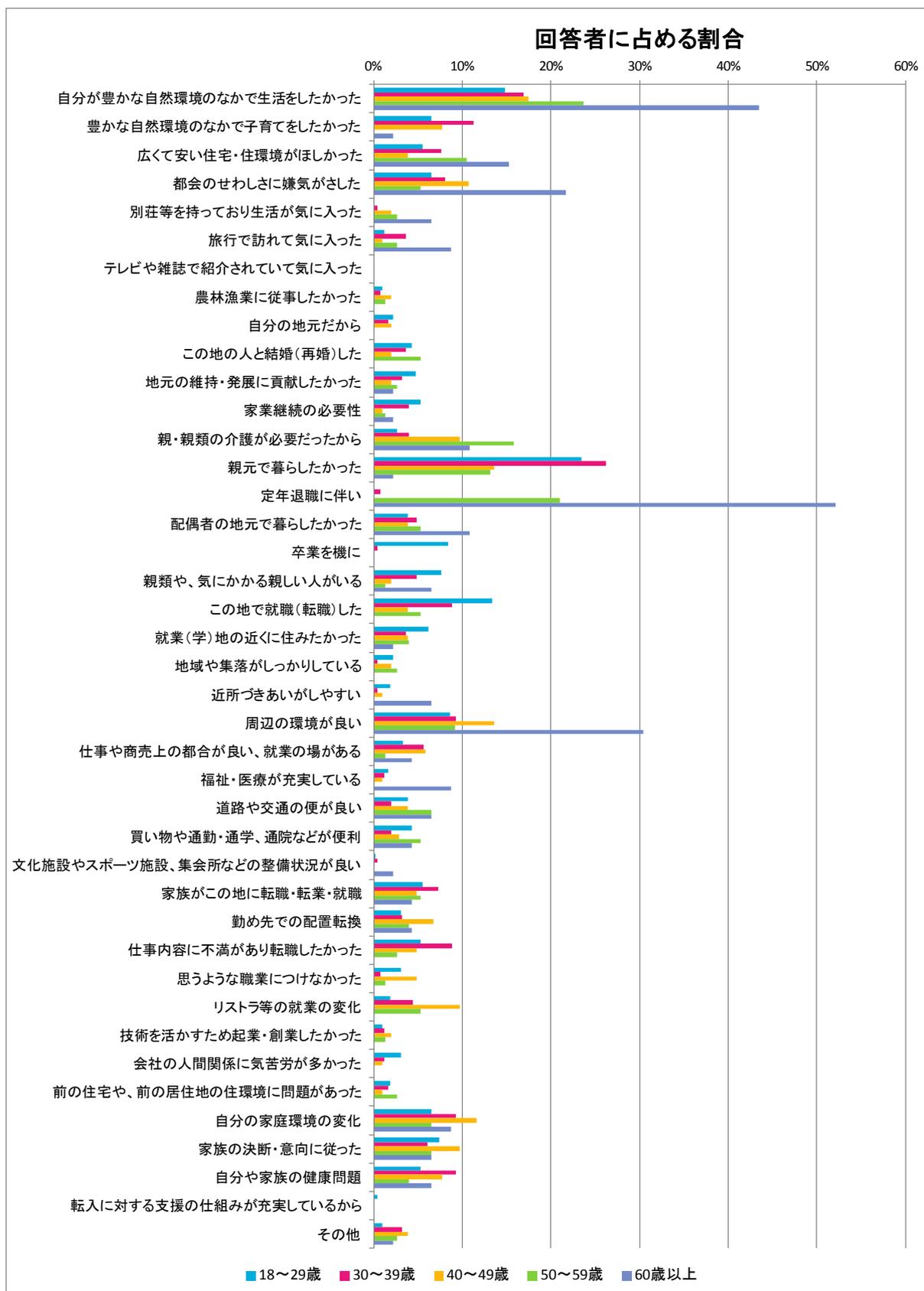


N=363, 118, 74, 230, 26, 79

図 3-34. 転入理由とターン分類の関係 (複数回答)

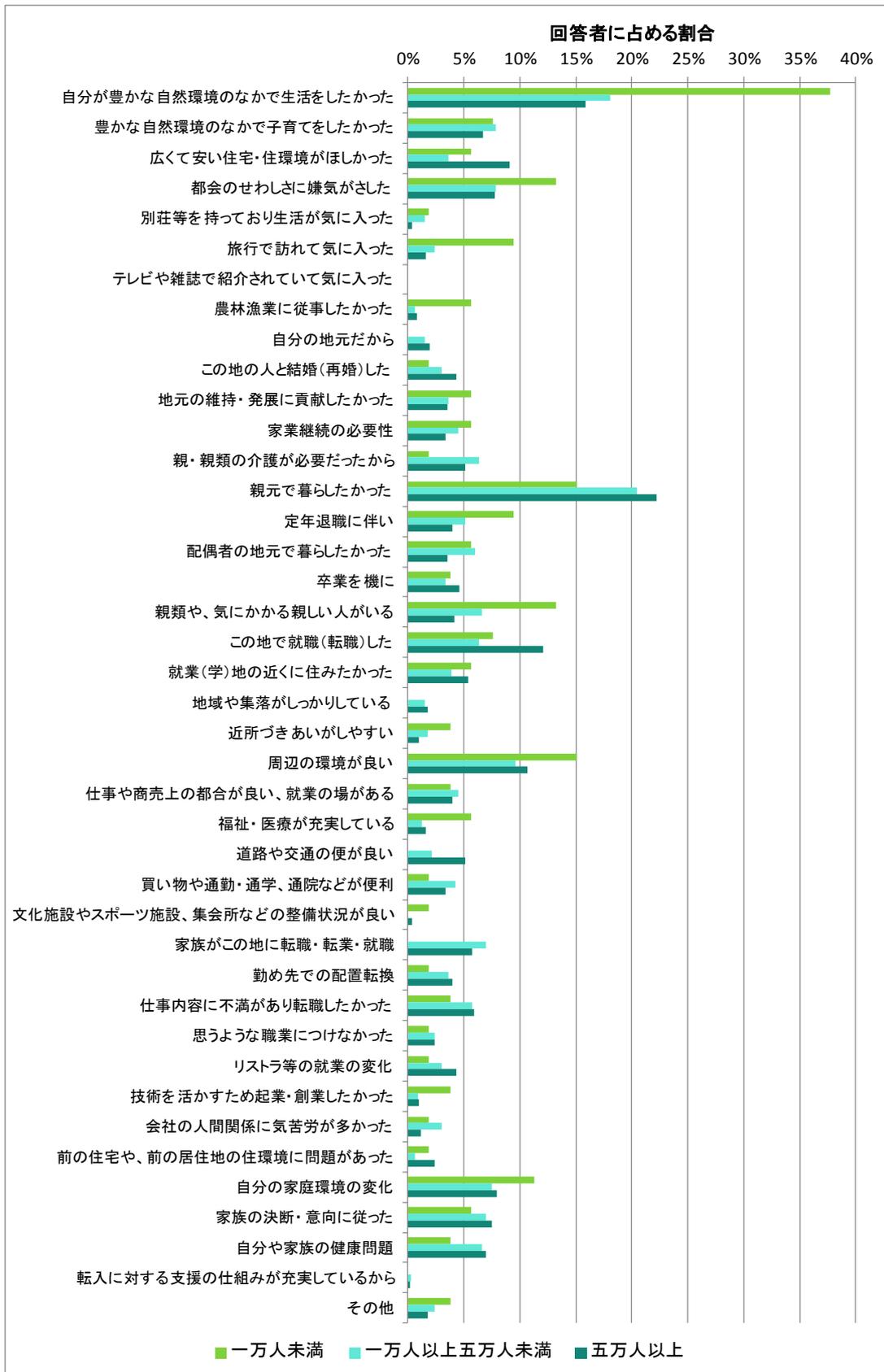
表 3-8. 業種別の転入理由

	公務員	農業	林業	水産業	鉱業	自営商工業	工場業者	土木建築業	製造業	電気・ガス・水道業	通信業	情報サービス業	運輸業・郵便業	卸売業・小売業	金融業・保険業	不動産業・物品賃貸業	学術研究・専門技術者	宿泊業・飲食サービス業	生活関連サービス業・娯楽業	教育・学習支援業	医療・福祉	パート・アルバイト	その他	総計
自分が豊かな自然環境のなかで生活をしたかった	17%	23%	33%	33%	0%	19%	20%	15%	16%	30%	0%	31%	28%	8%	8%	50%	27%	32%	13%	14%	9%	23%	14%	18%
豊かな自然環境のなかで子育てをしたかった	2%	15%	0%	100%	0%	0%	0%	9%	8%	20%	0%	13%	12%	3%	4%	33%	0%	13%	3%	3%	2%	10%	0%	7%
広くて安い住宅・住環境がよかった	2%	15%	0%	0%	0%	0%	0%	6%	5%	0%	0%	6%	24%	3%	4%	0%	7%	19%	3%	11%	6%	8%	14%	7%
都会のせわしさに嫌気がさした	7%	8%	0%	0%	0%	14%	7%	0%	5%	10%	0%	9%	12%	3%	0%	33%	7%	23%	19%	3%	7%	8%	14%	8%
別荘等を持っており生活が気に入った	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	4%	0%	0%	0%	7%	3%	0%	0%	0%	1%	7%	1%
旅行で訪れて気に入った	2%	0%	0%	33%	0%	3%	0%	6%	1%	0%	0%	0%	0%	5%	0%	0%	0%	3%	3%	3%	0%	3%	0%	2%
テレビや雑誌で紹介されていて気に入った	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
農林漁業に従事したかった	0%	23%	67%	67%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	1%
自分の地元だから	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	3%	4%	2%	8%	0%	0%	0%	0%	6%	1%	1%	0%	2%
この地の人と結婚(再婚)した	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	3%	2%	30%	0%	0%	0%	5%	4%	0%	7%	10%	10%	0%	5%	6%	14%	4%
地元の維持・発展に貢献したかった	12%	8%	0%	0%	0%	3%	0%	6%	5%	0%	3%	0%	0%	2%	0%	17%	7%	6%	0%	9%	2%	0%	0%	4%
家業継続の必要性	2%	23%	67%	0%	0%	14%	0%	3%	1%	10%	0%	3%	4%	11%	8%	33%	0%	3%	10%	0%	0%	0%	0%	4%
親・親類の介護が必要だったから	5%	0%	0%	0%	0%	11%	20%	6%	2%	10%	0%	0%	0%	8%	0%	0%	13%	0%	3%	0%	5%	6%	7%	4%
親元で暮らしたかった	34%	0%	33%	0%	0%	19%	13%	15%	23%	0%	67%	31%	24%	17%	27%	50%	20%	23%	3%	17%	25%	16%	14%	21%
定年退職に伴い	2%	0%	0%	0%	0%	0%	7%	0%	1%	10%	0%	0%	4%	2%	0%	0%	7%	3%	0%	6%	0%	4%	21%	2%
配偶者の地元で暮らしたかった	0%	8%	0%	0%	100%	0%	0%	9%	5%	20%	0%	6%	0%	3%	0%	0%	13%	3%	0%	3%	3%	3%	0%	4%
卒業を機に	15%	8%	0%	0%	0%	0%	7%	3%	5%	0%	0%	3%	4%	2%	12%	0%	7%	3%	3%	9%	5%	1%	14%	5%
親類や、気にかかる親しい人がいる	10%	8%	0%	0%	0%	0%	20%	3%	5%	10%	33%	0%	4%	5%	4%	0%	0%	3%	6%	3%	11%	6%	7%	6%
この地で就職(転職)した	17%	8%	0%	0%	0%	8%	0%	12%	15%	0%	33%	13%	12%	6%	12%	0%	0%	6%	6%	11%	18%	4%	14%	11%
就業(学)地の近くに住みたかった	2%	0%	0%	0%	0%	0%	7%	12%	8%	0%	33%	3%	8%	6%	4%	0%	20%	0%	3%	17%	3%	1%	7%	5%
地域や集落がしっかりしている	2%	0%	0%	0%	0%	5%	0%	0%	3%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	6%	3%	6%	1%	1%	0%	2%
近所づきあいがしやすい	2%	0%	0%	0%	0%	3%	0%	0%	0%	0%	0%	3%	4%	2%	0%	0%	0%	3%	3%	3%	0%	3%	0%	1%
周辺の良い環境が良い	10%	8%	33%	0%	0%	8%	13%	3%	11%	30%	0%	19%	4%	5%	4%	50%	13%	16%	10%	9%	6%	8%	14%	9%
仕事や商売上の都合が良い、就業の場がある	5%	0%	0%	0%	0%	5%	0%	6%	5%	0%	0%	0%	8%	9%	4%	17%	7%	6%	16%	3%	3%	1%	0%	5%
福祉・医療が充実している	0%	0%	0%	0%	0%	0%	7%	0%	0%	0%	0%	3%	4%	0%	0%	0%	0%	3%	0%	3%	1%	0%	7%	1%
道路や交通の便が良い	2%	8%	0%	0%	0%	3%	0%	0%	2%	0%	0%	3%	12%	3%	0%	17%	7%	3%	3%	3%	5%	4%	14%	3%
買い物や通勤・通学、通院などが便利	2%	8%	0%	0%	0%	3%	0%	0%	3%	0%	0%	6%	8%	3%	0%	17%	0%	0%	6%	3%	1%	5%	0%	3%
文化施設やスポーツ施設、集会所などの整備状況が良い	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%
家族がこの地に転職・転業・就職	2%	15%	0%	0%	0%	3%	0%	0%	3%	0%	0%	0%	0%	13%	4%	0%	13%	3%	3%	6%	6%	6%	0%	4%
勤め先での配置転換	2%	8%	0%	0%	0%	3%	0%	9%	9%	10%	0%	0%	0%	2%	12%	0%	0%	0%	6%	6%	2%	1%	0%	4%
仕事内容に不満があり転職したかった	7%	0%	33%	0%	0%	5%	13%	3%	6%	0%	0%	6%	0%	8%	8%	0%	7%	0%	3%	6%	7%	9%	0%	6%
思うような職業につけなかった	2%	0%	0%	0%	0%	0%	7%	3%	2%	0%	0%	3%	0%	2%	0%	0%	7%	0%	3%	3%	3%	4%	0%	2%
リストラ等の就業の変化	0%	15%	0%	0%	0%	5%	0%	6%	5%	10%	0%	0%	8%	5%	4%	0%	13%	0%	0%	2%	1%	7%	4%	4%
技術を活かすため起業・創業したかった	2%	0%	0%	0%	0%	5%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	7%	6%	0%	3%	0%	0%	1%	1%
会社の人間関係に苦労が多かった	0%	8%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	2%	4%	0%	7%	0%	3%	3%	6%	3%	0%	2%
前の住宅や、前の居住地の住環境に問題があった	0%	8%	0%	0%	100%	5%	0%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	4%	0%	7%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	1%
自分の家庭環境の変化	5%	0%	0%	0%	0%	14%	0%	3%	8%	0%	0%	16%	4%	6%	12%	0%	7%	13%	10%	3%	9%	14%	7%	8%
家族の決断・意向に従った	10%	8%	0%	0%	0%	5%	7%	6%	5%	0%	0%	0%	4%	8%	4%	0%	7%	3%	16%	0%	10%	9%	0%	6%
自分や家族の健康問題	5%	0%	0%	0%	0%	8%	0%	9%	3%	10%	0%	9%	4%	8%	8%	0%	0%	3%	10%	9%	6%	9%	0%	6%
転入に対する支援の仕組みが充実しているから	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	3%	0%	0%	1%	0%	0%	0%
その他	0%	0%	0%	0%	0%	5%	7%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	2%	4%	0%	0%	3%	3%	0%	2%	5%	7%	2%
合計 / 度数	41	13	3	3	1	37	15	34	131	10	3	32	25	64	26	6	15	31	31	35	87	79	14	736



N=417, 248, 103, 76, 46

図 3-35. 転入理由とターン時の年齢の関係 (複数回答)



N=53, 332, 505

図 3-36. 転入理由と現住地の人口規模の関係 (複数回答)

(2) 出身の近隣へのターン理由

出身の近隣へのターンの理由を図 3-37 に示す。「親のことが気にかかるから」という回答をした人の割合は 4 割を超え、次いで「昔からの友人、知人がいるため」という回答が多かった。親族関係、友人知人などの親しい人がいることや、またその土地がよく知っている環境であるという暮らしやすさを理由に挙げる人が多いことがわかる。

出身近隣へのターンの理由について、その他を選択した方の自由回答の抜粋を表 3-9 に示す。これらはどの項目にも分類しがたい回答であったが、様々な理由で出身近隣へのターンを実施している人がいることがわかった。

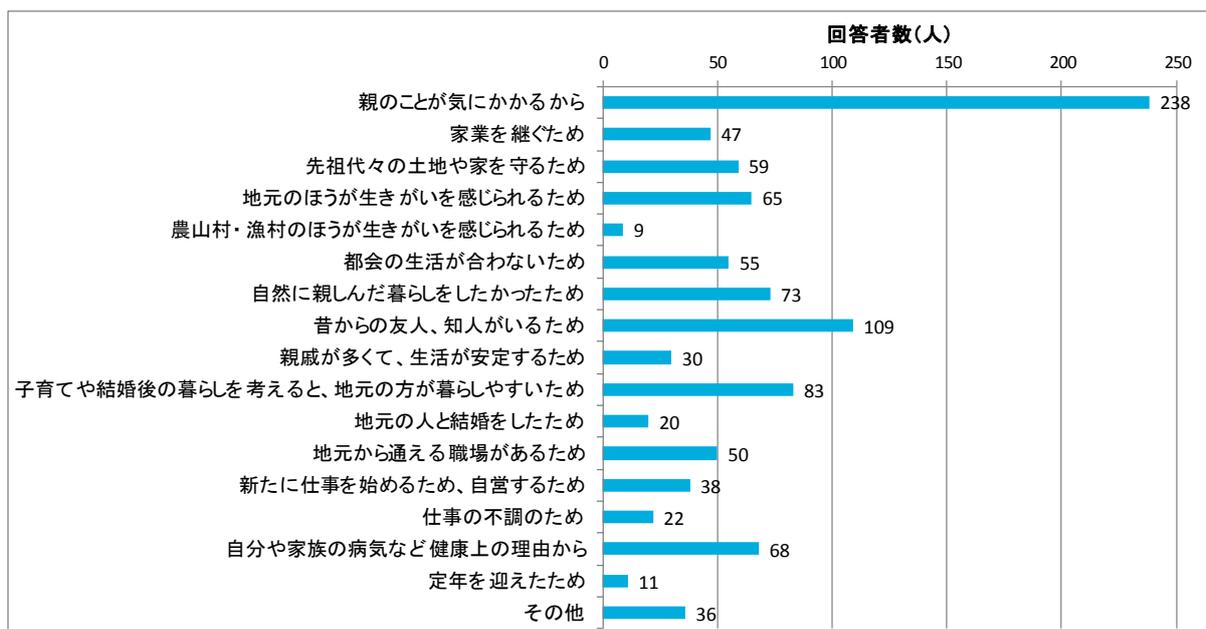
出身近隣へのターン理由とターン分類の関係を図 3-38 に示す。U ターン者のおよそ半数が、親への心配をきっかけとした転居を行っていることがわかる。当然ながら、U ターン者は、J ターン者などと比べると「昔からの友人、知人がいるため」といった地元に関連した回答を選んでいる人の割合が高い。

出身近隣へのターン理由とターン時の年齢の関係を図 3-39 に示す。ターン時の年齢が 59 歳以下の回答者では、ターン時の年齢による傾向の違いは見受けられないが、60 歳以上の世代では、他の年代とは異なる傾向が見受けられる。例えば、「親のことが気にかかるから」という回答を行った割合が、60 歳以上では極端に減少するものの、「先祖代々の土地や家を守るため」という回答を行った割合は、3 割以上と顕著な増加傾向にある。これは定年等により動きやすくなったことによるものが影響しているものと思われる。

出身近隣へのターン理由と現住地の関係を図 3-40 に示す。現住地域の違いによる近隣へのターン理由の選択割合に、差は認められなかった。

出身近隣へのターン理由と家族構成の関係を図 3-41 に示す。これも、現住地と同様に、家族構成の違いによる近隣へのターン理由の選択割合に、差は認められなかった。

「親のことが気にかかるから」を出身の近隣へのターンの理由の一つとして回答した 238 サンプルのターン時の年齢の分布を図 3-42 に示す。「親のことが気にかかるから」と回答した人は、ターン実施者全体と比較すると、若い時期にターンを実施している人が多い。なお、「親のことが気にかかる」と回答した人のターン時年齢の平均は 32.0 歳であり、全体では 33.7 歳であった。図 3-37 で示したように、U・J ターン実施者の多くは「親のことが気にかかるから」という理由でターンを実施しており、U・J ターン者誘致のための戦略を考える際には、若年層を意識した戦略を立てることが効果的だと思われる。

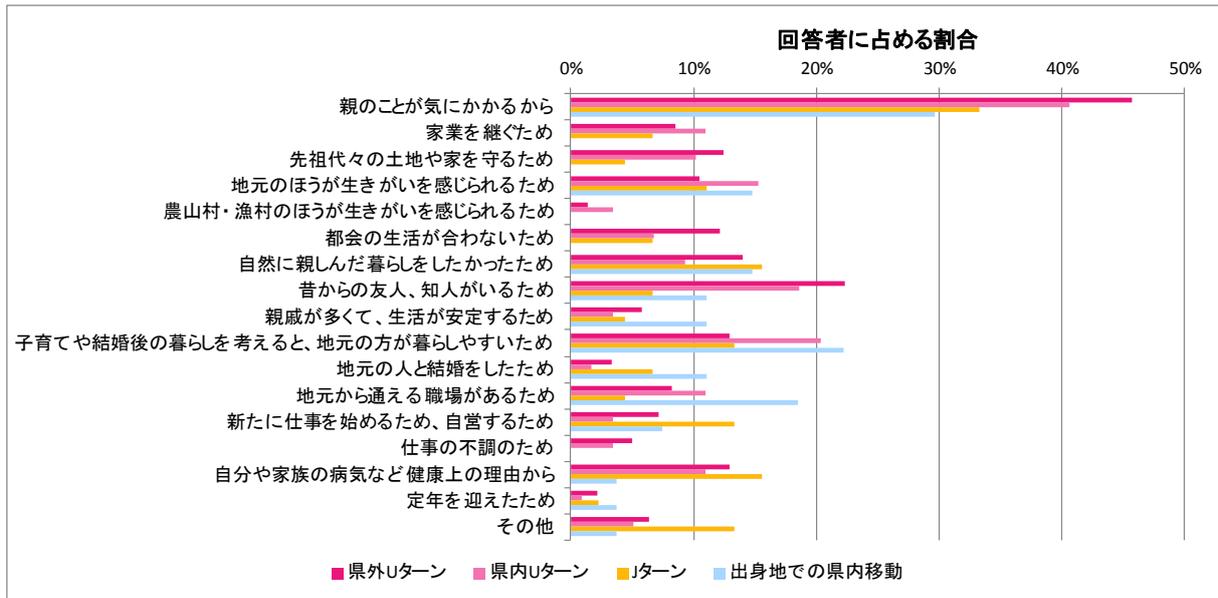


N=533

図 3-37. 出身の近隣へのターンの理由（複数回答）

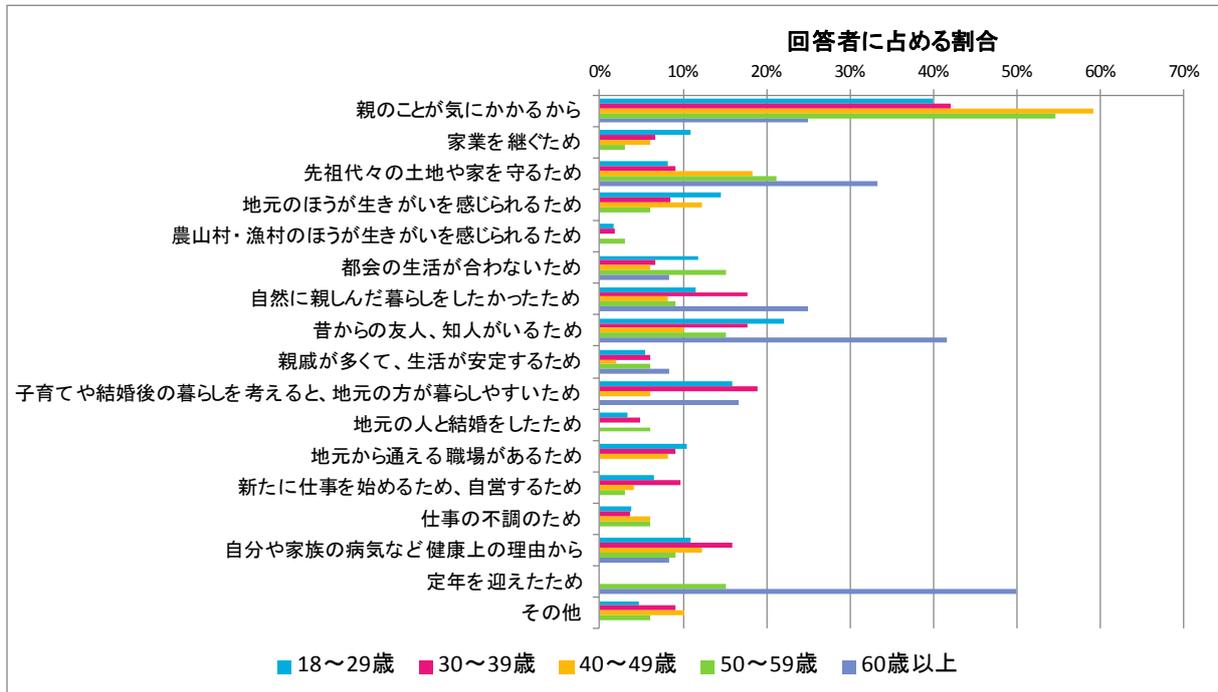
表 3-9. 出身の近隣へのターン理由に関する自由回答（抜粋）

都会でローンを組み家の購入は厳しかった
母親の意向
リストラで行く場所がなかった
仕事に飽きたので
なんとなく
子どもを自身の出身校に入れたかった
老猫の看病のため、一度地元に戻り充電期間が欲しく
子どもがいないため
職場や寮全て嫌だった
心機一転したかった
元交際相手から逃げるため
離婚
お金をためるため
配偶者が気に入ってしまったため



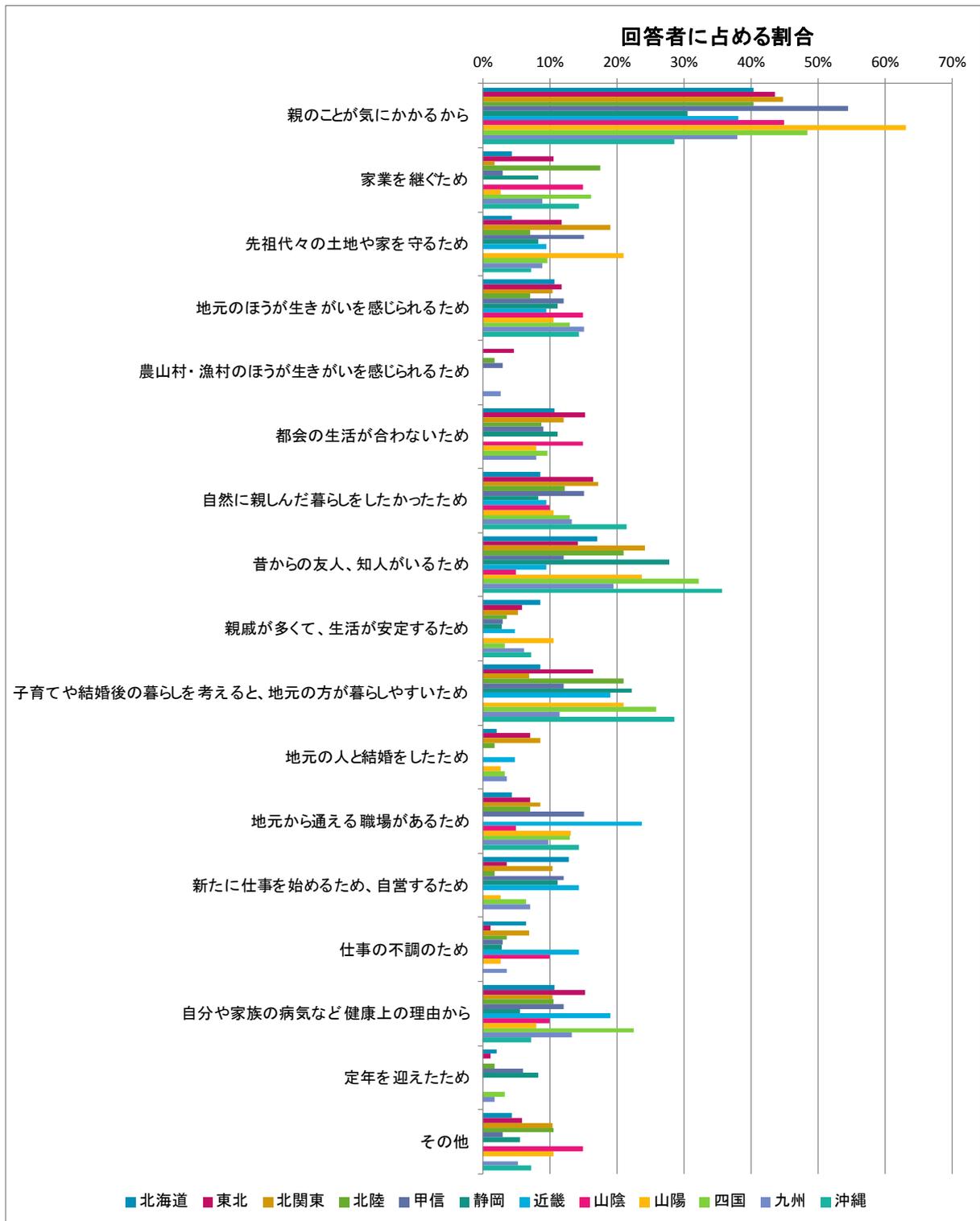
N=363, 118, 45, 27

図 3-38. 出身近隣へのターン理由とターン分類の関係（複数回答）



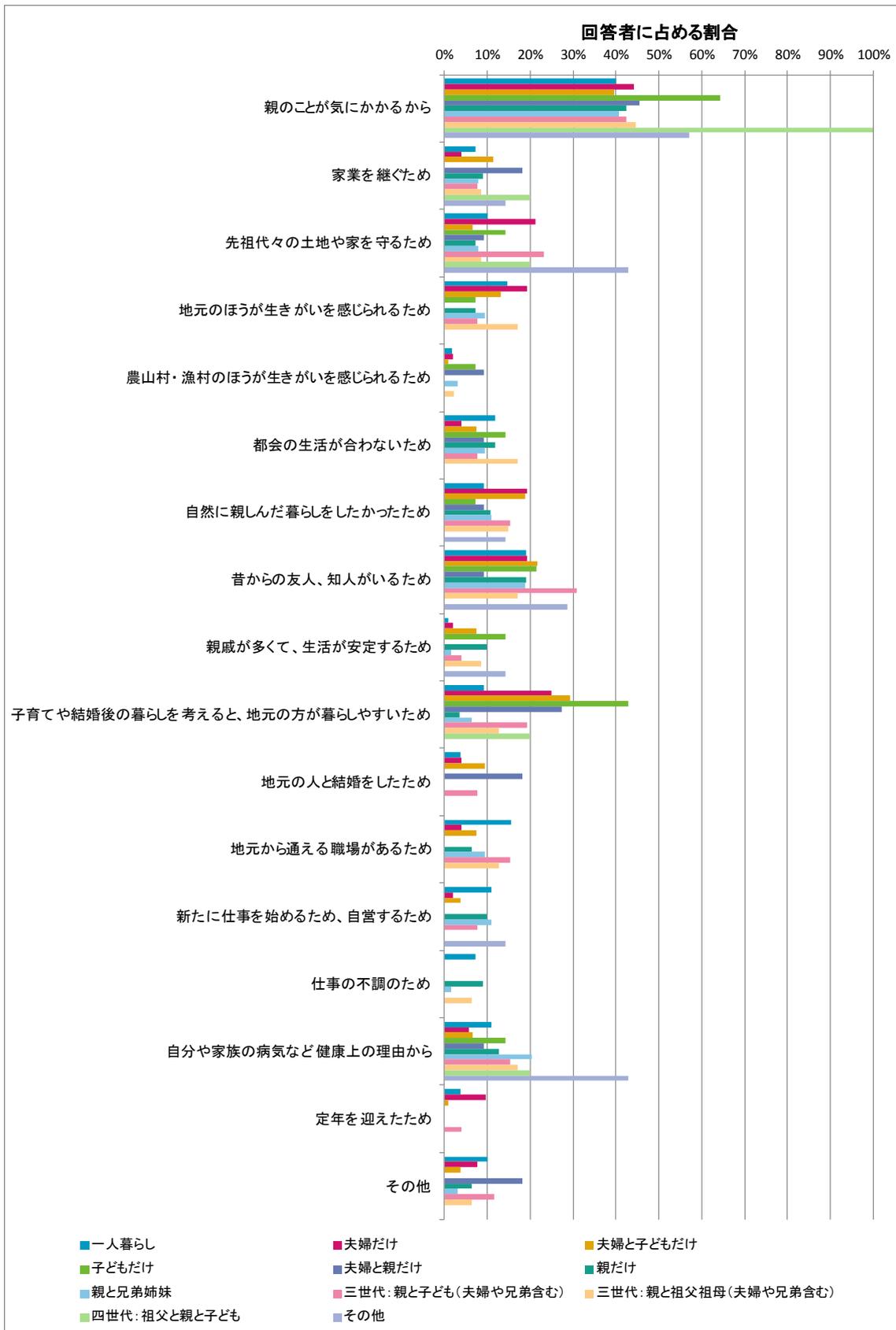
N=295, 164, 49, 33, 12

図 3-39. 出身近隣へのターン理由とターン時の年齢の関係（複数回答）



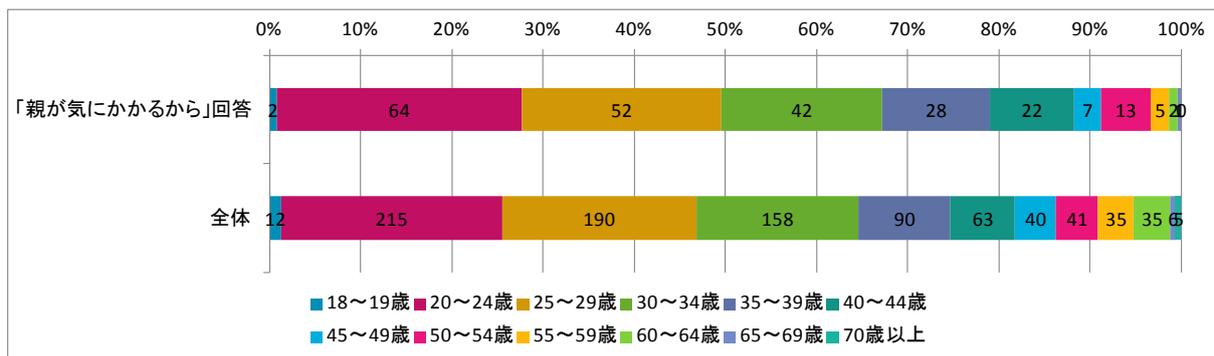
47, 85, 58, 57, 33, 36, 21, 20, 38, 31, 113, 14

図 3-40. 出身近隣へのターン理由と現住地の関係（複数回答）



N=110, 52, 106, 14, 11, 111, 64, 26, 47, 5, 7

図 3-41. 出身近隣へのターン理由と家族構成の関係（複数回答）



N=238（親が気にかかる），890（全体）

図 3-42. 「親のことが気にかかるから」回答者のターン時年齢

(3) 現住地に対する好嫌度

現住地に対する好嫌度を図 3-43 に示す。2 つに分類すると、「どちらかと言えば好き」以上（好き傾向）が 82%、「どちらかと言えば嫌い」以下（嫌い傾向）は 18%になった。多くの回答者は現住地に好意的な印象を寄せている一方で、「嫌い」「とても嫌い」と答えている方も 7%いる。

ターン分類と現住地に対する好嫌度の関係を図 3-44 に示す。「出身によらない県内移動」を実施した方に「とても好き」「とても嫌い」といった極端な回答を行った人がいなかったことを除けば、ターン分類の違いによる現住地の好嫌度に差は認められなかった。

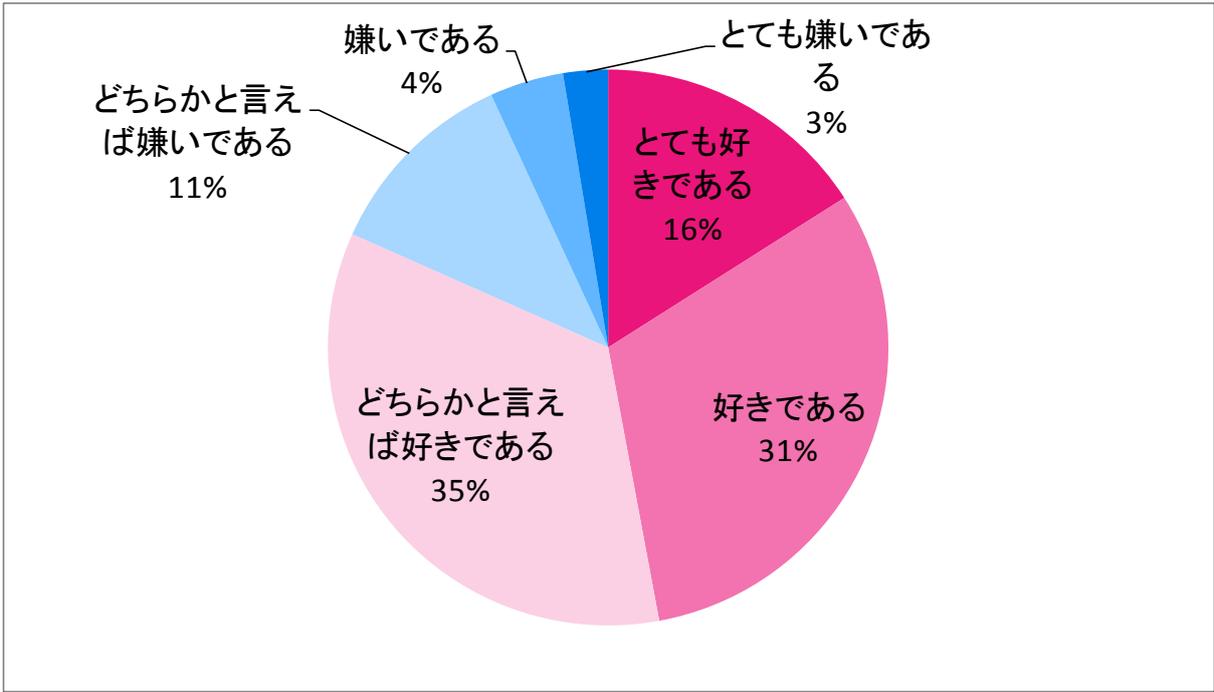
ターン時の年齢と現住地に対する好嫌度の関係を図 3-45 に示す。49 歳以下にターンを実施した人は、ターン時の年齢の増加に伴って、現住地が嫌いである割合が高くなっている。特に、40～49 歳のときにターンを実施した人のうち、およそ四分の一が嫌い傾向の回答を行っている。その一方、ターン時の年齢が 50 歳を超えると、嫌い傾向の回答を行っている人の割合は減少し、特に 60 歳以上では、「とても好きである」の割合も増加している。高齢になってからターンを実施した人の方が、現住地を好きである割合が高い。若いころのターン先は、就業環境や家庭の都合に左右されることが多く、仕方なく居住している方もいると思われるが、高齢になり定年を迎え、動きやすくなった後は、自分で好きな転居先に居住できるようになることから、このような傾向が見受けられるものと思われる。

家族構成と現住地に対する好嫌度の関係を図 3-46 に示す。「夫婦だけ」「夫婦と子どもだけ」「夫婦と親だけ」という配偶者のいる世帯は「とても好き」と回答した方の割合が 2 割近くいる一方で、「一人暮らし」「子どもだけ」「親だけ」という配偶者のいない世帯ではその割合が 1 割程度となっており、配偶者の有無によって、現住地に対する好嫌度に違いが認められる。

現住地と現住地に対する好嫌度の関係を図 3-47 に示す。沖縄へのターンを除けば、好き傾向の回答割合が 75～85%、「とても好き」回答の割合が 15～20%で同様の傾向を示しているが、沖縄に限り、「とても好き」回答が半分近くおり、好き傾向の回答も 90%を超えていることから、他の地域と比較すると、明らかに好感度が高い回答が得られていることがわかる。

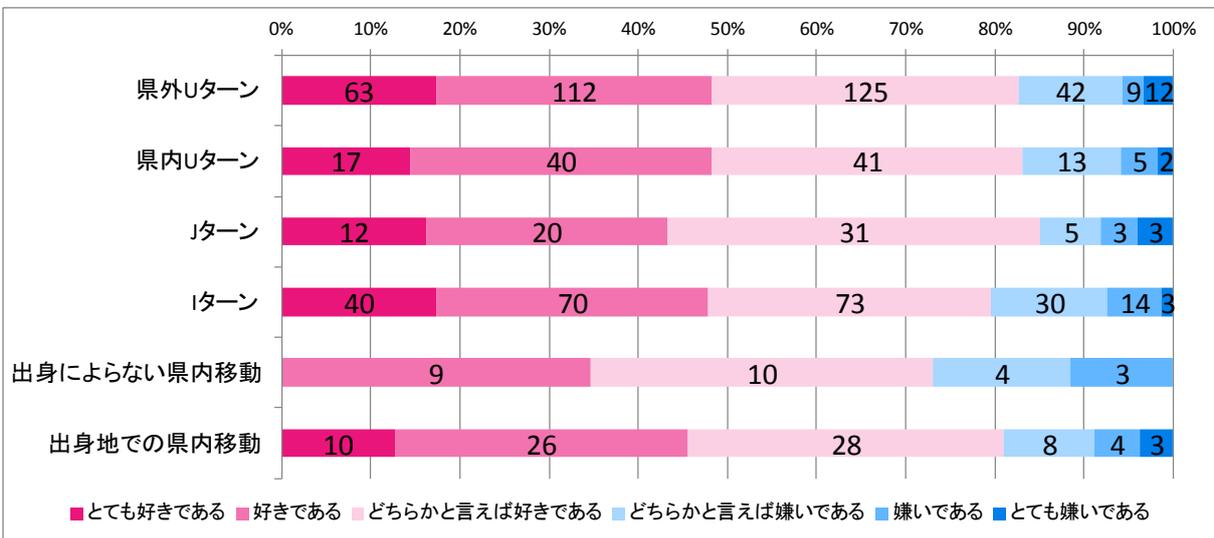
現住地の人口規模と現住地に対する好嫌度の関係を図 3-48 に示す。現住地の人口規模の違いによる、現住地に対する好嫌度に差は認められなかった。

「親のことが気にかかるから」を出身の近隣へのターンの理由の一つとして回答した 238 サンプルの現住地に対する好嫌度の分布を図 3-49 に示す。



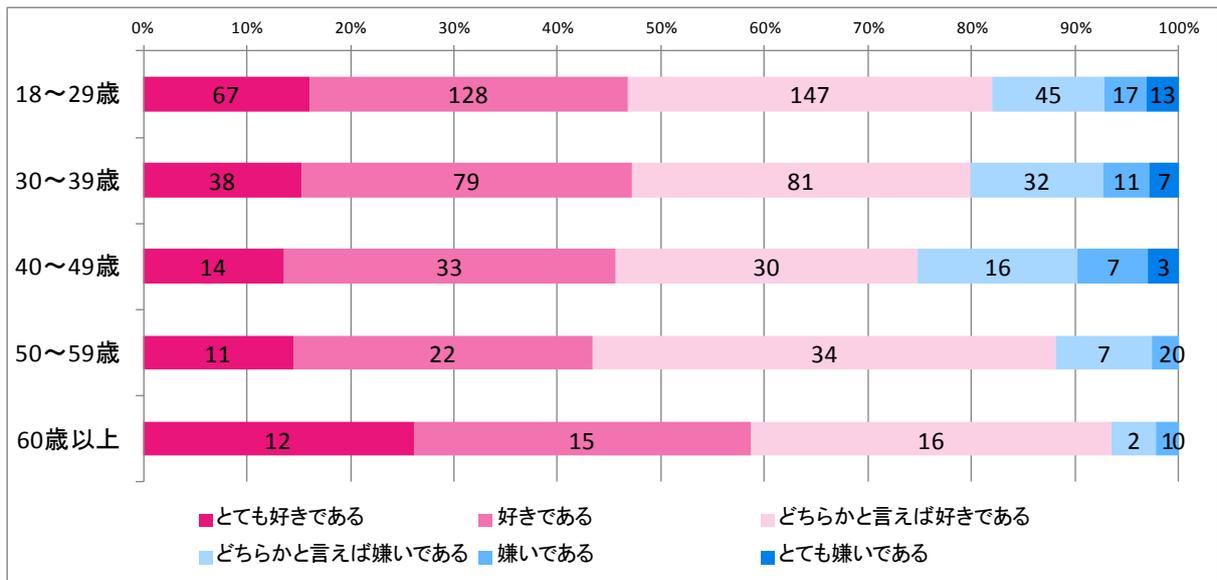
N=890

図 3-43. 現住地に対する好嫌度



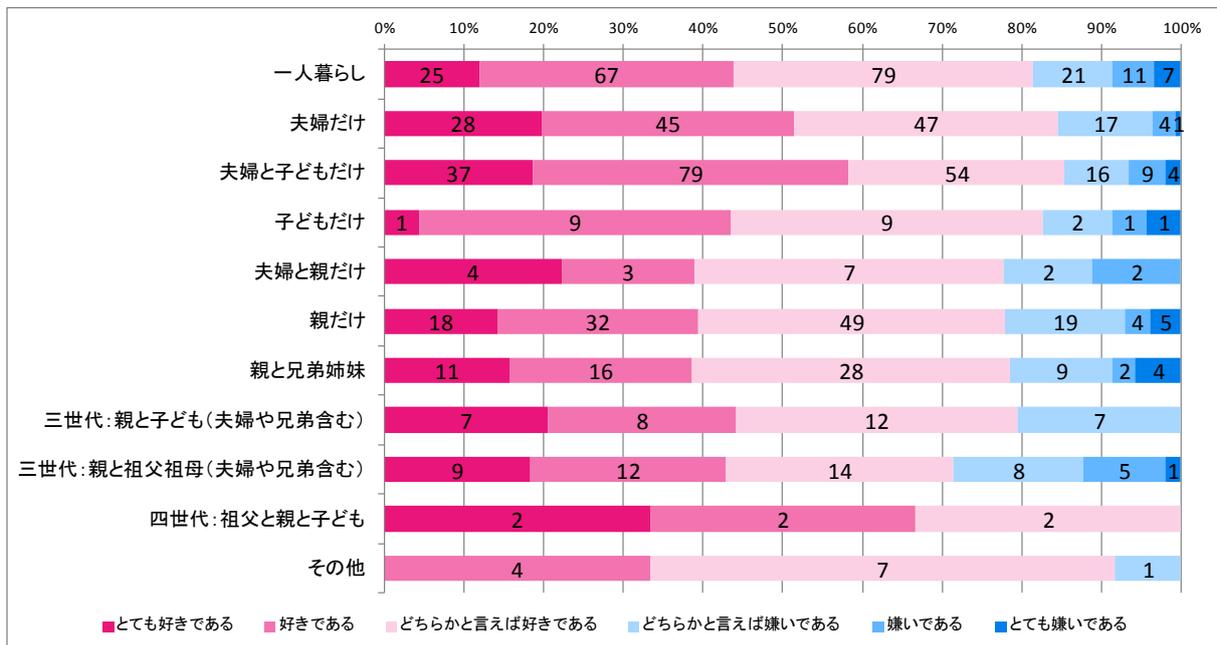
N=890

図 3-44. ターン分類と現住地に対する好嫌度の関係



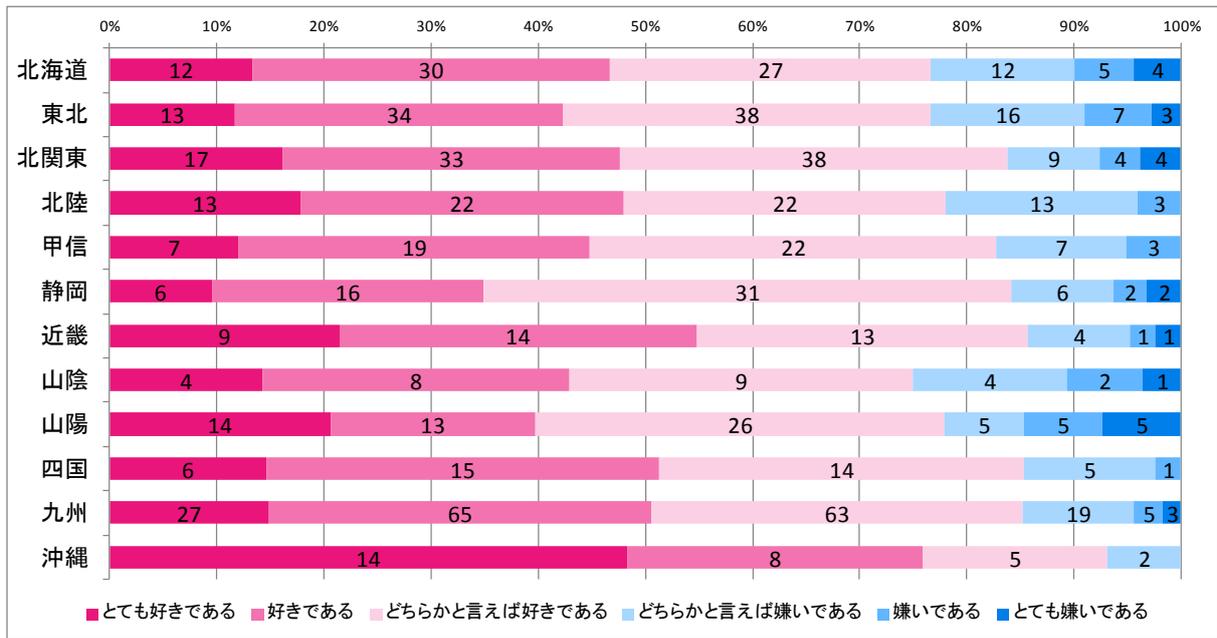
N=890

図 3-45. ターン時の年齢と現住地に対する好嫌度の関係



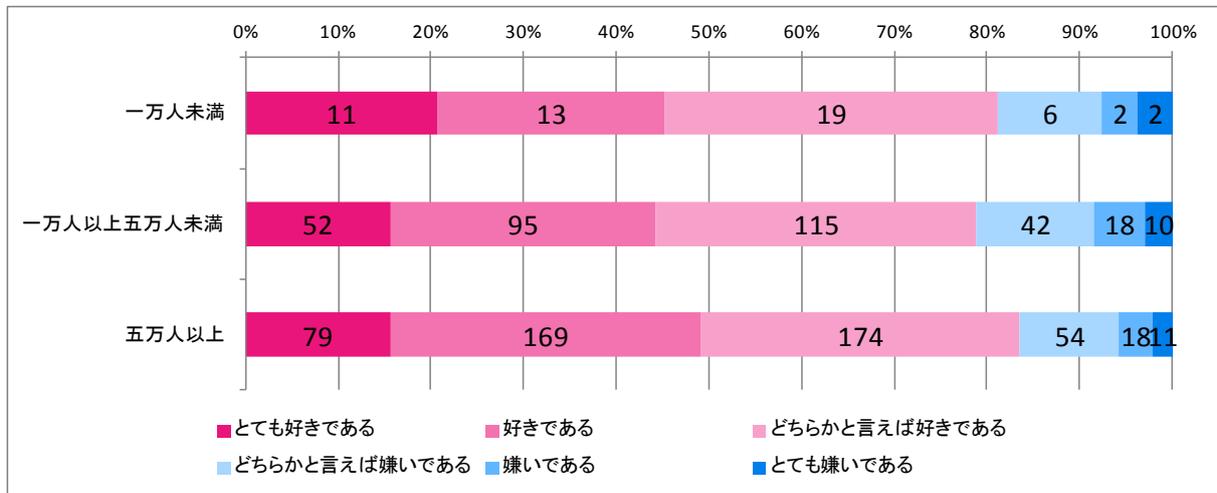
N=890

図 3-46. 家族構成と現住地に対する好嫌度の関係



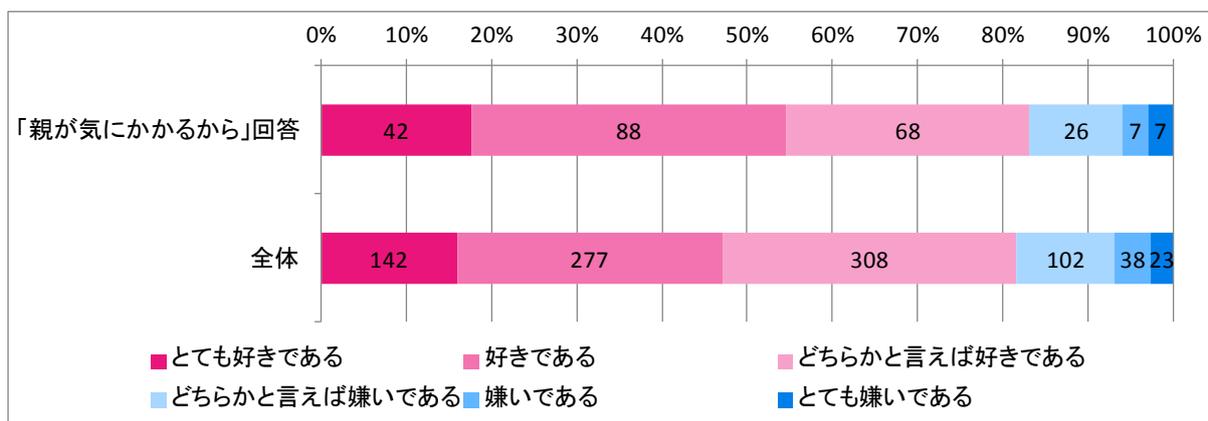
N=890

図 3-47. 現住地と現住地に対する好嫌度の関係



N=890

図 3-48. 現住地の人口規模と現住地に対する好嫌度の関係



N=238（親が気にかかる）, 890（全体）

図 3-49. 「親のことが気にかかるから」回答者の現住地に対する好嫌度

（４）定住意思（今後も現住地に住み続けたいか）

定住意思（今後も現住地に住み続けたいか）を図 3-50 に示す。2 つに分類すると、「ずっと住み続けたい」「当分の間は住み続けたい」「転出することがあっても帰ってきたい」という定住志向の回答が 77%、「転出を考えている、考えざるを得ない」「転出したい、転出を決めている」という転出志向の回答は 13%であり、「わからない」という回答も 1 割いた。多くの人は、現住地への定住意思を持っていることがわかった。

ターン分類と定住意思の関係を図 3-51 に示す。「ずっと住み続けたい」の回答の割合に着目すると、I ターンよりも J ターンのほうが高く、それよりも U ターンのほうが高いという結果となっている。また、出身によらない県内移動のターン実施者では、顕著に低くなっている。この割合が低いということは、ゆくゆくは現住地から転出してもよいと考えているということになるが、出身地ではない地域に居住している人のほうが、このように考える傾向が高いということを示唆する結果となっている。

ターン時の年齢と定住意思の関係を図 3-52 に示す。49 歳までにターンを実施した人は、定住志向の割合が 7 割強、転出志向の割合が 1 割強であるのに対し、50 歳以上でのターン実施者は、転出志向の割合は 5%ほどで、定住志向が 9 割を超えている。特に、60 歳以上では「ずっと住み続けたい」回答の割合が、59 歳以下と比較すると顕著に増加している。高齢になってからターンを実施した人は、定住希望の割合が高いといえる。

家族構成と定住意思の関係を図 3-53 に示す。「夫婦だけ」「夫婦と子どもだけ」「夫婦と親だけ」という配偶者のいる世帯は、定住志向の回答割合が 8 割を超えているが、「一人暮らし」「子どもだけ」「親だけ」という配偶者のいない世帯ではその割合が 7 割程度に留まっている。図 3-46 で示した現住地に対する好嫌度と同様に、配偶者の有無によって定住意思にも違いが認められる。

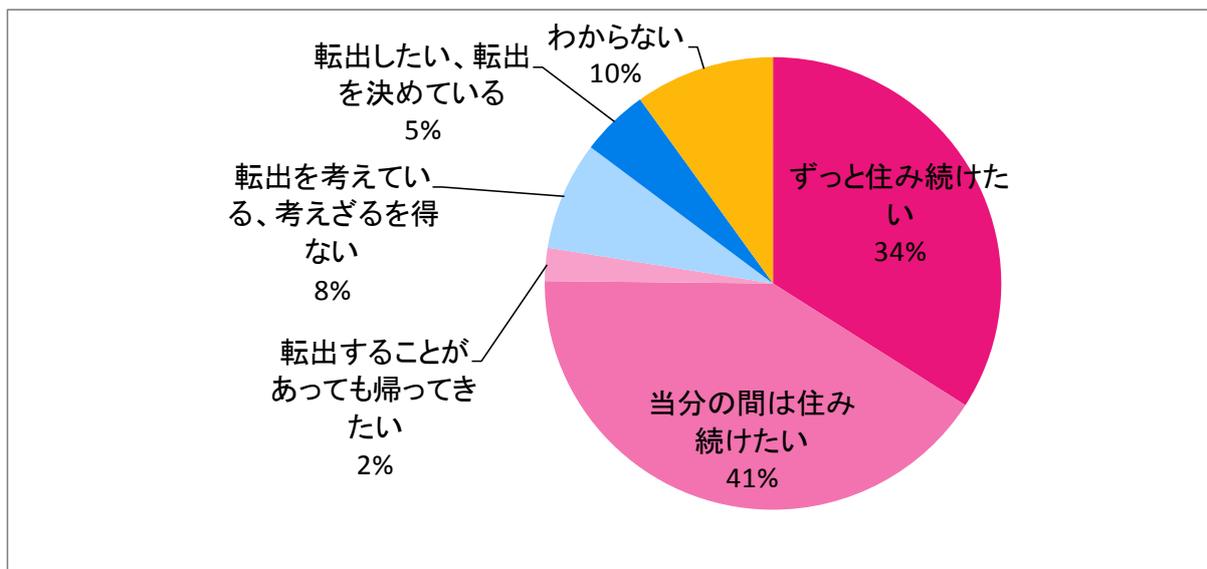
現住地と定住意思の関係を図 3-54 に示す。沖縄へのターン実施者は定住志向の回答が 9 割を超えており、明らかに他の地域とは傾向を異にしている。他の地域では、山陰が定住志向の回答割合が高く、北海道や山陽が定住志向の割合が低い。

現住地の人口規模と定住意思の関係を図 3-55 に示す。「ずっと住み続けたい」という強い定住意思を示した回答の割合はどの人口規模でも 3 割を越える程度でほぼ同じであるが、「当分の間は住み続けたい」「転出することがあっても帰ってきたい」を含めた定住志向を示した全ての回答で考えると、人口一万人未満の市町村に居住する方は、人口五万人以上の市町村に居住する方よりもその割合が 1 割低く、転出志向を示した割合が 1 割程度高くなっている。現住地に対して強い定住意思を持っていない人では、人口規模の小さい市町村では生活環境や就業環境の不便さから転出意思を持つ方が多くなるものと思われる。

好嫌度と定住意思の関係を図 3-56 に示す。定住意思と現住地に対する好嫌度には、明らかに関連が認められる結果となった。また、現住地が嫌いであればあるほど、定住に関して「わからない」と回答した割合は高くなっている。その一方で、現住地に対して好き傾向の回答をしているにも関わらず、転出意思のある方も僅かに存在していることがわかった。これらの回答の転出希望理由を精査することによって、地域から人口の流出を食い止める方法が分かる可能性が示唆される。

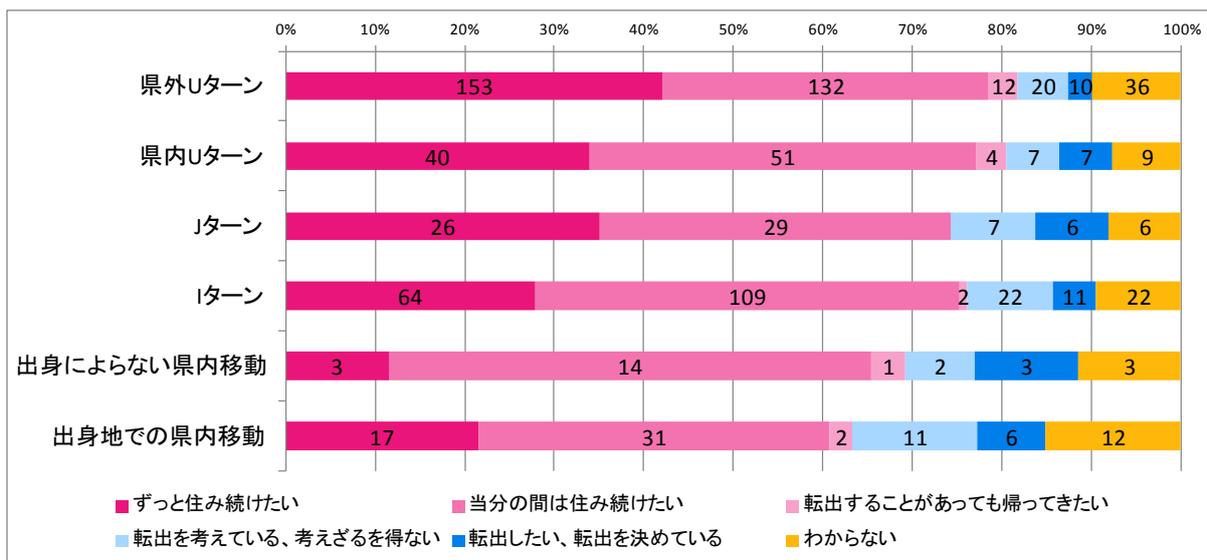
転入理由と定住意思の関係を図 3-57 に示す。「自分が豊かな自然環境のなかで生活をしたかつ

た」「都会のせわしさに嫌気がさした」など自然環境を求めての転入理由や、「周辺の環境が良い」「道路や交通の便がよい」など生活環境を求めての転入理由は、定住志向の回答者の割合が、転出志向の回答者の割合と比較して大きい。その一方で、「親元で暮らしたかった」「家族がこの地に転職・転業・就職」など、自発的にターン先となる現住地を決めていない人は、転出志向の回答者の割合が大きい。



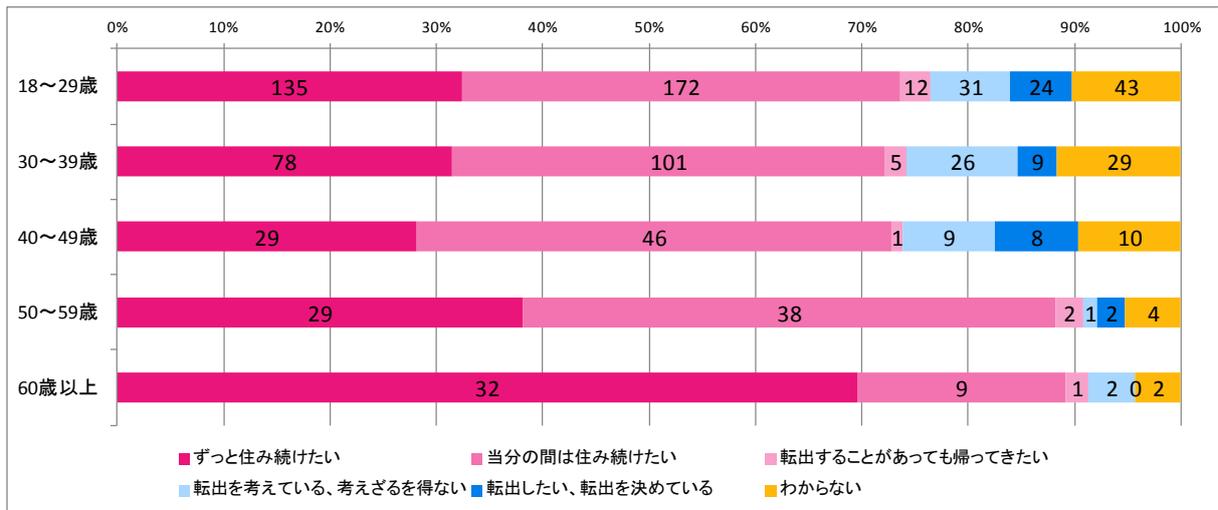
N=890

図 3-50. 定住意思（今後も現住地に住み続けたいか）



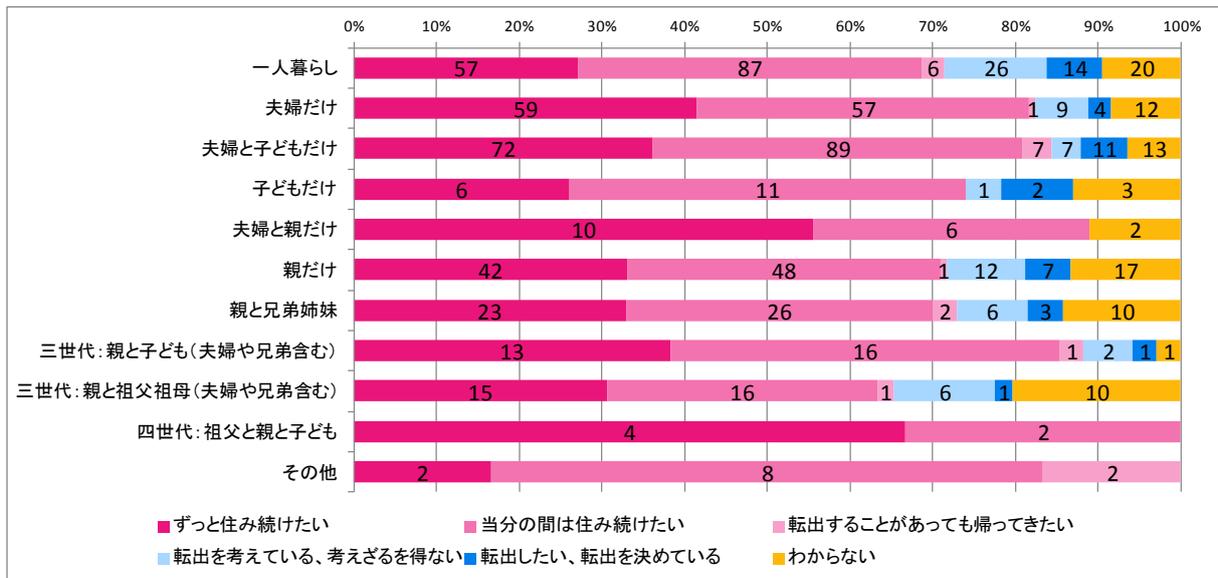
N=890

図 3-51. ターン分類と定住意思の関係



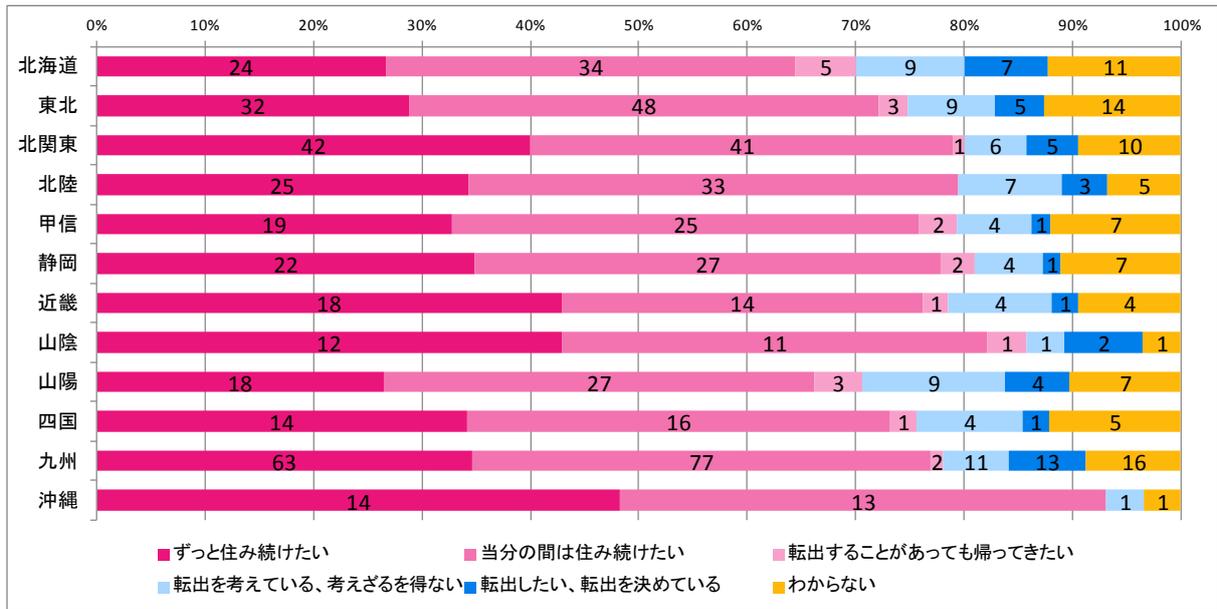
N=890

図 3-52. ターン時の年齢と定住意思の関係



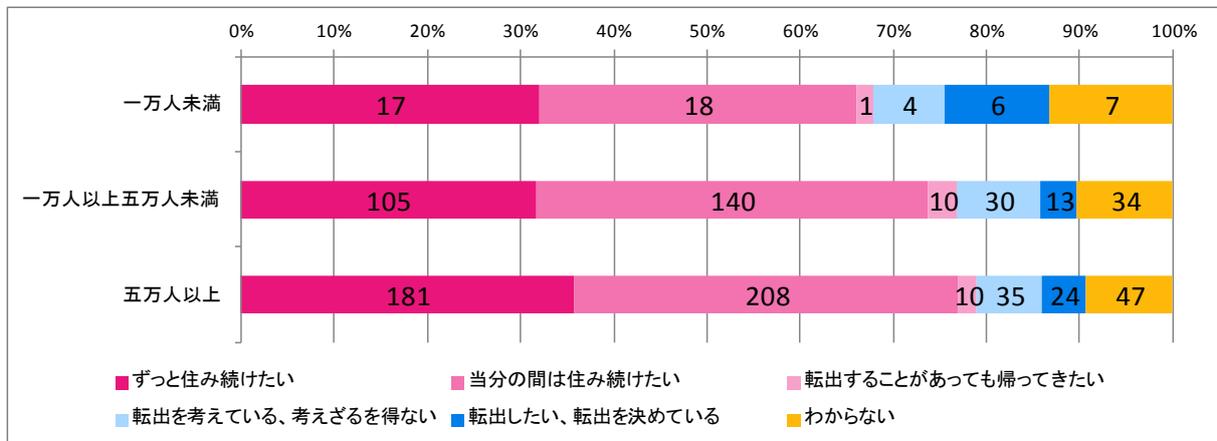
N=890

図 3-53. 家族構成と定住意思の関係



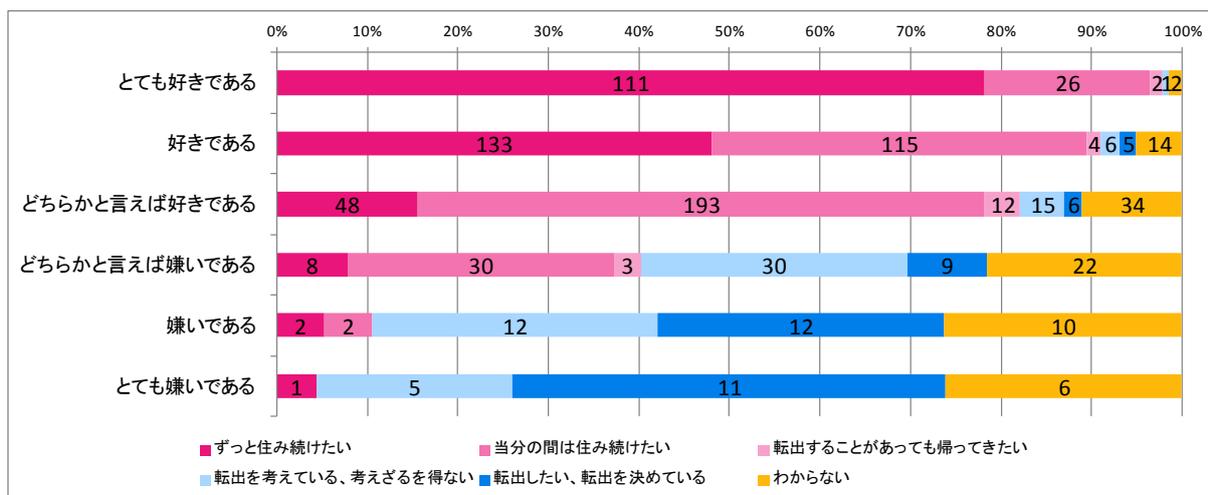
N=890

図 3-54. 現住地と定住意思の関係



N=890

図 3-55. 現住地の人口規模と定住意思の関係



N=890

図 3-56. 好嫌度と定住意思の関係

（５）定住を希望する理由

定住を希望する理由を図 3-58 に示す。最も多いのは「自宅や土地がある」という回答であった。この回答や「地域への愛着がある、先祖代々住んできた土地だから」といった地元志向、「住宅や周辺の環境が良い」、「買い物や通勤・通学などが便利」といった生活環境、「自然環境に親しみを感じている」、「気候や風土にあっている」といった自然環境の、大きく 3 つに分類できるものと思われる。その一方で、「他に行くところが無い、仕方ない」といったネガティブな理由での定住意思を持っている方もいることがわかった。

定住を希望する理由について、その他を選択した方の自由回答の抜粋を表 3-10 に示す。回答数は少なかったが、子どもの学校や友達関係などを理由にあげる回答や、スキー場など趣味のための施設の存在を理由にする回答があった。

定住を希望する理由とターン分類の関係を図 3-59 に示す。「自宅や土地がある」「地域への愛着がある、先祖代々住んできた土地だから」などの地元志向の回答割合を比較すると U ターン者の割合が他のターン実施者よりも高い。その一方で、「住宅や周辺の環境が良い」、「自然環境に親しみを感じている」などの、自然環境・生活環境を重視した回答の割合を比較すると、I ターンや J ターンが高くなっている。I ターンや J ターンでは、自然環境や生活環境を重視してターン先を選択している可能性が示唆される。

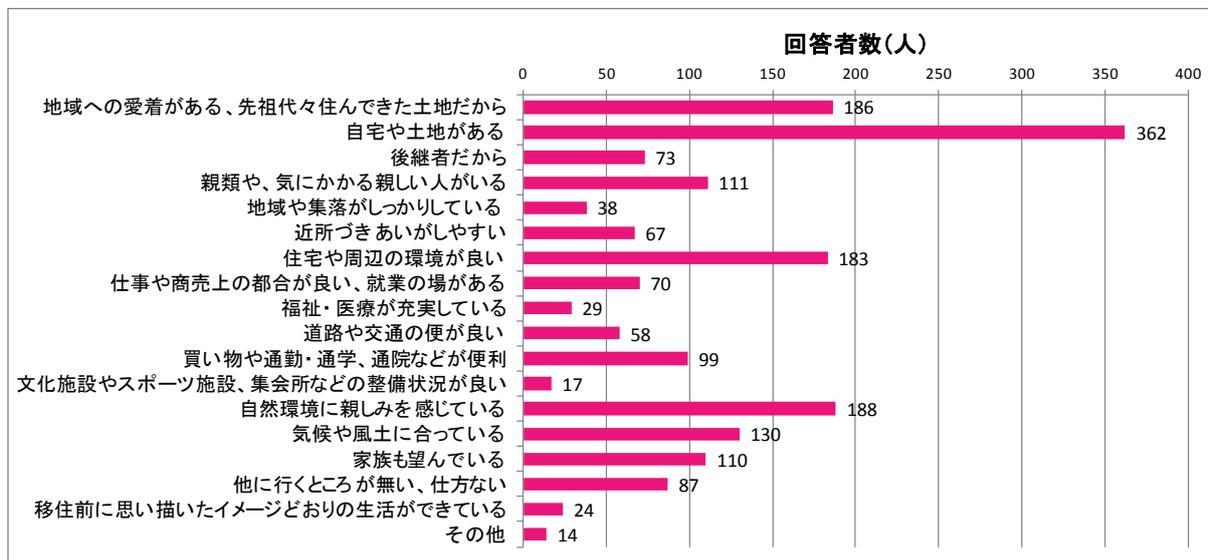
定住を希望する理由とターン時の年齢の関係を図 3-60 に示す。「地域への愛着がある、先祖代々住んできた土地だから」という回答に着目すると、高齢になってからのターンであればあるほど、この理由を選択する人の割合が少なくなっている。若い頃のターンのほうが、地域への愛着が定住を希望する理由になりやすい傾向にあることがわかる。「住宅や周辺の環境が良い」「自然環境に親しみを感じている」などの、自然環境・生活環境を重視した回答に着目すると、60 歳以降にターンを実施した人では、その割合が顕著に高くなっている。これは、定年を迎え退職したことにより、生活が自由になったことで、より良い環境を求めてのターンを実施しやすくなったことによるものと考えられる。また、「福祉・医療が充実している」「道路や交通の便が良い」などの回答も、割合としては小さいが、他と年代と比較すると 60 歳以上の割合は高くなっており、高齢者は生活環境の利便性を、定住を希望する要因として重視している傾向にあることがわかる。

定住を希望する理由と現住地の関係を図 3-61 に示す。現住地域の違いによる定住を希望する理由の選択割合に、差は認められなかった。

定住を希望する理由と現住地の人口規模の関係を図 3-62 に示す。「仕事や商売上の都合が良い、就業の場がある」「福祉・医療が充実している」「道路や交通の便が良い」「買い物や通勤・通学、通院などが便利」などの生活環境に関する項目については、現住地の人口規模が大きいほど、その回答の割合も大きくなっている。いずれも回答者に占める割合は 2 割程度と小さいものの、生活環境の利便性が定住の意識に影響を及ぼしていることがわかる。

定住を希望する理由と現住地に対する好嫌度の関係を図 3-63 に示す。現住地に対して嫌い傾向の回答をしたにもかかわらず、定住志向の回答者が少なからずおり、それら回答の定住希望理由をみると、「他に行くところが無い、仕方ない」という回答のほかに、「自宅や土地がある」という回答の割合が高くなっている。自宅や土地があることは、現住地に対して好き傾向である回答の割合が高い一方で、嫌い傾向の回答割合も少なくない。嫌いであっても定住しなければなら

ないという「イエ」的動機に縛られている回答者がいることによるものと思われる。

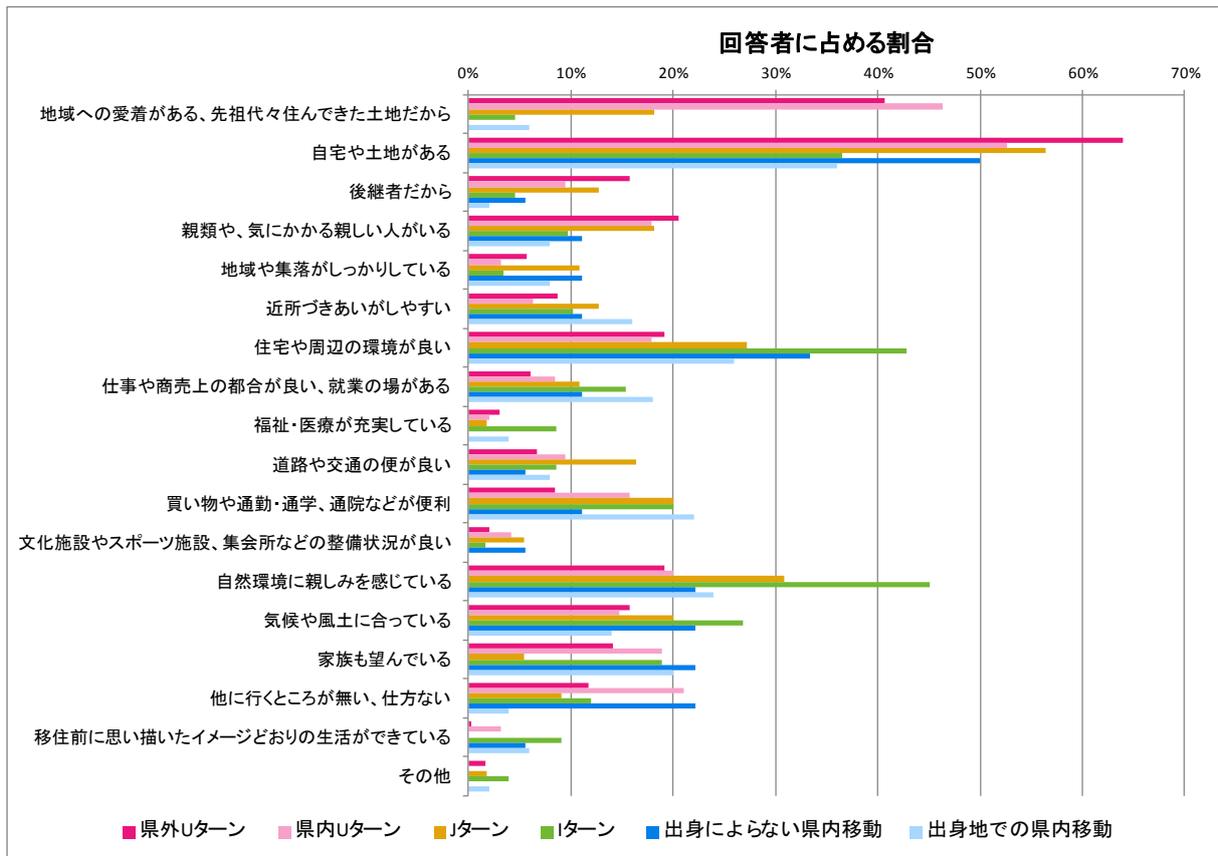


N=690

図 3-58. 定住を希望する理由（複数回答）

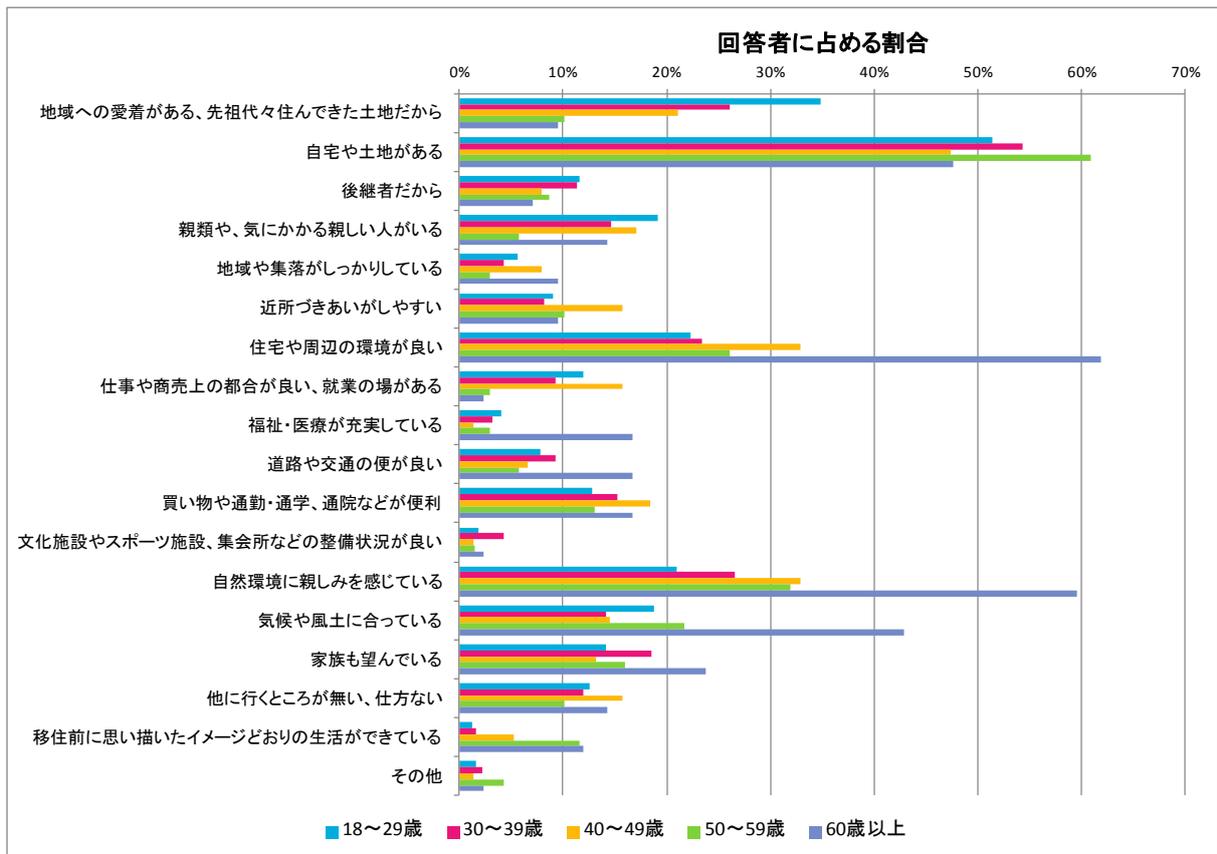
表 3-10. 定住を希望する理由に関する自由回答（抜粋）

物価が安い
子供の学校関係でこのままの方が良いと思うから
職場があるため
スキー場が多い
夫が出身地で生活したがっている
子供が友達付き合いできている



RN=295, 95, 55, 175, 18, 50

図 3-59. 定住を希望する理由とターン分類の関係（複数回答）



N=319, 184, 76, 69, 42

図 3-60. 定住を希望する理由とターン時の年齢の関係（複数回答）

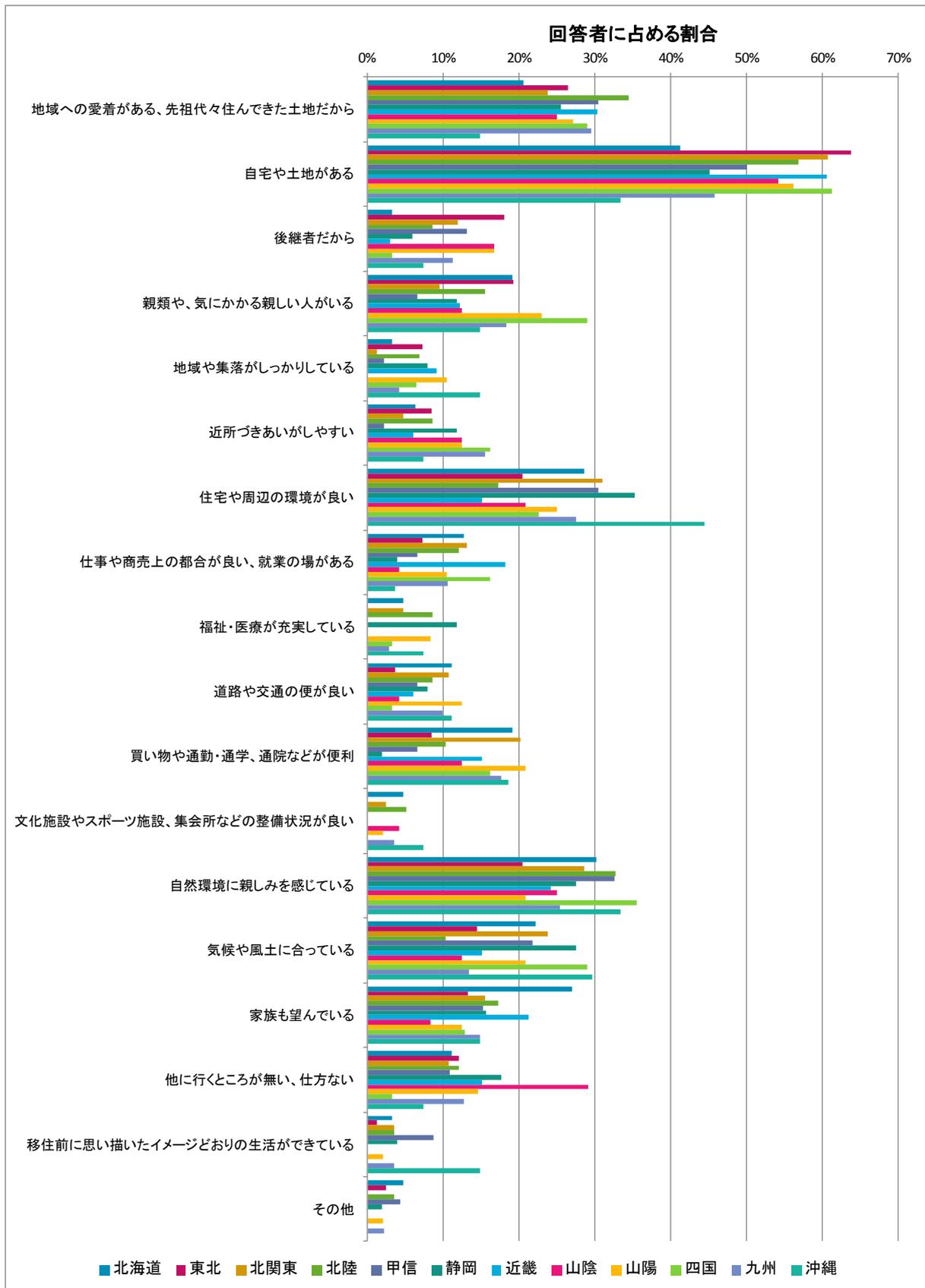
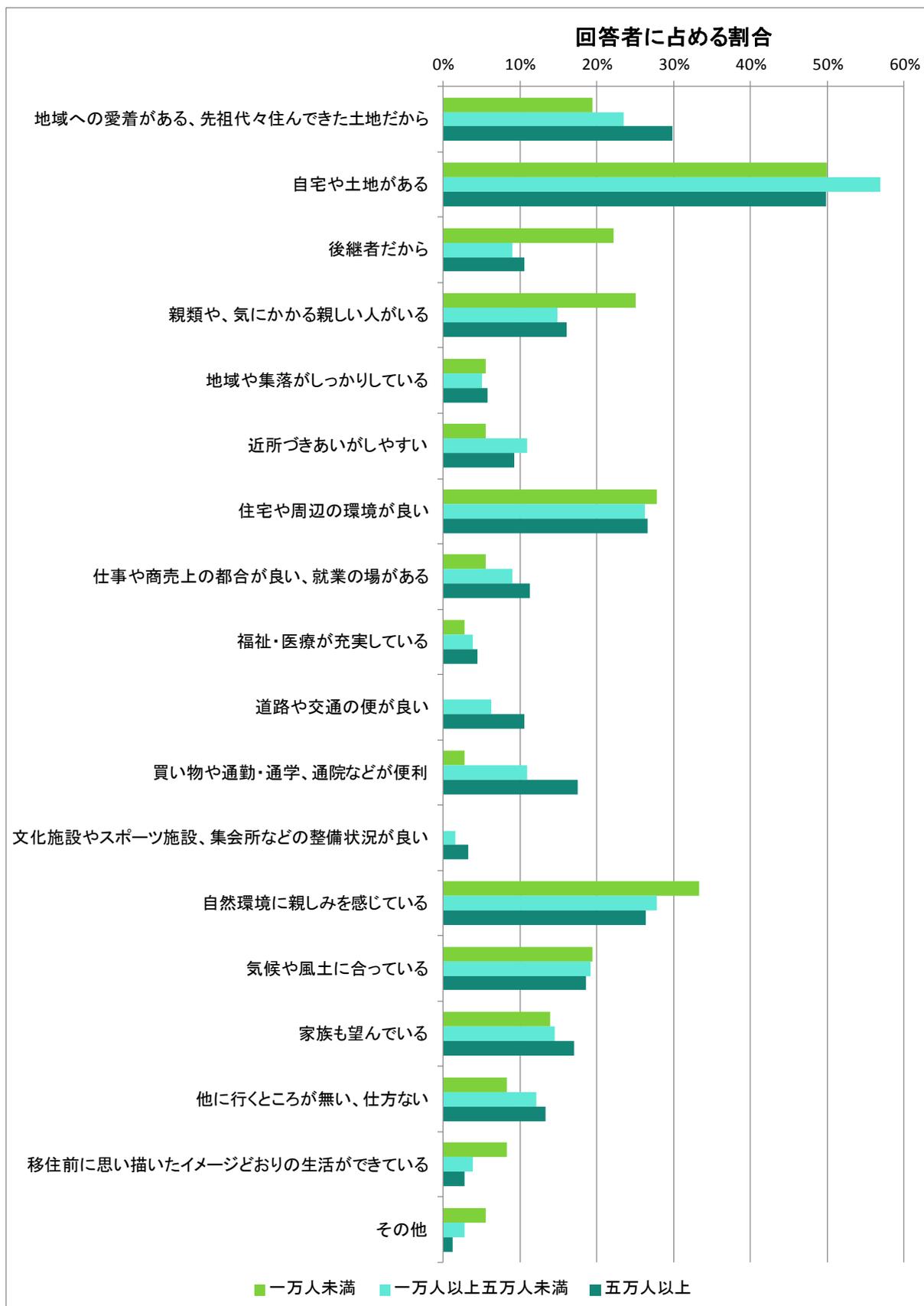
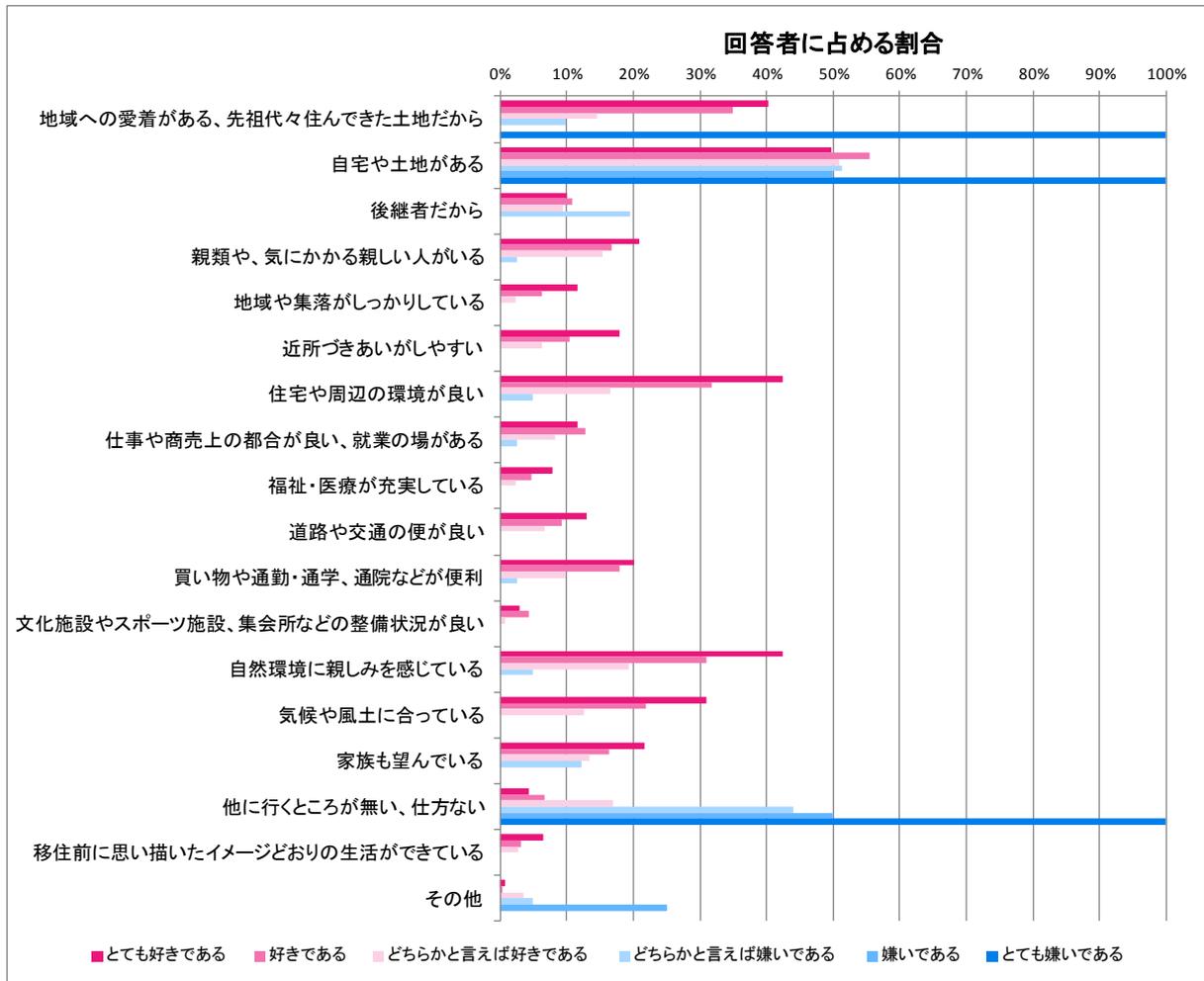


図 3-61. 定住を希望する理由と現住地の関係（複数回答）



N=36, 255, 399

図 3-62. 定住を希望する理由と現住地の人口規模の関係（複数回答）



N=139, 252, 253, 41, 4, 1

図 3-63. 定住を希望する理由と現住地に対する好嫌度の関係（複数回答）

（6）転出を希望する理由

転出を希望する理由を図 3-64 に示す。一番多かったのは「地域への愛着を感じない」という回答であったが、それに次いで「道路や交通の便が悪い」、「買い物や通勤・通学、通院などが不便」といった生活環境、「仕事や商売上の都合が悪い」、「希望する就業の場がない」などといった就業環境による回答が目立った。

転出を希望する理由について、その他を選択した方の自由回答の抜粋を表 3-11 に示す。回答数は少なかったが、行政への不満や治安の悪さを理由に転出を希望している方がいることがわかった。

転出を希望する理由とターン分類の関係を図 3-65 に示す。I ターンや J ターンを実施した人で転出を希望している方のうち、半分以上が「地域への愛着を感じない」という選択肢を選択している。その一方で、U ターン者についても「地域への愛着を感じない」ことから転出を希望している人が 4 割弱いることがわかった。このことは、どのターン分類でも関係なく、地域への愛着の有無が転出の希望理由になり得ることを示唆している。また、「住宅や周辺の環境が良くない」、「仕事や商売上の都合が悪い」、「道路や交通の便が悪い」などといった生活環境、就業環境に関連する選択肢に着目すると、I ターン・J ターン者と比較すると、U ターン者の選択割合は低くなっている。U ターン者は地元へのターンであるため、たとえ環境が悪くても悪いことを承知でターンを実施していることで、このような結果になったと考えられる。

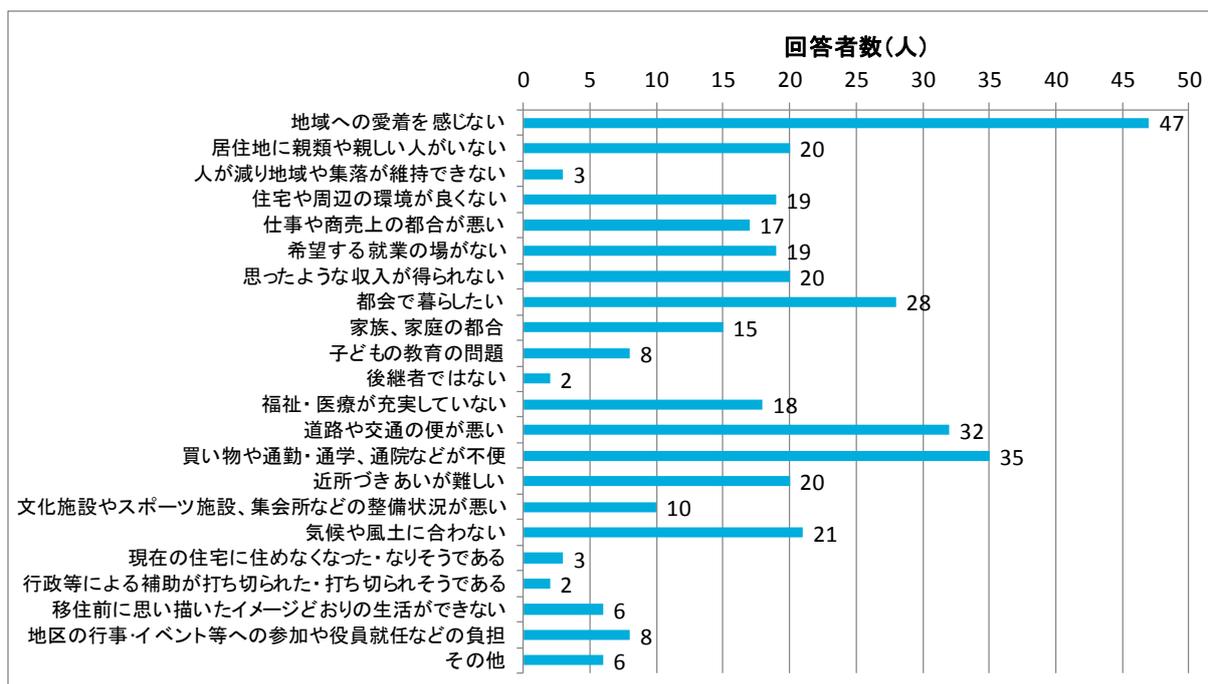
転出を希望する理由とターン時の年齢の関係を図 3-66 に、転出を希望する理由と家族構成の関係を図 3-67 に、転出を希望する理由と現住地の関係を図 3-68 に示す。これらの各要因の違いによる転出を希望する理由の選択割合に、差は認められなかった。

転出を希望する理由と現住地の人口規模の関係を図 3-69 に示す。現住地の人口規模が一万人未満の市町村に居住する方では「都会で暮らしたい」という都会志向の回答のほか、「希望する就業の場がない」「福祉・医療が充実していない」「道路や交通の便が悪い」「買い物や通勤・通学、通院などが不便」などといった就業環境・生活環境の不便さを理由に転出を希望している方の割合が、人口規模が一万人以上の市町村に居住する方より顕著に大きくなっている。これは図 3-62 で示した定住を希望する理由と現住地の人口規模の関係と対になる結果であり、人口規模の小さい市町村では、生活環境や就業環境の不便さを補うような政策を実施していくことが、人口流出の防止のためには重要であると考えられる。

転出を希望する理由と現住地に対する好嫌度の関係を図 3-70 に示す。どの回答でも、現住地を嫌いであればあるほど、概ね選択割合が高くなっている。また、「家族、家庭の都合」という仕方ない理由を除けば、「仕事や商売上の都合が悪い」、「希望する就業の場がない」、「思ったような収入が得られない」などの就業環境、「道路や交通の便が悪い」、「買い物や通勤・通学、通院などが不便」といった生活環境に関する各理由が原因で、現住地が好きであるにもかかわらず、転出を検討している回答者が見受けられる。このような回答者は、これら要素が無ければ定住する可能性の高い方々であり、図 3-69 でも示したように人口の流出を食い止めるためには、生活環境や就業環境の改善を図ることが重要であると思われる。

転入理由と転出を希望する理由の関係を表 3-12 に示す。これは転出志向のある回答者の転入理由を、転出を希望する理由別に集計したものである。家庭環境の変化など不可抗力の事由によ

るものを除けば、「親元で暮らしたかった」「この地で就職（転職）した」「家族がこの地に転職・転業・就職」などの自発的にターン先を選択していない理由による転入を行っている回答が多く、それら回答の転出理由として多いのは、「道路や交通の便が悪い」「買い物や通勤・通学、通院などが不便」などの生活環境の不便さや「仕事や商売上の都合が悪い」「希望する就業の場がない」「思ったような収入が得られない」などの就業環境の不便さをあげた回答が多かった。生活・就業環境を考慮せずにターンを実施し、実際に居住した後に居住地の生活・就業環境の不便さを知り、転出を検討しているというパターンが多いように思われる。

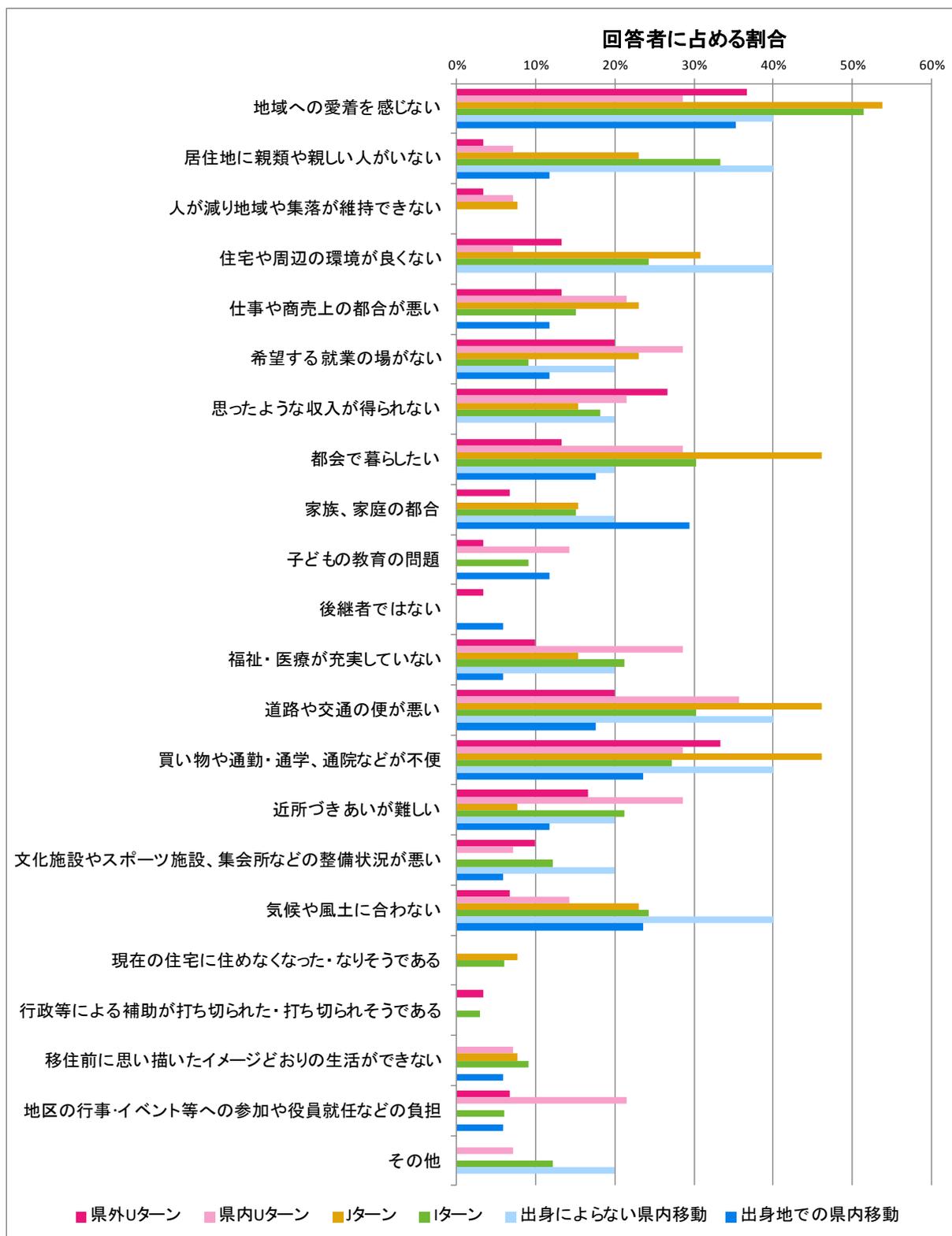


N=112

図 3-64. 転出を希望する理由（複数回答）

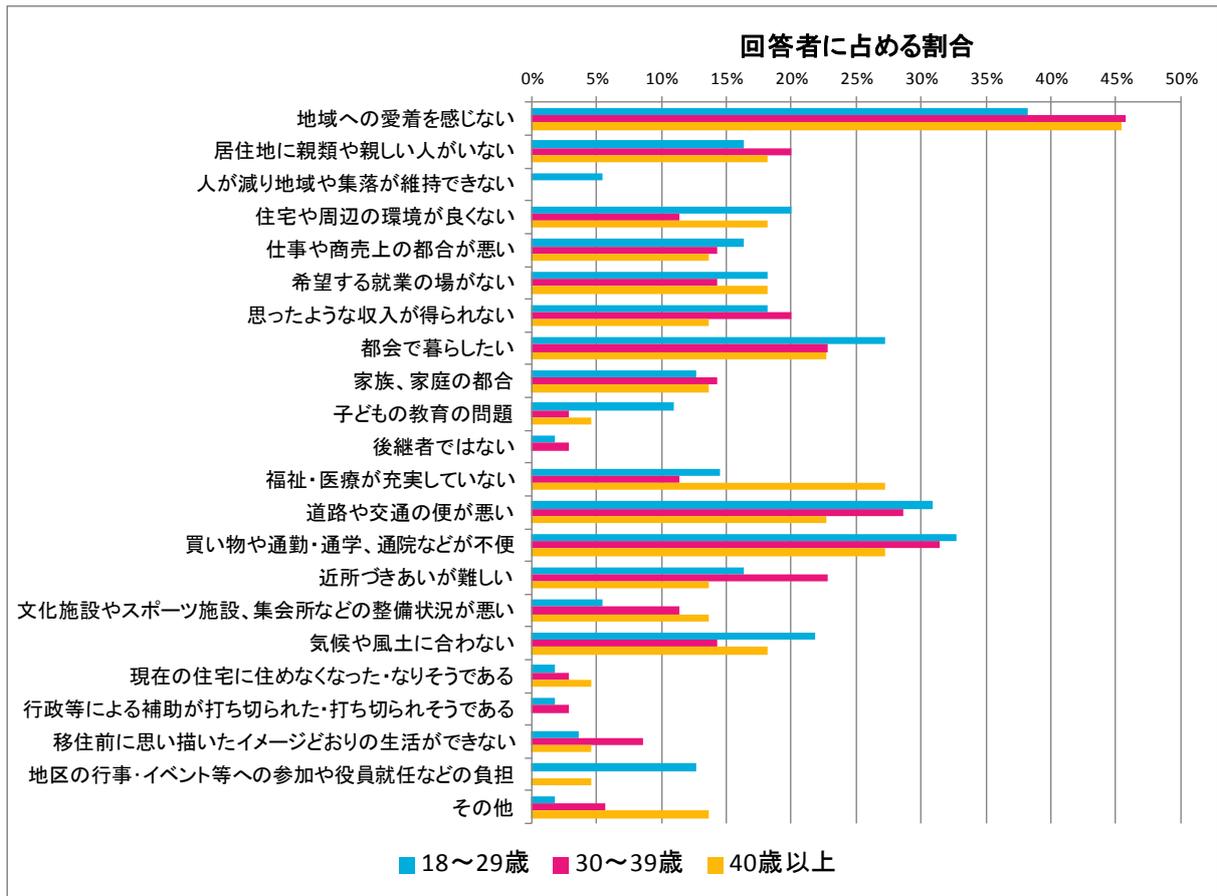
表 3-11. 転出を希望する理由に関する自由回答（抜粋）

行政が話にならないぐらい仕事ができない
信じられない人が多い
外国人が多く治安が悪い
行政のレベルが低い
転職を検討している為



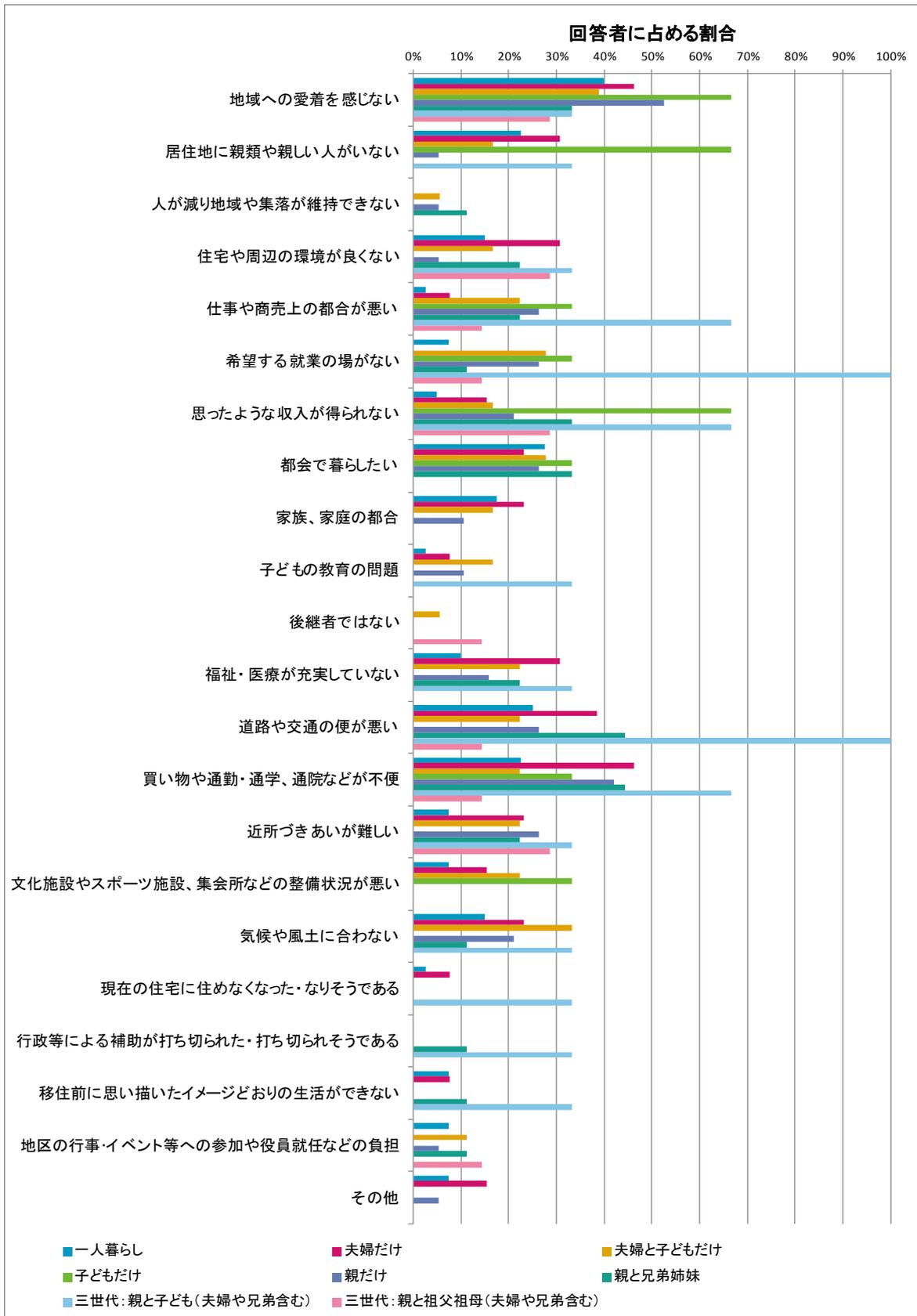
N=30, 14, 13, 33, 5, 17

図 3-65. 転出を希望する理由とターン分類の関係（複数回答）



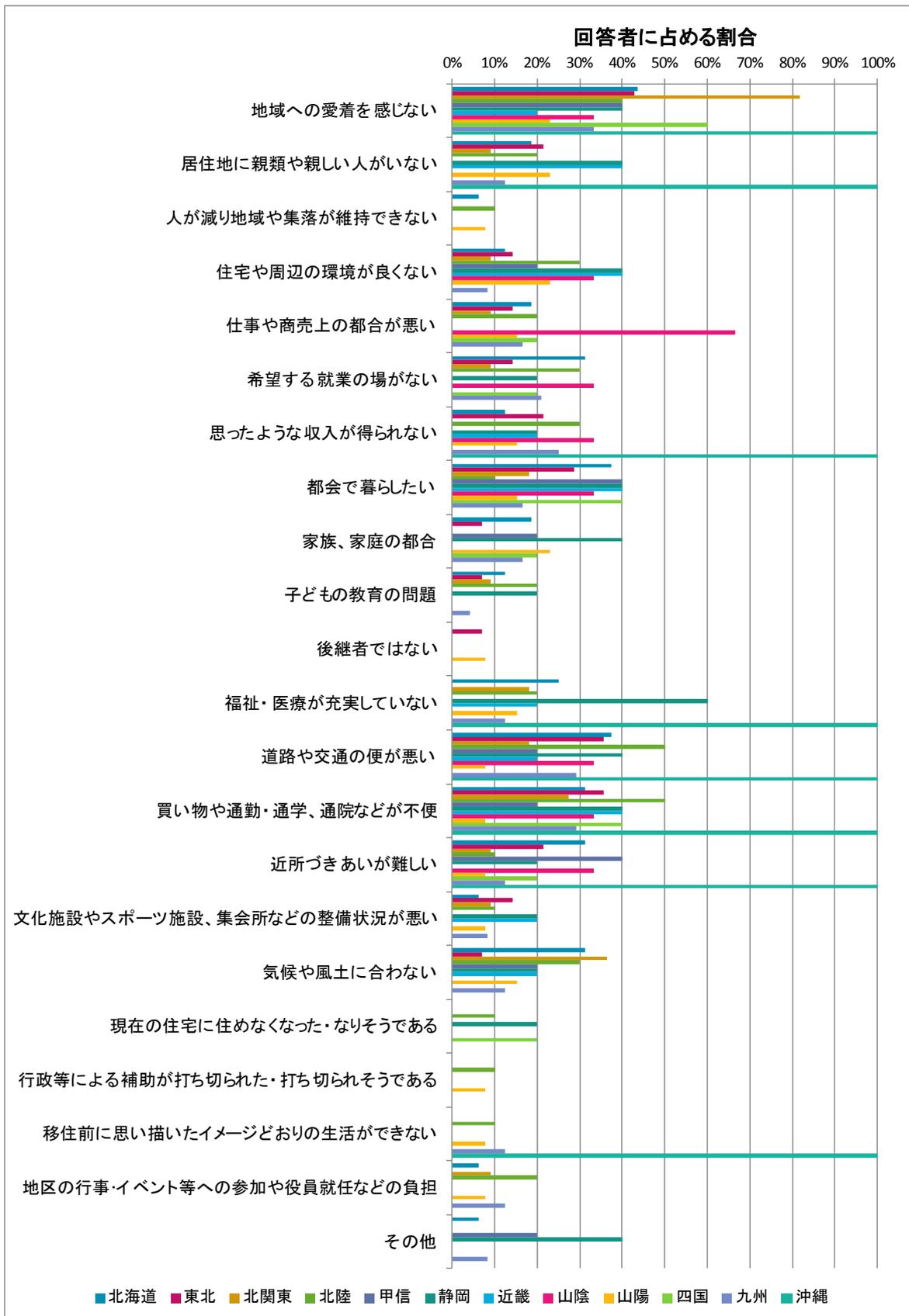
N=55, 35, 22

図 3-66. 転出を希望する理由とターン時の年齢の関係（複数回答）



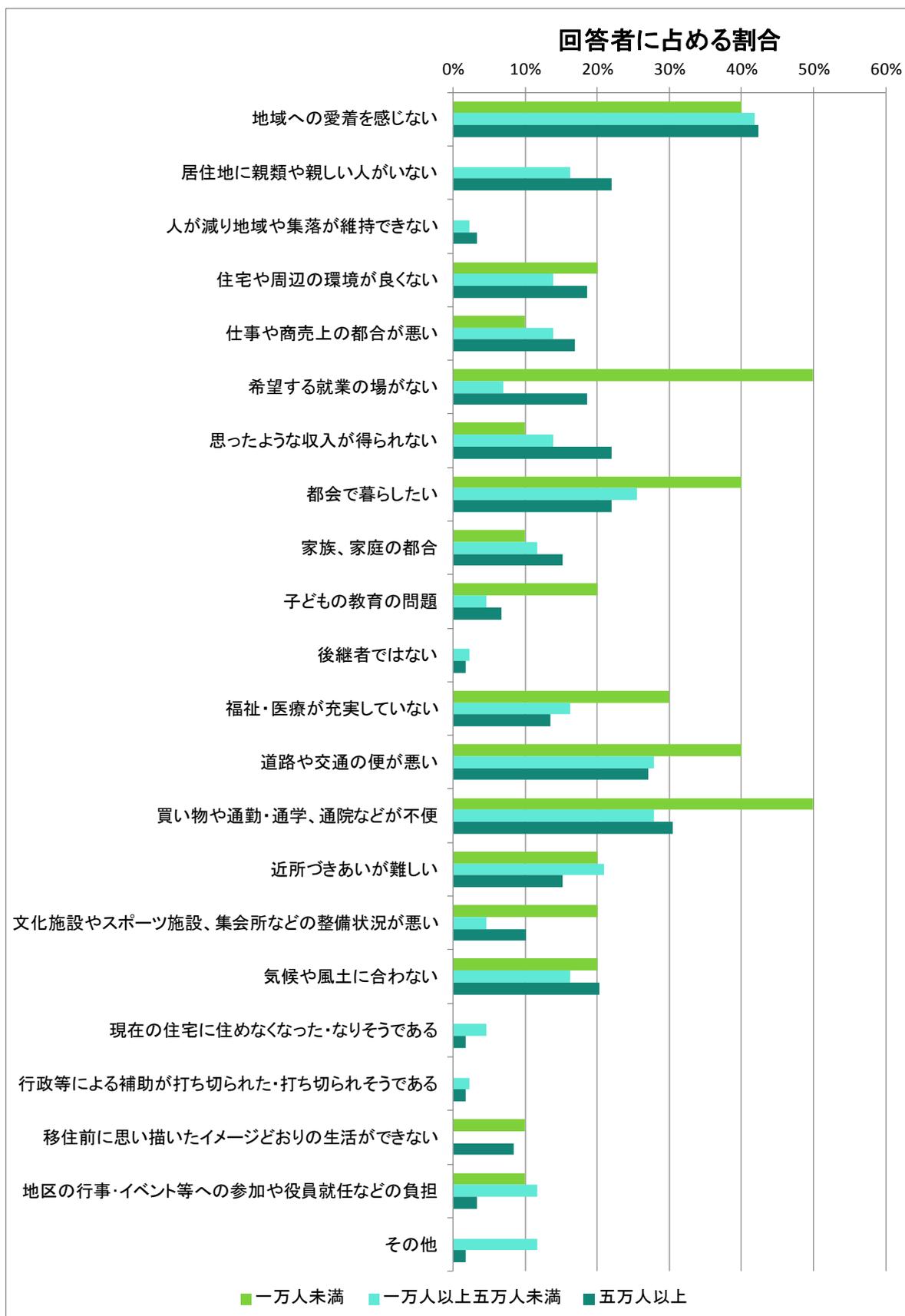
N=40, 13, 18, 3, 19, 9, 3, 7

図 3-67. 転出を希望する理由と家族構成の関係 (複数回答)



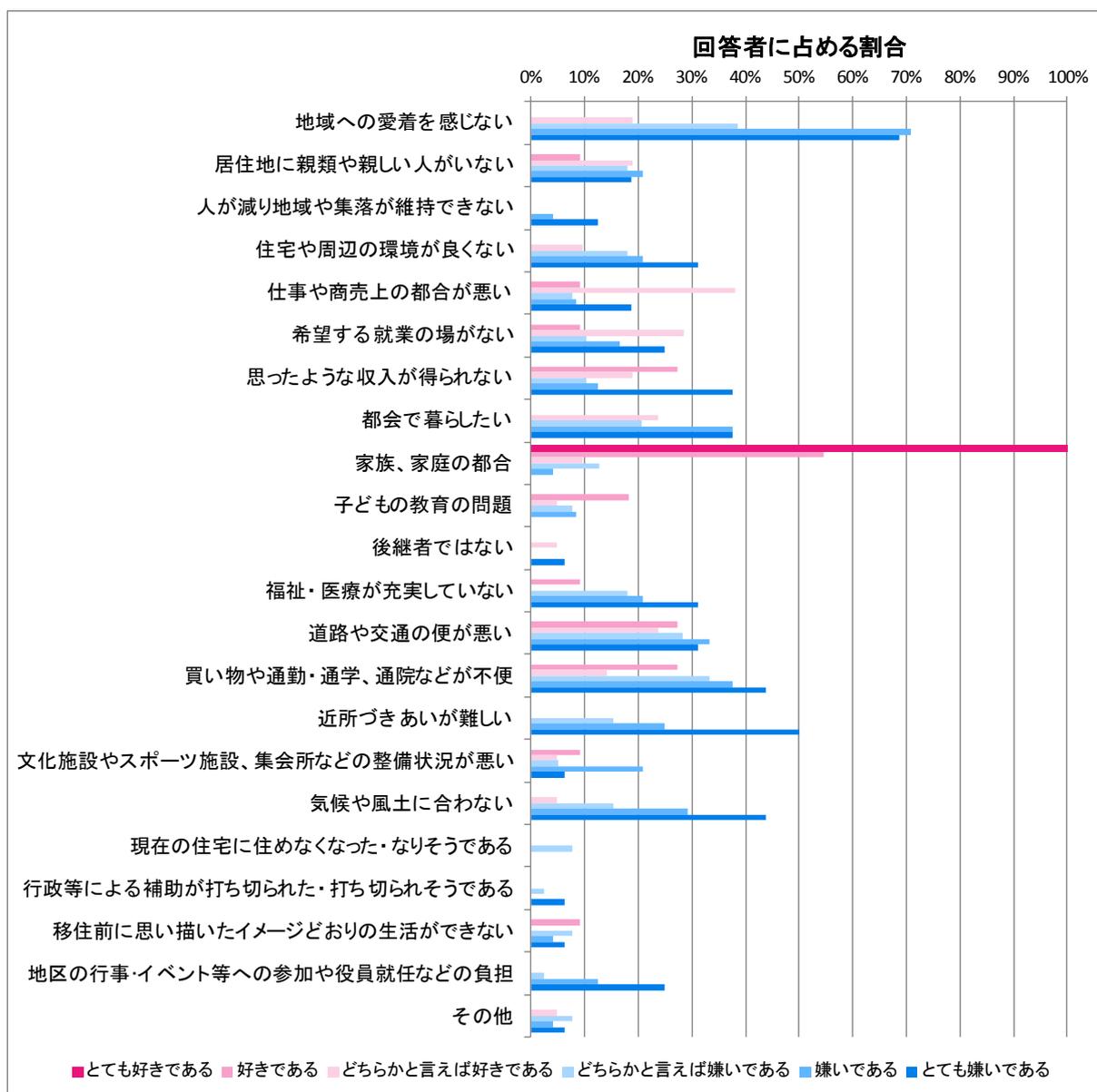
N=16, 14, 11, 10, 5, 5, 5, 3, 13, 5, 24, 1

図 3-68. 転出を希望する理由と現住地の関係（複数回答）



N=10, 43, 59

図 3-69. 転出を希望する理由と現住地の人口規模の関係（複数回答）



N=1, 11, 21, 39, 24, 16

図 3-70. 転出を希望する理由と現住地に対する好嫌度の関係（複数回答）

表 3-12. 転入理由と転出を希望する理由の関係（複数回答）

転入理由 \ 転出希望理由	地域への愛着を感じない	居住地に親類や親しい人がいない	人が減り地域や集落が維持できない	住宅や周辺の環境が良い	仕事や商売上の都合が悪い	希望する就業の場がない	思ったような収入が得られない	都会で暮らしたい	家族、家庭の都合	子どもの教育の問題	後継者ではない	福祉・医療が充実していない	道路や交通の便が悪い	買い物や通勤・通学、通院などが不便	近所づきあいが難しい	文化施設やスポーツ施設、集会所などの整備状況が悪い	気候や風土に合わない	現在の住宅にならないうである	行政等による補助が打ち切られたり打ち切られそうである	移住前に思い描いたイメージどおりの生活ができない	地区の行事・イベント等への参加や役員就任などの負担	その他	合計
自分が豊かな自然環境のなかで生活をしかつた	2	0	0	2	2	2	1	1	2	1	0	2	3	2	0	2	0	1	0	0	0	2	10
豊かな自然環境のなかで子育てをしたかった	2	1	0	0	1	2	1	0	1	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
広くて安い住宅・住環境が良かった	1	0	0	0	0	1	0	2	1	1	0	1	2	2	0	1	0	0	0	0	0	1	5
都会のせわしさに嫌気がさした	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	1	0	3
別荘等を持っており生活が気に入った	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
旅行で訪れて気に入った	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	1
テレビや雑誌で紹介されていて気に入った	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
農林漁業に従事したかった	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
自分の地元だから	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
この地の人と結婚(再婚)した	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
地元の維持・発展に貢献したかった	0	0	0	0	2	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
家業継続の必要性	2	0	0	1	0	2	2	1	0	0	0	1	1	1	3	1	1	0	0	1	0	1	4
親・親類の介護が必要だったから	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	3
親元で暮らしたかった	5	3	3	4	6	8	8	5	1	1	0	4	9	9	3	2	4	1	2	2	2	1	15
定年退職に伴い	1	1	0	2	2	1	1	1	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	2
配偶者の地元で暮らしたかった	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
卒業を機に	2	1	0	1	1	1	1	1	2	2	0	2	3	3	3	0	2	0	0	1	1	1	9
親類や、気にかかる親しい人がいる	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	0	0	1	0	1
この地で就職(転職)した	7	5	1	6	3	3	3	4	1	1	0	3	6	7	2	2	4	1	0	1	1	1	12
就業(学)地の近くに住みたかった	1	2	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	4
地域や集落がしっかりしている	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1
近所づきあいがしやすい	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
周辺の環境が良い	1	0	0	0	1	2	1	0	2	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4
仕事や商売上の都合が良い、就業の場がある	2	0	0	1	0	0	0	2	2	1	1	1	2	3	0	0	1	1	0	0	0	0	5
福祉・医療が充実している	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
道路や交通の便が良い	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
買い物や通勤・通学、通院などが便利	0	1	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3
文化施設やスポーツ施設、集会所などの整備状況が良い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
家族がこの地に転職・転業・就職	5	2	0	2	2	1	1	2	1	0	0	2	4	4	1	1	1	0	0	1	0	0	9
勤め先での配置転換	2	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0	0	2	1	1	0	2	0	0	0	0	0	6
仕事内容に不満があり転職したかった	2	0	0	2	3	2	2	1	0	0	1	0	2	1	2	0	0	0	0	0	1	1	6
思うような職業につけなかった	0	0	0	0	2	2	3	0	1	0	0	0	2	1	1	0	1	0	0	1	0	0	4
リストラ等の就業の変化	0	0	0	0	2	1	2	0	1	0	0	0	1	3	1	0	1	0	0	0	0	0	4
技術を活かすため起業・創業したかった	2	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3
会社の人間関係に苦苦労が多かった	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2
前の住宅や、前の居住地の住環境に問題があった	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	2
自分の家庭環境の変化	7	2	0	1	2	3	1	4	1	2	0	1	2	1	1	1	3	0	0	0	1	1	13
家族の決断・意向に従った	4	1	0	2	2	1	1	2	1	0	0	2	2	1	1	1	1	1	0	0	1	1	8
自分や家族の健康問題	5	2	1	2	1	1	2	1	0	0	0	2	4	5	2	1	0	0	1	2	1	0	7
転入に対する支援の仕組みが充実しているから	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
その他	1	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	4

N=112

(7) 永住意思（子や孫にも現住地に住み続けて欲しいか）

永住意思（子や孫にも現住地に住み続けて欲しいか）を図 3-71 に示す。子や孫はいないという回答を除いて 3 つに分類すると、「住み続けて欲しい」傾向の回答が 50%、「住み続けてほしくない」傾向の回答が 18%、「どちらでもよい」という回答が 32%となった。現住地への定住意思を示す回答が 78%であったことと比較すると、子孫への地元志向に対する思いは小さいと言える。

ターン分類と永住意思の関係を図 3-72 に示す。どのターン分類でも概ね同様の割合を示す結果となっているが、県内 U ターンは「住み続けて欲しい」傾向の回答割合が高くなっている。県内 U ターン実施者は、出身地だけでなく前の居住地も、現住地と同じ都道府県内であるため、現住地近隣に居住している期間が他のターン実施者より長いため、このような傾向が見受けられたものと思われる。

ターン時の年齢と永住意思の関係を図 3-73 に示す。39 歳以下の若い頃にターンを実施した人は、子孫にも住み続けて欲しいと回答する割合が 4 割を超えており、40 歳以降にターンを実施した人と比較すると、その割合が高くなっている。定住希望理由とターン時の年齢の関係を図 3-60 で示したが、ここでも若い頃にターンを実施した方のほうが、「地域への愛着がある、先祖代々住んできた土地だから」という理由で定住を希望している人の割合が高く、この理由での定住意思が、子孫への永住意思にも影響を与えている可能性が示唆される。

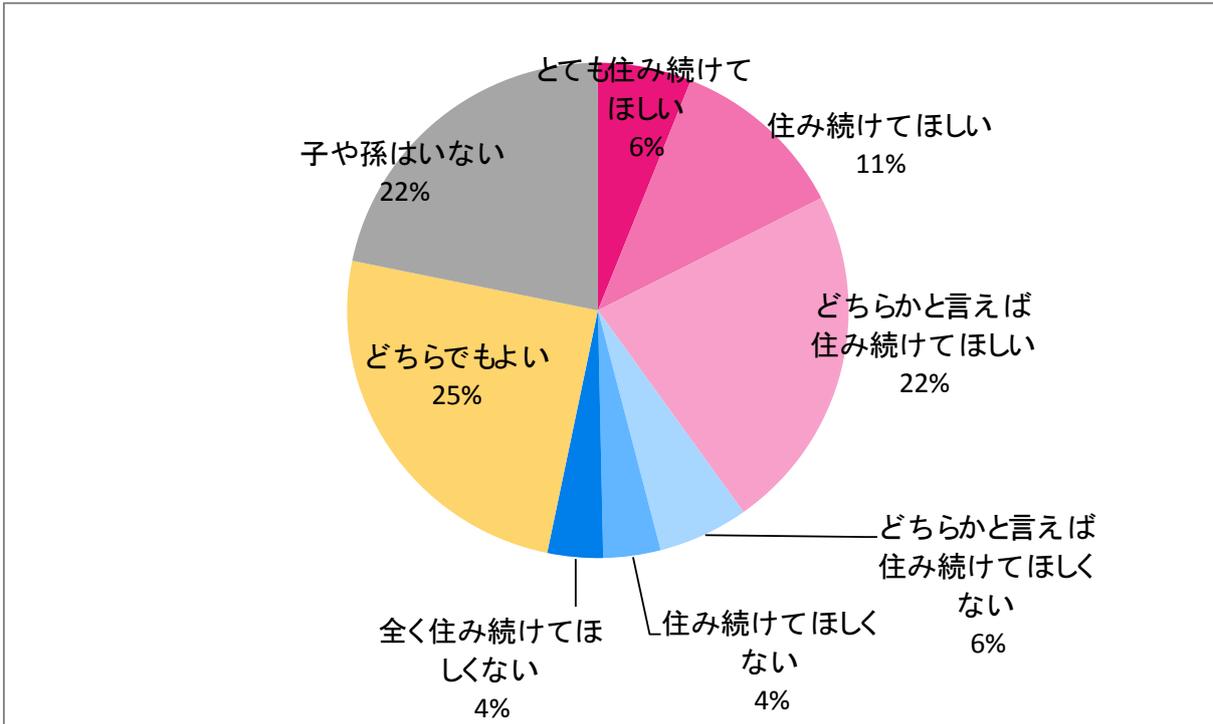
家族構成と永住意思の関係を図 3-74 に示す。「子や孫はいない」という回答を除いて考えると、家族構成の違いによる永住意思の程度に、差は認められなかった。

現住地と永住意思の関係を図 3-75 に示す。子孫にも住み続けて欲しい傾向が高いのは沖縄であり、逆に低いのは北海道や山陽地方となっている。この傾向は、図 3-54 で示した現住地と定住意思の関係と同様の傾向を示している。

現住地の人口規模と永住意思の関係を図 3-76 を示す。現住地の人口規模が小さいほど、子孫に住み続けてほしくないと回答する方の割合が大きいことがわかる。人口規模の小さい地域では、図 3-69 や図 3-70 で示したように、生活環境や就業環境に対して不満を持つ方が多く、これら生活の不便さによって、「住み続けてほしくない」傾向の回答割合が大きくなったものと考えられる。

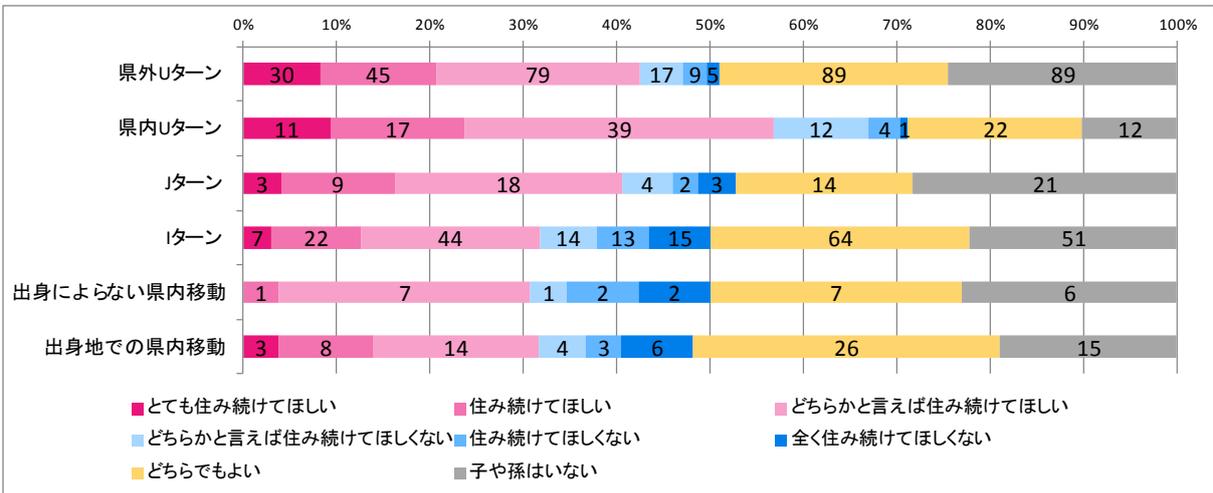
現住地に対する好嫌度と永住意思の関係を図 3-77 に示す。図 3-56 で示した現住地に対する好嫌度と定住意思の関係と同様に、好嫌度は永住意思とも明確に関連性が認められる。ただし、現住地が好きであっても、永住意思に関しては「わからない」と答えている場合が多く、この結果からは、子孫のことは子孫で決めて欲しいといった感情が伺える。ただし、現住地が嫌いな人では「わからない」という回答は少なくなり、子や孫には住み続けてほしくないと答えている割合が高くなっている。

定住意思と永住意思の関係を図 3-78 に示す。子や孫に対して「とても住み続けて欲しい」と答えている 54 名のうち 49 名が、定住意思についても「ずっと住み続けたい」という最も定住志向の高い選択肢を選んでいる。また、自分は定住の意思があるにも関わらず、子孫には住み続けてほしくないと回答している方や、その逆で、自分には転出意思があるにも関わらず、子孫には住み続けて欲しいと回答している方も散見された。



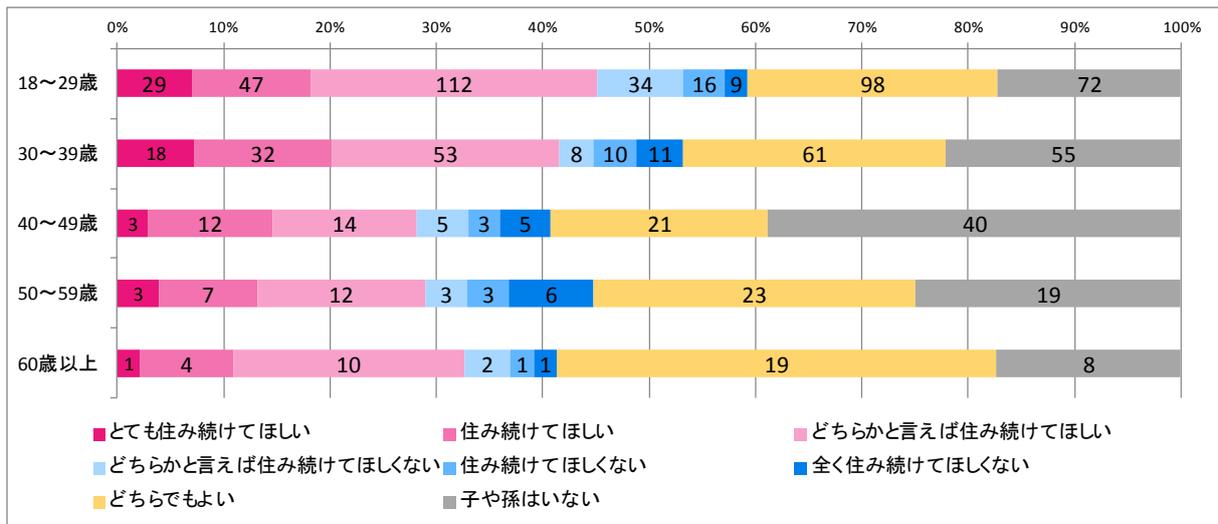
N=890

図 3-71. 永住意思（子や孫にも現住地に住み続けて欲しいか）



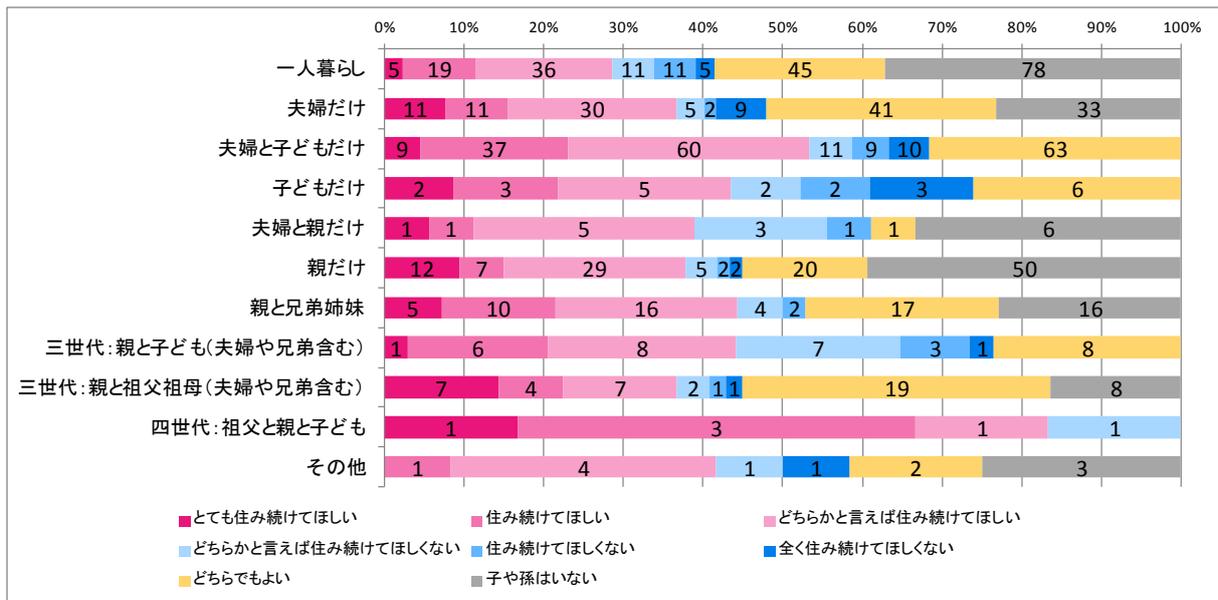
N=890

図 3-72. ターン分類と永住意思の関係



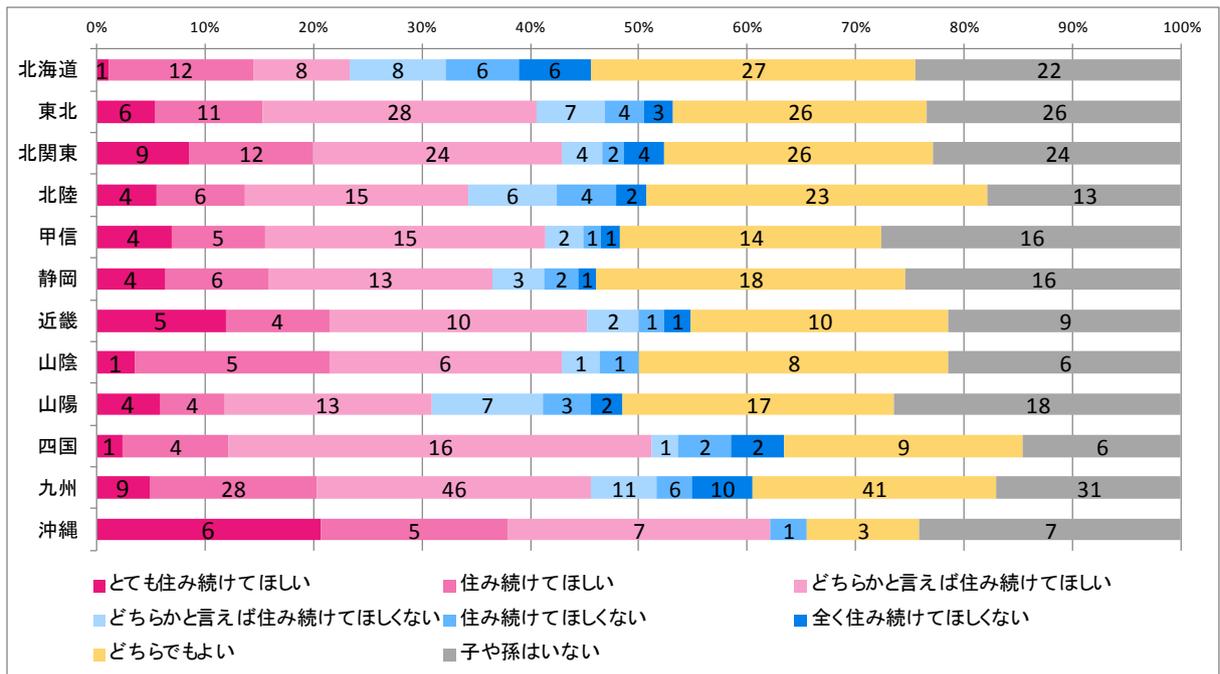
N=890

図 3-73. ターン時の年齢と永住意思の関係



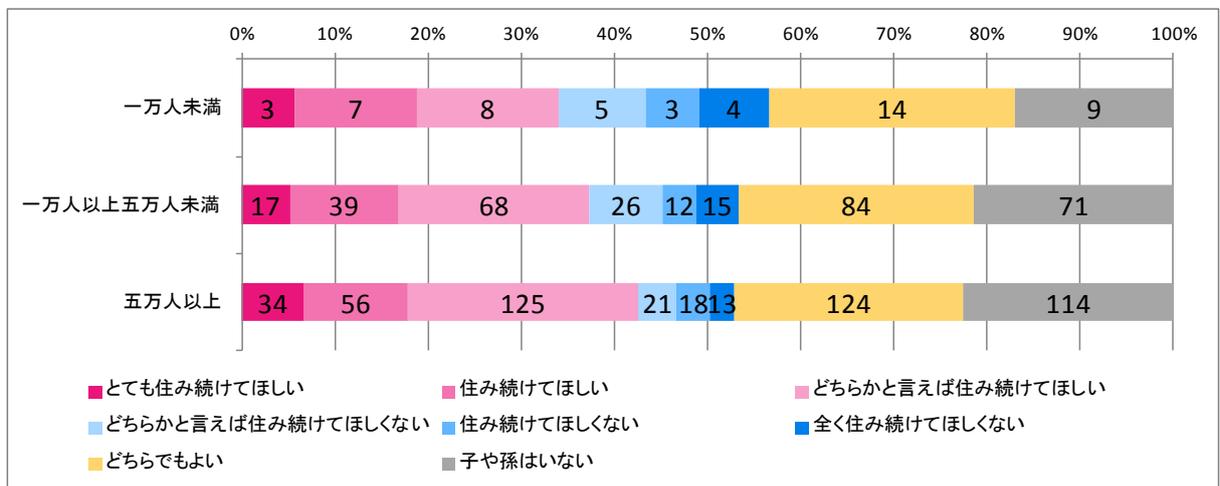
N=890

図 3-74. 家族構成と永住意思の関係



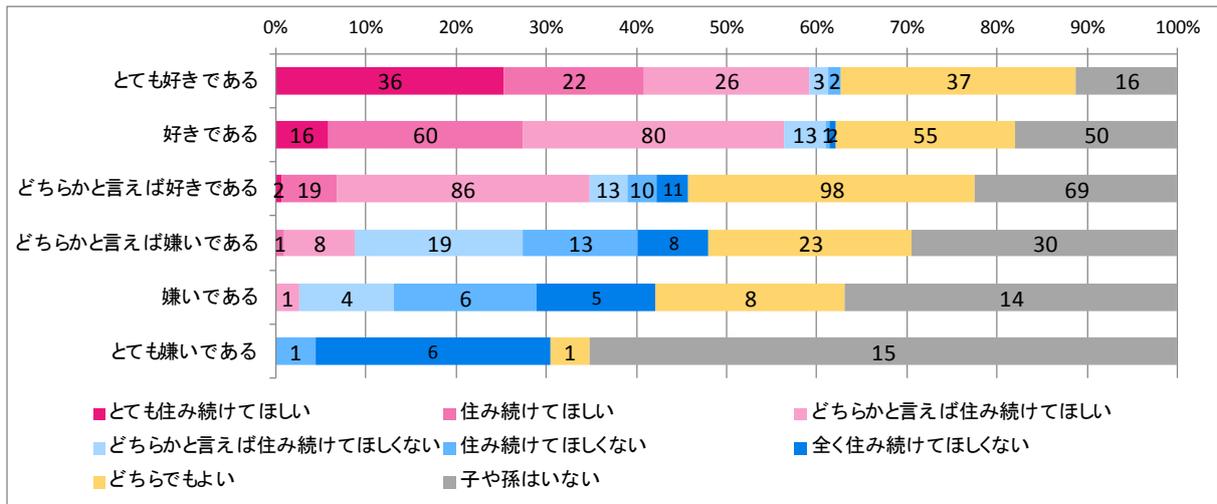
N=890

図 3-75. 現住地と永住意思の関係



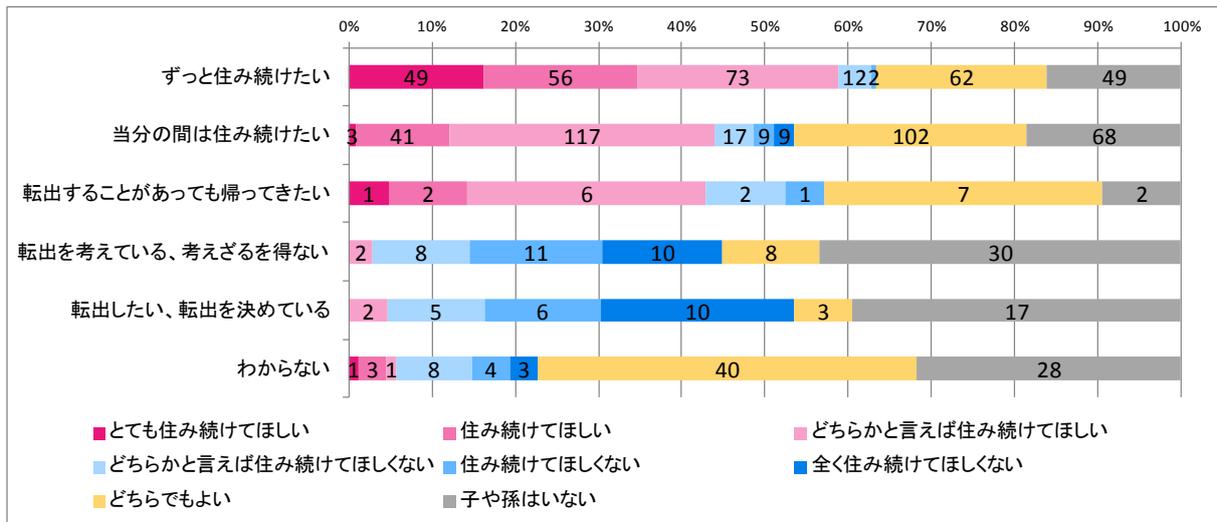
N=890

図 3-76. 現住地の人口規模と永住意思の関係



N=890

図 3-77. 現住地に対する好嫌度と永住意思の関係



N=890

図 3-78. 定住意思と永住意思の関係

(8) ターンの満足度

ターンの満足度を図 3-79 に示す。2 つに分類すると、「どちらかと言えば満足」以上（満足傾向）が 79%、「どちらかと言えば不満」以下（不満傾向）は 21%になった。図 3-43 で示した「現住地に対する好嫌度」と、6 段階の内訳も含め、ほとんど同様の傾向であった。

ターン分類とターン満足度の関係を図 3-80 に示す。「出身によらない県内移動」を実施した方に「とても満足」「とても不満」といった極端な回答を行った人が特に少なかったことを除けば、ターン分類の違いによるターン満足度に差はほとんど認められなかった。なお、この傾向は図 3-44 で示したターン分類と現住地に対する好嫌度の関係と、ほとんど同様の傾向であった。

ターン時の年齢とターン満足度の関係を図 3-81 に示す。49 歳以下にターンを実施した人は、ターン時の年齢の増加に伴って、ターンに対して不満傾向である割合が高くなっている。特に、40～49 歳のときにターンを実施した人のうち、およそ 3 割が不満傾向の回答を行っている。その一方、ターン時の年齢が 50 歳を超えると、不満傾向の回答を行っている人の割合は減少し、特に 60 歳以上では、「とても満足」の割合も 2 割程度まで増加する。高齢になってからターンを実施した人の方が、ターンに対して満足である割合が高い。なお、この傾向は図 3-45 で示したターン時の年齢の現住地に対する好嫌度の関係と、ほとんど同様の傾向であった。

家族構成とターン満足度の関係を図 3-82 に示す。ターン満足度は現住地に対する好嫌度と同様の傾向を示していることが多かったが、家族構成については、図 3-46 で示した結果とは異なり、配偶者の有無によって違いが認められるということとはなかった。ただし、四世代世帯については不満傾向の回答がなく、三世代（親と祖父祖母）世帯については不満傾向の回答が最も多いなど、一部については同様な傾向も見受けられた。

現住地とターン満足度の関係を図 3-83 に示す。沖縄へのターンを除けば、どの地域でも「とても満足」の回答割合が 1 割前後であるのに対し、沖縄はその割合が 4 割弱にも上っている。図 3-47 で示した現住地との関係と同様に、現住地に対する好嫌度については、ターン満足度についてもほとんど同様の傾向が見受けられた。

現住地の人口規模とターン満足度の関係を図 3-84 に示す。現住地の人口規模の違いによるターン満足度に差は認められなかった。

現住地に対する好嫌度とターン満足度の関係を図 3-85 に示す。グラフから見ても明らかのように、二つの指標には強い関連が認められる。特に、「どちらかと言えば好きである」と回答した人のうち、ターン満足度については満足傾向の人が 8 割を超え、「どちらかと言えば嫌いである」と回答した人のうち、ターン満足度については不満傾向の人が 8 割弱いることから、これら回答の間に、明確な意識の差があることがわかる。

定住意思とターン満足度の関係を図 3-86 に示す。定住意思について、定住志向を持っている方では、ターン満足度についても 8 割以上が満足傾向の回答をしているのに対し、転出志向を持っている方では、満足の割合は 3 割に留まっている。ターンに満足しているにもかかわらず転出志向を持っている方は、転出を希望する理由（図 3-64）が「家族、家庭の都合」など、やむを得ない事情による場合であると考えられる。また、ターン満足度が「とても不満」「不満」と回答した人のほとんどが、転出志向を持っていることから、ターン満足度と定住意思には強い関連が認められる。

永住意思とターン満足度の関係を図 3-87 に示す。グラフからも明らかなように、二つの項目には強い関連が認められる。永住意思について「どちらでもよい」と回答した方では、「住み続けてほしくない」傾向の回答をした方と比較すると、不満傾向（特に「とても不満」「不満」）の回答の割合が小さい。「どちらでもよい」と回答しているとはいえ、現住地が嫌い、もしくはターンに不満を持っている方は、子や孫に対しても住み続けてほしくないと思っている人が多い。

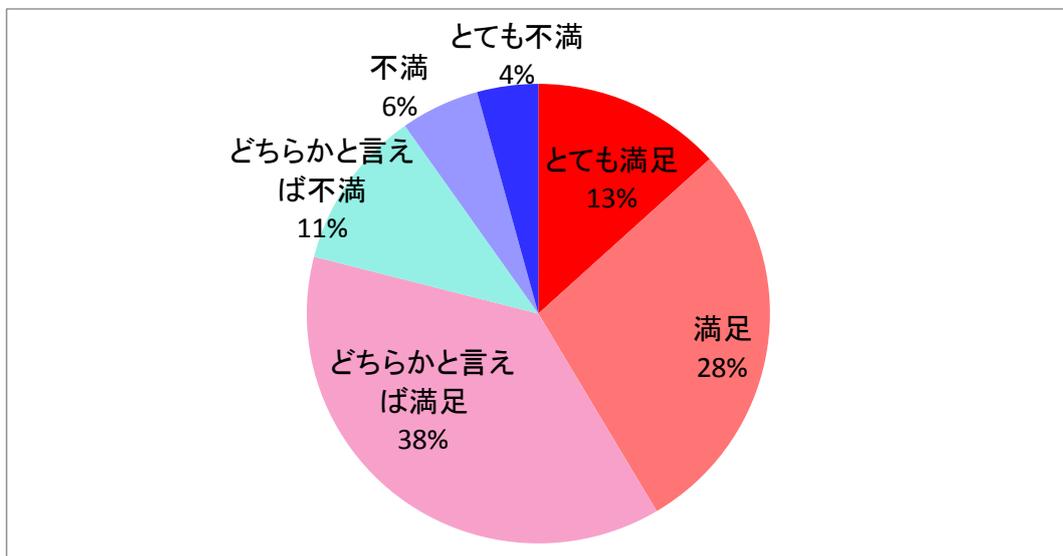
転入理由とターン満足度の関係を図 3-88 に示す。「自分が豊かな自然環境のなかで生活をしたかった」「都会のせわしさに嫌気がさした」など自然環境を求めて転入した方や、「周辺環境が良い」「道路や交通の便がよい」など生活環境を求めて転入した方は、満足傾向の回答の割合が高い。その一方で、「親・親類の介護が必要だったから」「家族がこの地に転職・転業・就職」「自分や家族の健康問題」など、自発的にターン先となる現住地を決めていない人は、不満傾向な回答の割合が高い。なお、満足度の高い方では「親元で暮らしたかった」ことを理由に転入してきている人がある程度いるものの、不満に思う人の割合も高くなっている。自発的にターン先を決めていない人は不満傾向にある割合が大きいという結果は、図 3-57 で示した転入理由と定住意思の関係と同様の傾向を示している。

「親のことが気にかかるから」を出身の近隣へのターンの理由の一つとして回答した 238 サンプルのターン満足度の分布を図 3-89 に示す。「親のことが気にかかるから」という理由で出身近隣へのターンを実施した人のターン満足度は、ターン実施者全体のターン満足度と比較しても、顕著な傾向の違いは見受けられなかった。

定住を希望する理由とターン満足度の関係を図 3-90 に示す。定住を希望しているターン実施者のみの回答をグラフ化しているため、基本的には満足傾向の回答が多くを占めている。ただし、不満傾向の割合が高い選択肢もあり「他に行くところが無い、仕方ない」という回答以外では、「自宅や土地がある」という回答の割合が高くなっている。なお、この選択肢はターンに対して「とても満足」している人が定住を希望する理由として最も多くあげた理由でもあるが、不満傾向の回答割合も多くなっている。この傾向は図 3-63 で示した定住を希望する理由と現住地に対する好嫌度関係と同様の傾向を示しており、ターンが不満であっても定住しなければならないという「イエ」的動機に縛られている回答者がいることによるものと思われる。また、満足度が高い方の選択割合が大きい項目に目を向けると、「地域への愛着がある、先祖代々住んできた土地だから」「自然環境に親しみを感じている」「気候や風土に合っている」などが該当した。定住を促進するためには、生活環境や利便性なども大事であるが、如何にその地域に「親しみ」を持ってもらうか、その方策を考えることも重要であると考えられる。

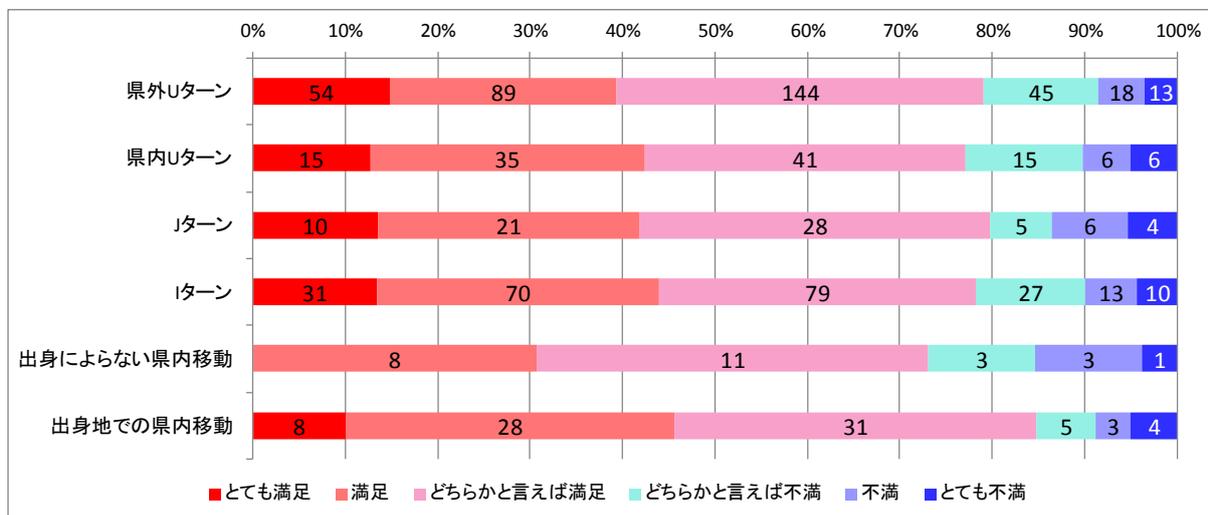
転出を希望する理由とターン満足度の関係を図 3-91 に示す。ターン自体には満足をしている人であっても、転出を希望している人は少なくない。「家族、家庭の都合」のようなやむを得ない理由によるものを除けば、現住地に対して不満に思っており転出を希望している人のうちおよそ半数が、「仕事や商売上の都合が悪い」「思ったような収入が得られない」「道路や交通の便が悪い」「買い物や通勤・通学、通院などが不便」など、就業環境、福祉や医療、道路交通、買い物などに対して不便を感じていることから、転出を希望している。これらの回答者は、ターン自体には満足をしていることから、就業環境や生活環境などが改善されれば、定住を希望するものと考えられる。これら要素を改善するような政策をとることで、一度転入してきた人口の流出防止に寄

与するものと思われる。



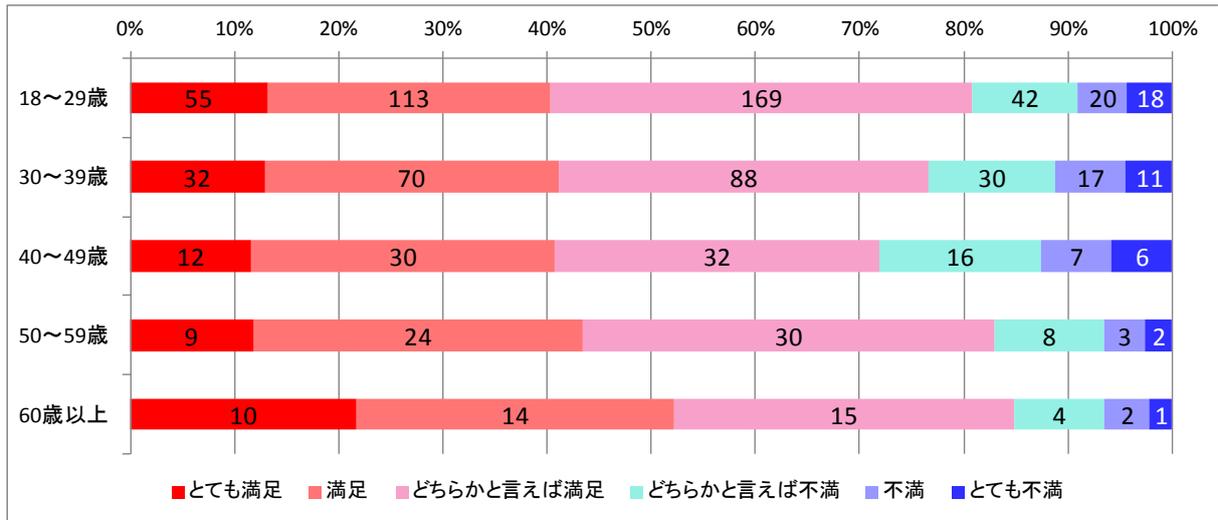
N=890

図 3-79. ターンの満足度



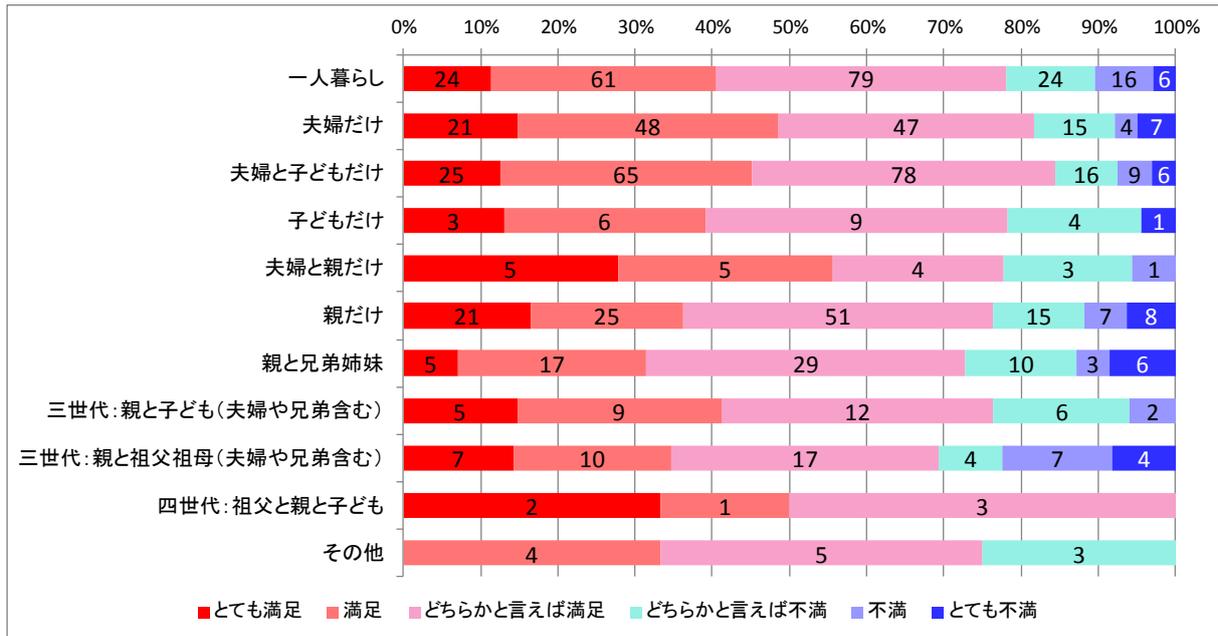
N=890

図 3-80. ターン分類とターン満足度の関係



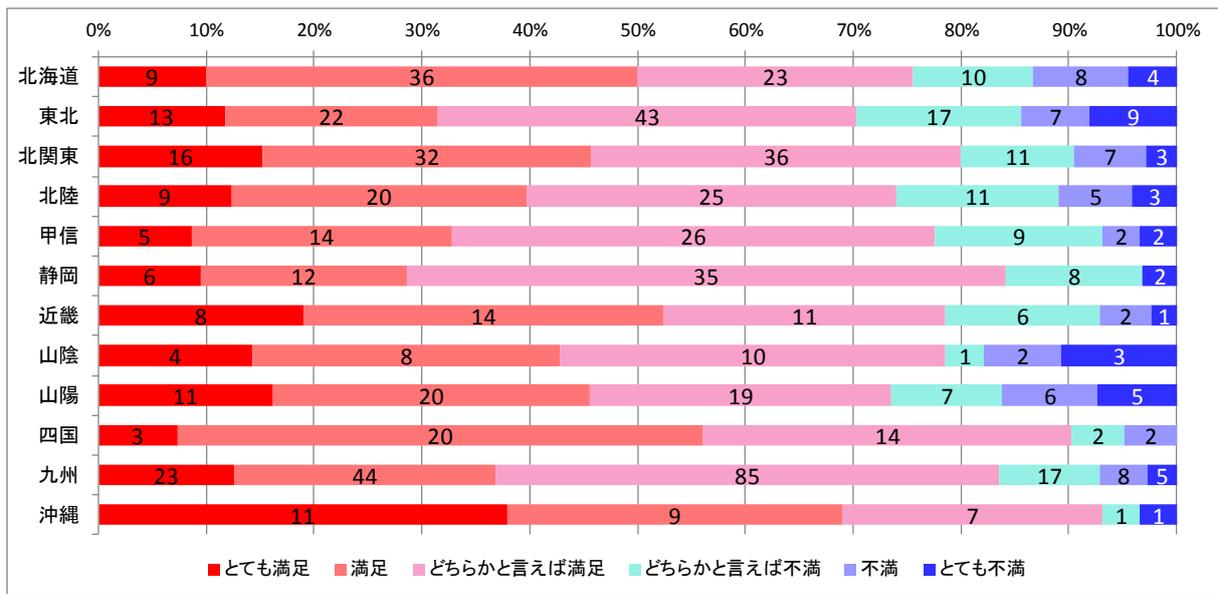
N=890

図 3-81. ターン時の年齢とターン満足度の関係



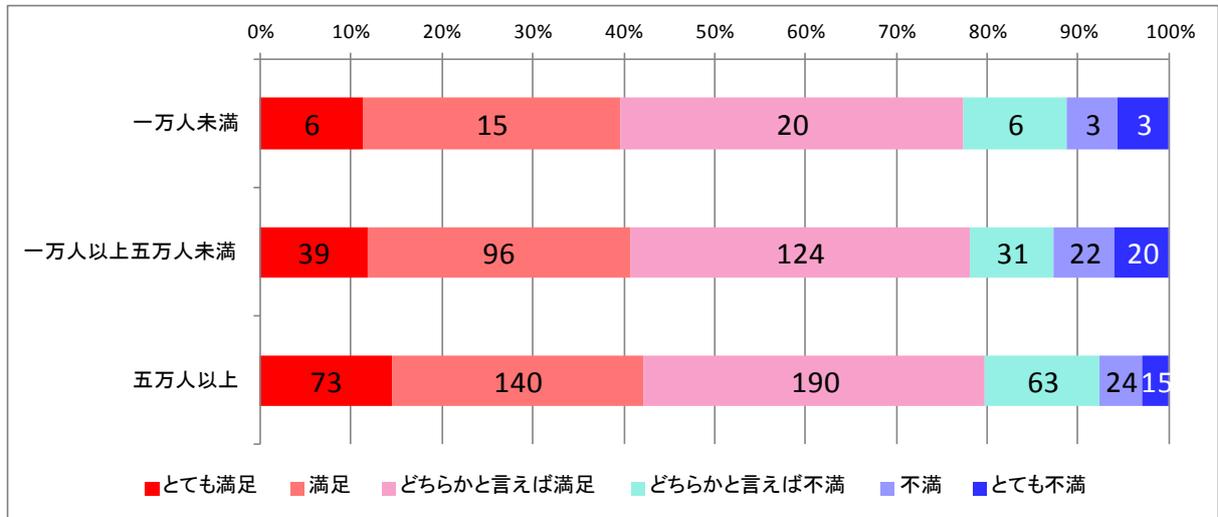
N=890

図 3-82. 家族構成とターン満足度の関係



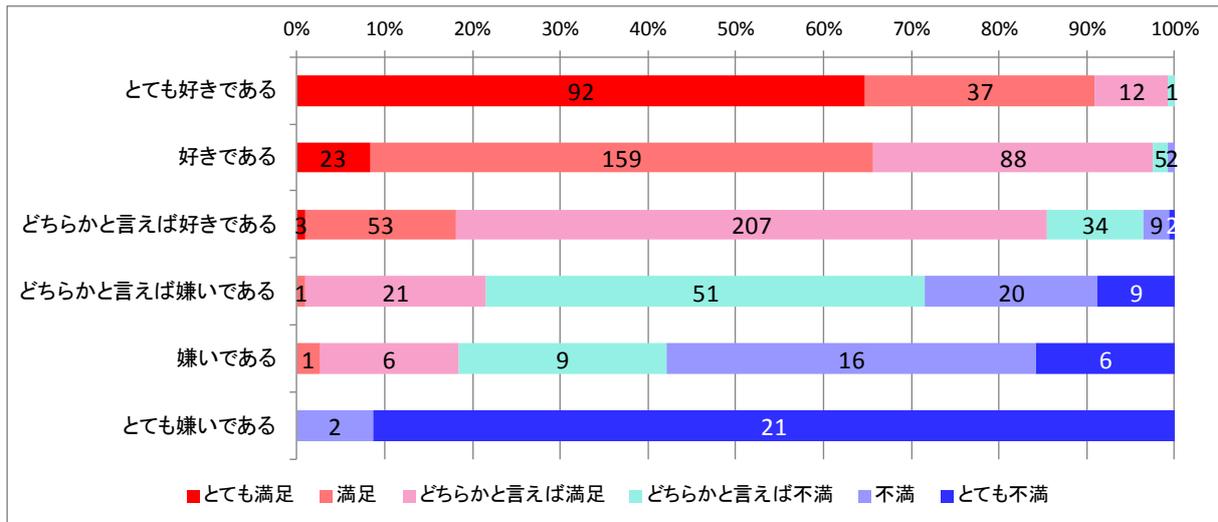
N=890

図 3-83. 現住地とターン満足度の関係



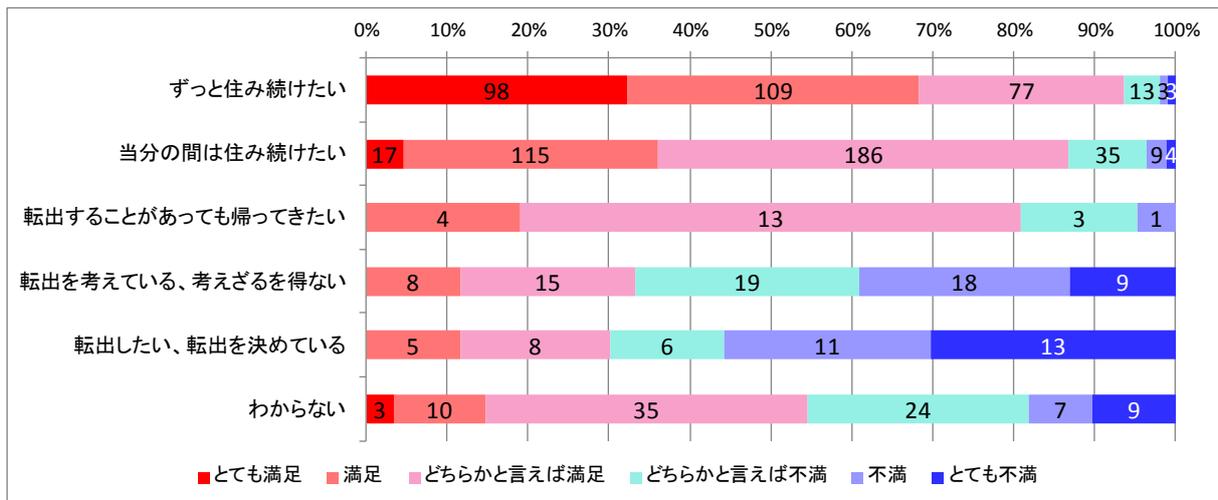
N=890

図 3-84. 現住地の人口規模とターン満足度の関係



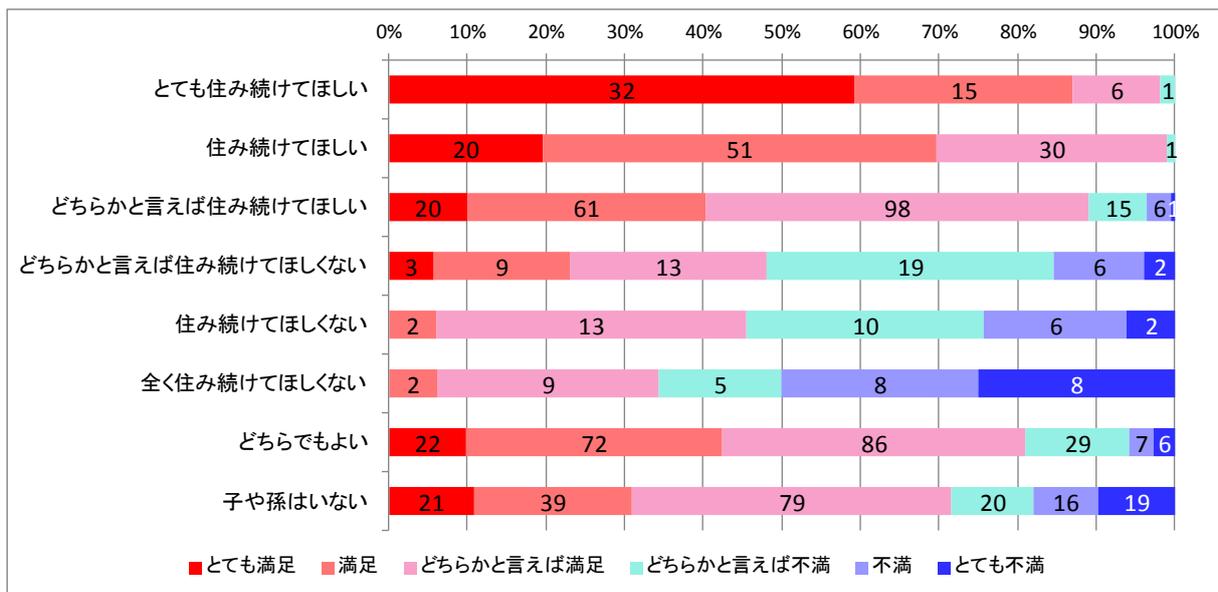
N=890

図 3-85. 現住地に対する好嫌度とターン満足度の関係



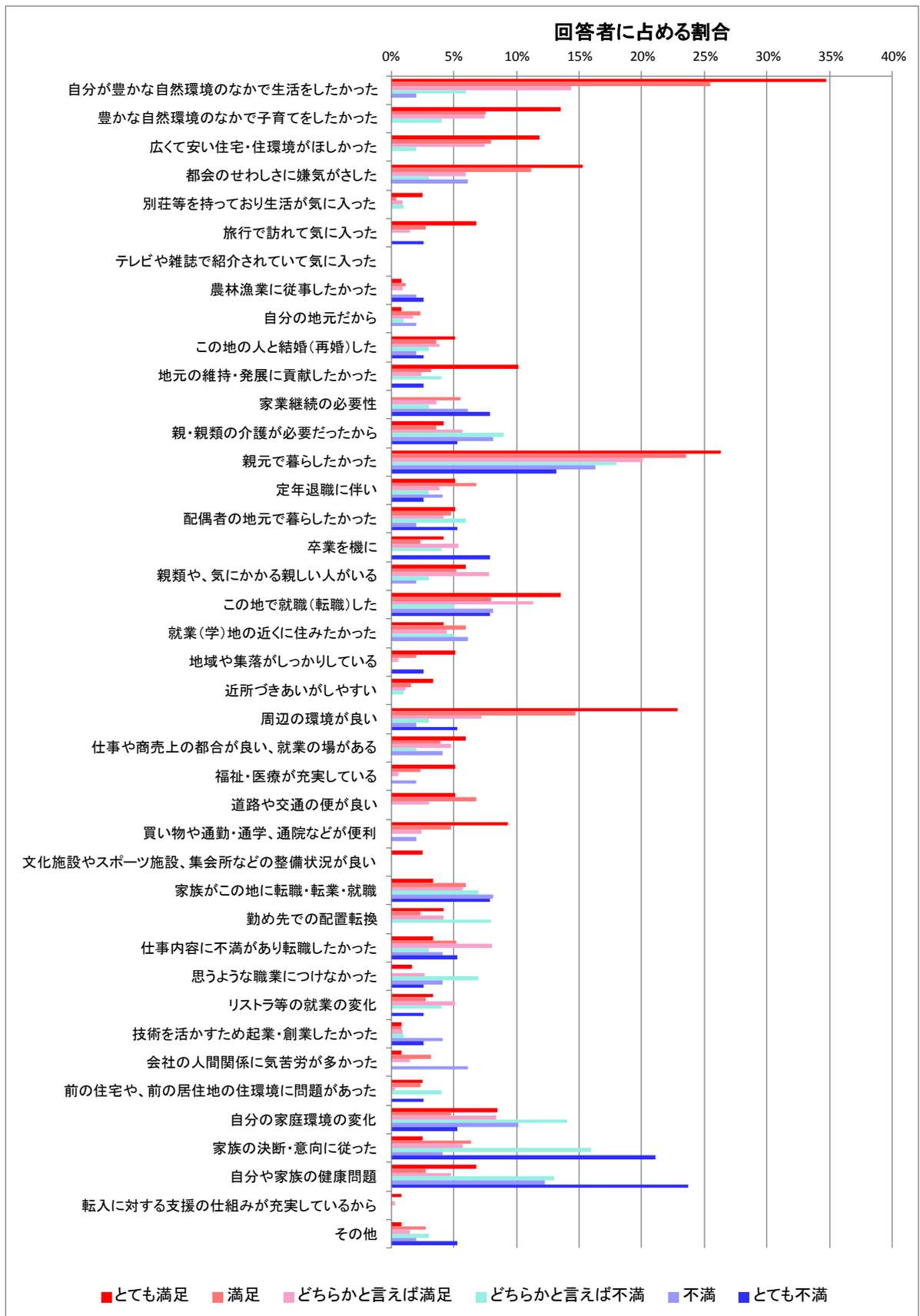
N=890

図 3-86. 定住意思とターン満足度の関係



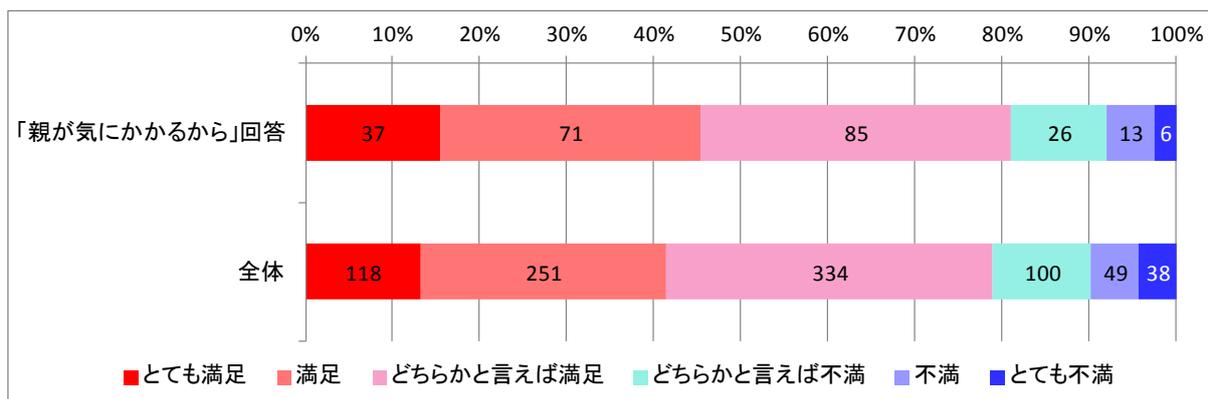
N=890

図 3-87. 永住意思とターン満足度の関係



N=118, 251, 334, 100, 49, 28

図 3-88. 転入理由とターン満足度の関係 (複数回答)



N=238（親が気にかかる），890（全体）

図 3-89. 「親のことが気にかかるから」回答のターン満足度

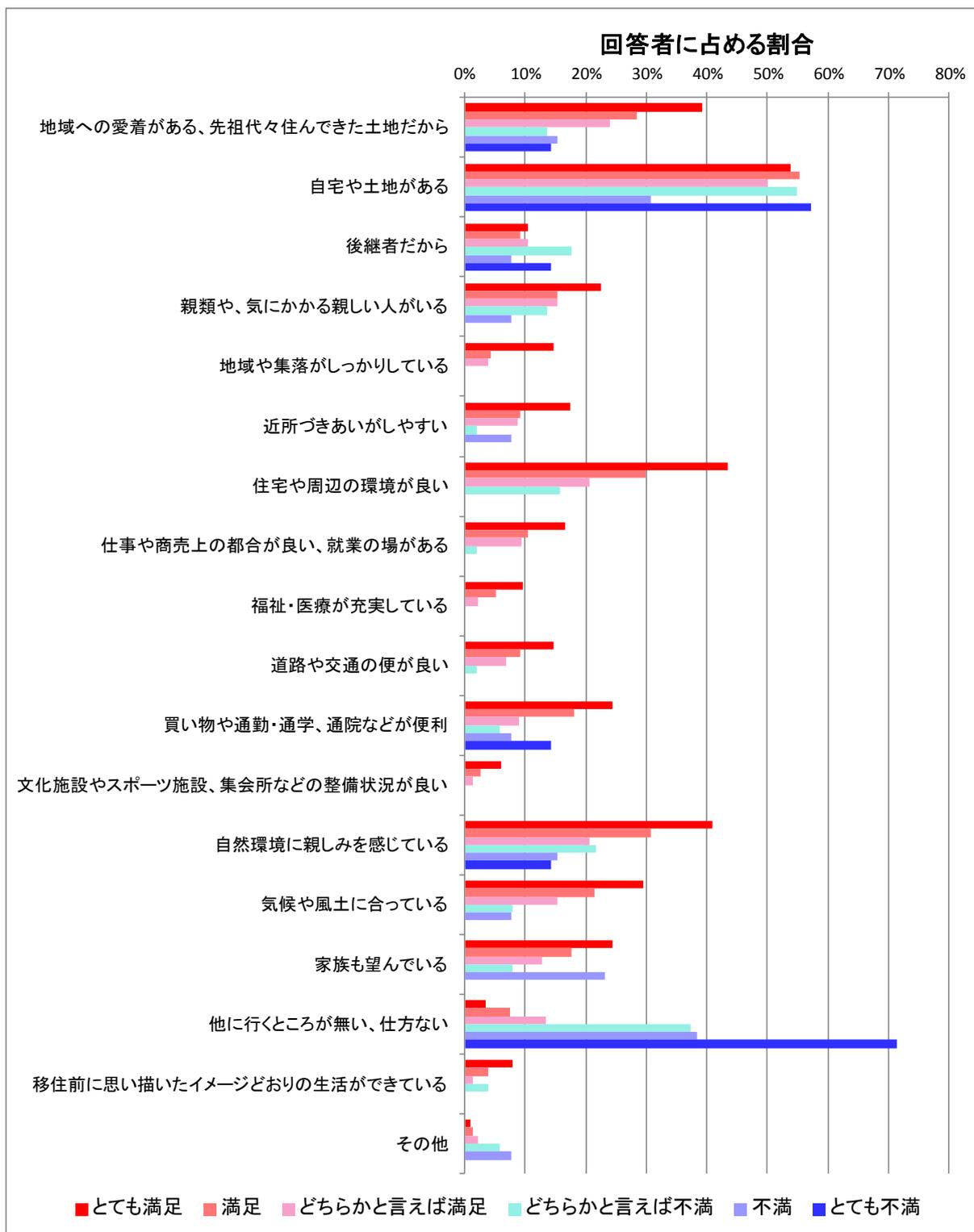
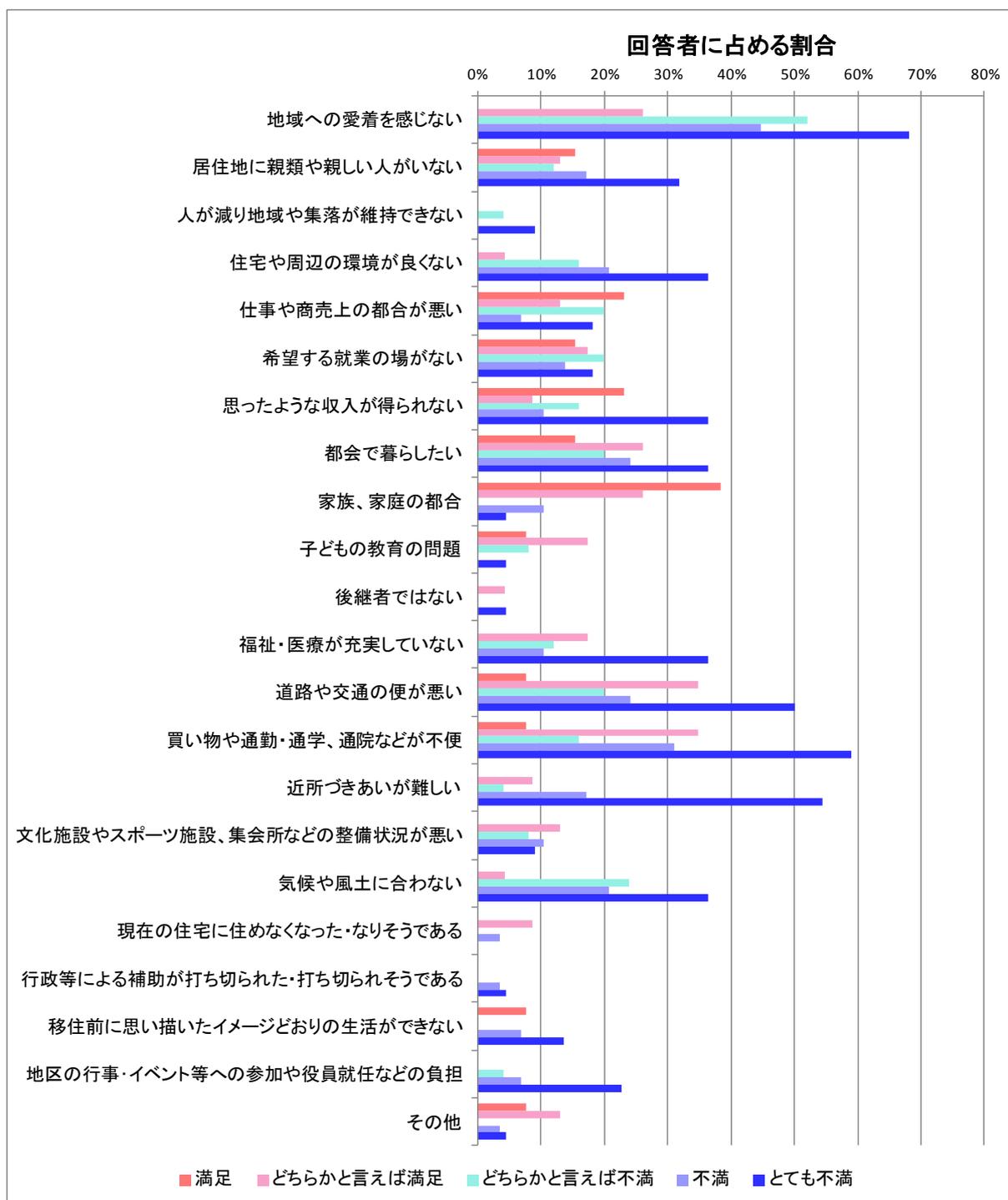


図 3-90. 定住を希望する理由とターン満足度の関係（複数回答）



N=13, 23, 25, 29, 22

図 3-91. 転出を希望する理由とターン満足度の関係（複数回答）

3.7. ターン時に受けた行政サービス・情報入手法等

本節では、回答者がターン実施時に受けた行政サービスや、情報の入手方法などについて報告する。

(1) ターン時に受けた行政サービス補助

転入に際して行政等からサービス補助を受けたか否かとその内訳を図 3-92 に示す。サービス補助は受けていないという回答が大部分を占めたものの、1割の方は何らかの補助を受けていた。補助を受けたという回答のなかでは、就職支援を受けた方が最も多かったほか、住宅に関する支援を受けた人も 30 人程度いた。

ターン分類と受けたサービス補助の有無の関係を図 3-93 に、ターン時の年齢と受けたサービス補助の有無の関係を図 3-94 に、家族構成と受けたサービス補助の有無の関係を図 3-95 に、現住地と受けたサービス補助の有無の関係を図 3-96 に示す。グラフからも読み取れるように、どの条件においても、何らかの補助を受けたという回答は 1 割程度に留まっており、ターン分類、ターン時の年齢、家族構成、現住地の違いによる受けたサービス補助の有無について、差は認められなかった。

受けたサービス補助の内訳とターン分類の関係を図 3-97 に、受けたサービス補助の内訳とターン時の年齢の関係を図 3-98 に、受けたサービス補助の内訳と家族構成の関係を図 3-99 に、受けたサービス補助の内訳と現住地の関係を図 3-100 に示す。サービス補助の内訳についても、ターン分類、ターン時の年齢、家族構成、現住地の違いによる差は認められなかった。細かく見ると違いはあるものの、いずれも絶対回答数が少ないため、個別事情の域を脱していないと考えられる。

現住地に対する好嫌度と受けたサービス補助の有無の関係を図 3-101 に示す。現住地に対して好きと答えている人ほど、行政などから何らかのサービス補助を受けている割合が高い。また、受けたサービス補助の内訳と好嫌度の関係を図 3-102 に示す。「住宅に関する支援」や「情報収集に関する支援」を受けた人の割合に着目すると、不満傾向の回答を行っている人より、満足傾向の回答を行っている人の割合が明らかに高い。納得した住環境、納得した生活環境を得るための情報などを支援によって得た人は、ターン先が嫌いである割合が小さい。職業に関する支援と比較すると、住環境や情報提供に関する支援は費用対効果が高い支援と考えられる。

定住意思と受けたサービス補助の有無の関係を図 3-103 に示す。回答数の少ない「転出することがあっても帰ってきたい」を除けば、何らかの補助を受けたという回答は 1 割程度に留まっており、定住意思の違いによる受けたサービス補助の有無について、差は認められなかった。

受けたサービス補助の内訳と定住意思の関係を図 3-104 に示す。定住意思を持つ方の半数以上が就職支援を受けている。定住意思を持つ方では、次いで住宅に関する支援を受けている人が多い。その一方で転出志向を持つ方の半数は住宅に関する支援を受けている層であり、この結果は図 3-102 で示した受けたサービス補助の内訳と好嫌度の関係と相反するものであった。

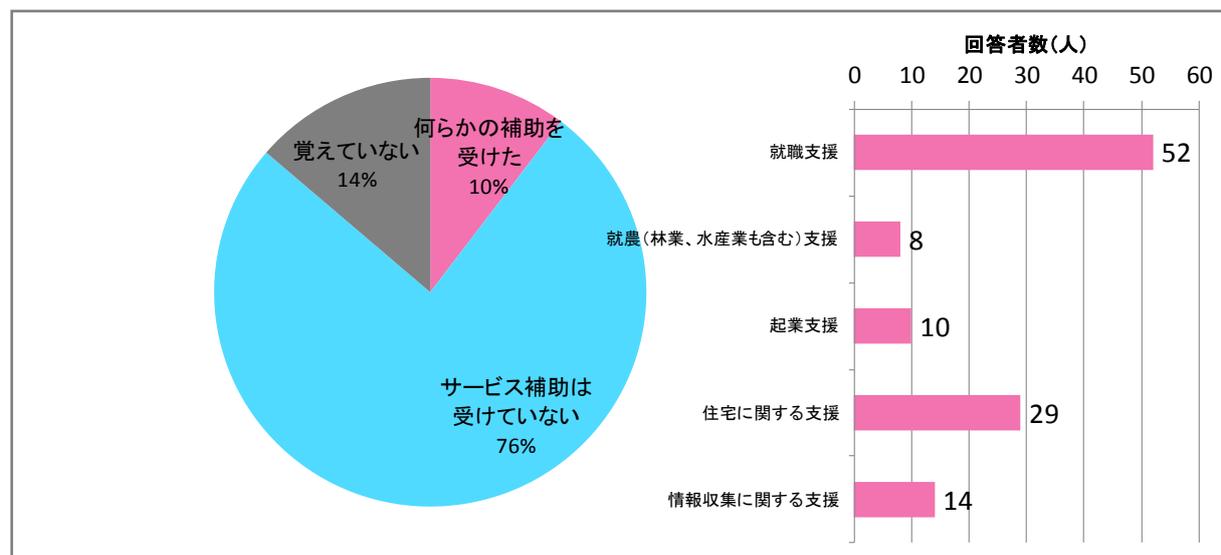
以上の結果を受けて、現住地に対する好嫌度が好き傾向であり、かつ定住意思が転出傾向であるサンプルに着目した。34 サンプルが該当し、そのうち何らかの支援を受けたサンプルが 6 サン

プルあったが、そのうちの全てが住宅に関する支援を受けたサンプルであった。さらに、これら6サンプルの転出を希望する理由について調べたところ、そのうちの4サンプルが「家族、家庭の都合」という理由で転出を希望していた。ただし、「家族、家庭の都合」と「住宅に関する支援」の間に因果関係があるとは思えないので、このような傾向が出たのは、サンプル数が些少であることにより偶然出た結果であると判断できる。

永住意思と受けたサービス補助の有無の関係を図 3-105 に、受けたサービス補助の内訳と永住意思の関係を図 3-106 に示す。永住意思と受けたサービス補助の有無や内訳との関係については、現住地に対する好嫌度や定住意思との関係と同様に、永住意思の違いによる差は認められなかった。

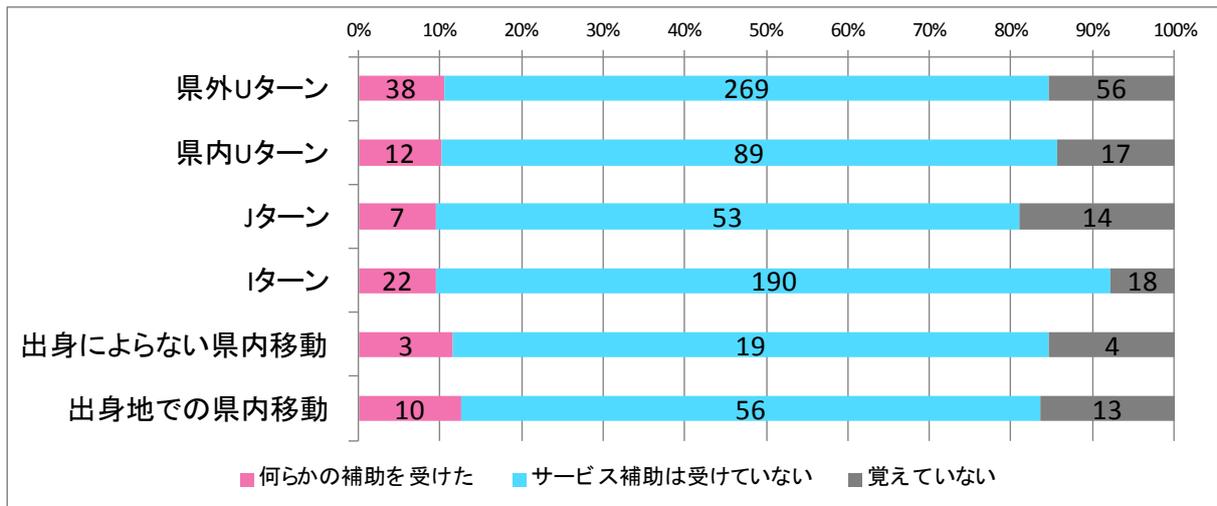
転入理由と受けたサービス補助の有無と内訳の関係を表 3-13 に示す。そもそもサービス補助を受けたという方の絶対数が少ないということもあり、転入理由の違いによる受けたサービス補助に顕著な差は認められなかった。

あれば良いと思う行政等によるサービス補助についての自由回答の抜粋を表 3-14 に示す。不慣れた交通事情に対する支援、育児に関する支援、転入時の引っ越しに対する支援などの回答が多く見られた。



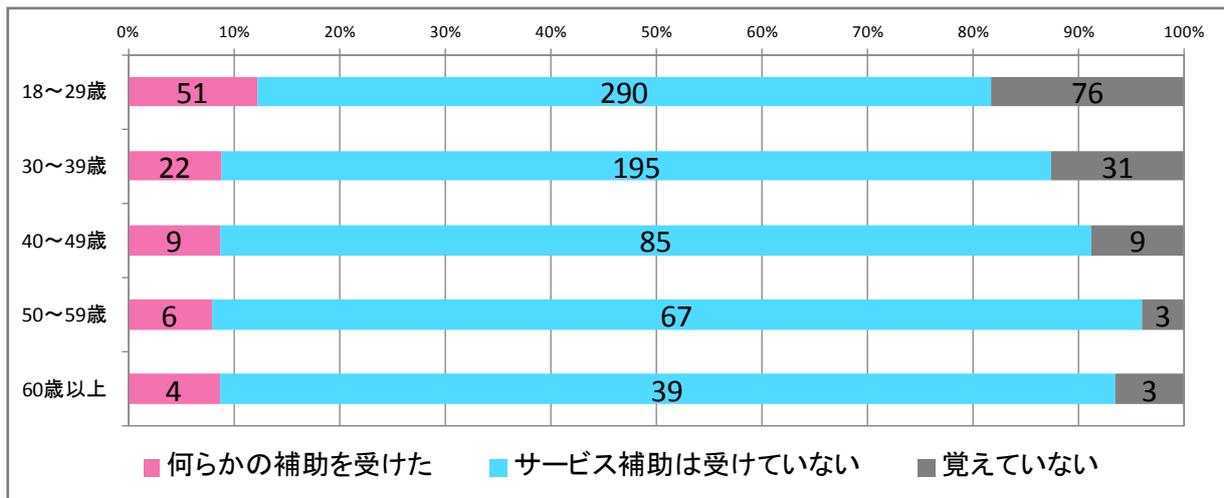
N=890 (全体)、N=92 (内訳)

図 3-92. 転入に際してサービス補助を受けたか否かとその内訳 (複数回答)



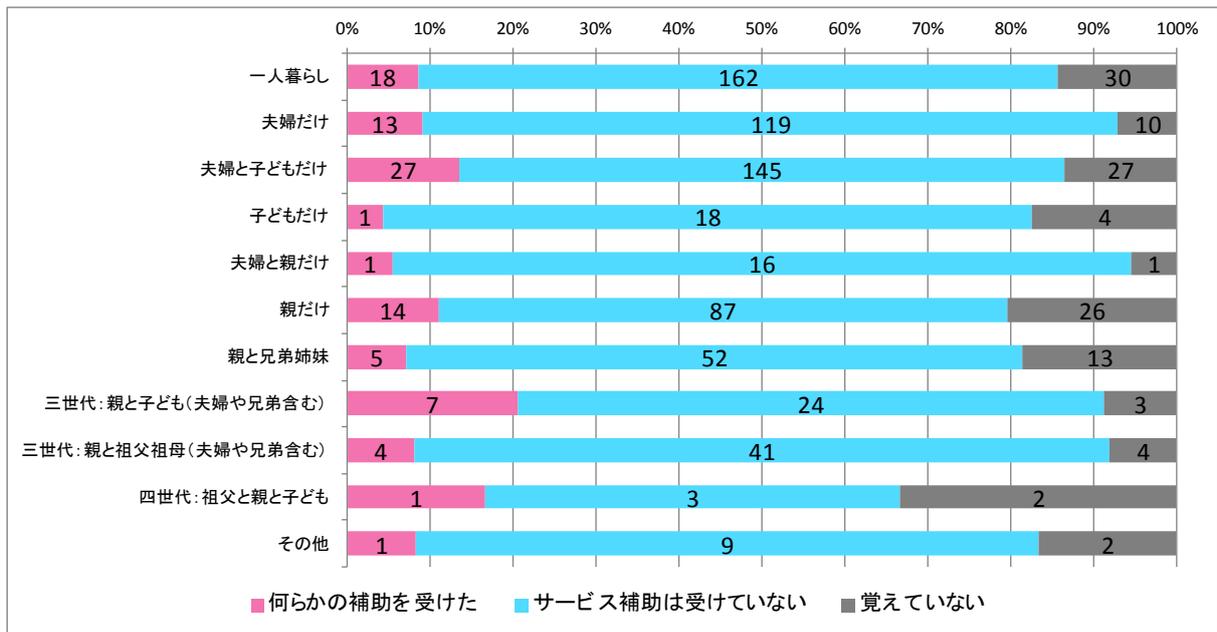
N=890

図 3-93. ターン分類と受けたサービス補助の有無の関係



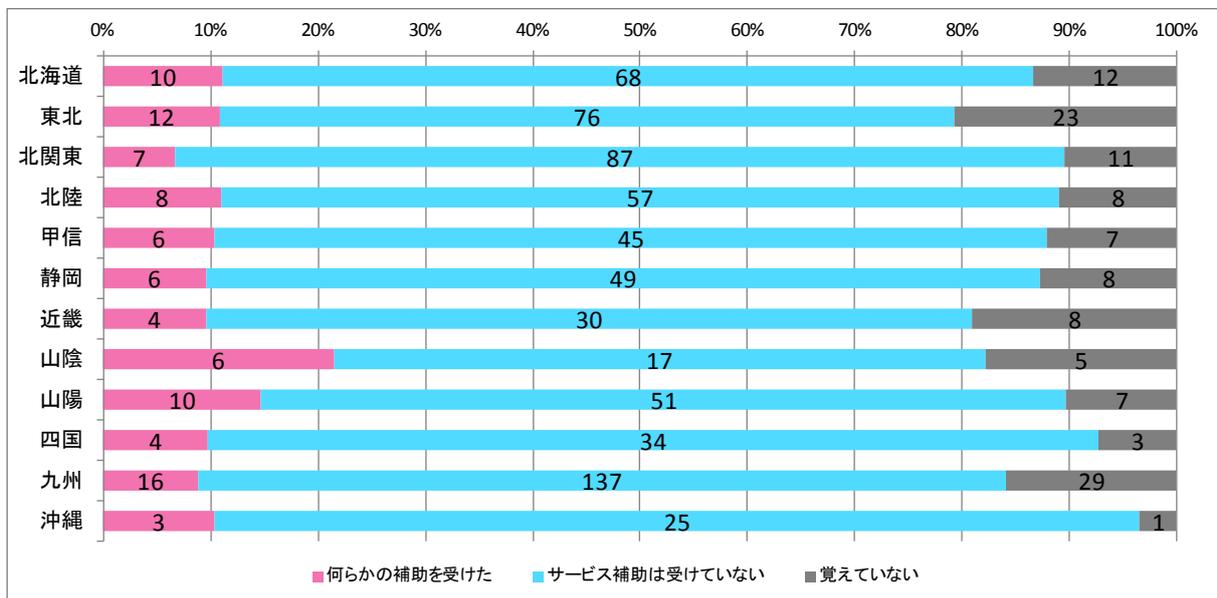
N=890

図 3-94. ターン時の年齢と受けたサービス補助の有無の関係



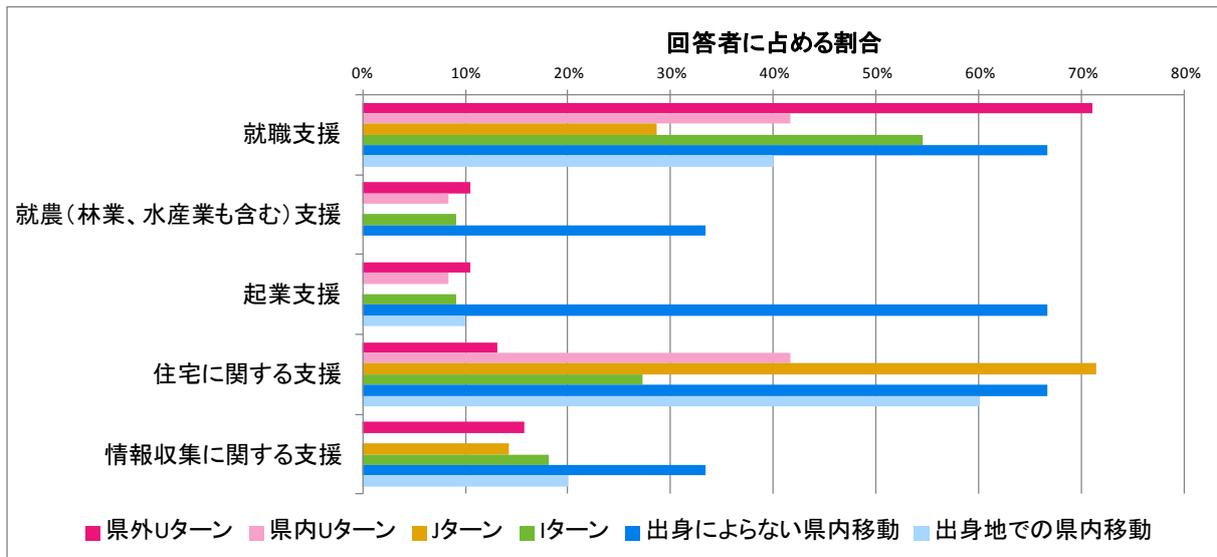
N=890

図 3-95. 家族構成と受けたサービス補助の有無の関係



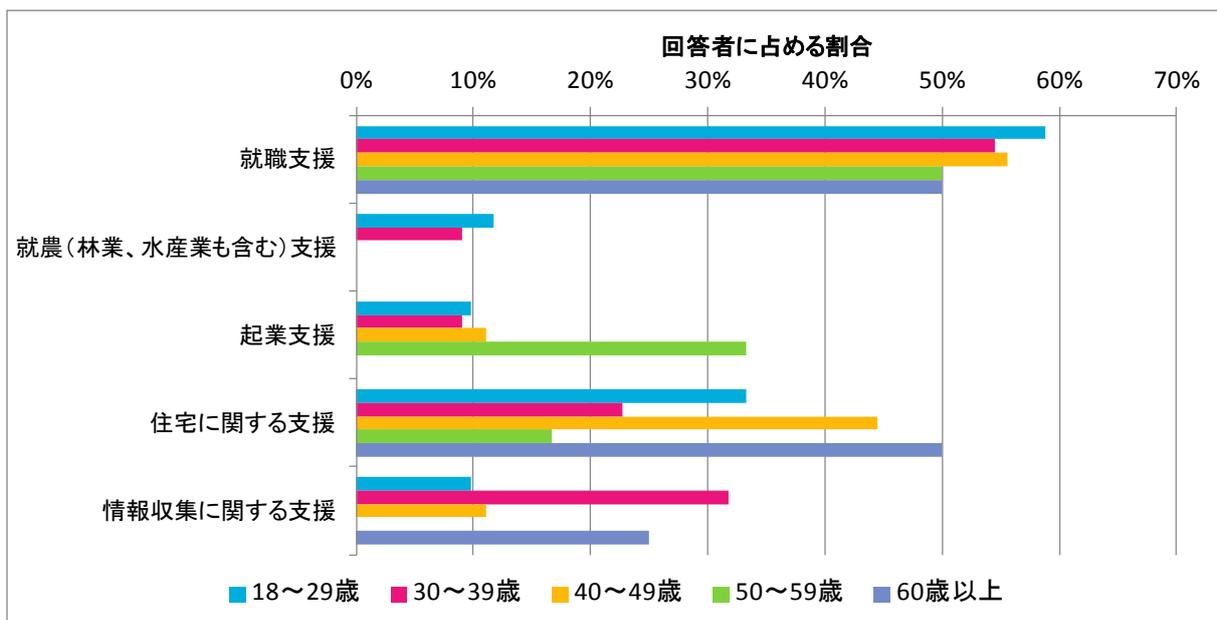
N=890

図 3-96. 現住地と受けたサービス補助の有無の関係



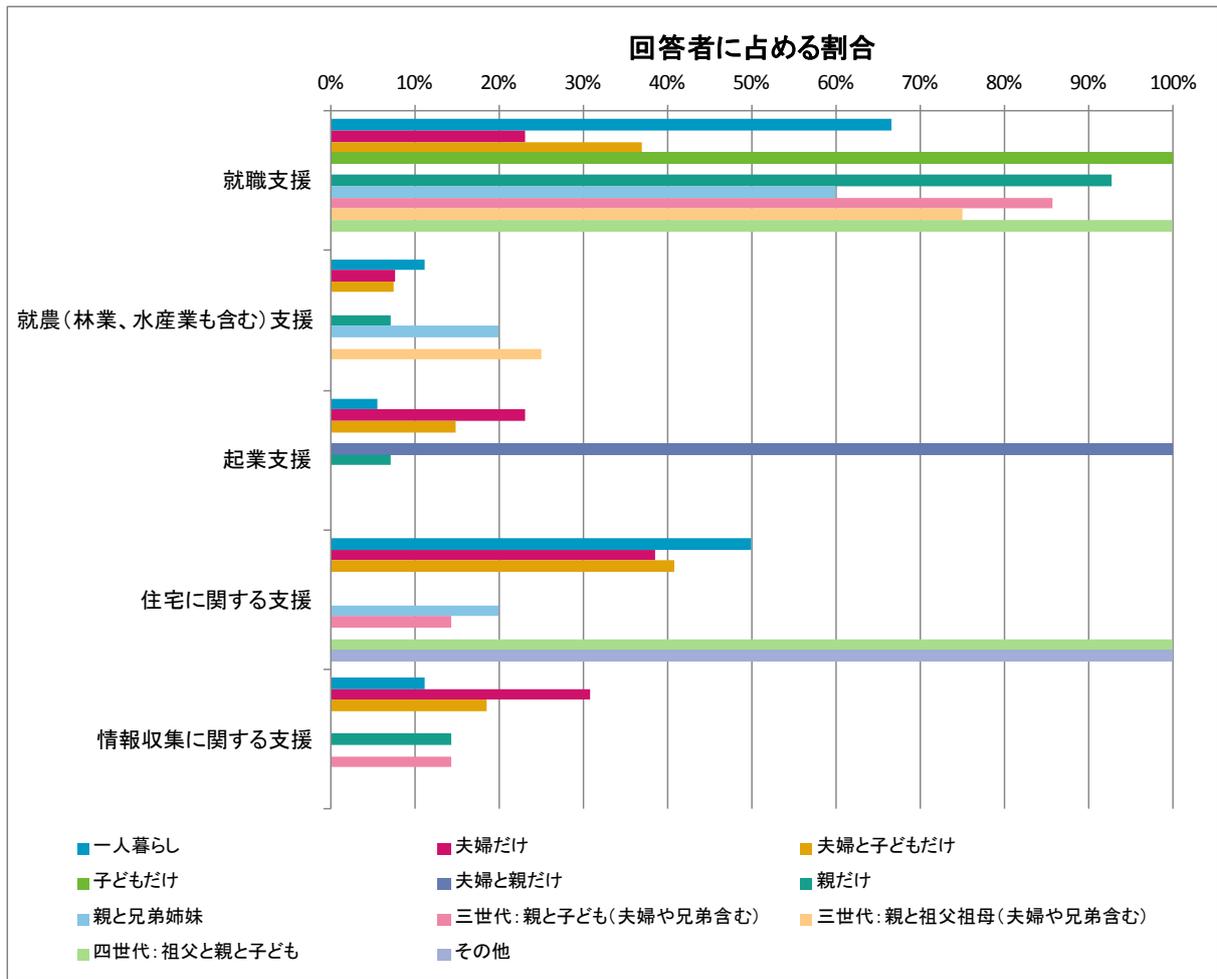
N=36, 12, 7, 22, 3, 10

図 3-97. 受けたサービス補助の内訳とターン分類の関係 (複数回答)



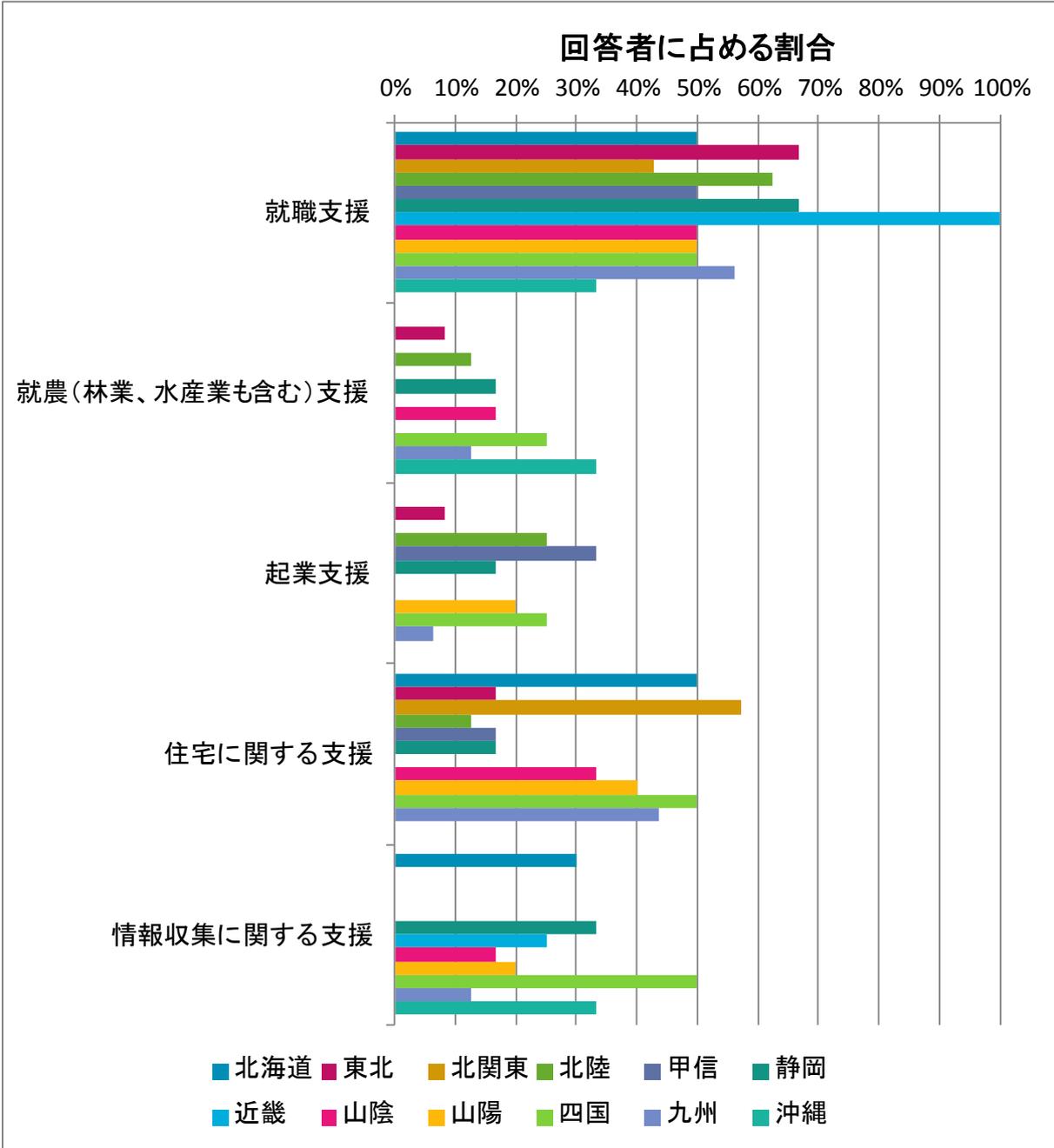
N=51, 22, 9, 6, 4

図 3-98. 受けたサービス補助の内訳とターン時の年齢の関係 (複数回答)



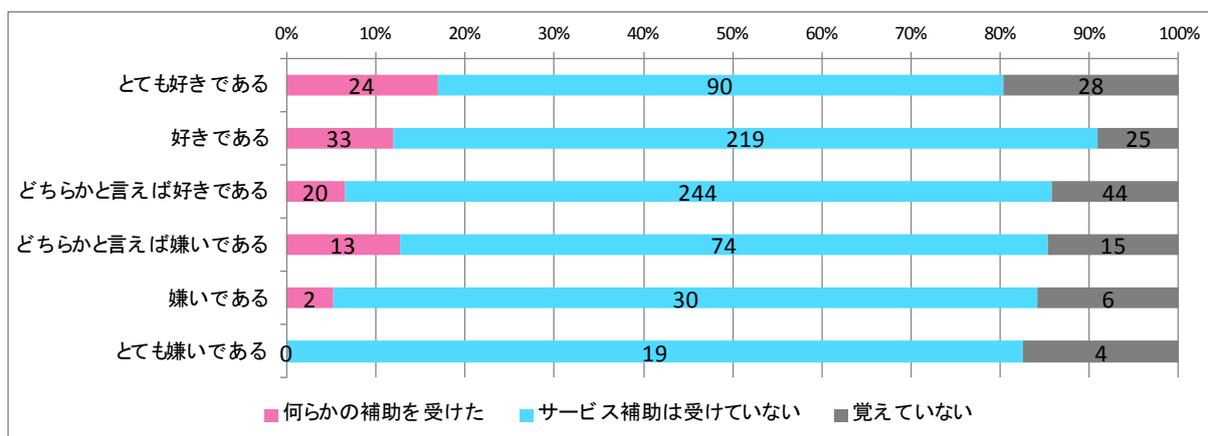
N=18, 13, 27, 1, 1, 14, 5, 7, 4, 1, 1

図 3-99. 受けたサービス補助の内訳と家族構成の関係 (複数回答)



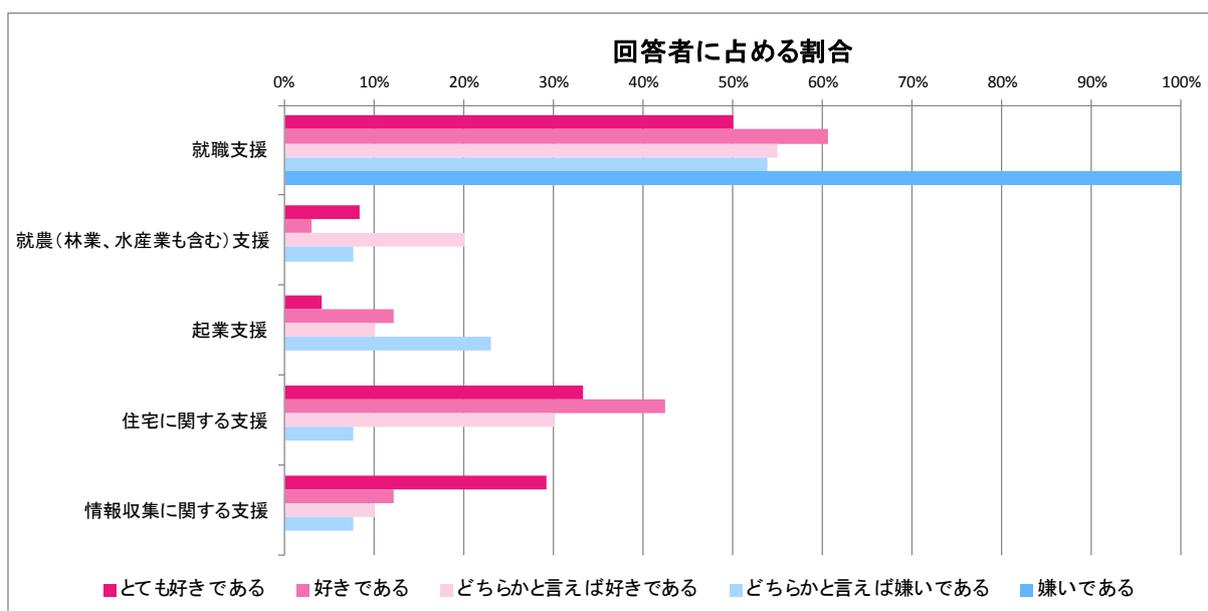
N=10, 12, 7, 8, 6, 6, 4, 6, 10, 4, 16, 3

図 3-100. 受けたサービス補助の内訳と現住地の関係（複数回答）



N=890

図 3-101. 現住地に対する好嫌度と受けたサービス補助の有無の関係



N=24, 33, 20, 13, 2

図 3-102. 受けたサービス補助の内訳と好嫌度の関係 (複数回答)

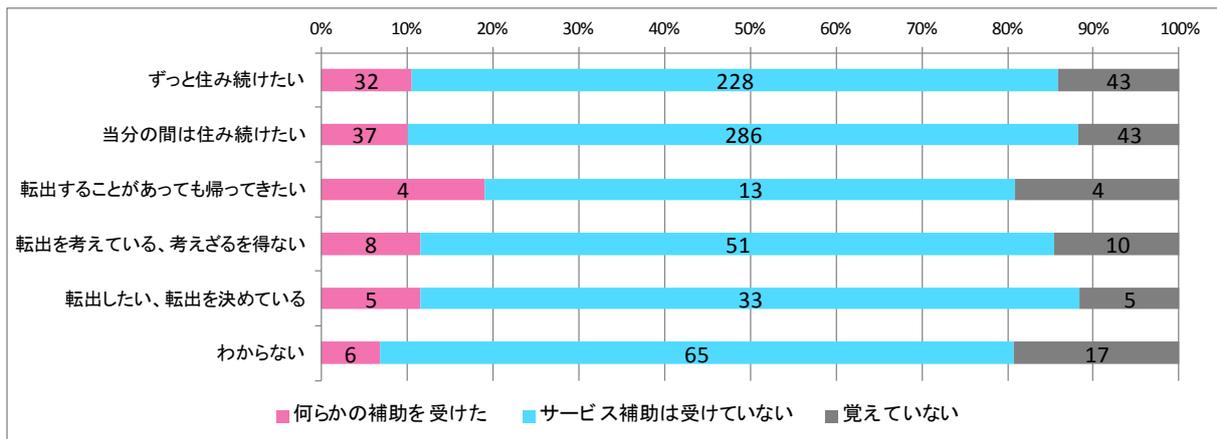
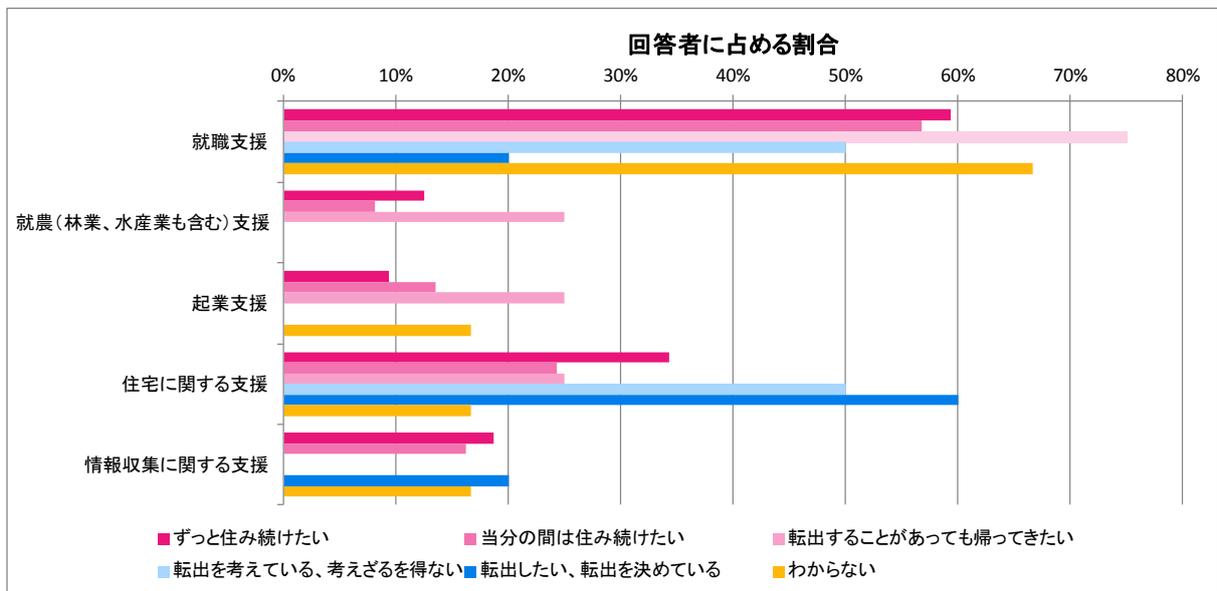
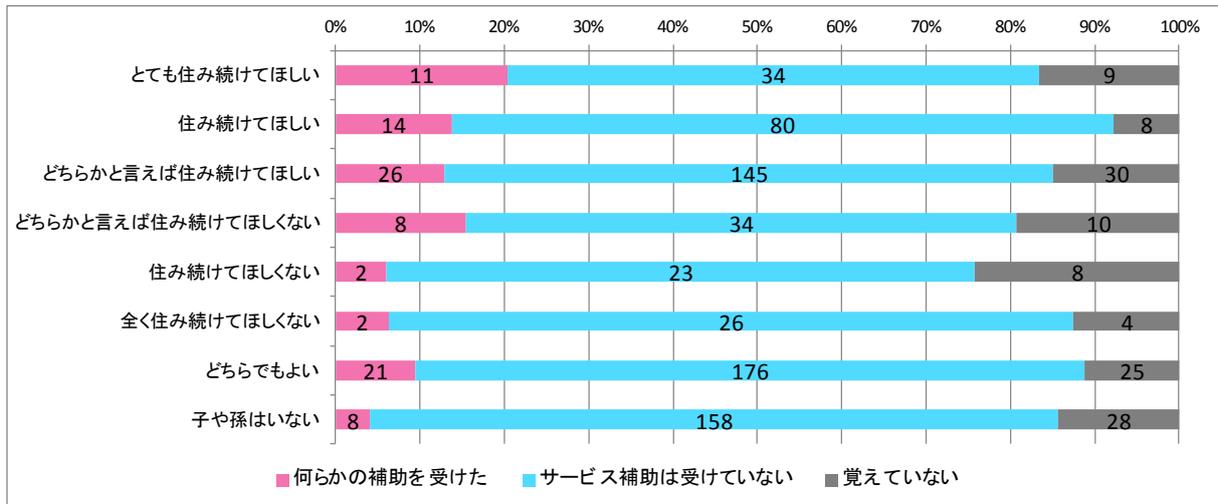


図 3-103. 定住意思と受けたサービス補助の有無の関係



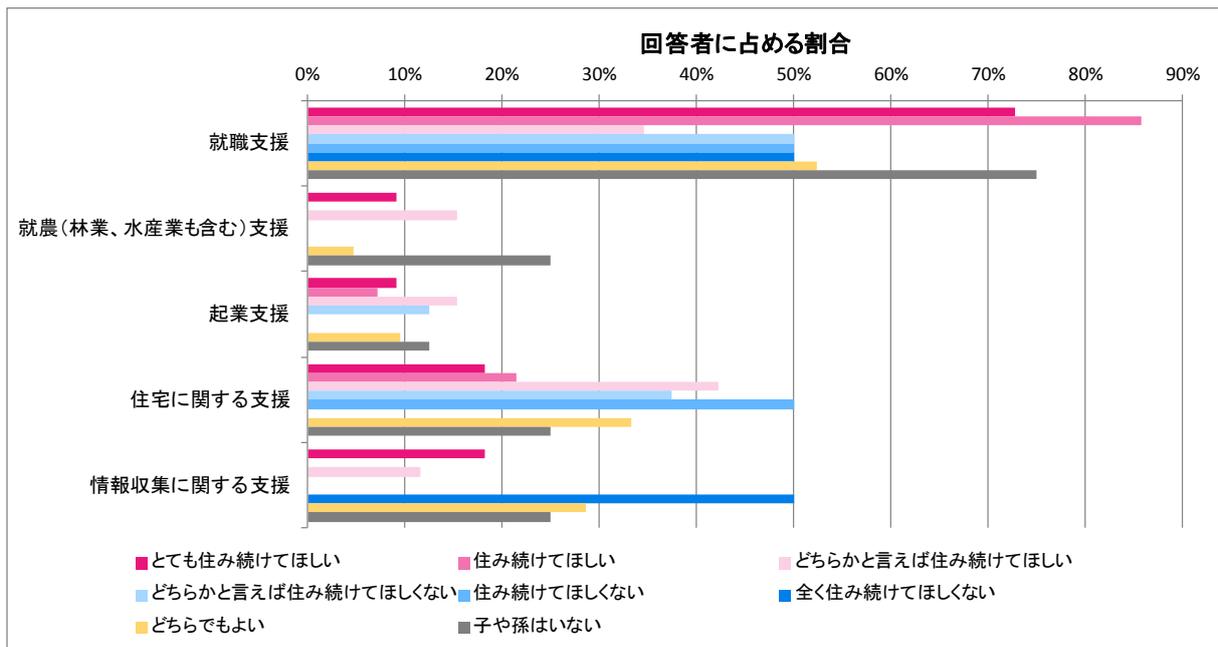
N=32, 37, 4, 8, 5, 6

図 3-104. 受けたサービス補助の内訳と定住意思の関係 (複数回答)



N=890

図 3-105. 永住意思と受けたサービス補助の有無の関係



N=11, 14, 26, 8, 2, 2, 21, 8

図 3-106. 受けたサービス補助の内訳と永住意思の関係 (複数回答)

表 3-13. 転入理由と受けたサービス補助の有無と内訳の関係（複数回答）

	就職支援	就農(林業、水産業も含む)支援	起業支援	住宅に関する支援	情報収集に関する支援	サービス補助は受けていない	覚えていない
自分が豊かな自然環境のなかで生活をしたかった(N=160)	15	2	2	7	8	116	21
豊かな自然環境のなかで子育てをしたかった(N=64)	5	2	0	2	4	45	9
広くて安い住宅・住環境がほしかった(N=61)	7	2	2	4	5	45	5
都会のせわしさに嫌気がさした(N=72)	4	0	1	1	3	57	6
別荘等を持っており生活が気に入った(N=8)	1	0	0	0	0	6	1
旅行で訪れて気に入った(N=21)	3	0	0	0	2	15	1
テレビや雑誌で紹介されていて気に入った(N=0)	0	0	0	0	0	0	0
農林漁業に従事したかった(N=9)	1	3	1	1	1	5	1
自分の地元だから(N=15)	0	0	0	0	0	13	2
この地の人と結婚(再婚)した(N=33)	2	0	1	3	1	23	4
地元の維持・発展に貢献したかった(N=33)	2	1	0	0	0	23	7
家業継続の必要性(N=35)	0	2	0	0	0	30	3
親・親類の介護が必要だったから(N=48)	1	0	1	1	0	41	4
親元で暮らしたかった(N=188)	8	1	1	2	2	157	19
定年退職に伴い(N=42)	1	0	0	0	1	39	1
配偶者の地元で暮らしたかった(N=41)	2	1	0	2	1	35	2
卒業を機に(N=36)	2	0	0	1	0	28	5
親類や、気にかかる親しい人がいる(N=50)	3	0	0	1	1	39	7
この地で就職(転職)した(N=86)	3	0	1	4	0	64	14
就業(学)地の近くに住みたかった(N=43)	5	0	1	1	1	31	6
地域や集落がしっかりしている(N=14)	2	0	0	0	2	8	3
近所づきあいがしやすい(N=13)	1	0	0	0	0	11	1
周辺の良い環境(N=94)	5	1	2	2	5	76	7
仕事や商売上の都合が良い、就業の場がある(N=37)	2	0	2	2	2	28	3
福祉・医療が充実している(N=15)	3	0	1	1	3	7	1
道路や交通の便が良い(N=33)	1	0	0	1	1	27	3
買い物や通勤・通学、通院などが便利(N=32)	3	0	0	1	1	24	4
文化施設やスポーツ施設、集会所などの整備状況が良い(N=3)	0	0	0	0	0	3	0
家族がこの地に転職・転業・就職(N=52)	1	0	0	5	2	36	9
勤め先での配置転換(N=33)	1	0	1	1	0	24	6
仕事内容に不満があり転職したかった(N=51)	6	0	0	1	2	38	6
思うような職業につけなかった(N=21)	1	0	0	0	0	20	0
リストラ等の就業の変化(N=33)	4	1	1	1	1	27	2
技術を活かすため起業・創業したかった(N=10)	1	0	1	0	1	9	0
会社の人間関係に苦悶が多かった(N=17)	1	1	1	1	1	12	4
前の住宅や、前の居住地の住環境に問題があった(N=15)	1	0	1	0	0	11	2
自分の家庭環境の変化(N=71)	1	0	1	2	0	58	10
家族の決断・意向に従った(N=64)	2	0	0	2	0	49	11
自分や家族の健康問題(N=59)	2	0	0	2	1	48	7
転入に対する支援の仕組みが充実しているから(N=2)	0	0	0	1	1	0	0
その他(N=19)	1	0	0	1	0	15	3

表 3-14. あればよいと思う行政等によるサービス補助の自由回答（抜粋）

街の中心地に出るときの交通費の割引や無料バスなど
どんなことでも相談できる総合的な窓口
I,Uターンの人たちにはもっと助成金等の優遇をするべき、現状は地域を限定するなど（現市長の出身地優先など）見え見えの姑息さを感じた
自家用車購入支援（公共交通機関が無いので）
定住化補助金
子育て世代の交流サービス
転入祝い金
Uターンしてきた人たちへの、住宅支援。子供がいる人達への優遇。
引っ越し費用一部負担
就職活動中の給付金
帰郷補助
サービス補助を役所が進んで教えてくれるようにしてほしい
保育園情報の詳しい説明

(2) ターン時に行った情報収集

転入に際しての情報収集の実施の有無とその方法を図 3-107 に示す。転入に際して情報は特に収集していないという回答が三分の二を占めたものの、2 割強の方が情報の収集を行っていた。情報を収集したという回答のなかでは、「転居検討先に居住している親戚や親しい人に聞いた」という回答が最も多かったほか、自治体や団体が開設しているウェブサイトや相談窓口を利用したという人も全体の 1 割弱存在した。

情報収集を実施した人のうち、その方法としてその他を選択した方の自由回答の抜粋を表 3-15 に示す。自由回答のなかでは、実際に訪問して現地を回ったという回答が多かったが、体験入居などの制度を利用して、現地で生活を体験するなどの方法を取っている方もいた。

ターン分類と情報収集の実施の関係を図 3-108 に示す。情報収集を実施した割合は、U ターン実施者よりも J ターン実施者が大きく、J ターン実施者よりも I ターン実施者が大きいという結果であった。県内移動でも出身によらない県内移動の実施者は J ターンよりも割合が大きかった。ターン先が出身地から遠いほど、情報収集を実施するという結果は理に適ったものである。

情報収集の方法とターン分類の関係を図 3-109 に示す。県内・県外 U ターンと出身地に依存しない J・I ターンの実施者を比較すると、U ターン実施者は「転居検討先に居住している親戚や親しい人に聞いた」と回答した割合が J・I ターン実施者と比較すると大きく、J・I ターン実施者は「転居先の自治体や団体が開設しているウェブサイトを見た」と回答した割合が U ターン実施者と比較すると大きくなっている。J・I ターン実施者は、U ターン実施者と比較すると、自治体や団体が開設しているウェブサイトや相談窓口、相談会、説明会などを頼りに、ターンを実施しているものと思われる。J・I ターン者の誘致に向けては、これらウェブサイトや相談窓口などの設置が有効な手段であると考えられる。

ターン時の年齢と情報収集の実施の関係を図 3-110 に示す。ターン時の年齢が高齢であればあるほど、何らかの方法で情報収集したという割合が大きくなる。図 3-15 で示したように、ターン時の年齢が高齢であるほど I ターンの割合は大きくなるため、出身によらない土地への転居を実施するときに、何らかの情報収集を実施するのは自然なことである。また、実際に情報提供を行う際には、高齢の方にとっても親切な情報提供を行うことが大事であると考えられる。

情報収集の方法とターン時の年齢の関係を図 3-111 に示す。ターン時の年代の違いによる情報収集の方法に差は認められなかった。

家族構成と情報収集の実施の関係を図 3-112 に、情報収集の方法と家族構成の関係を図 3-113 に示す。情報収集の実施や方法については、家族構成の違いによる差は認められなかった。

現住地と情報収集の実施の関係を図 3-114 に示す。どの地域へのターンについても情報収集を行った人は 2 割前後であったが、沖縄へのターンに限り何らかの方法で情報を収集した人が 4 割に上った。図 3-83 でも示したように、沖縄へのターンについては、他地域へのターンと比較すると顕著に満足度が高かったことから、情報収集とターンの満足度には関連がある可能性がある。

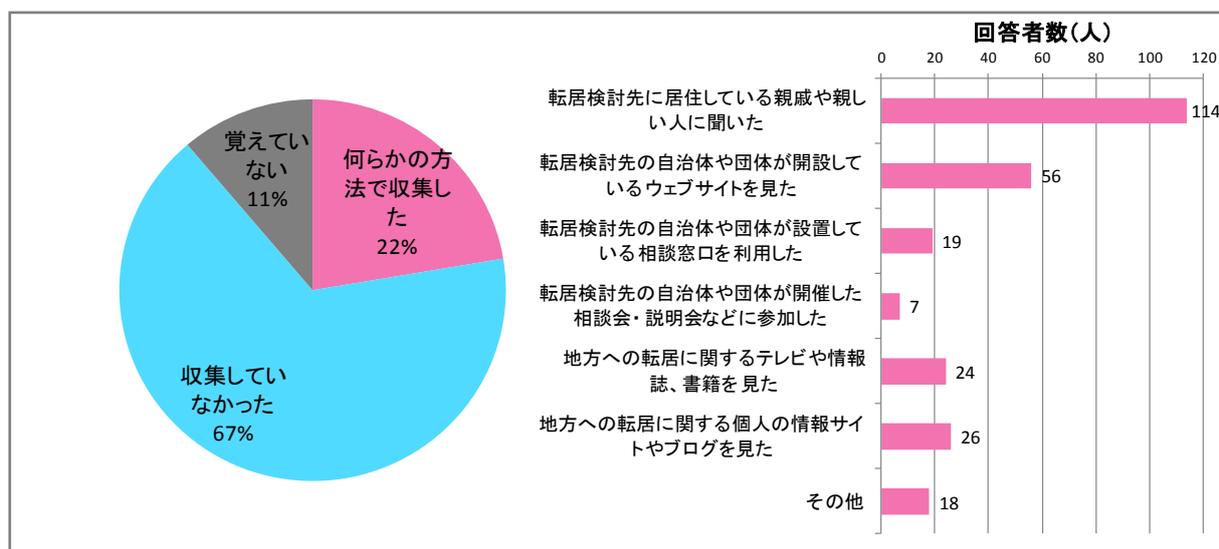
情報収集の方法と現住地の関係を図 3-115 に示す。情報収集人数の割合の多かった沖縄に着目すると、「地方への転居に関する個人の情報サイトやブログを見た」と回答した方が、他の地域へのターンと比較すると顕著に多くなっている。実際にターンを実施した人の体験談は、これからターンを実施しようとしている人にとって貴重な情報であり、このような情報の発信がターンの

促進、また実施後の満足度の向上に寄与している可能性がある。

現住地に対する好嫌度と情報収集の実施の関係を図 3-116 に示す。現住地に対する好感度が高い人ほど、情報収集を実施したという人の割合が高い。十分に情報収集を行い、納得してターンを実施している人のほうが現住地に対する好感度が高いものと思われる。

情報収集の方法と好嫌度の関係を図 3-117 に示す。情報収集を実施し現住地がとても嫌いであるという人は 2 名と些少であるため、このデータは無視して考えると、情報収集の方法については、現住地に対する好嫌度の違いによる差は認められなかった。

定住意思と情報収集の実施の関係を図 3-118 に、情報収集の方法と定住意思の関係を図 3-119 に、永住意思と情報収集の実施の関係を図 3-120 に、情報収集の方法と永住意思の関係を図 3-121 に示す。情報収集の実施・方法の内訳については、定住意思・永住意思の違いによる差は認められなかった。ターン者に情報収集を実施させるというだけでは定住・永住につなげることは難しく、ターン後に現住地を好きになってもらうなどの方法が有効であると思われる。

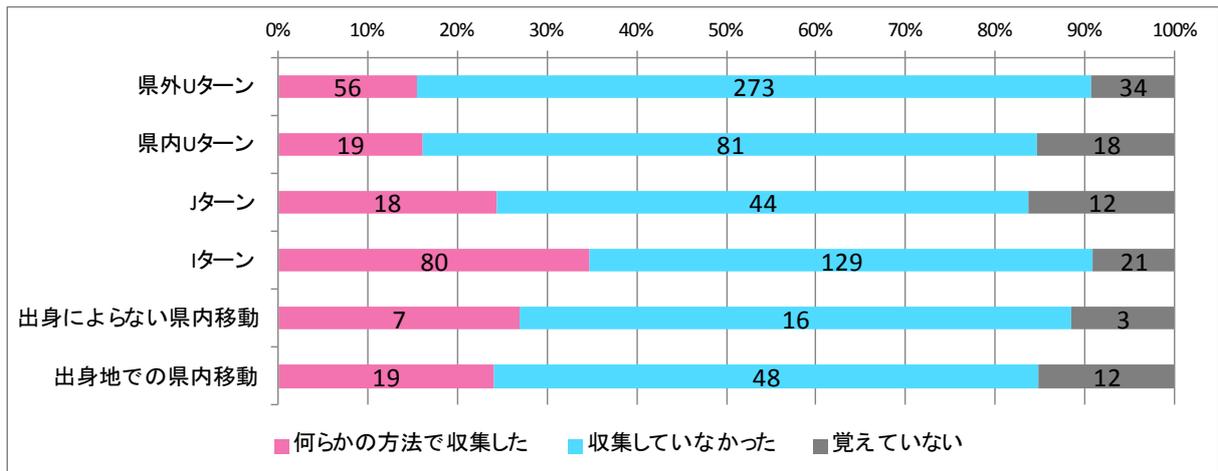


N=890 (全体)、N=199 (方法)

図 3-107. 転入に際しての情報収集の実施の有無とその方法 (複数回答)

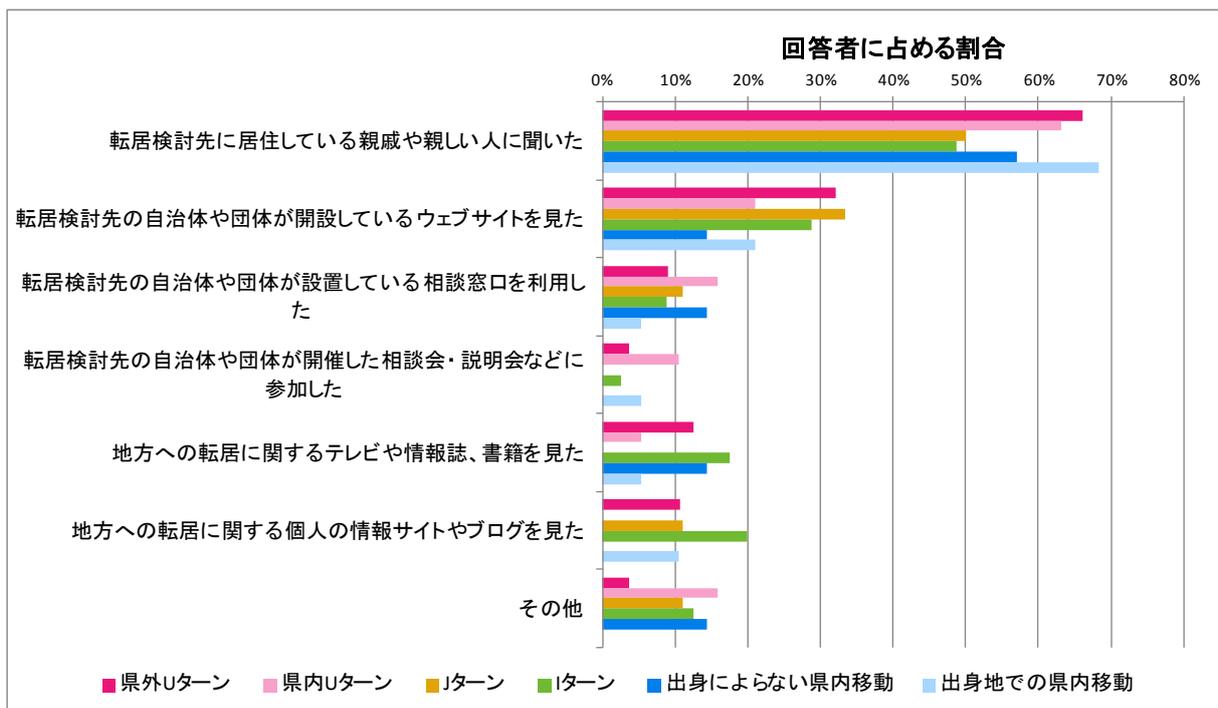
表 3-15. 情報収集の方法に関する自由回答 (抜粋)

実際に訪問した
自分の車で回った
体験入居をし、その間に自分で環境を調べた
パソコンで地元の不動産情報を検索した
不動産屋に騙された
現地の飲食店の主人などに聞いた
インターンシップで一度訪れた



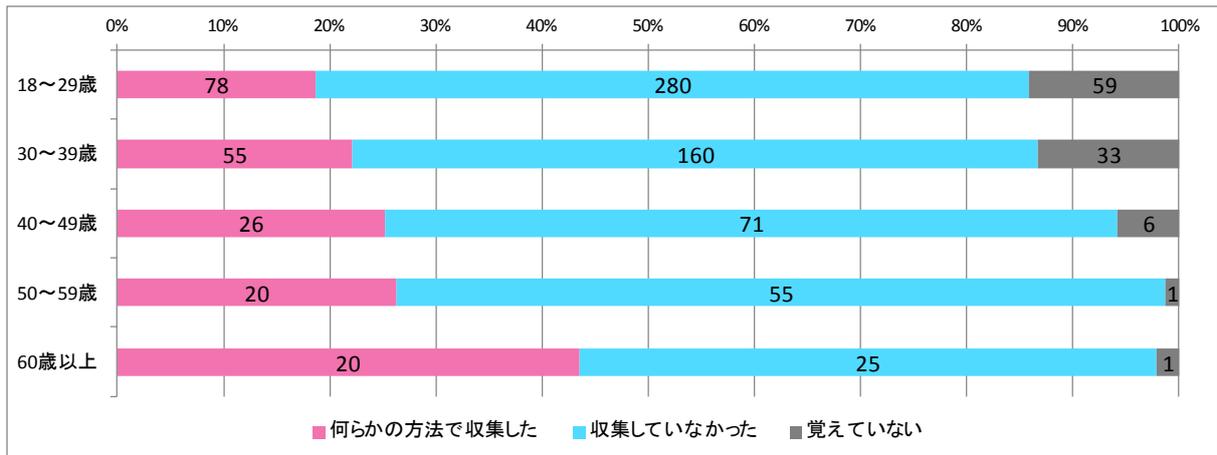
N=890

図 3-108. ターン分類と情報収集の実施の関係



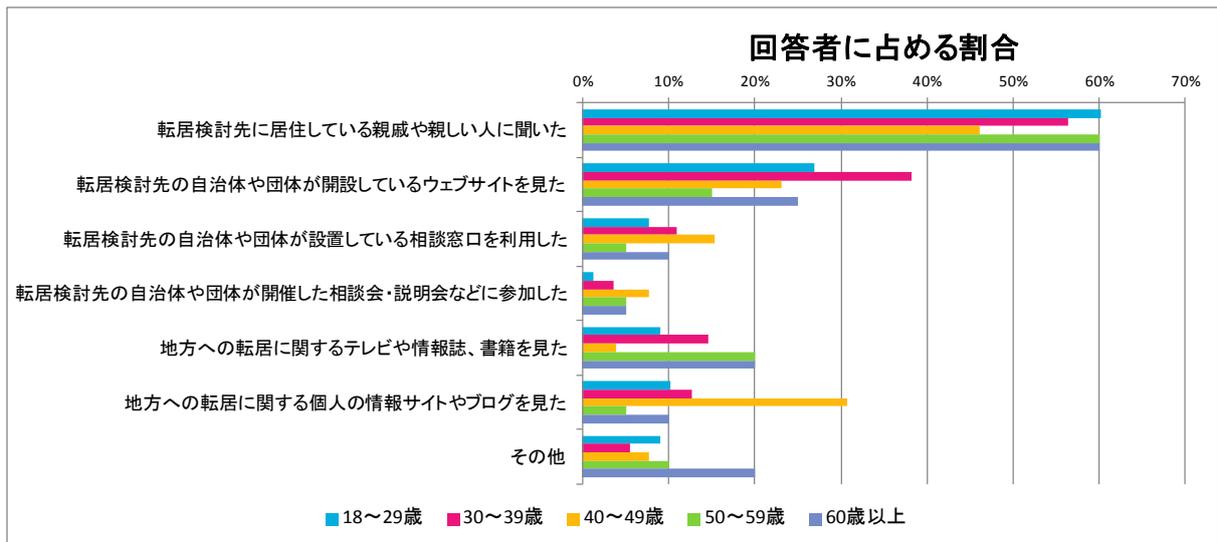
N=56, 19, 18, 80, 7, 19

図 3-109. 情報収集の方法とターン分類の関係（複数回答）



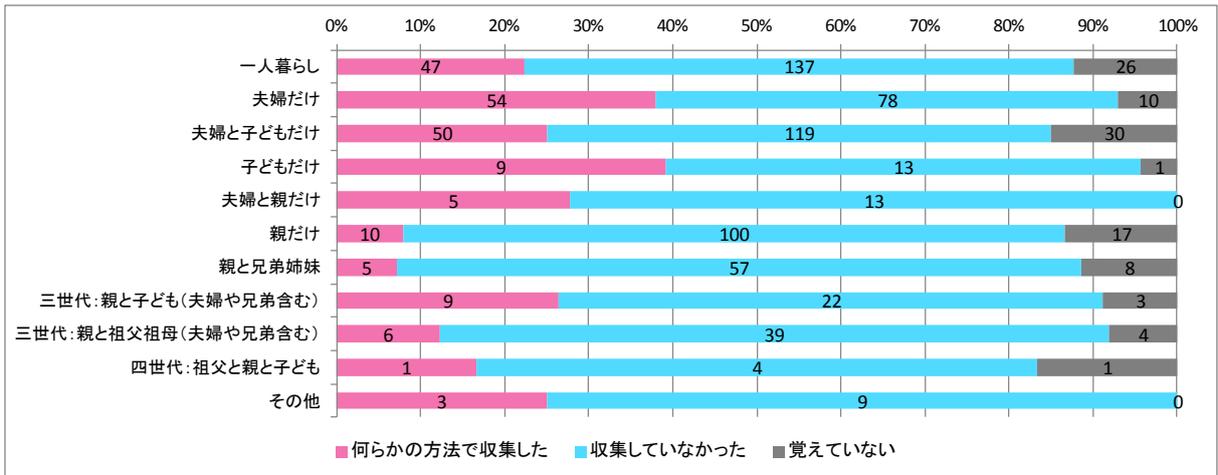
N=890

図 3-110. ターン時の年齢と情報収集の実施の関係



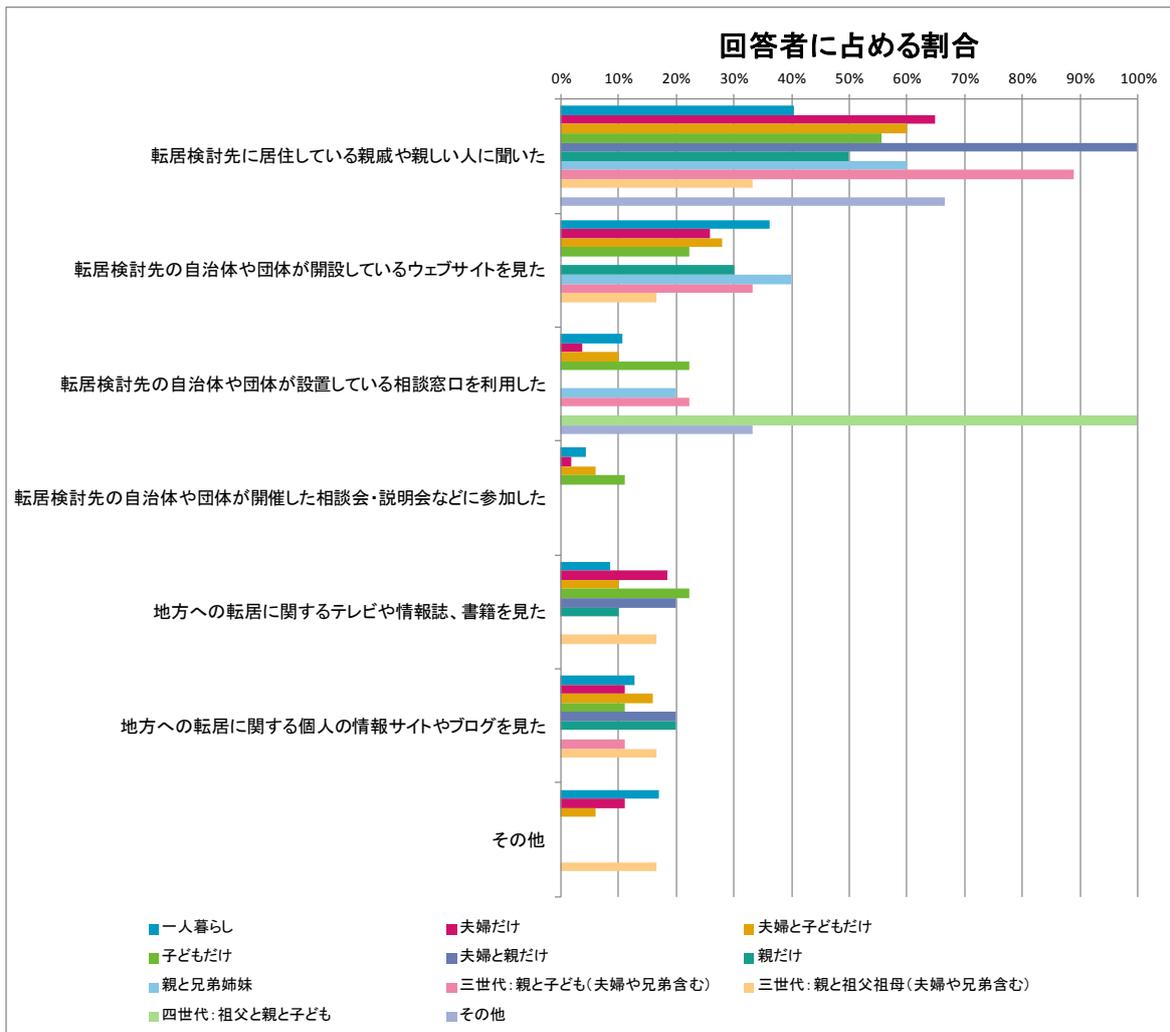
N=78, 55, 26, 20, 20

図 3-111. 情報収集の方法とターン時の年齢の関係（複数回答）



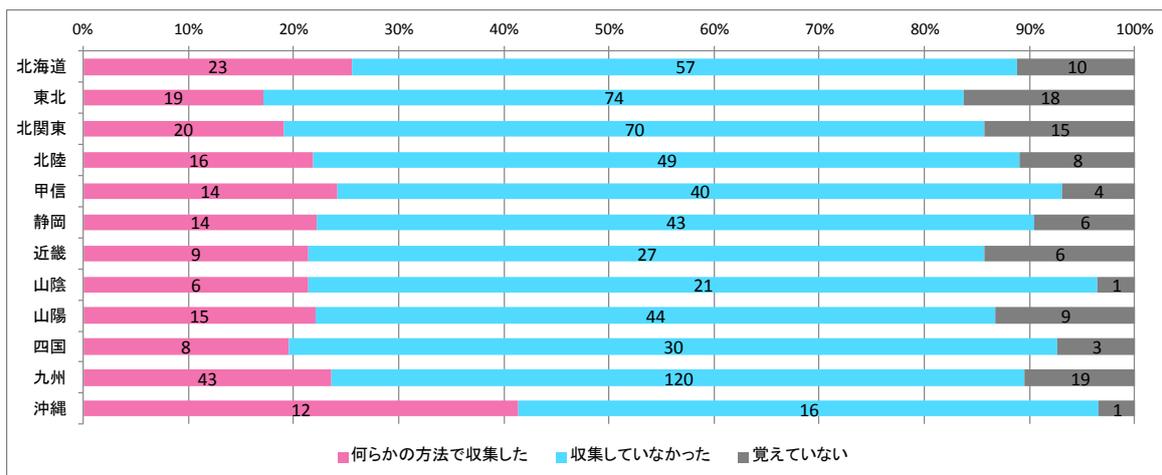
N=890

図 3-112. 家族構成と情報収集の実施の関係



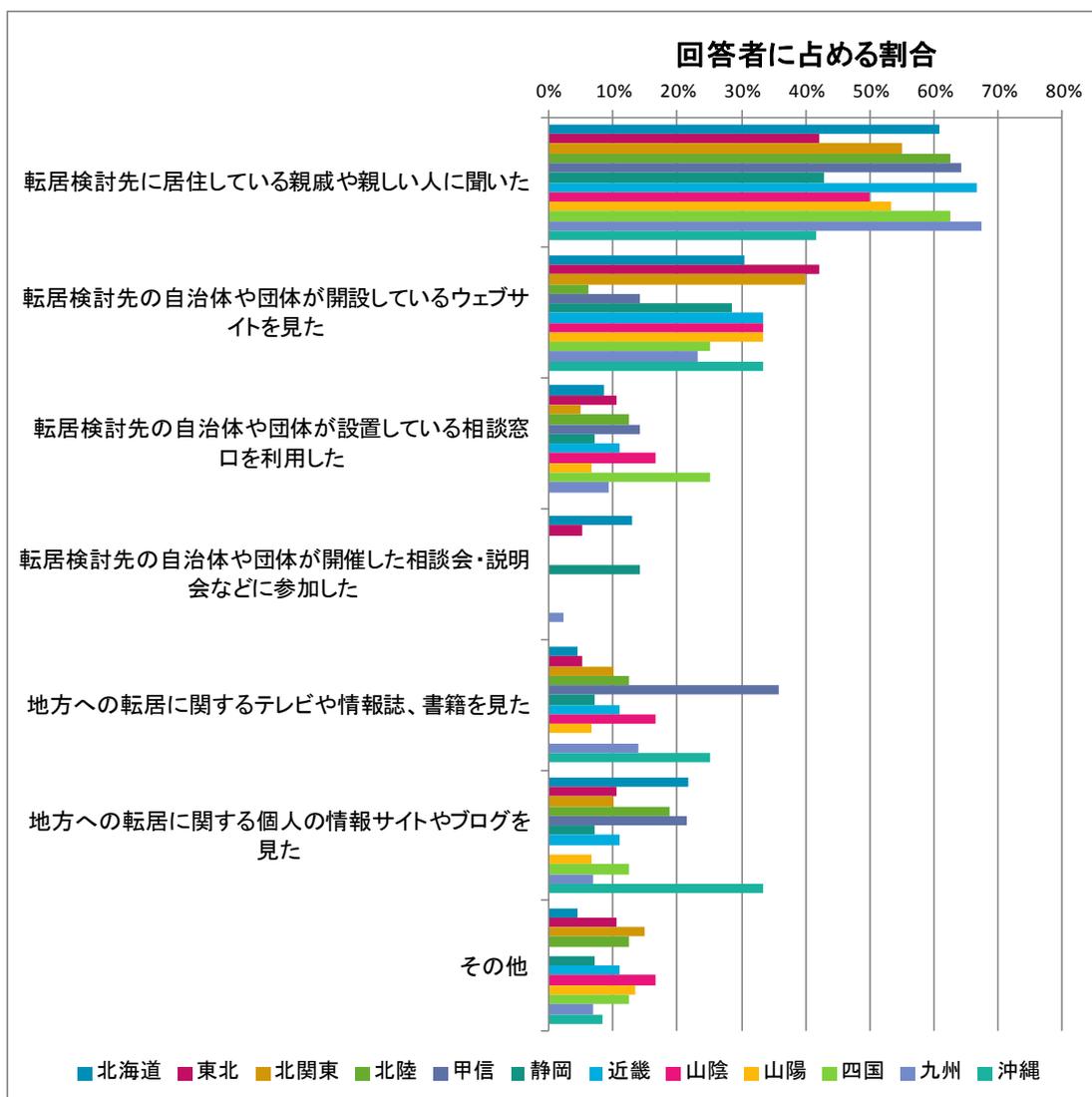
N=47, 54, 50, 9, 5, 10, 5, 9, 6, 1, 3

図 3-113. 情報収集の方法と家族構成の関係（複数回答）



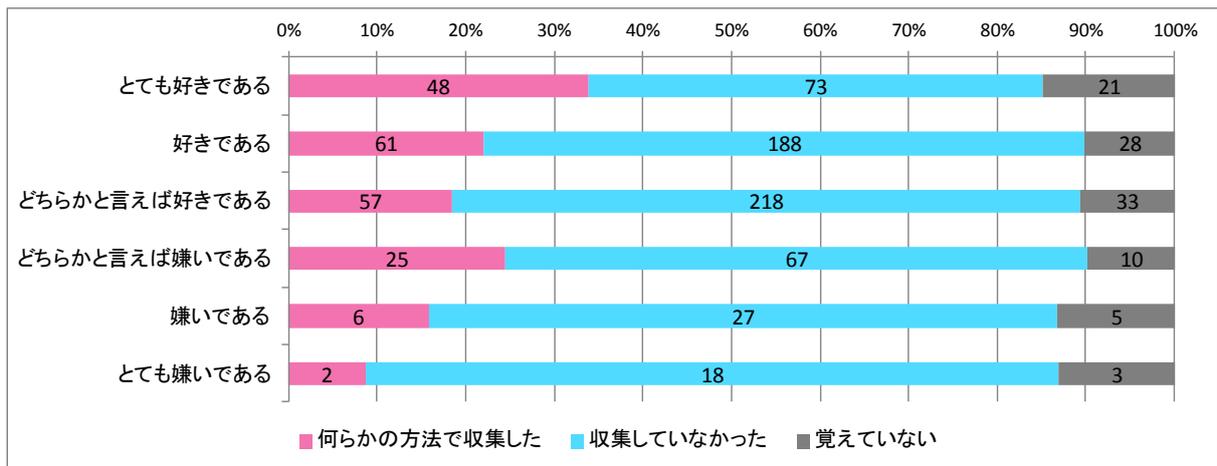
N=890

図 3-114. 現住地と情報収集の実施の関係



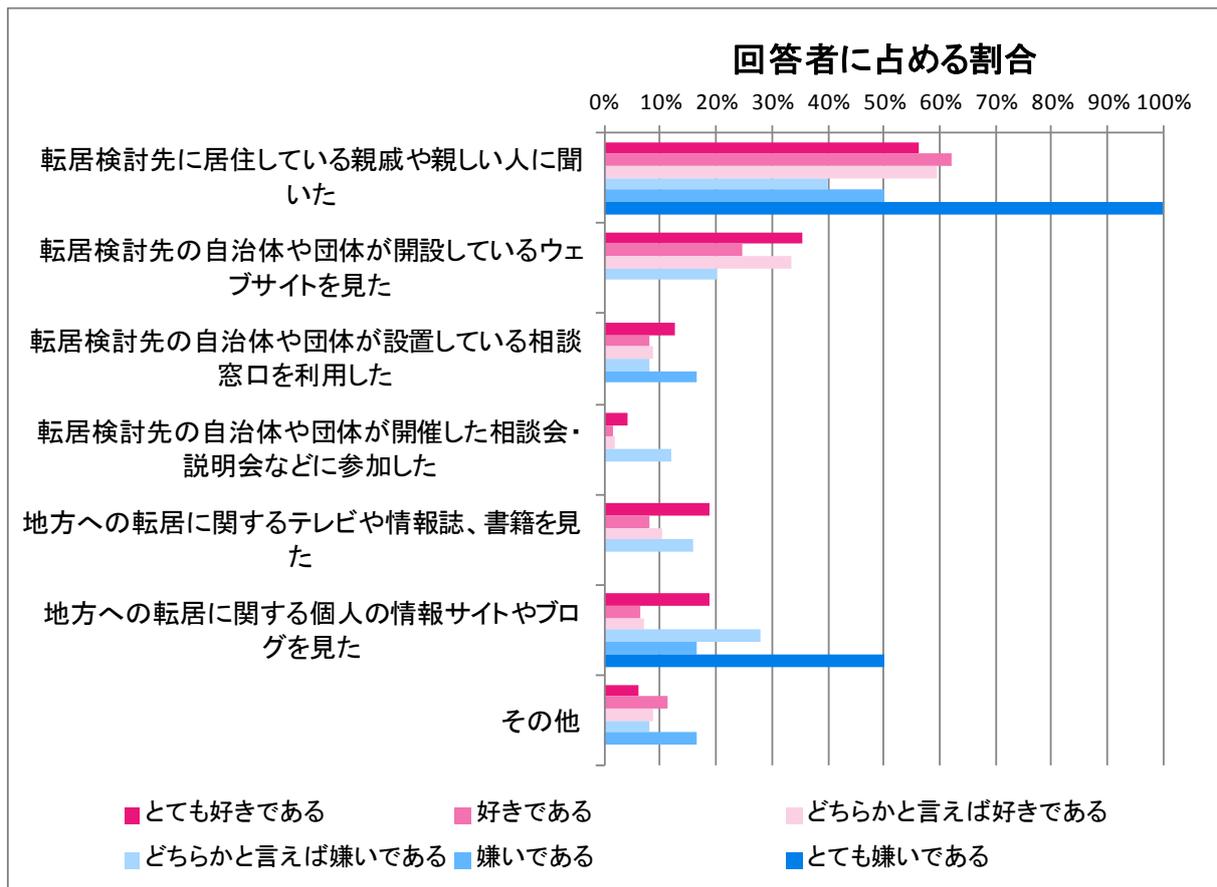
N=23, 19, 20, 16, 14, 14, 9, 6, 15, 8, 43, 12

図 3-115. 情報収集の方法と現住地の関係（複数回答）



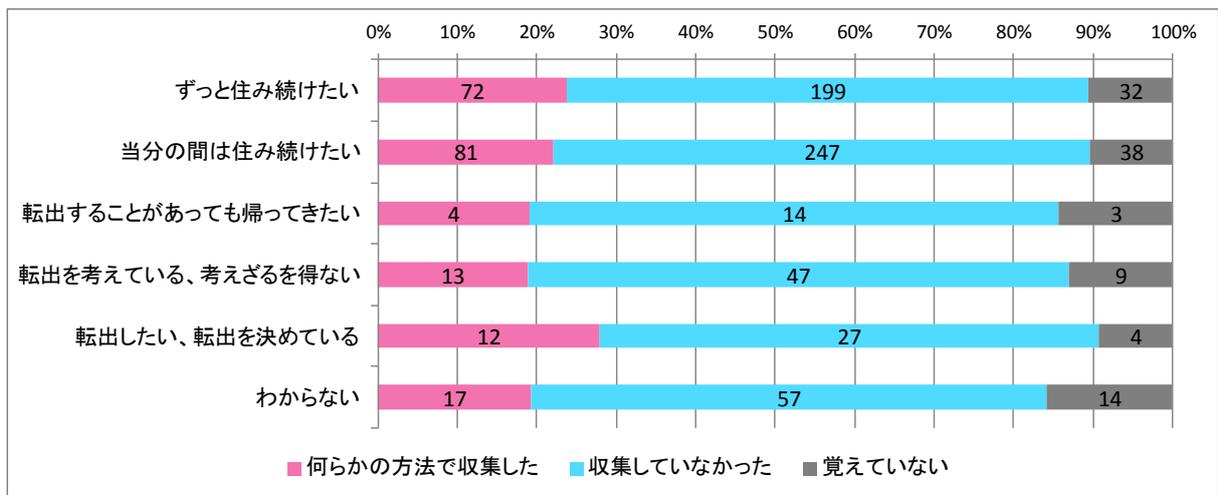
N=890

図 3-116. 現住地に対する好嫌度と情報収集の実施の関係



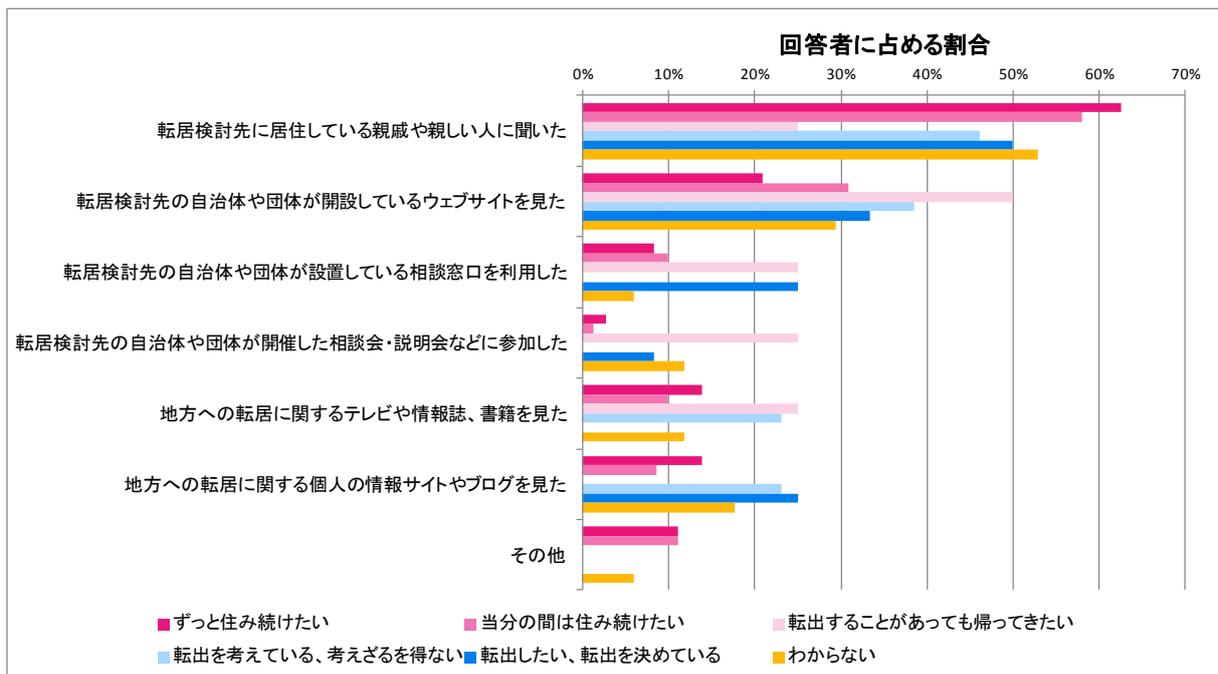
N=48, 61, 57, 25, 6, 2

図 3-117. 情報収集の方法と好嫌度の関係（複数回答）



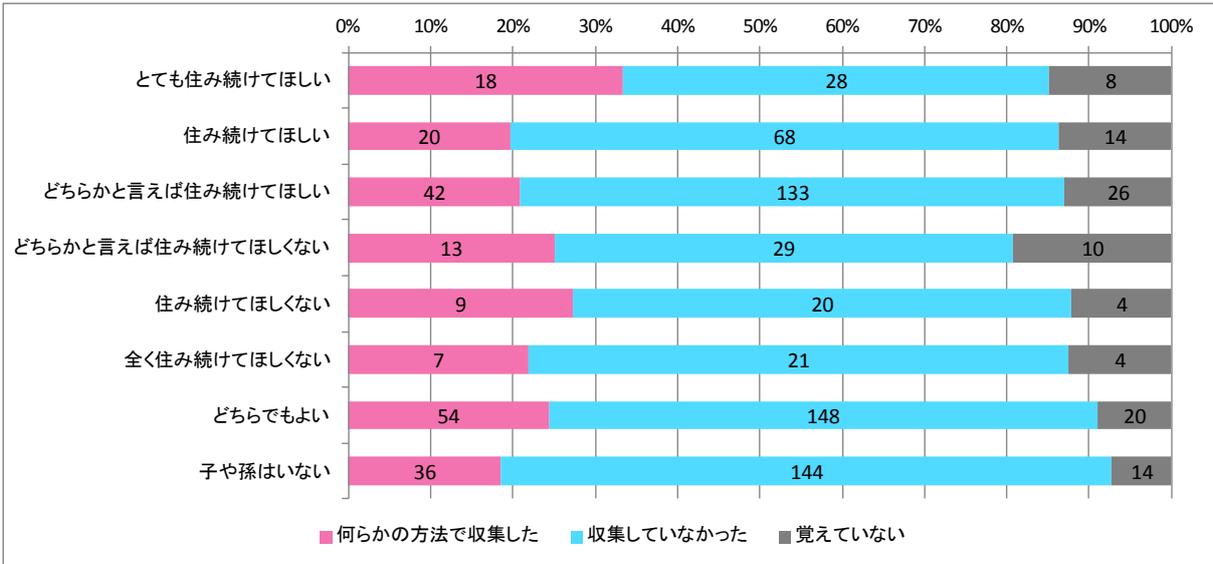
N=890

図 3-118. 定住意思と情報収集の実施の関係



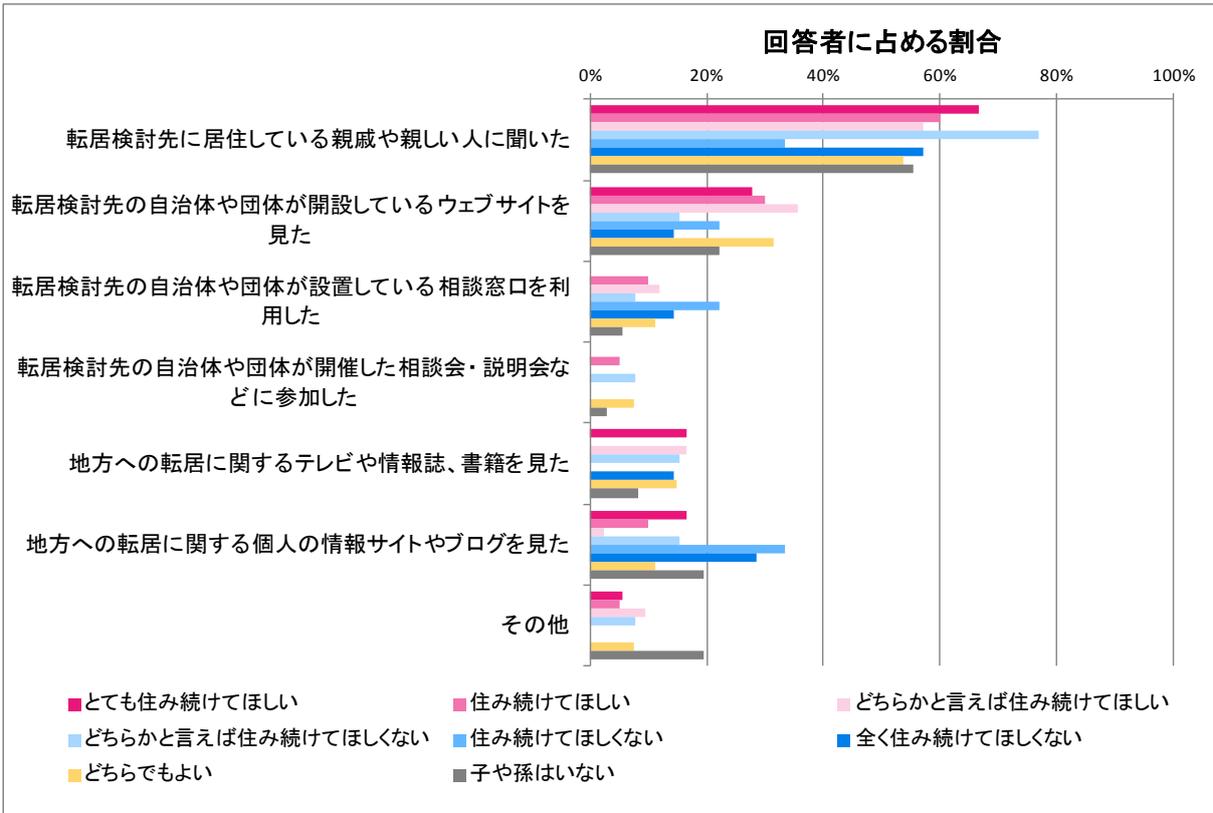
N=72, 81, 4, 13, 12, 17

図 3-119. 情報収集の方法と定住意思の関係（複数回答）



N=890

図 3-120. 永住意思と情報収集の実施の関係



N=18, 20, 42, 13, 9, 7, 54, 36

図 3-121. 情報収集の方法と永住意思の関係（複数回答）

(3) ターン先として比較検討した市区町村の数

転入時に比較検討した転入先の市区町村数を図 3-122 に示す。比較していないという回答がおよそ 9 割を占めている。比較検討した候補地が多くなるほど、回答者の割合は少なくなっており、多くの市区町村と比較検討するようなターン実施者はかなり少ないと言える。

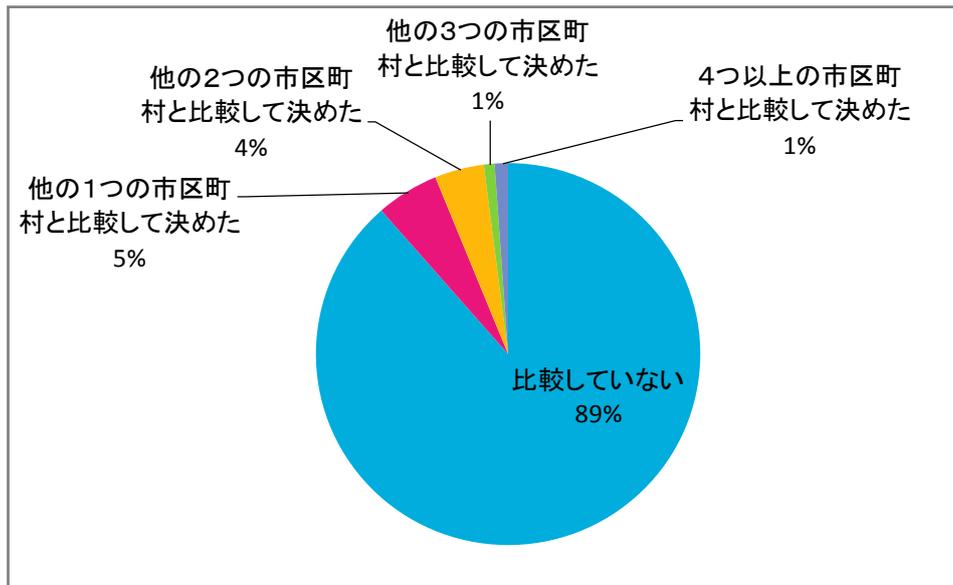
ターン分類と比較検討した転入先の数の関係を図 3-123 に示す。当然ながら、U ターン実施者ではそのほとんどがターン先の比較を実施していない。その一方で、I・J ターン者や出身によらない県内移動の実施者ではおよそ 2 割がターン先の比較検討を実施していることがわかった。

ターン時の年齢と比較検討した転入先の数の関係を図 3-124 に示す。高齢でのターンほど、比較検討した市区町村の数が多くなっている。

家族構成と比較検討した転入先の数の関係を図 3-125 に示す。ほとんどが比較していないという回答ではあったものの、配偶者のいる世帯である「夫婦だけ」「夫婦と子どもだけ」については、他の市区町村と比較して決めた方が 2 割近くに上っている。図 3-19 でも示したが、ターン分類と家族構成の関係をみると、配偶者がいる場合には I ターンの割合が大きくなるため、比較検討する市区町村の数も多くなるという関係が示唆される。

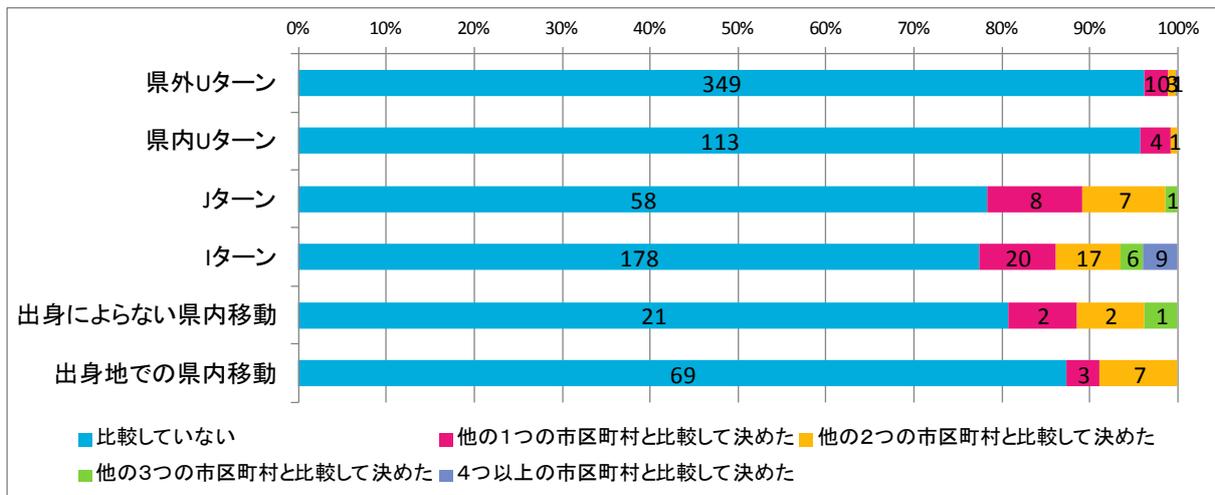
現住地と比較検討した転入先の数の関係を図 3-126 に、現住地に対する好嫌度と比較検討した転入先の数の関係を図 3-127 に、定住意思と比較検討した転入先の数の関係を図 3-128 に、永住意思と比較検討した転入先の数の関係を図 3-129 に、ターン満足度と比較検討した転入先の数の関係を図 3-130 に示す。どの項目においても、比較検討していないという回答が多いこともあり、これら各項目の違いによるターン先の比較検討に差は認められなかった。

比較検討した転入先の数と転入理由の関係を図 3-131 に示す。比較検討した転入先の数が多いほど、「自分が豊かな自然環境のなかで生活をしたかった」「都会のせわしさに嫌気がさした」「旅行で訪れて気に入った」「定年退職に伴い」などの項目を選択した方の割合が大きくなっている。これらの項目に共通するのは、I ターン実施者が多いことや、ターン時の年齢が高齢であることであり、I ターン実施者やターン時の年齢が高齢である方は、転入先について積極的に比較検討する傾向にあると言える。



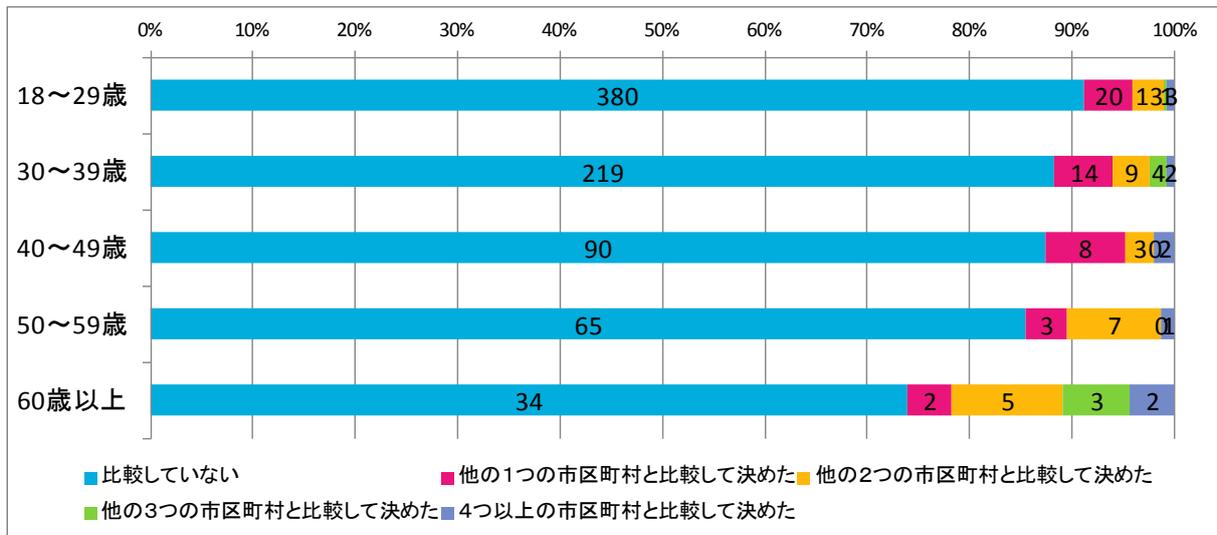
N=890

図 3-122. 転入時に比較検討した転入先の市区町村数



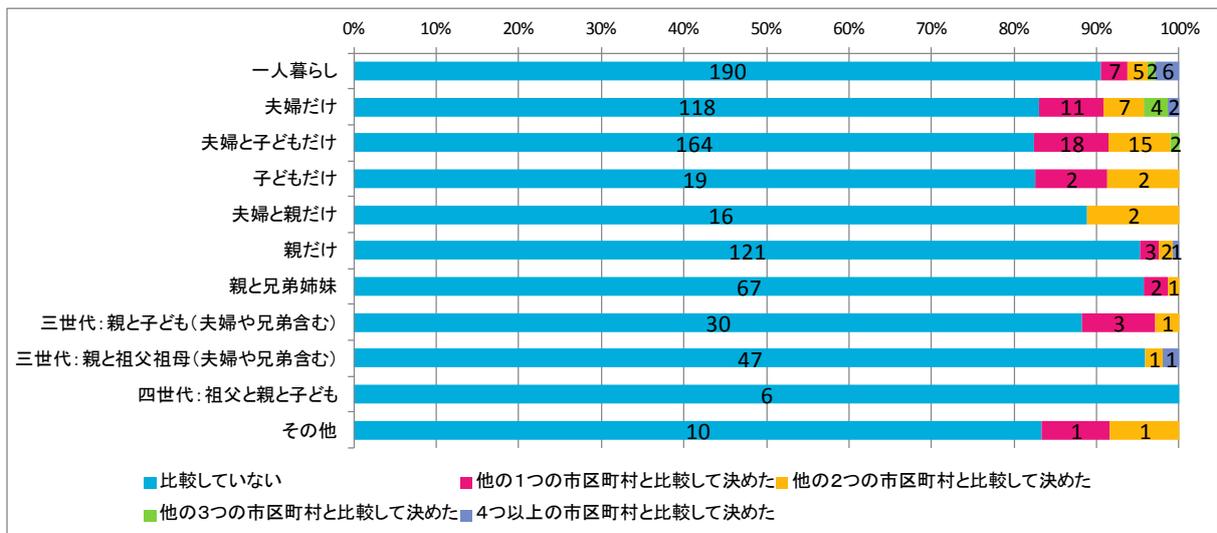
N=890

図 3-123. ターン分類と比較検討した転入先の数の関係



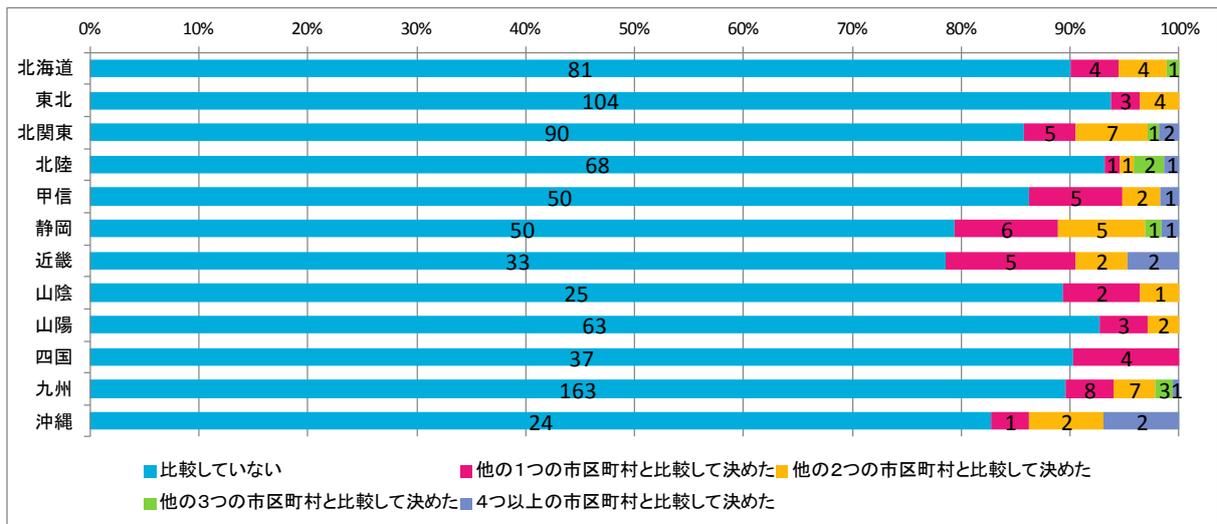
N=890

図 3-124. ターン時の年齢と比較検討した転入先の数の関係



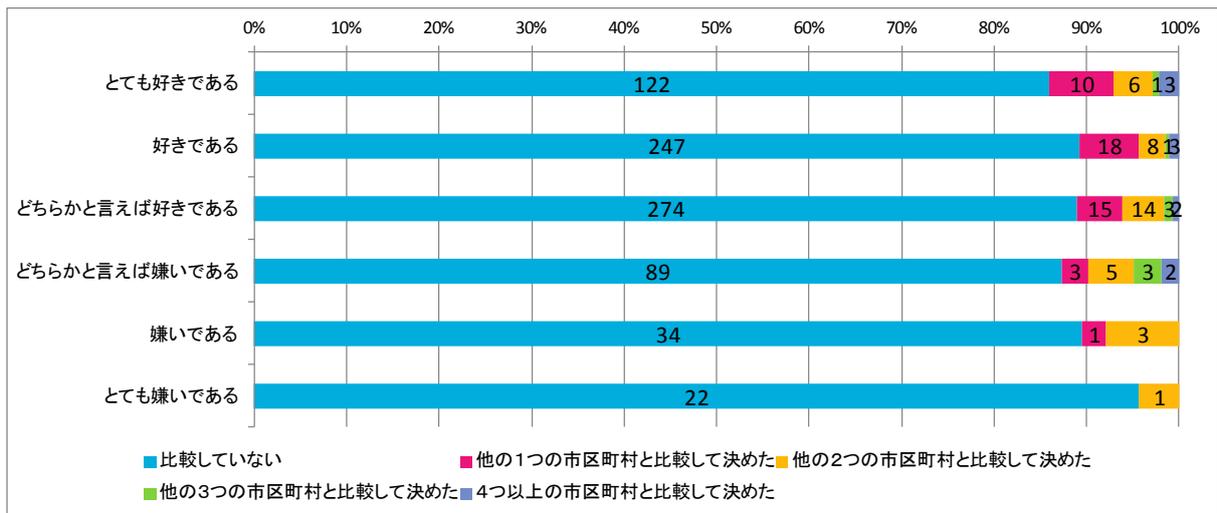
N=890

図 3-125. 家族構成と比較検討した転入先の数の関係



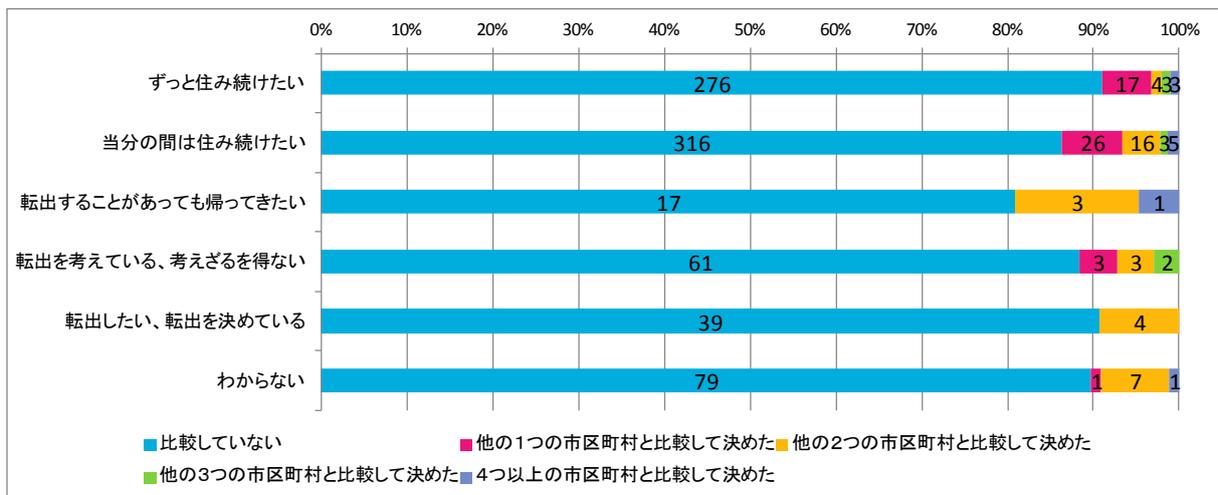
N=890

図 3-126. 現住地と比較検討した転入先の数の関係



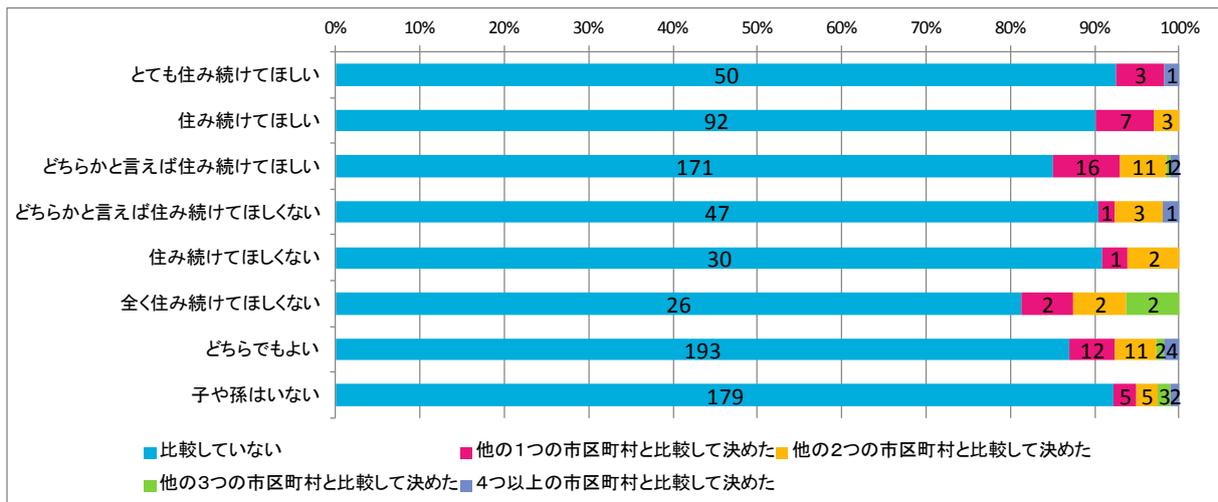
N=890

図 3-127. 現住地に対する好嫌度と比較検討した転入先の数の関係



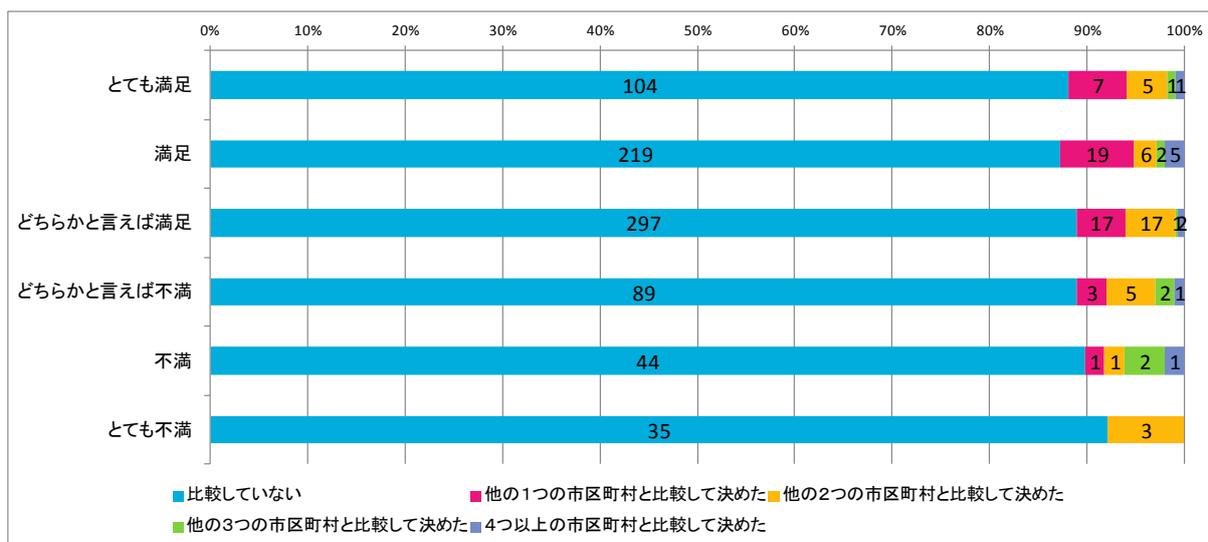
N=890

図 3-128. 定住意思と比較検討した転入先の数の関係



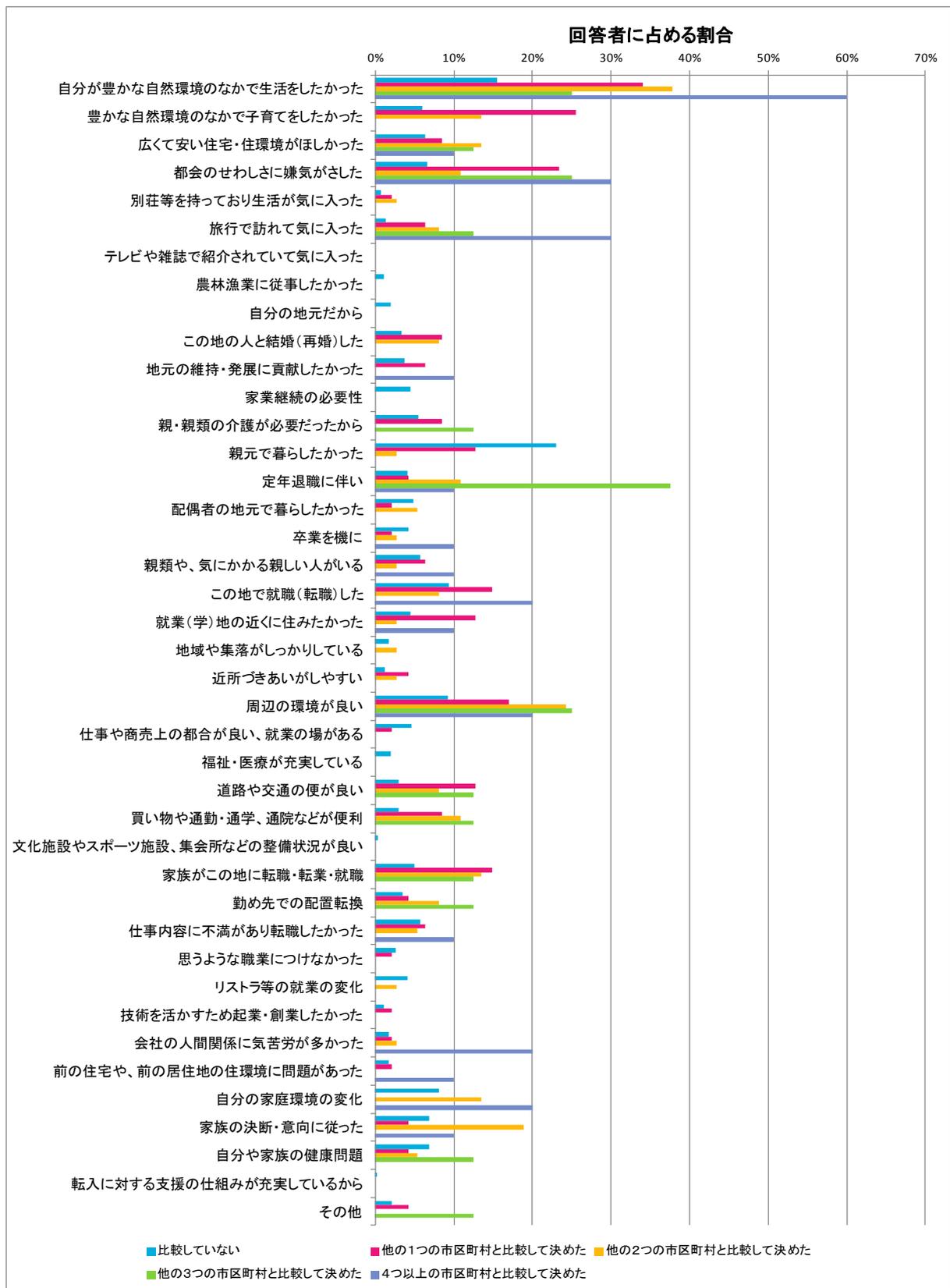
N=890

図 3-129. 永住意思と比較検討した転入先の数の関係



N=890

図 3-130. ターン満足度と比較検討した転入先の数の関係



N=788, 47, 37, 8, 10

図 3-131. 比較検討した転入先の数と転入理由の関係 (複数回答)

(4) ターン時に検討した期間

転入に際して検討した期間を図 3-132 に示す。長い期間検討している人は少ない傾向にあり、3 ヶ月以内で検討を終える人が 6 割以上、1 年以内に検討を終える人が 8 割以上と、数ヶ月で検討を終える人がほとんどである。

ターン分類と転入の検討期間の関係を図 3-133 に示す。ターン分類の違いによる転入の検討期間に差は認められなかった。

ターン時の年齢と転入の検討期間の関係を図 3-134 に示す。ターン時の年齢が高齢になればなるほど、転入の検討期間が長くなる傾向が顕著に認められる。30～59 歳では 3 ヶ月以内の検討が 6 割弱、1 年以内の検討がおおよそ 8 割であるが、29 歳以下では 3 ヶ月以内の検討が 7 割弱、1 年以内の検討がおおよそ 9 割と検討期間は比較的短く、60 歳以上では 3 ヶ月以内の検討が 4 割弱、1 年以内の検討がおおよそ 7 割と検討期間が比較的長くなる傾向にある。

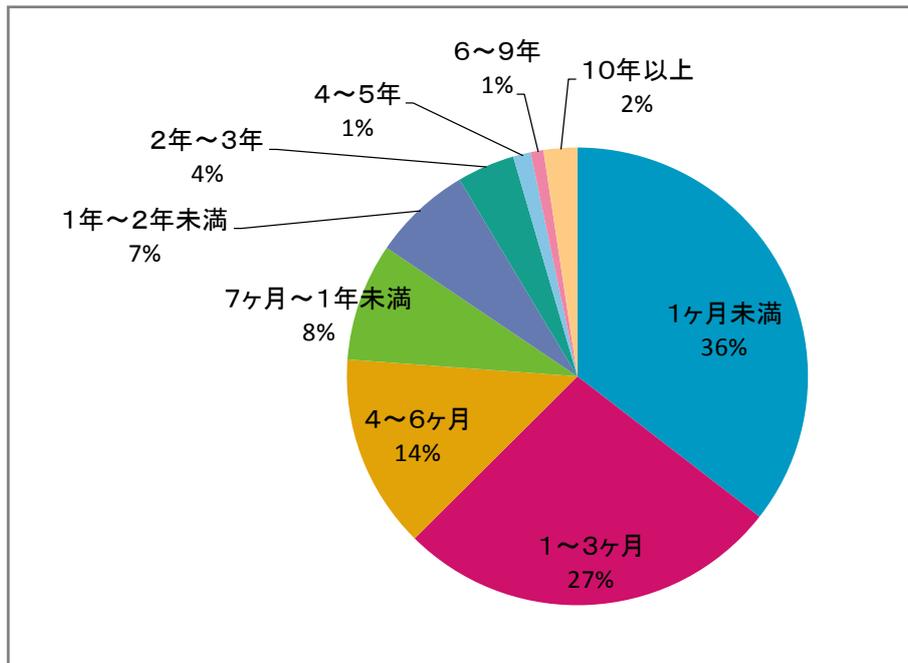
家族構成と転入の検討期間の関係を図 3-135 に示す。1 ヶ月未満の検討の割合に着目すると、配偶者のいる世帯である「夫婦だけ」「夫婦と子どもだけ」「夫婦と親だけ」は 3 割を下回っており、全体平均よりもその割合が小さい。図 3-19 に示したターン分類と家族構成の関係をみると、配偶者がいる場合には I ターンの割合が大きくなるため、転入の検討期間も長くなるという関係が示唆される。これは、図 3-125 で示した家族構成と比較検討した転入先の数の関係と同様の理由により生じた結果だと思われる。

現住地と転入の検討期間の関係を図 3-136 に、現住地に対する好嫌度と転入の検討期間の関係を図 3-137 に、定住意思と転入の検討期間の関係を図 3-138 に、永住意思と転入の検討期間の関係を図 3-139 に示す。これら各項目の違いによる転入の検討期間に差は認められなかった。転入に際しての検討期間が長くなることだけは、現住地に対する好感度の上昇や定住・永住を促すことにはつながらないという結果が示唆される。

比較検討した転入先の数と転入の検討期間の関係を図 3-140 に示す。比較検討した転入先の数と転入の検討期間には顕著な関係が認められ、検討する転入先の市区町村の数が多いほど、検討期間は長くなることがわかった。

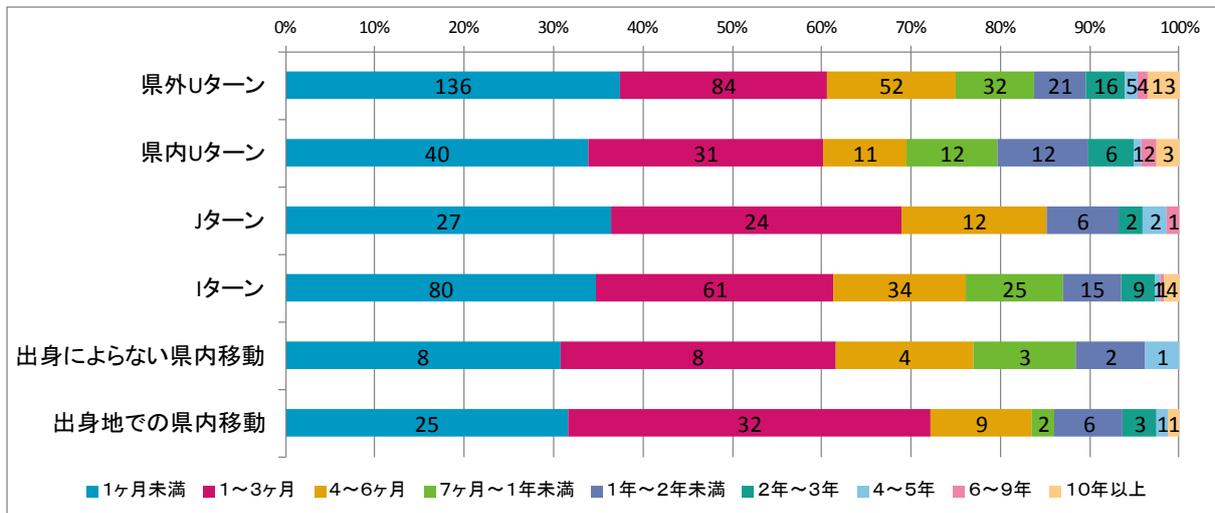
ターン満足度と転入の検討期間の関係を図 3-141 に示す。ターン満足度の違いによる転入の検討期間に差は認められなかった。

転入の検討期間と転入理由の関係を図 3-142 に示す。転入に際しての検討期間が長いほど、「自分が豊かな自然環境のなかで生活をしたかった」「都会のせわしさに嫌気がさした」「周辺の環境が良い」などの各回答についての選択割合が大きくなっている。これらの理由による転入は、いずれも自発的な理由による転入であることから、転入に際しての検討期間も長くなっているものと思われる。



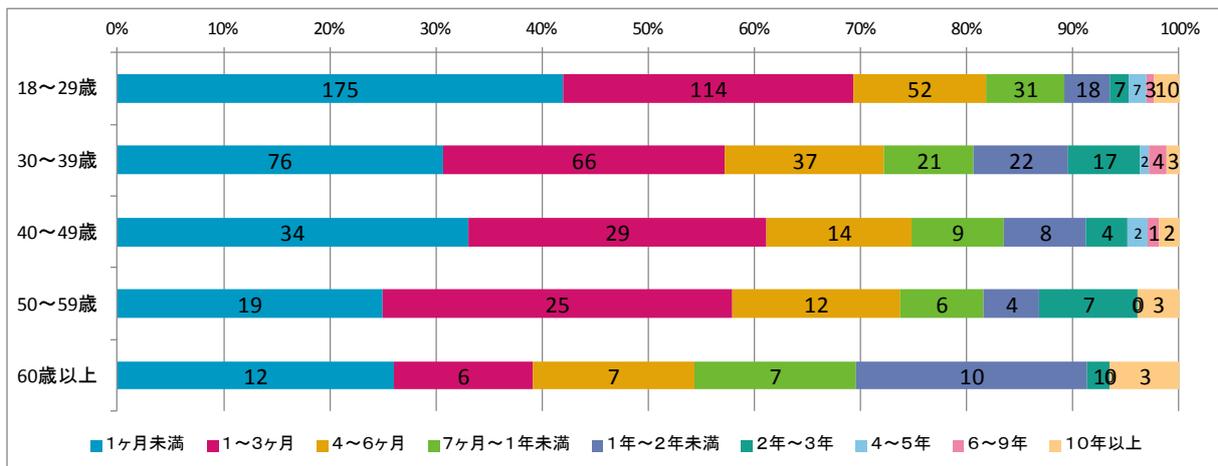
N=890

図 3-132. 転入に際して検討した期間



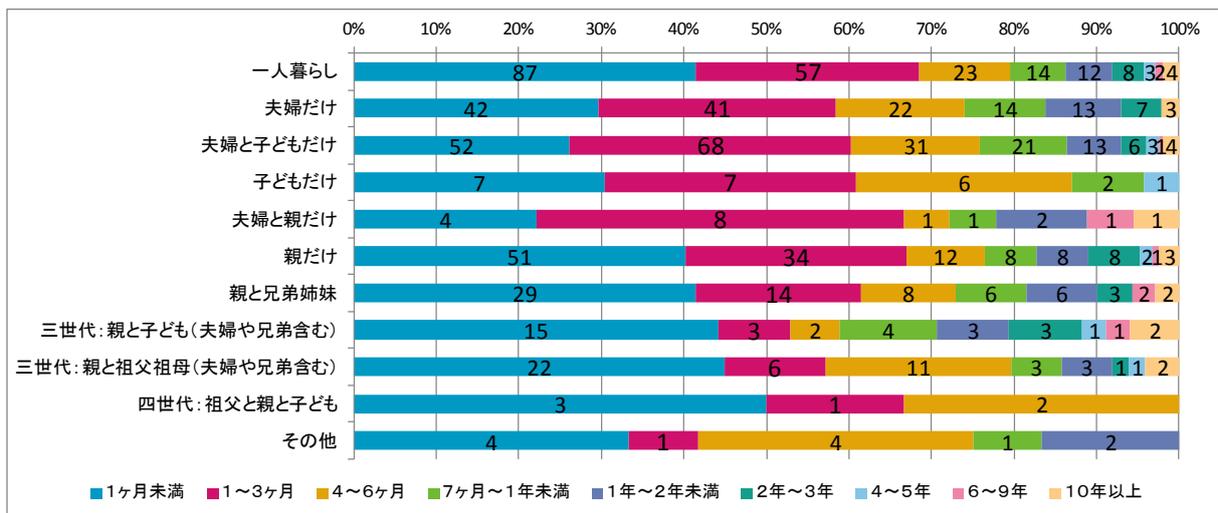
N=890

図 3-133. ターン分類と転入の検討期間の関係



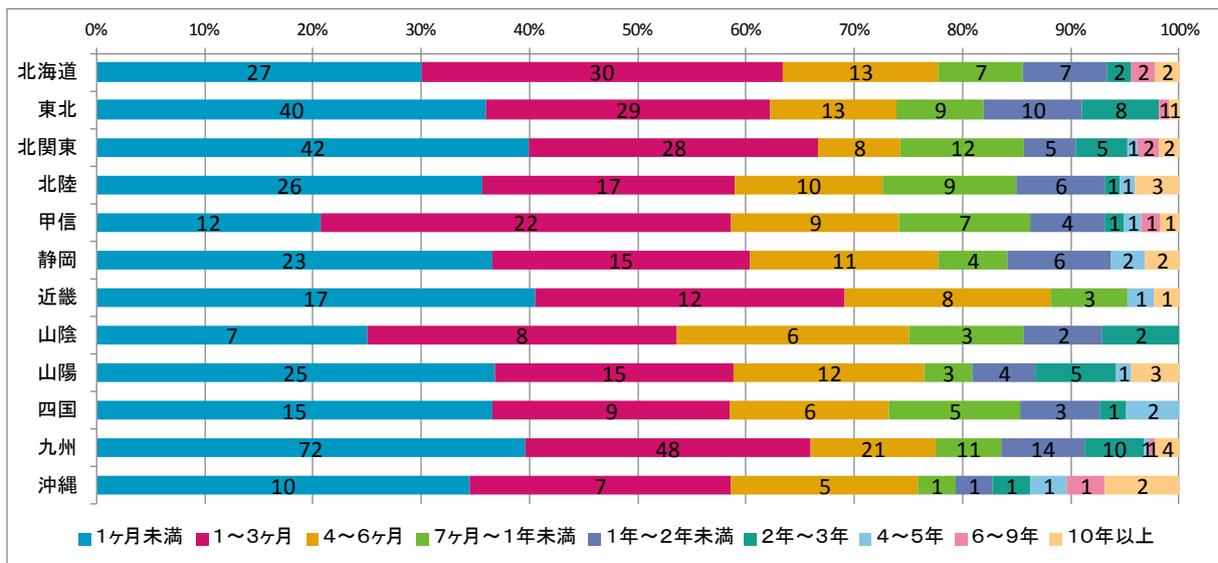
N=890

図 3-134. ターン時の年齢と転入の検討期間の関係



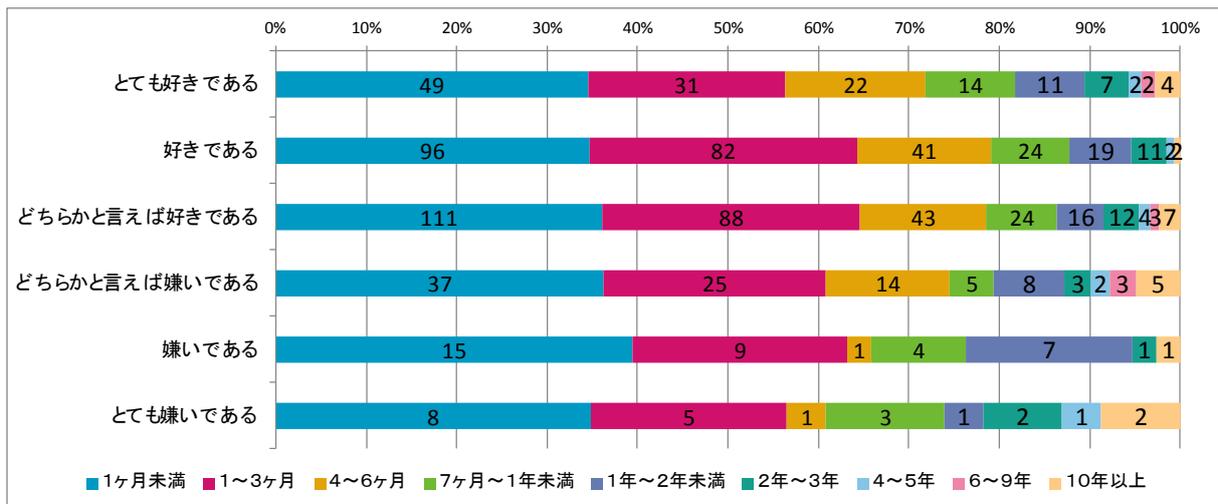
N=890

図 3-135. 家族構成と転入の検討期間の関係



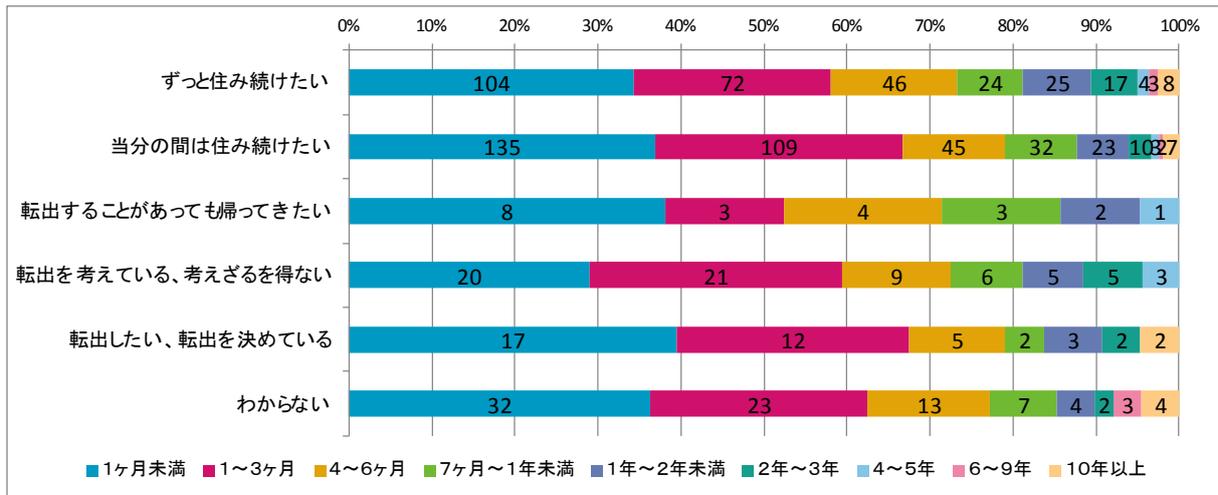
N=890

図 3-136. 現住地と転入の検討期間の関係



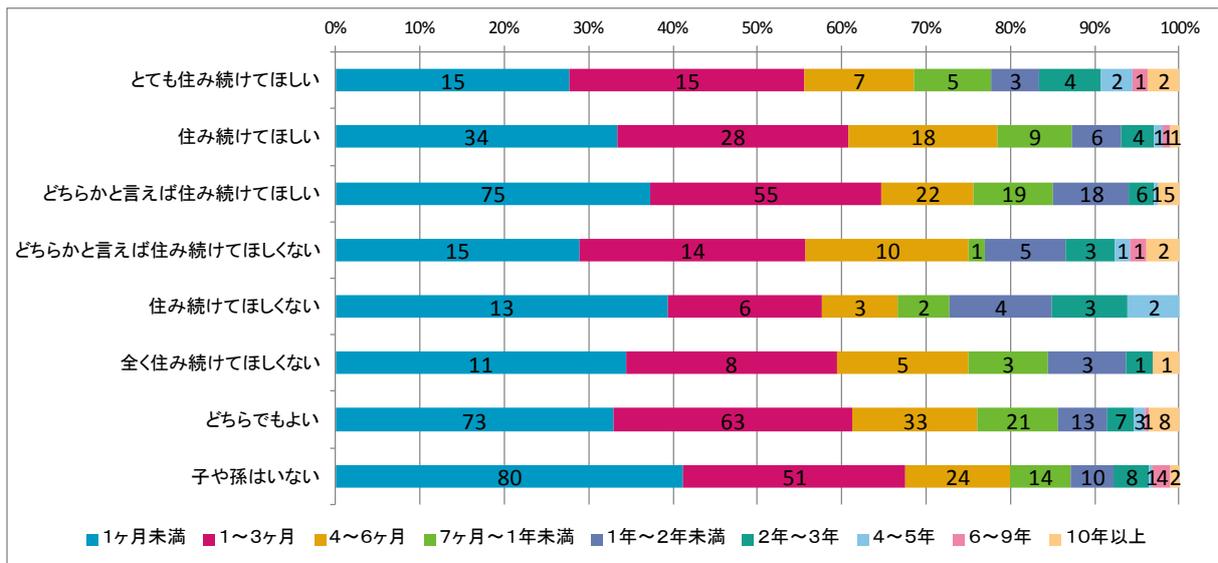
N=890

図 3-137. 現住地に対する好嫌度と転入の検討期間の関係



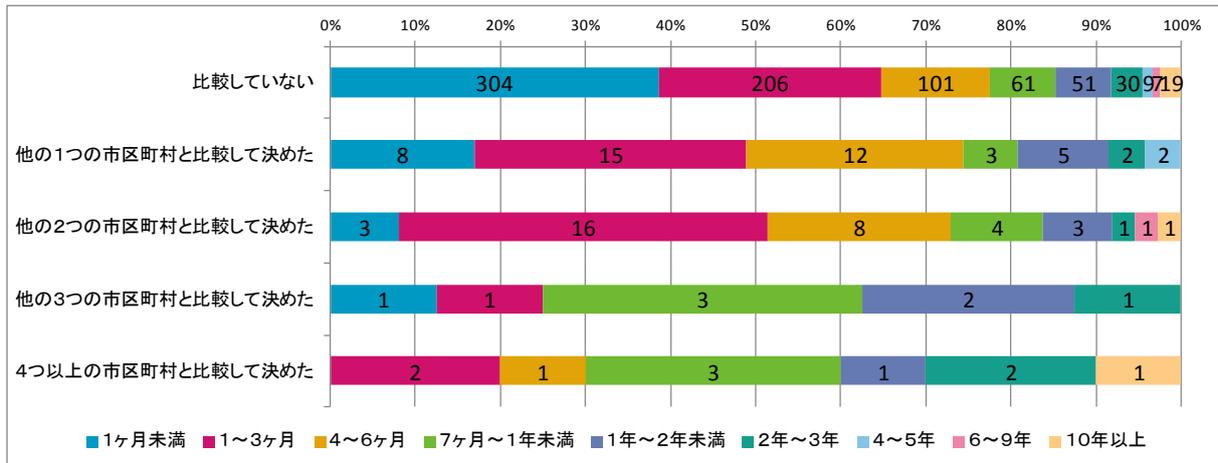
N=890

図 3-138. 定住意思と転入の検討期間の関係



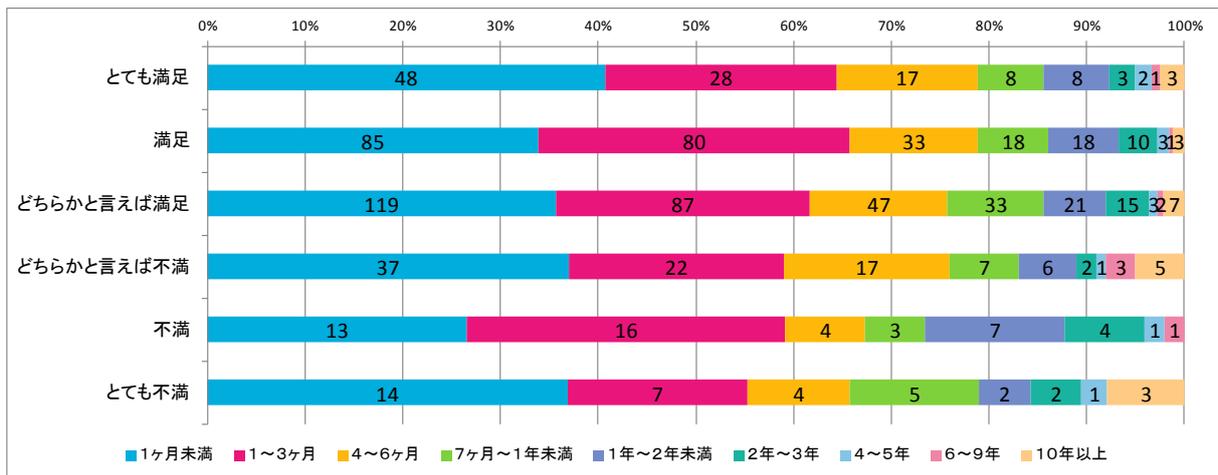
N=890

図 3-139. 永住意思と転入の検討期間の関係



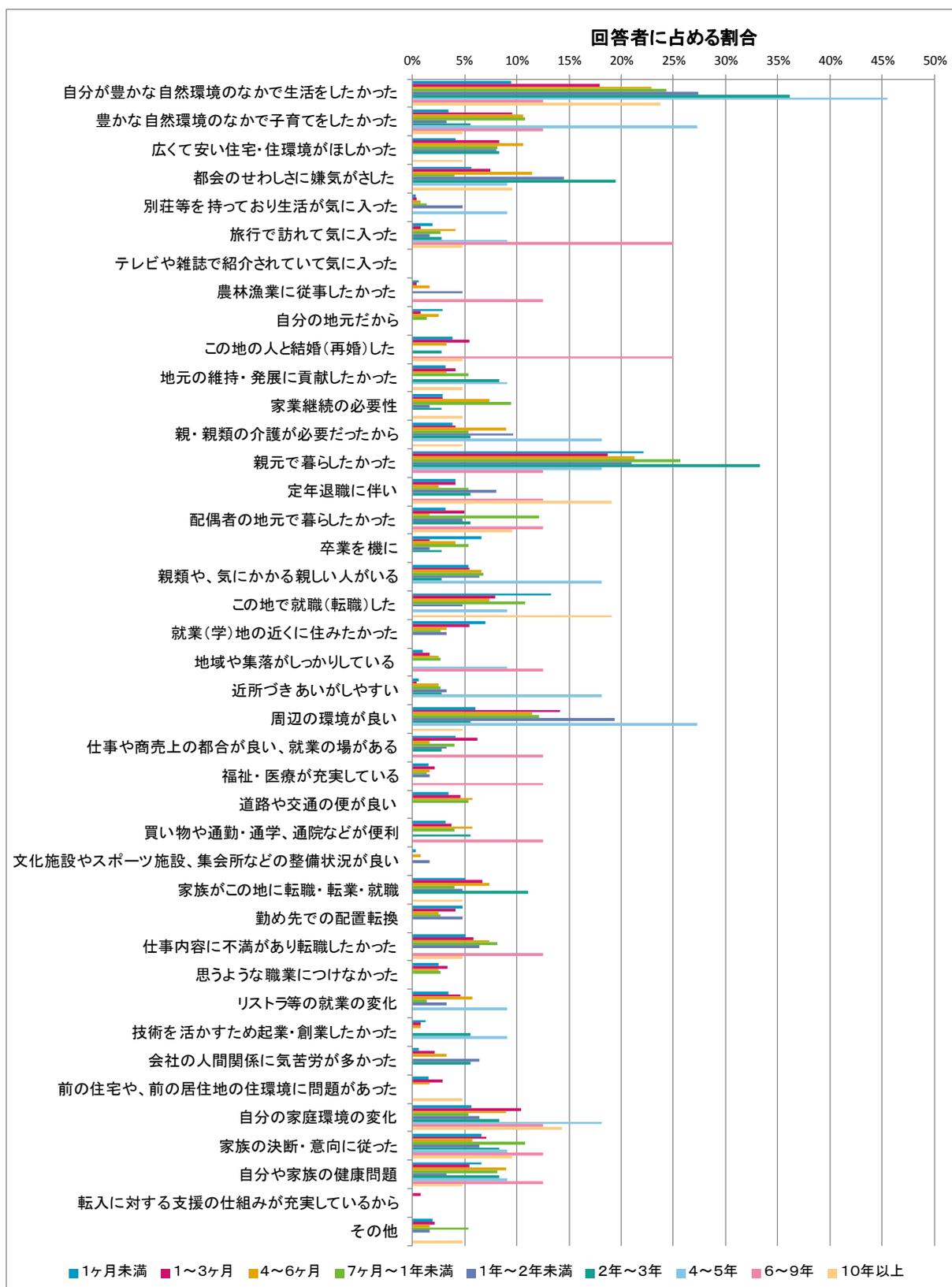
N=890

図 3-140. 比較検討した転入先の数と転入の検討期間の関係



N=890

図 3-141. ターン満足度と転入の検討期間の関係



N=316, 240, 122, 74, 62, 36, 11, 8, 21

図 3-142. 転入の検討期間と転入理由の関係 (複数回答)

3.8. まとめ

本調査により得られた知見を、項目別に下記にまとめる。また、得られた知見を踏まえ、UIJターンを促進させるために必要な方策についても記す。

◎ ターン実施者の属性・勤務実態に関して

- ▶ 都市部から地方部へのターン実施者は半分以上がUターンであり、出身地がターン先の選択に大きく影響を及ぼす。
- ▶ Iターンによる地域別移住者数は、地域によって差がある。人口100万人以上の都市がない東北・北陸・山陰・四国の各地域はIターン実施者の割合が小さく、核となる都市の存在がUIJターンの実施に影響を及ぼしている可能性がある。
- ▶ 居住地域別のターン実施者の属性については、沖縄を除き、ターン分類以外には顕著な差は見受けられなかった。甲信地域に関しても、沖縄以外の各地域と傾向の差は認められなかった。
- ▶ ターン実施の年齢は20～34歳がピークであり、65歳以上になるとターン者の人数は特に少なくなる。
- ▶ 出身地に依存するU・Jターンと依存しないIターンでは、ターン者の属性やターン時の意識に差が認められる。具体的には、ターン時の年齢や家族構成、仕事の見つけ方、転入理由、定住意思の有無などの各項目で差が認められる。
- ▶ 高齢になってからターンを実施した人は、現住地を好きである割合が高く、定住志向が強い。
- ▶ ターン実施者の家族構成に着目すると、配偶者の有無によって、現住地に対する好嫌度、定住意思に差が認められる。配偶者がいる方が現住地に対する好感度が高く、現住地に住み続けたいと回答する割合が高い。

◎ ターン実施者の現住地に対する意識や評価に関して

- ▶ 現住地への転入理由や、現住地に定住を希望している人の定住希望理由に着目すると、Uターン者は「親元で暮らす」など地元志向の理由、Iターン者は自然環境の理由による転入・定住希望が多い。Jターン者は道路・交通、生活環境の利便性を考慮してターン先を決めている人が多く、出身地より生活環境の良い、出身地の近隣の地域に居住する傾向がある。
- ▶ 定住を希望する理由として「福祉・医療が充実している」、「道路や交通の便が良い」などの回答は、ターン時の年齢が60歳以上の方の回答割合は、他の年代と比較すると高い。高齢者は生活環境の利便性を、定住を希望する要因として特に重視している。
- ▶ 転出を希望する人では地域への愛着の無さをその理由に挙げる人が最も多いが、それに次いで生活環境や就業環境の悪さによる理由を挙げる人が多い。特に、Uターン者は就業環境を、Iターン者は生活環境を、Jターン者はその両方を、それぞれ転

出希望の理由に挙げる人が多い。

- ▶ 現住地が好きであるにも関わらず転出を検討している回答者が一定数存在する。転出を検討する理由は、「仕事や商売上の都合が悪い」、「希望する就業の場がない」、「思ったような収入が得られない」などの就業環境、「道路や交通の便が悪い」、「買い物や通勤・通学、通院などが不便」といった生活環境に関するものが多い。これらターン者は現住地が好きであることから、一度ターンしてきた人の流出を食い止めるためにも、就業環境・生活環境の改善を図ることが重要である。
- ▶ 現住地に対して不満に思っており、転出を希望している人のおよそ半数が、福祉や医療、道路交通、買い物などの生活環境に対して不便を感じていることで転出を希望している。
- ▶ ターン満足度が高く定住を希望する人では、定住を希望する理由として「地域への愛着」「自然環境への親しみ」をあげている人が多い。生活・就業環境の充実も重要であるが、居住者に定住してもらうためには、如何に、居住地域に親しみを持ってもらうかを考えることが重要である。

◎ ターン時の情報・サービス入手方等に関して

- ▶ 転入時に行政等からサービス補助を受けた人は1割程度に留まったものの、自由回答では就職支援、住宅支援、子育てに関する支援を希望する回答が多く、支援を希望するターン者は決して少なくない。また、自治体にはサービス補助を実施していることに対するわかりやすい説明を希望する声も大きく、移住者の補助に関する説明会等の実施が、ターン実施の増加に寄与する可能性がある。
- ▶ 支援を受けた人の中では、住宅に関する支援を受けた人よりも、就職や起業などの仕事に関する支援を受けた人の方が定住希望者の割合が高い。このことから、ターン者を定住させるためには仕事に対する支援が有効であると思われる。
- ▶ ターンに際して情報収集を行った人は全体の2割程度であり、その中ではターン先に居住する親戚や知人を頼る旨の回答が最も多かった。自治体等の開設するwebサイトや、設置する相談窓口を利用したという回答も全体の1割程度存在した。
- ▶ ターン時の年齢が高齢であるほど、情報収集を行う割合が大きい。ターンを検討している方への情報提供の際には、高齢の方にとっても親切な情報提供の方法を意識することが重要である。
- ▶ 転入時にサービス補助を受けたり、ターン時に情報収集を行ったりした人は、そうでない人と比較すると現住地に対する好感度が高い。自治体側から、ターンの実施者に対して積極的にサービス補助や情報収集の案内をすることで、ターン後の居住地への好感度を高めるために寄与するものと思われる。

4. 総論

4.1. 南信州地域への移住・二地域居住者誘致のための戦略

平成 25～27 年度に実施した「南信州地域への移住・二地域居住可能性調査」で得られた成果をもとに、南信州地域への移住・二地域居住者誘致のための戦略について、以下に示す。

▶ 別荘・別宅利用者の誘致

別荘・別宅の利用者は 60 歳以上で、経済水準が比較的高い人が多い。ただし、年間を通じた利用日数は一週間程度以下が多いなど、それほど長い期間は滞在しない傾向にある。夏の避暑などのある目的を果たすための利用が多いと考えられる。南信州地域への別荘・別宅利用者の誘致には、当地のハイシーズンの良さ（景色、気候、農産物など）をアピールすることが重要である。また、全国の別荘・別宅保有者は軽井沢などに見られるブランド志向が高いので、マスコミによる情報発信力を利用するなどの方策により、南信州地域で別荘・別宅を建てるのに適した地区のブランド力を向上させる PR 戦略が効果的である。関東・近畿地方で、特に知名度の高い「天龍」ブランドを活用するのも一方策である。

▶ U・J ターン者に対する施策

U・J ターンを行う意思決定の理由には、自分が生まれ育った故郷への愛着といった理由のほか、他にいくところが無く仕方なく親元へ戻った人のような消極的理由も存在する。特に若年層においては、自分の思い描く理想像とは異なるターン後の生活に直面することで、都会へ戻ろうとする再転出を考えざるを得ない状況に陥ることが懸念される。そのような若年層 U・J ターン者に対して、当地で暮らし甲斐のある生活を営むにはどのようなフォローが必要かを思案することが望ましい。また J ターン者は交通・生活環境の充実した地域の中核都市に移住してくることが多く、南信州地域においては飯田市がその役目を果たすものと思われる。飯田市では、充実した都市機能や就業環境をアピールするのが効果的である。

▶ I ターン者に対する施策

I ターン者には自然環境が良いとの理由のほか、この土地でこれをやりたいという積極的な理由のもと、転入してくる人が少なからず存在すると見られる。これは、別荘・別宅利用者の地域選択傾向と似た性格がある。東京などの大都市では、地域の理解を深めてもらうためのイベントや物産展がよく行われるが、そこに参集するのは地元出身者のみならず、その地域に関心を持つファンのような人が多いものと考えられる。移住を考慮する起点となっただけでなく、そのような方々との交流機会を設けるなど、地域情報の発信源としての戦略的な活用法を思案することが望ましい。伝聞や SNS による個人間の情報伝達も重要なメディアである。

▶ 家族で定住できる社会環境づくり

本人のみならず、家族も UIJ ターンに理解を示し、ターン先の地域に愛着を感じるようになる

ことで世帯としての定住が長続きするものと考えられる。例えば、本人の就職はもちろん、配偶者や子どもに対する就労・就学機会の斡旋も重要である。

▶ 中央リニア新幹線の開業

現状の南信州地域は東京や大阪からの高速交通アクセスが良いとは言えず、二大都市圏から別荘・別宅利用者や UIJ ターン者を誘致するには、交通の利便性の面でかなり不利な条件となっている。中央リニア新幹線の開業は、これを大きく覆す千載一遇の機会となる。リニア開業前から、首都圏や近畿圏に向けて、南信州地域の認知度を高めるためにその魅力を継続的にアピールしていくことが重要である。また、リニア駅から地域内各市町村への二次交通の確保が必須であり、開業までに計画的な二次交通対策を施すことが重要である。

なお、全席事前予約制となるリニアの座席サービスを勘案すれば、南信州地域在住者による東京・名古屋方面へのリニアによる通勤・通学利用については日常の反復的利用がしにくいと考えられるので、むしろ南信州地域の本宅へ週末に帰ってくる単身赴任者向けの施策を企画した方が効果的である。

4.2. おわりに

我が国が本格的な人口減少・少子高齢化社会を迎えるに当たり、地方の活性化が今日の大きな課題となっている。「地方創生」はこのような課題を打開すべく掲げられたキーワードであり、国をはじめとする関係機関が地方活性化に向け、様々な施策を投じている。ふるさと納税制度の導入も、緊縮に追われる地方自治体の財政を支援している制度の一例である。その一方で各自治体では、地元の特産品などの魅力ある返礼品を用意するもしくは商品開発を手がけるなど、その企画力が問われる時代となっている。インターネットの普及など社会の ICT 化が進展することにより、地域の地理的・距離的な障壁を克服することが容易くなり、地域間競争が一層激しくなっていることも事実である。

地域活性化に欠かせない定住人口の確保に向けては、定住者への行政サービスの充実により人口の流出を防ぐとともに、都市部からの UIJ ターンを促進することにより移住者を増加させることが鍵となる。そのためには、継続的で効果的な地域の情報発信が不可欠であり、UIJ ターンに関心のある都会在住者に向けて、どのような情報発信を行うべきかを思慮することが求められる。

本件の調査では、ターン実施時の属性別の転入理由・定住希望理由・転出希望理由の違いや、ターン実施者が求めているサービス補助、ターン時実施時の情報収集と現住地に対する好嫌度や定住に対する意向の関係など、UIJ ターン実施時における意思決定要因を明らかにした。また、調査成果をもとに、南信州地域への移住・二地域居住者誘致のための戦略を立てた。本件が UIJ ターン者の誘致のみならず、UIJ ターン者とその世帯が持続的な住民となってもらうための施策に対する示唆を与えるよう願っている。

リニア中央新幹線の整備は、南信州地域が超高速幹線交通ネットワークの節点となることを意味する。その開業効果は莫大なものと見込まれ、地域振興の起爆剤となることに異論はない。地域間競争の時代において少しでも先行すべく、その開業に向けて戦略的な施策を今から講じてい

くことが重要と考える。

付録1:「南信州地域への移住・二地域居住に関する調査」調査票（原稿）

スクリーニング調査

・調査の配信対象者

三大都市圏（東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県・愛知県・三重県・岐阜県・京都府・大阪府・奈良県・兵庫県）以外で、かつ人口15万人以下の市町村に居住する25歳以上の方

スクリーニング Q1

- ・あなたご自身について、これまでに異なる市区町村からの転居の経験はありますか？

1. はい

2. いいえ

※回答が1であったサンプルは Q2 へ

スクリーニング Q2

- ・現在お住まいの市町村の前に住んでいた市区町村名をお答えください。

都道府県

市区町村

※回答が、三大都市圏（東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県・愛知県・三重県・岐阜県・京都府・大阪府・奈良県・兵庫県）の市区町村、もしくは人口15万人以上の市区町村であったサンプルは Q3 へ

スクリーニング Q3

- ・現在お住まいの市町村へ転入された理由をお答えください。（複数選択可）

1. 就職

2. 転職

3. 就農（林業、水産業も含む）

4. 退職し、第二の人生を送る

5. 自ら申し出での転勤（同じ会社・団体）

6. 命じられての転勤（同じ会社・団体）

7. 両親もしくは同居人の転勤・移動

8. 結婚

9. 進学

10. 介護

11. 転居先（現在の居住地）の土地や住環境に惹かれて

12. 自分や家族の出身地で暮らしたかった

13. 住宅を購入した
14. 元の住宅に住めなくなった
15. 住んでいた場所の環境になじめなかった
16. その他

※回答が 1,2,3,4,5,11,12 に一つでもチェックがあるサンプルは Q4 へ

スクリーニング Q4

- ・ 現在お住まいの市町村へ転入されたのは何年前ですか。1 年未満の端数は年単位に切り上げてください（例：2 年 4 ヶ月前→3 年）。

年前

※回答が 21（年前）より小さいサンプルは Q5 へ

スクリーニング Q5

- ・ 現在お住まいの市町村の前にお住まいであった市区町村については、何年間住んでいましたか。1 年未満の端数は年単位に切り上げてください（例：8 年 10 ヶ月→9 年）。記憶があいまいな方は、おおよそで結構です。

年

※回答が 101（年）より小さいサンプルを本調査の対象とする

本調査

あなたが現在お住まいの市町村へ転入されたときのことについて、お尋ねします（現在、お住まいの市町村内での引っ越しを除き、他の市区町村から転入されたときのことです）。

本調査 Q1

- ・ 現在お住まいの市町村に転入されたときの家族構成について、自分以外にはどなたがいらっしゃいましたか。（複数選択可）

1. 配偶者
2. 子ども
3. 孫
4. 曾孫
5. 親（配偶者の親も含む）
6. 祖父・祖母（配偶者の祖父母も含む）
7. 兄弟姉妹（配偶者の兄弟姉妹も含む）
8. その他親戚
9. 自分だけの一人暮らし

本調査 Q2

- ・ 現在お住まいの市町村への転入後にお仕事をしている、もしくはされていましたか。お仕事にはパートやアルバイトも含まれます。

1. 仕事をしていた（今もしている場合も含む）
2. 転入後には仕事をしていない、リタイヤしていた

本調査 Q3（Q2 で 1 を回答の方）

- ・ その勤務先の所在地の市区町村名をお答え下さい。

都道府県	市区町村
------	------

本調査 Q4（Q2 で 1 を回答の方）

- ・ お仕事の業種で一番近いものを選んで下さい。（複数の業種を経験された方は、代表的なもの一つをお答え下さい）

1. 公務員
2. 農業
3. 林業
4. 水産業
5. 鉱業

6. 自営商工業
7. 工場作業者
8. 土木建築業
9. 製造業
10. 電気・ガス・水道業
11. 通信業
12. 情報サービス業
13. 運輸業・郵便業
14. 卸売業・小売業
15. 金融業・保険業
16. 不動産業・物品賃貸業
17. 学術研究・専門技術者
18. 宿泊業・飲食サービス業
19. 生活関連サービス業・娯楽業
20. 教育・学習支援業
21. 医療・福祉
22. パート・アルバイト
23. その他「(自由回答)」

本調査 Q5 (Q2 で 1 を回答の方)

- ・ 転入後のお仕事をどのようにして見つけましたか。(複数回答可)

1. 民間主催の就・転職の説明会や相談窓口で
2. 自治体や公的機関主催の就・転職の説明会や相談窓口で
3. ハローワークを訪れて
4. 民間の就・転職を支援するウェブ・サイトで
5. 自治体や公的機関の就・転職を支援するウェブ・サイトで
6. 就職先のホームページで
7. 前の就学先・勤務先の紹介で
8. 親・兄弟の薦めで
9. 友人・知人の紹介で
10. テレビや情報誌、書籍のメディアで紹介された
11. 以前から何となく知っていた
12. 就職先が実家や親戚であるから
13. その他「(自由回答)」

本調査 Q6

- ・ 現在お住まいの市町村に転入した理由・きっかけをお答えください。(複数回答可)

1. 自分が豊かな自然環境のなかで生活をしたかった
2. 豊かな自然環境のなかで子育てをしたかった
3. 広くて安い住宅・住環境がほしかった
4. 都会のせわしさに嫌気がさした
5. 別荘等を持っており生活が気に入った
6. 旅行で訪れて気に入った
7. テレビや雑誌で紹介されていて気に入った
8. 農林漁業に従事したかった
9. この地の人と結婚(再婚)した
10. 地元の維持・発展に貢献したかった
11. 家業継続の必要性
12. 親・親類の介護が必要だったから
13. 親元で暮らしたかった
14. 定年退職に伴い
15. 配偶者の地元で暮らしたかった
16. 卒業を機に
17. 親類や、気にかかる親しい人がいる
18. この地で就職(転職)した
19. 就業(学)地の近くに住みたかった
20. 地域や集落がしっかりしている
21. 近所づきあいがしやすい
22. 周辺の環境が良い
23. 仕事や商売上の都合が良い、就業の場がある
24. 福祉・医療が充実している
25. 道路や交通の便が良い
26. 買い物や通勤・通学、通院などが便利
27. 文化施設やスポーツ施設、集会所などの整備状況が良い
28. 家族がこの地に転職・転業・就職
29. 勤め先での配置転換
30. 仕事内容に不満があり転職したかった
31. 思うような職業につけなかった
32. リストラ等の就業の変化
33. 技術を活かすため起業・創業したかった
34. 会社の人間関係に気苦労が多かった
35. 前の住宅や、前の居住地の住環境に問題があった

36. 自分の家庭環境の変化
37. 家族の決断・意向に従った
38. 自分や家族の健康問題
39. 転入に対する支援の仕組みが充実しているから
40. その他「(自由回答)」

本調査 Q7

- ・ 現在お住まいの市町村は、あなたの出身地ですか。なお「出身地」とは、あなたが生まれ育った代表的な市区町村を指します。

1. そうである
2. 厳密にはそうではないが、近隣の市区町村出身である
3. 違う

本調査 Q8

- ・ (Q7で2,3を回答した方) あなたの出身地の市区町村(複数の出身地を持つ方は、代表的な市区町村を一つのみ)をお答え下さい。

都道府県	市区町村
------	------

本調査 Q9

- ・ (Q7で1,2を回答した方) 出身地に戻られた、もしくは出身地の近隣の地域に転入された理由をお答えください。(複数回答可)

1. 親のことが気にかかるから
2. 家業を継ぐため
3. 先祖代々の土地や家を守るため
4. 地元のほうが生きがいを感じられるため
5. 農山村・漁村のほうが生きがいを感じられるため
6. 都会の生活が合わないため
7. 自然に親しんだ暮らしをしたかったため
8. 昔からの友人、知人がいるため
9. 親戚が多くて、生活が安定するため
10. 子育てや結婚後の暮らしを考えると、地元の方が暮らしやすいため
11. 地元の人と結婚をしたため
12. 地元から通える職場があるため
13. 新たに仕事を始めるため、自営するため
14. 仕事の不調のため
15. 自分や家族の病気など健康上の理由から
16. 定年を迎えたため

17. その他「(自由回答)」

本調査 Q10

- あなたは、現在お住まいの市町村が好きですか？

- | |
|------------------|
| 1. とても好きである |
| 2. 好きである |
| 3. どちらかと言えば好きである |
| 4. どちらかと言えば嫌いである |
| 5. 嫌いである |
| 6. とても嫌いである |

本調査 Q11

- あなたは、これからも現在お住まいの市町村に住み続けたいと思いますか？

- | |
|----------------------|
| 1. ずっと住み続けたい |
| 2. 当分の間は住み続けたい |
| 3. 転出することがあっても帰ってきたい |
| 4. 転出を考えている、考えざるを得ない |
| 5. 転出したい、転出を決めている |
| 6. わからない |

本調査 Q12

- (Q11 で 1,2,3 を回答した方) 定住を希望する理由をお答えください。(複数回答可)

- | |
|-------------------------------|
| 1. 地域への愛着がある、先祖代々住んできた土地だから |
| 2. 自宅や土地がある |
| 3. 後継者だから |
| 4. 親類や、気にかかる親しい人がいる |
| 5. 地域や集落がしっかりしている |
| 6. 近所づきあいがしやすい |
| 7. 住宅や周辺の環境が良い |
| 8. 仕事や商売上の都合が良い、就業の場がある |
| 9. 福祉・医療が充実している |
| 10. 道路や交通の便が良い |
| 11. 買い物や通勤・通学、通院などが便利 |
| 12. 文化施設やスポーツ施設、集会所などの整備状況が良い |
| 13. 自然環境に親しみを感じている |
| 14. 気候や風土に合っている |
| 15. 家族も望んでいる |

16. 他に行くところが無い、仕方ない
17. 移住前に思い描いたイメージどおりの生活ができています
18. その他「(自由回答)」

本調査 Q13

- ・ (Q11 で 4,5 を選択した方) 転出を考えている理由をお答えください。(複数回答可)

1. 地域への愛着を感じない
2. 居住地に親類や親しい人がいない
3. 人が減り地域や集落が維持できない
4. 住宅や周辺の環境が良くない
5. 仕事や商売上の都合が悪い
6. 希望する就業の場がない
7. 思ったような収入が得られない
8. 都会で暮らしたい
9. 家族、家庭の都合
10. 子どもの教育の問題
11. 後継者ではない
12. 福祉・医療が充実していない
13. 道路や交通の便が悪い
14. 買い物や通勤・通学、通院などが不便
15. 近所づきあいが難しい
16. 文化施設やスポーツ施設、集会所などの整備状況が悪い
17. 気候や風土に合わない
18. 現在の住宅に住めなくなった・なりそうである
19. 行政等による補助が打ち切られた・打ち切れそうである
20. 移住前に思い描いたイメージどおりの生活ができない
21. 地区の行事・イベント等への参加や役員就任などの負担
22. その他「(自由回答)」

本調査 Q14

- ・ あなたは現在お住まいの市町村に、子や孫にも住み続けてほしいと思いますか？

1. とても住み続けてほしい
2. 住み続けてほしい
3. どちらかと言えば住み続けてほしい
4. どちらかと言えば住み続けてほしくない
5. 住み続けてほしくない
6. 全く住み続けてほしくない

7. どちらでもよい

8. 子や孫はいない

本調査 Q15

- ・ あなたが現在お住まいの市町村に転入するときに、あなたが受けた行政等によるサービス補助（斡旋や補助金の受給など）をお答えください。（複数回答可）

1. 就職支援

2. 就農（林業、水産業も含む）支援

3. 起業支援

4. 住宅に関する支援

5. 情報収集に関する支援

6. サービス補助は受けていない

7. 覚えていない

本調査 Q16

- ・ Q15 の選択肢以外に、行政等による、どのようなサービス補助があれば良いと思いますか。もしあれば、1を選んで具体的にお書き下さい。

1. 「(自由回答)」

2. 特にない

本調査 Q17

- ・ あなたは現在お住まいの市町村への転入を検討するにあたり、居住地の情報（住まい、暮らし、仕事等）を収集しましたか。収集されていたという方は、その手段をお答えください。

情報の収集方法（複数回答可）

1. 転居検討先に居住している親戚や親しい人に聞いた

2. 転居検討先の自治体や団体が開設しているウェブ・サイトを見た

3. 転居検討先の自治体や団体が設置している相談窓口を利用した

4. 転居検討先の自治体や団体が開催した相談会・説明会などに参加した

5. 地方への転居に関するテレビや情報誌、書籍を見た

6. 地方への転居に関する個人の情報サイトやブログを見た

7. その他「(自由回答)」

8. 収集していなかった

9. 覚えていない

本調査 Q18

- あなたは現在お住まいの市町村への転入を検討するにあたり、他の市区町村との比較をしましたか。

1. 比較していない
2. 他の1つの市区町村と比較して決めた
3. 他の2つの市区町村と比較して決めた
4. 他の3つの市区町村と比較して決めた
5. 4つ以上の市区町村と比較して決めた

本調査 Q19

- 現在お住まいの市町村への転入を決断するまでに、どのくらいの期間をかけて検討しましたか。一番近いものを選んで下さい。

1. 1ヶ月未満
2. 1～3ヶ月
3. 4～6ヶ月
4. 7ヶ月～1年未満
5. 1年～2年未満
6. 2年～3年
7. 4～5年
8. 6～9年
9. 10年以上

本調査 Q20

- あなたは、現在お住まいの市町村への転入後の生活について、満足していますか。

1. とても満足
2. 満足
3. どちらかと言えば満足
4. どちらかと言えば不満
5. 不満
6. とても不満

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

整理番号	D4150001
件名	平成27年度 南信州地域への移住・二地域居住可能性調査 UIJ ターンにおける実態調査

公益財団法人鉄道総合技術研究所

信号・情報技術研究部

部長 平栗 滋人

交通計画研究室 室長 深澤 紀子

研究員 渡邊 拓也

NTT 042-573-7309 FAX 042-573-7305

JR 053-7309 FAX 053-7305

企画室

室長 奥井 明伸

戦略調査課 課長 武藤 雅威

NTT 03-5334-0420 FAX 03-5334-0435

JR 058-2276 FAX 058-2278